

日本語用論学会

(*The Pragmatics Society of Japan*)

第6回(2003年度)大会

PROGRAMS & ABSTRACTS

日時: 2003年12月6日(土)

会場: 神奈川大学(横浜キャンパス)

日本語用論学会事務局:

〒573-1001

大阪府枚方市中宮東之町16番1号

関西外国語大学外国語学部

澤田治美 研究室内

Tel: 072-805-2801

Fax: 072-805-2890

日本語用論学会

(*The Pragmatics Society of Japan*)

第6回(2003年度)大会

PROGRAMS & ABSTRACTS

日時: 2003年12月6日(土)

会場: 神奈川大学(横浜キャンパス)

日本語用論学会事務局:

〒573-1001

大阪府枚方市中宮東之町16番1号

関西外国語大学外国語学部

澤田治美 研究室内

Tel: 072-805-2801

Fax: 072-805-2890

プログラム（アブストラクト目次）

大会受付 9:00~[16号館2階セレストホール入り口前]

ワークショップ (10:00~12:05) A室、B室、C室、D室、E室

A室 [11号館2階11-21教室]

テーマ「語彙、構文とダイクシスをめぐって」

司会 杉本 孝司 (大阪外国語大学)

1. 「フランス語sécherの多義性」	染谷 聰 (早稲田大学大学院) ······	1
2. 「～てくれる」構文に関する 「ウチ／ソト」論再考：認知的・ 語用論的アプローチ	澤田 淳 (早稲田大学大学院) ······	5
3. 一人称指示における「こちら」の 機能と使用条件	金井 勇人 (早稲田大学大学院) ······	9
4. 英語のit, this, thatの間の相違につ いて—認知ステイタスに注目して—	東 裕美 (英国マン彻スター大学大学院) ···	13

B室[11号館2階11-23教室]

テーマ「語用論の観点からとらえたコミュニケーションについて」

司会 林 宅男 (桃山学院大学)

1. 夫婦間のコミュニケーション ギャップの一考察	寺田 千恵 (神戸大学大学院) / 岡本 真一郎 (愛知学院大学) ······	15
2. 反対意見表明における日本語母語 話者と非母語話者の比較—発話データ とメールデータの相違—	薄井 良子 (神戸大学大学院) ······	19
3. フレームの移行と包含性：教員会議 データからの一考察	内田らら (東京工芸大学非常勤講師) ·····	23
4. 精神療法面接Exchange構造における Abortionと先行発話との関連— Sullivanの面接記録に基づいて—	加藤 澄 (青森中央学院大学) ······	27
5. Linguistic Marketingの研究— ファッショング販売における感性 ワード分析—	坂本 和子 (横浜国立大学大学院) ······	31

C室[11号館2階11-24教室]

テーマ「発話と文の意味をめぐって」

司会 東森 熱 (龍谷大学)

1. 禁止命令の意味を持つ発話行為の 日英語の諸相	有光 奈美 (獨協大学非常勤講師) ······	35
2. 語用論的能力の発達に関する実証的 一考察	小林 正佳 (横浜国立大学) ······	39
3. スケール推意の取り消し方について —1次元的スケールから3次元的 スケールまで—	澤田 治 (早稲田大学大学院) ······	42
4. 日英語の長文分析について	趙 順文 (台湾大学) ······	46
5. 目的を表すso that節に現れるcan / willの意味	明日 誠一 (青山学院大学非常勤講師) ·····	50

D室[11号館1階11-11教室]

テーマ「語用論と行動生態学：言語進化論へ向けて」

司会 野澤 元 (京都大学大学院)

1. サルは鳴き声で何を伝えているのか	小田 亮 (名古屋工業大学) ······	52
2. 進化から見た発話行為・意味・統語	野澤 元 (京都大学大学院) ······	56
3. 「否定」再考：発話行為論の観点から	山崎 章裕 (京都大学大学院) ······	60

E室[11号館1階11-12教室]

テーマ「話し言葉と談話：自然言語処理と語用論のインターフェイス」
司会 岡本 雅史（東京大学）

1. Webコーパスと国語辞典を用いた 書き言葉から話し言葉への言い換え	鍛治 伸裕（東京大学大学院）/ 岡本 雅史 (東京大学) / 黒橋 祐夫（東京大学） ······	64
2. 会話の「場」を生み出す一貫性の諸相	岡本 雅史（東京大学）/ 堀 哲哉（東京大学 大学院/ 黒橋 祐夫（東京大学） ······	68
3. 『日本語話し言葉コーパス』の談話 構造タグ付与	竹内 和広（通信総合研究所）/ 高梨 克也 (通信総合研究所) / 森本 郁代（通信総合研究所） 井佐原 均（通信総合研究所） ······	72
4. 談話を語る／聞く動機とエピソード 構造	高梨 克也（通信総合研究所）/ 森本 郁代 / (通信総合研究所)/ 仲本 康一郎（通信総合研究所） / 井佐原 均（通信総合研究所） ······	76

総会(12:40~12:55)[11号館1階11-11教室]

司会 田中 廣明（関西外国語大学）

1. 会長挨拶	小泉 保（関西外国語大学）
2. 事務局長報告	澤田 治美（関西外国語大学）
3. 編集委員会報告	高原 梢（関西外国語大学）
4. 会計報告	田中 廣明（関西外国語大学）
5. その他	

研究発表(13:00~15:30) A室、B室、C室、D室

(1. 13:00~13:35 2. 13:35~14:10 3. 14:20~14:55 4. 14:55~15:30)

A室[11号館2階11-21教室]

司会 松井 智子（国際基督教大学）

1. 「やっぱり」広告についての一考察	榎原 愛（大阪大学大学院） ······	81
2. Primary interjection と Secondary interjection-解釈的使用の視点から-	西川 真由美（奈良女子大学大学院） ······	89
	(10分休憩)	
3. コンテクストへの制約—yetの場合	山田 大介（神奈川大学大学院） ······	97
4. 否定疑問文に対する応答文とその解釈	黒川 尚彦（大阪大学大学院） ······	103

B室[11号館2階11-23教室]

司会 蓮沼 昭子（姫路獨協大学）

1. 語用化(pragmaticalization) とは何か。～接続助詞「ものの」の 用法における通時的考察～	田辺 和子（日本女子大学） ······	111
2. 文末思考動詞「思う」の伝達機能	宇津木 愛子（慶應義塾大学） ······	119

(10分休憩)

司会 加藤 雅啓 (上越教育大学)

3. 義務表現に関する状況について 長友 俊一郎 (関西外国語大学大学院) ······ 125

C室 [11号館1階11-11教室]

司会 加藤 重広 (富山大学)

1. 「···」ではあることは
まちがいない」という表現について 森 貞 (福井工業高等専門学校) ······ 133
2. メタ言語否定の談話分析 山田 政通 (拓殖大学) ······ 141

(10分休憩)

司会 西山 佑司 (慶應義塾大学)

3. 存在文の文法性—メンタルスペース
理論に基づいて— 大川 裕也 (大阪大学大学院) ······ 149
4. 前提にならないUntil節と因果連鎖 出水 孝典 (立命館大学) ······ 156

D室[11号館1階11-12教室]

司会 三宅 和子 (東洋大学)

1. 対人関係に配慮した「申し出」表現
についての一考察 吉成 祐子 (神戸大学大学院) ······ 164
2. 会話における認識的権威の交渉：
終助詞「よ」「ね」の分布と機能
について 金井 薫 (日本女子大学大学院) ······ 172

(10分休憩)

司会 西村 美和 (早稲田大学)

3. 直接引用とパワー：女性雑誌の
批判的談話分析 真田 敬子 (神戸大学大学院) ······ 180
4. パラグラフの一貫性 海寶 康臣 (龍谷大学非常勤講師) ······ 187

シンポジウム(15:45~18:10) [16号館2階セレストホール]

<< 第2言語語用論—異文化間語用論の視点からー >>

司会 伊藤 克敏 (神奈川大学) ······ 195

1. 第二言語語用論の潮流と
これからの英語教育 講師 関山 健治 (沖縄大学) ······ 197
2. ポジティブポライティネスと英語教育
講師 村田 和代 (龍谷大学) ······ 201
3. 英語学習者の個人差と第二言語語用論
講師 高橋 里美 (立教大学) ······ 209
コメンテーター 西光 義弘 (神戸大学) (216)

閉会の辞 小泉 保 (関西外国語大学)

懇親会 (18:30~) (会費 3,000円) (会場: 19号館地下 ラックスホール)

ワークショップ

フランス語 *sécher* の多義性

染谷 聰

早稲田大学大学院

(someya@ruri.waseda.jp)

<目的>

本発表はフランス語 *sécher* (乾かす) の多義性に焦点を当て、比喩とダイクシスの関係を扱う。次のことを示す。(1) *sécher* は任意の A と B を何らかの媒体で引き離すイベントである。(2) A と B を引き離すイベント構造には三つの類型が存在する。

<背景>

現代フランス語 *sécher* はラテン語 *siccāre* (=乾かす) や *secāre* (=切断する) と関連があると考えられる。

<*sécher* の多義>

sécher の意味は次のように分類できる。(1) 乾かす (2) 水気などを取る (3) 干物にする (4) 飲み干す (5) サボる (6) 答えに詰まる (7) 慄悴 (ショウスイ) する、衰弱する。

<換喻とダイクシス>

本発表ではダイクシスを「換喻」と「換喻能力」の関連で捉える。第一に換喻について、糸山 (2002: 12) は「ある表現が換喻として用いられるとは、その表現の意味が参照点を表し、その同じ表現によって実際に指示されるのがターゲットである。」と指摘する。第二に換喻能力について、森 (2001) は「換喻」及び「換喻能力」を「全体→部分」の関係で捉えるが、両者を次のように区別する。印刷物としての *newspaper* が組織の意味で使われるのは「新聞→新聞社」と特定して使う「有標」の表現であり、彩としての「換喻」と定義する。一方、*book* が特定化して出版社を意味できず、換喻として機能しなくとも、「本=全体としての出版社の一部」のように「全体→部分」関係を認め、どこに焦点を当てるかコントロールできる認知能力を「換喻能力」と定義し両者を区別する。

(I) これを踏まえ、*sécher* が任意の A と B を何らかの媒体で引き離すイベントであるとすれば、一つの類型が存在する。

・ *sécher* が任意の A と B を何らかの媒体で引き離すイベントであるなら、A と B のうち片方だけが切片化され、もう一方は除外される。さらに、媒体も除外される。

(a) sécher du linge (洗濯物を乾かす)

(b) sécher les raisins (干しブドウを作る)

(c) Il a séché dans son examen de français. (彼はフランス語の試験で答えに窮した。)

(a)で、*linge* という語が本来表す<洗濯物そのもの>を参照点として、<(洗濯物に含まれる)水分>を指示するとすれば、<洗濯物>と<水分>を<日光、乾燥機 etc で干す>という媒体で引き離すイベントが *sécher* である。その過程で切片化され、プロファイルされるのは<洗濯物>である。<水分>や<日光、乾燥機 etc で干す>（媒体）は除外される。(b)も同様に、*raisins* という語が本来表す<ブドウそのもの>を参照点として、<(ブドウに含まれる)水分>を指示するとすれば、*sécher* は<ブドウ>と<水分>を<空気 etc にさらす>の媒体で引き離すイベントの役割を果たす。その過程で切片化され、プロファイルされるのは<ブドウ>である。<水分>や<空気 etc に干す>（媒体）は除外される。(c)では *sécher* は<彼>と<答え（言葉）>を<試験官による口頭試問>という媒体で引き離すイベントの役割を果たす。その過程で切片化され、プロファイルされるのは<彼>である。<答え（言葉）>や<試験官による口頭試問>（媒体）は除外される。(a)と(b)は水分、(c)は答え（言葉）であることが特定できるので、この限りでは換喻である。一方、A と B を引き離す媒体について、(a)と(b)は一つに特定できない。この点では換喻能力である。

Rewet (1975) はこの種の現象を言葉の省略の過程と捉えるが、省略を可能にするのは *sécher* のような動詞の潜在的な力であると指摘する。一方、Kleiber (1999 : 153-154) は周辺的要素 (c の *examen de français* 等) も意味を規定し得ると言う。

(II) 二つ目の類型は次のようなものである。

- *sécher* が任意の A と B を何らかの媒体で引き離すイベントであるなら、媒体及び A と B のうち片方だけが切片化され、もう一方は除外される。

(d) sécher la sueur avec un mouchoir (ハンカチで汗をぬぐう)

(e) Elle a séché les maths pour aller en boîte avec son copain. (彼女は数学の授業をサボって仲間とディスコに行った。)

(d)では<顔や体の皮膚 etc>と<汗>を<ハンカチ>という媒体で引き離すイベントが *sécher* である。その過程で切片化され、プロファイルされるのは<汗>（引き離されるもの）と<ハンカチ>（引き離す媒体）である。<顔や体の皮膚 etc>（汗をかく場所）は除外される。この時、汗をかく場所は *sueur* からも *mouchoir* からも一つに限定できないので換喻ではなく換喻能力である。(e)で、*sécher* は<数学（の授業）>と<彼女>を<ディスコに行く>という媒体で引き離すイベントの役割を果たす。その過程で切片化され、プロファイルされるのは<数学>（引き離されるもの）と<彼女・ディスコに行く行為>（引き離す主格・引き離す媒体）である。<授業>（数学に関するイベント）や<教室>（数学の授業が行われる場所）は除外される。

(III) 三つ目の類型は以下である。

- *sécher* が任意の A と B を何らかの媒体で引き離すイベントであるなら、A と B の両方が切片化される。しかし、媒体は除外される。

(f) sécher un verre de bière d'un trait (ビール一杯を一気に飲み干す)

(f)で *sécher* は<グラス>と<ビール>を<飲む>という媒体で引き離すイベントの役割を果たす。その過程で切片化され、プロファイルされるのは<グラス>（容器）と<ビール>（内容物）と<飲む>（引き離す媒体）は除外される。この例では *verre*=グラス、*bière*=ビール、*d'un trait*=一気に、等から飲むという媒体が特定できるので換喻である。

参考文献

- Barcelona, Antonio (ed.). 2000. *Metaphor and metonymy at the crossroads: a cognitive perspective.* Berlin. : Mouton de Gruyter.
- Kleiber, Georges. 1999. *Problème de sémantique: polysémie en questions.* Villeneuve d' Ascq: Presses Universitaire du Septentrion.
- 朝山洋介. 2001. 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」山梨正明（編）『認知言語学論考』No. 1. ひつじ書房. 29-58.
- 朝山洋介. 2002. 「換喻（メトニミー）をめぐって—認知言語学からのアプローチー」『表現研究』第 76 号. 7-14.
- 森雄一. 2001. 「能力としての比喩、彩としての比喩」『成蹊国文』第 34 号. 90-100.
- Radden, Günter and Zoltán Kövecses. 1999. 'Toward the theory of metonymy.' In Klaus-Uwe Panther and Günter Radden (eds.), *Metonymy in language and thought*, 17-59. Amsterdam: J. Benjamins.
- Rewet, Nicolas. 1975. 'Synecdoche et métonymie' *Poétique* 23. 383-385.
- 染谷聰. 2003. 「「かたい」とフランス語 dur の比較」日本認知言語学会第 4 回大会 Conference book. 95-98.
- Talmy, Leonard. 2000. *Toward a cognitive semantics*, vol. 1, *Concept structuring systems.* Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Victorri, Bernard et Fuchs Catherine. 1996. *La polysémie: construction dynamique du sens.* Hermès. Paris.

「～てくれる」構文に関する「ウチ／ソト」論再考：認知的・語用論的アプローチ

澤田 淳 (早稲田大学大学院)

0. 本研究の目的

本研究の目的は、「ウチ」と「ソト」の概念を用いた条件（以下、「ウチ／ソト」性条件）は、「～てくれる」構文に対する適格性条件とはなり得ないことを明らかにし、代わりに、澤田（2003）で提出した「認知主体の仮説」に基づき、「理由・動機づけの条件」と「恩恵的認知不可能性の条件」という二つの認知的・語用論的観点からの適格性条件を提出することである。

1. 「ウチ／ソト」性条件による「～てくれる」構文の分析

授受（受益）表現の本質を「ウチ／ソト」性条件に基づいて明らかにしようとする研究は数多く存在する（奥津 1986、城田 1996、牧野 1996、沼田 1999、廣瀬 2001 等参照）。本節では、「ウチ／ソト」性条件は、「～てくれる」構文をどのように分析するかについて概観した後、その問題点を明らかにしたい。

1.1. 城田（1996）

城田（1996）は、「～てくれる」構文を「外主語内向態」と称し、（1）のように説明している。

- (1) テクレルは、発話の場においてより外なるものを主語にして、より内なるものを補語にして立てる。主語に立つのは事柄の主体（動作者）、（ノタメ）ニ等をともなう補語に立つのは関係者（主に受け手）である。
コトはより外からより内に向かう。これを外主語内向態という。（城田 1996：6-7）

（1）に従えば、次の（2）は、「主語」に「外なるもの」が、「補語」に「内なるもの」が生起しているため適格となるが、（3）は、「主語」に「内なるもの」が、「補語」に「外なるもの」が生起しているため不適格となる。

- (2) 君ハウチノ妹ノ為ニ十分尽クシテクレタ。
(3) *僕ハ太郎ニ料理ヲツクッテクレタ。 （城田 1996：6）

1.2. 牧野（1996）

牧野（1996）は、「～てくれる」構文に対し、次のような適格性条件を提出了。

- (4) 「～てくれる」では受け手が「ウチ人称」をとる。（牧野 1996：78）

牧野（1996）のいう「ウチ人称」とは、「話し手が発話時に心理的に自分のウチの人だと認知している人（牧野 1996：73）」のことである。次の（5）では、受け手である「通行人」が「ウチ人称」ではないため不適格とされる。

- (5) *花子は通行人にチョコレートを買ってくれた。 （牧野 1996：78）

1.3. 「ウチ／ソト」性条件の問題点

本節では、上述した「～てくれる」構文に関する「ウチ／ソト」性条件に対して、3点の反論を提出する。

第1に、「～てくれる」構文には、「補語」（受け手）が存在しないため「ウチ／ソト」の概念が関与しない例がある。

- (6) この日は、チェンジアップで西武打線のタイミングを外し、カーブを低めに沈めた。「いい具合にチェンジアップが抜けてくれた。」と杉内。 （『朝日新聞 2003.5.19』）（下線筆者）

第2に、主語や「補語」（受け手）が「無生物」である例がある。

- (7) 活気が、眼気も疲労も、身体から吹き飛ばしてくれる。 （松本清張『時間の習俗』（下線筆者）
「ウチ／ソト」性条件に従えば、（7）では、主語の「活気」が「外なるもの」、「補語」（受け手）の「眼気」や「疲労」が「内なるもの」（＝ウチ人称）となるが、無生物に対して「ウチ／ソト」の概念を適用することは不自然である。

第3に、主語が「外なるもの」で、「補語」（受け手）が「内なるもの」（＝ウチ人称）とは分析できない例がある。

- (8) うちのチームの監督が敵チームの監督に抗議文を渡してくれた。
(9) 桃太郎が鬼を退治してくれた。

「ウチ／ソト」性条件に従えば、（8）、（9）では、主語の「うちのチームの監督」、「桃太郎」が「外なるもの」であり、「補語」（受け手）の「敵チームの監督」、「鬼」が「内なるもの」（＝ウチ人称）であると分析されるが、実際はむしろ、「うちの監督」、「桃太郎」は「内なるもの」で、「敵チームの監督」、「鬼」は「外なるもの」であろう。

以上の論拠から、「ウチ／ソト」性条件は、「～てくれる」構文の適格性条件とはなり得ないと結論づけられる。

2. 認知主体の仮説

澤田（2003）では、「～てくれる」構文が表す恩恵性に関して次の仮説を提出了。

(10) 認知主体の仮説：「～てくれる」構文は事象を捉えている認知主体にとっての恩恵性を表す。

「認知主体の仮説」が示していることは、(i) 「～てくれる」文は、概念構造上、「事象」と「～てくれる」という二つの部分に峻別でき、(ii) 「～てくれる」構文は、事象内部の要素(=「非主語指示物」)にとっての恩恵性を表す(久野 1978、高見・久野 2002 等参照)のではなく、事象外部から事象を恩恵的なものと捉えている認知主体(conceptualizer)にとっての恩恵性を表す、という点である(澤田 2003:23)。「認知主体」に関しては Achard 1998、山梨 2000、Langacker 2002 等参照)。

本研究では、「認知主体の仮説」に基づき、「～てくれる」構文に対し、図1のような基本スキーマを提出したい(Pは事象を、Cは認知主体を、太点線矢印は、事象に対する認知主体の恩恵的な捉え方(construal)(=「～てくれる」)を表す)。

ここで、「認知主体の仮説」を用いて、以下の例を説明してみたい。
第1に、次の例を考えてみよう。

(11) 君はうちの妹の為に十分尽くしてくれた。 (=2)

(12) *僕は太郎に料理を作ってくれた。 (=3)

「認知主体の仮説」によれば、(11)では、「君がうちの妹の為に尽くした」という事象(=P)を認知主体(=C)が自分にとって恩恵的であると捉えるという自然な状況が成立するため、適格となると説明される。一方、(12)では、「僕が太郎に料理を作った」という事象(=P)を認知主体(=C)が自分にとって恩恵的であると捉えるという状況はあり得ないため、不適格となると説明される。

第2に、次の例を考えてみよう。

(13) *花子は通行人にチョコレートを買ってくれた。 (=5)

「認知主体の仮説」によれば、(13)が不自然に響くのは、「花子が通行人にチョコレートを買った」という事象(=P)を認知主体(=C)が自分にとって恩恵的であると捉えるという状況は想定しにくいためであると説明される。しかし、次の(14)の例では、受け手が「通行人」であるが、「うちのアルバイト店員が通行人にチラシを配って来た」という事象(=P)を認知主体(=C)が自分にとって恩恵的であると捉えるのはごく自然であるため適格となる。

(14) うちのアルバイト店員が通行人にチラシを配って来てくれた。

この事実は、(13)の不自然さは、「ウチ人称」であるべき受け手に「通行人」が生じていることが原因(牧野 1996: 78)ではないことを如実に物語っている。

3. 理由・動機づけの条件

本節では、上述した「認知主体の仮説」に基づいて、「～てくれる」構文の1つ目の適格性条件として、「理由・動機づけの条件」を提出する。はじめに、次の例のaとbを比較されたい。

(15) a. ワープロが壊れた。 / b. ??ワープロが壊れてくれた。

(15a) は自然に響くのに対し、「～てくれる」文(15b)は不自然に響く。なぜなら、通常我々は、自分が使っているワープロが壊れた場合、その事態を恩恵的である(好ましい)とは捉えないからである。このような事態に直面した場合、我々は通常、次のように「～てしまう」や「～やがる」を用いて表現する。

(16) a. ワープロが壊れてしまった。 / b. ワープロが壊れやがった。

しかしながら、認知主体が「ワープロが壊れた」という事象を恩恵的と捉える「理由・動機づけ」が保証されれば、(15b)は適格となる。次の例を見てみよう。

(17) ワープロが壊れてくれたことで、パソコンに切り替える決心がついた。

(17)では、「パソコンに切り替える決心がついた」は、事象(=「ワープロが壊れたこと」)を恩恵的と捉えたことの「理由・動機づけ」を表わしている⁽¹⁾。次の(18)も同様な線に沿って説明可能である。

(18) ノーベル化学賞受賞から間もなく一年を迎える島津製作所フェローの田中耕一さん(44)が一日、京都市の本社で記者会見し、最近の研究活動について「なんとか成果も始めました」と話した。(略)この一年について「わたしの顔を見ても(世間が)無視してくれるようになった」と笑わせた。

(『静岡新聞 2003.10.2』)(下線筆者)

(18)では、「世間が(私を)無視する」という事象を恩恵的と捉える「理由・動機づけ」は明示されてはいないものの、田中耕一氏の置かれた状況などによって、語用論的に(文脈によって)それが保証されているため、適格とな

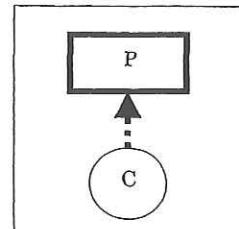


図1

っている。もしこうした語用論的な保証が失われてしまったら、次の(19)のように、(18)は不自然となる。

(19) ??世間が(私を)無視してくれるようになった。

以上の議論から、「～てくれる」構文に対する一つ目の適格性条件として、次の条件を提出する。

(20) 「理由・動機づけの条件」：「～てくれる」構文の使用に際しては、事象そのものに恩恵性が備わっていない場合、認知主体が事象を恩恵的と捉えるだけの「理由・動機づけ」が保証されていなければならない。このことは、図2のスキーマで表すことができる(Xは恩恵的と捉える「理由・動機づけ」を表す)。

図2のスキーマにおいて、「理由・動機づけ」(=X)の点線矢印が事象(=P)ではなく、恩恵的な捉え方(=「～てくれる」)に向かられていることに注意されたい。すなわち、本研究で言うところの「理由・動機づけ」とは、事象に対する「理由・動機づけ」ではなく、恩恵的であると捉えることに対する「理由・動機づけ」に他ならない。

次に、(21)のaとbについて考察してみよう。

(21) a. ??物価が上がってくれた。／ b. 物価が下がってくれた。

(21a)が不自然に響くのは、「物価が上がったこと」を恩恵的と捉える「理由・動機づけ」が保証されておらず、「理由・動機づけの条件」に違反しているからである。よって、(21a)が適格となるためには、次の(22)のように、「理由・動機づけ」が保証される必要がある。(22)では、恩恵的と捉える認知主体は、例えば、「農家の」人である。

(22) 物価が上がってくれたことで、通常の2倍の値段で野菜を売ることができる。

一方、(21b)では、「物価が下がったこと」を恩恵的と捉える「理由・動機づけ」がなくとも、それだけで適格となっている。なぜなら、一般に、「物価が下がること」の場合、「物価が上がること」とは異なり、事象そのものに恩恵性が備わっているからである⁽²⁾。

4. 「恩恵的認知不可能性の条件」

本節では、「～てくれる」構文の2つ目の適格性条件として、「恩恵的認知不可能性の条件」を提出する。

(23) 「恩恵的認知不可能性の条件」：不变の真理・法則、あるいは年表の表現形式をとる歴史的事実を表す事象(命題)に対しては、認知主体は恩恵的と捉えることはできない。

はじめに、次の例のaとbを比較されたい。

(24) a. 1+1は2である。／ b. *1+1は2であってくれる。

(25) a. 水は水素と酸素の結合からなる。／ b. *水は水素と酸素の結合からなってくれる。

(24a)、(25a)に「～てくれる」を付加した(24b)、(25b)はいずれも不適格である。なぜなら、「1+1が2であること」や、「水が水素と酸素の結合からなること」は、不变の真理・法則であり、認知主体の感情・評価とは無関係に成立している事象(命題)であるからである。このことは、「恩恵的認知不可能性の条件」によって説明される。

しかしながら、興味深いことに、「1+1が2である」という命題が「計算通りである／うまくいく」ということを表す比喩として用いられたような場合には、「～てくれる」構文は適格となる。次の例を見られたい。

(26) この世の中は、なかなか1+1が2であってはくれないものだ。

これは、「1+1が2である」という命題が比喩的に用いられることで、もはや不变の真理・法則ではなくなり、認知主体による恩恵的な捉えが可能となるためであると考えられる。

続いて、次の例のaとbを比較されたい。

(27) a. 1789年、幕府、棄捐令を発する。／ b. *1789年、幕府、棄捐令を発してくれた。

(27a)の事象は、年表に記載された一事件であり、認知主体の感情とは独立的に成立している。このような、年表の表現形式をとる歴史的事実を表す事象に対しては、「恩恵的認知不可能性の条件」が適用され、(27b)は不適格となる。しかしながら、次の(28)のように、格助詞を補ったり、過去形にしたりすることで、年表の表現形式をとらない形にすれば、適格性は若干上がる。

(28) ??1789年に、幕府が棄捐令を発してくれた。

さらに、「1789年」という年号表現ではなく、「去年」、「5年前」等の直示表現で表した場合、完全に適格となる。

(29) 去年／5年前、幕府が棄捐令を発してくれた。

これは、直示表現が用いられることで、話し手である認知主体が座標軸の原点となり、認知主体が自分自身の「個人

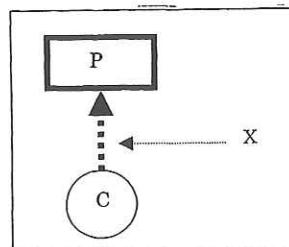


図2

的な」捉え方によって事象を捉えることが可能となるからであろう。(29) の認知主体は、例えば「旗本・御家人」である。幕府が棄捐令(旗本・御家人救済のため6年以前の借金を破棄させた令)を発令したこと、旗本・御家人は借金を返済する必要がなくなったのである。

5. まとめと今後の課題

本研究では、「ウチ／ソト」性条件は、「～てくれる」構文に対する適格性条件とはなり得ないことを明らかにし、それに代わる適格性条件として、澤田(2003)で提出した「認知主体の仮説」に基づいて、(i)「理由・動機づけの条件」、(ii)「恩恵的認知不可能性の条件」の2つの条件を提出した。(i)「理由・動機づけの条件」は、「～てくれる」構文の使用に際しては、事象そのものに恩恵性が備わっていない場合、認知主体が事象を恩恵的と捉えるだけの「理由・動機づけ」が保証されている必要があることを、(ii)「恩恵的認知不可能性の条件」は、不变の真理・法則や年表の表現形式をとる歴史的事実を表す事象(命題)に対しては認知主体は恩恵的と捉えることができないということを、それぞれ表している。

「恩恵的認知不可能性の条件」は、恩恵性のみならず、感情性・思考性一般にまで適用され得るかなり普遍的な条件であると考えられるが、詳しい考察については今後に残された課題としたい。

注

(1) しかしながら、恩恵的と捉える「理由・動機づけ」が保証されていれば、必ず適格となるとは限らない。次の例を見られたい。

(i) a. *愛用のパソコンが壊れてくれた。

b. ?? 愛用のパソコンが壊れてくれたことで、返ってパソコンに切り替える決心がついた。

これは、「愛用の」という表現が、「ワープロが壊れたこと」を認知主体が恩恵的と捉えることを許容しないためであろう。

(2) 高見・久野(2002:342)では、(i)「くれる」が現れる節のところまでの記述が、話し手(または非主語指示物)に対する利益を表しているかどうか(=先行利益度(の階層))、(ii)「くれる」が現れる節に続く記述が、話し手(または非主語指示物)に対する利益を表しているかどうか(=後続利益度(の階層))が、「～てくれる」構文の適格性を決定するとしている。

(i) a. 教科書を忘れたので、隣の人が見てくれた。

b. 教科書を忘れたが、隣の人が見てくれたので助かった。(高見・久野2002:343)

高見・久野(2002)によれば、(i a)では、先行利益のみ表されているが、(i b)では、先行利益と後続利益の両方が表されてるため、(i a)より(i b)の方が適格性が高いという(高見・久野は、この適格性の度合いを点数化して表しており、7点満点中、(i a)では5点を、(i b)では7点を与えている)。しかし、このような数値分析には問題があると思われる。次例参照。

(ii) 「松井が僕の夢をかなえてくれた」。朝日新聞社の単独インタビューに応じた長嶋氏はそう語った。

(『朝日新聞2003.5.3』)(下線筆者)

高見・久野(2002)の分析に従えば、(ii)では、先行利益も、後続利益も表されていないため、適格度の点数は7点満点中3点となるが、(ii)は完璧な文であると判断される。利益の意味が明示されていれば明示されている程、適格性が高まるとする高見・久野(2002)の分析は、本研究における「理由・動機づけの条件」による分析とは、本質的に異なっている。

参考文献

- Achard, M. 1998. *Representation of Cognitive Structures*. Berlin : Mouton de Gruyter.
- 廣瀬幸生 2001. 「授受動詞と人称」『言語』Vol.30. No.5. pp.64-70.
- 久野暉 1978. 『談話の文法』東京：大修館書店。
- Langacker, R. 2002. "The Control Cycle : Why the Grammar is a Matter of Life and Death." 『認知言語学会論文集第2巻』pp.193-220.
- 牧野成一. 1996. 『ウチとソトの言語文化学—文法を文化で切る—』東京：株式会社アルク.
- 沼田善子. 1999 「授受動詞文と対人認知」『日本語学』第18巻第9号. pp.46-54.
- 奥津敬一郎. 1986. 「やりもらい動詞」『国文学 解釈と鑑賞』第51巻1号. pp.96-102.
- 澤田淳. 2003. 「「～てくれる」構文の本質と認知主体」『国語学会2003年度秋季大会予稿集』. pp.17-24.
- 城田俊. 1996. 「話場応接態(いわゆる「やり・もらい」) — 「外」主語と「内」主語—」『国語学』186. pp.1-14.
- 高見健一・久野暉. 2002. 『日英語の自動詞構文』東京：研究社.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』東京：くろしお出版.

一人称指示における「こちら」の機能と使用条件

早稲田大学大学院 金井勇人 hayato@trio.plala.or.jp

1. はじめに

話し手が自身を指すとき、「わたし」¹などの一人称名詞だけでなく、「こちら」という指示語が用いられることが多い。本発表では、一人称指示に関して、どのような場面でどのような機能を意図して「こちら」が使用されるのか、について考察する。

なお本発表では、一人称指示を、個人としての話し手を指すものから、組織や団体の一員としての話し手を指すものまでを含めた、幅広い概念として捉える。

2. <対立性>を強調した「こちら」

話し手が「こちら」と言ったとき、原則的に、それに対立する相手が想定される。また三上(1972)では、指示語について、「コレ、ソレ、アレは同一平面を同時的に分割するものではない。ソレ対コレとアレ対コレとは異時的であり、異質的である(p.178)」と述べられている。

すなわち「こちら」と二人称を指す「そちら」との間に、あるいは三人称を指す「あちら」との間に、対立が想定されるということである。以下、この特性を<対立性>と呼ぶ。

それでは、この<対立性>を強調した「こちら」とは、どのようなものか。

(1) 散歩途中、小学高学年らしい子どもたちの「けんか」に遭遇した。…（中略）…
「どうしたの？」。声を掛けると、腕組みしていた男児が「いいえ、何でもありません。ぼくたちのことです。どうぞ、お構いなく」

その言葉と態度に驚き、立ち尽くしていると今度は「こちらの問題ですので、おばさんには関係ありません。立ち去ってください」『毎日新聞』1999.02.21朝刊

(1)では、「こちら」の代わりに、一人称名詞を用いるという選択肢がある。

(1)「ぼくたちの問題ですので、…」

なぜ、一人称名詞の選択が可能なのに、わざわざ「こちら」が選択されているのか。

その意図は、両者の対立を強調したい、ということに他ならない。すなわち(1)では、「子どもたち」が「おばさん」に反感を覚えているのであり、「コ」と「ソ」の対立によって、それを表現したいのだと考えられる。

逆に、そうした十分な理由がなければ、「こちら」の使用は難しい。

(2) ゆらーり、ゆらーり、お母さんが生まれたばかりの赤ちゃんを抱っこしてあやしている。無心に眠る赤ちゃん。お母さんはそっと歌いだした▲「アイ・ラブ・ユー いつまでも／アイ・ラブ・ユー どんなときも／わたしが いきているかぎり／あなたはずっと わたしのあかちゃん」。『毎日新聞』1999.12.24朝刊

(2)では理屈の上では、「お母さん」は「コ」に、「赤ちゃん」は「ソ」に相当する。しかし

¹ 本発表では、特に断りがない場合、「わたし」を一人称名詞の代表として扱うこととする。

「お母さん」にとっては、「赤ちゃん」との対立を強調する理由は存在しない²。このことから「お母さん」が自身を「こちら」で指すと、不自然に感じられる。

(2)' ? 「あなたは ずっと こちらのあかちゃん」

つまり対立の強調は、(1)十分な理由があれば自然だが、(2)'そうでなければ全く不要である。

後者の場合には、<対立性>を持たない一人称名詞「わたし」が、やはり適當だろう。

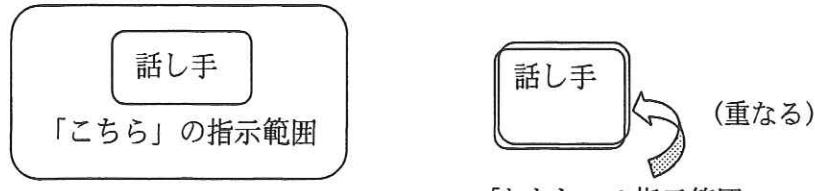
以上の議論は、「対あちら」の場合にも当てはまると考えられるが、詳細は割愛する。

3. <間接性>を強調した「こちら」

「コ」と「ソ」の対立において、その対立を強調する方向ではなく、むしろ緩和する方向に働く「こちら」も考えられる。

指示語「こちら」は、話し手自身のみならず、その周囲の領域をも、その指示範囲に含む。このとき、「こちら」の指示範囲と、話し手自身の物理的領域とは、言わば<全体ー部分>という関係を構成する。ここで、<全体>から<部分>へというメトニミーによる転換が行われて、「こちら」による一人称指示が成功する。

(3)



「わたし」の指示範囲

このことに着目すると、「こちら」による指示は、メトニミーを介在させた間接的なもの、と言うことができる。以下、この特性を<間接性>と呼ぶ。

それでは、<間接性>を強調した「こちら」とは、どのようなものか。まず次のような場合には、特に対立が強調されているとは感じられない。³

(4) 彼は受話器を取り上げると、

「L社の京都支局ですね。こちらは左山です。これから記事をおくります」

と、はっきりした口調で言った。

『あすなろ物語』

この発話における「こちら」を「わたし」に変更したのが、(4)'である。

(4)' 「L社の京都支局ですね。わたしは左山です。これから記事をおくります」

もし、(4)が対立を強調したものならば、それを(4)'に変更すると<対立性>が消え、その結果(4)'は、より当たりの柔らかい発話になるはずである。しかしながら直観的に、(4)'より(4)の方が、当たりが柔らかい。したがって、(4)における特性は<対立性>ではない。

(4)の「こちら」が強調するのは、実は<間接性>である。それによって、聞き手に対する当たりの柔らかさが生まれているのだと考えられる。

このような<間接性>を要求する場面的特徴とは、どのようなものか。それは、聞き手にと

² 対立を強調するか否かは、話し手の主觀に依存する相対的なものと言える。しかしながら、空間的に隔たっていること、心理的に隔たっていることなどが、その指標となり得るだろう。

³ ある一つの「こちら」において、ある特性と他の特性とは、互いに排他的なのではなく、共存可能と考えられる。問題は、そのうちで最も強調されている特性は何か、ということである。

って話し手が新情報であること、と要約できるだろう。

自身が新情報である話し手は、まず、会話の場へ自身を導入する。その際、いきなり一人称名詞を使用すると、その指示範囲の局所性（(3)参照）によって、聞き手にとって、話し手の特定にかかる負担が大きい。

そこで、指示範囲の広い「こちら」によって、話し手の特定に関し、まず聞き手に大まかな見当をつけさせて、その後、精確な特定を行わせる。このような段階的な特定を提供することで、聞き手の負担を軽くするのである。

これは、一種の対人的配慮と言えよう。したがってこのときの話し手には、聞き手に丁寧に接しようという意図があることが、前提となる。

4. <補完性>を利用した「こちら」

これまででは、対立相手が特定されている場合のみを考察してきた。しかしながら「こちら」の全体像を捉えようとするとき、第3の機能に触れる必要があるだろう。それは、対立相手が不特定なときに使用される、もっとも根本的な特性に関わるものである。

例えば、新聞の読者投稿欄の冒頭に次のようにあるのは、不自然と感じられる。

(5) ?こちらはちり紙こうかんでございます（投稿欄の冒頭で）

人称指示におけるコソアは、人称によって区分されると考えられる。したがって二人称である聞き手が不特定であれば、「そちら」に相当するものが存在しない。(5)は読み手（聞き手）が正に不特定であり、必然的に「対そちら」が成立しないから、不自然なのである。

しかしながら、路上をゆっくり走る車からの次のような発話ならば、自然と感じられる。

(5)' まいどおさわがせいたしております こちらはちり紙こうかんでございます

(<http://www9.big.or.jp/~mister/qq.txt>, 2003.10.29 現在)

この発話が行われる瞬間も、(5)と同様、具体的な「そちら」は特定されていない。この発話を、例えば家の中で聞いた者が、家の外に出て行って発話者と接触する。そして、この接触を行う者が、将来的な「そちら」に相当する者である。

なぜ(5)は不自然で、(5)'は自然なのか。それは、(5)'では具体的な「そちら」が、すでに発話の時点で見込まれているが、(5)ではそうではないからと考えられる。

(5)'の行為には、新聞紙を提供する者（客）と、それをちり紙に交換する者（業者）との、2者が必須である。このように、ある行為の完遂にとって相互交渉が不可欠な場合には、その時点で相手が不特定でも、相手の特定を見込んだ発話を行える、と考えられる。

相互交渉が不可欠な場合というのは、(5)'のように、多くは、ある種の職能⁴を媒介にして、両者の接触が動機づけられる場合だろう。このとき、行為を完遂するためには、「こちら」に対して「そちら」が必須である。

換言すれば、職能を媒介にして、「こちら」が、未出の「そちら」の補完を要求する、というわけである。以下、このような特性を<補完性>と呼ぶ。

つまり(5)の場合には、「そちら」に相当するものが存在しないという前述の理由に加え、相互交渉が不可欠ではない（書くという行為は読者からの干渉を受けるわけではない）という

⁴ 多くは商業的な利益の関係するものであろうが、必ずしもそれに限らない、と定義する。

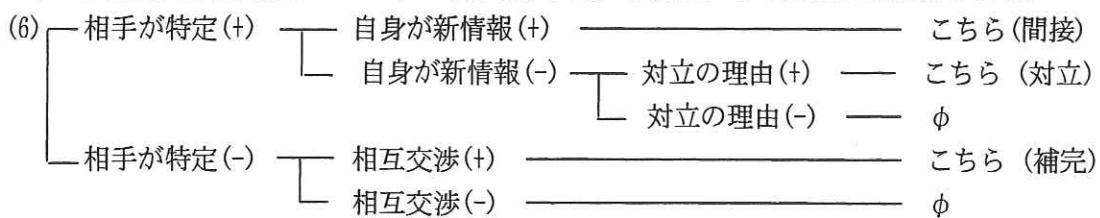
理由によっても、「こちら」の使用が不自然となる。そのため投稿欄では、<補完性>を持たない「わたし」の方が、自然と感じられるのである。

(5)" わたしはちり紙こうかん（を営む者）でございます（投稿欄の冒頭で）
一方、路上においては「わたし」の使用は不自然である。

(5)" ?わたしはちり紙こうかん（を営む者）でございます（路上で）
前述の通り、このとき具体的な「そちら」は特定されていない。よって一見「わたし」の方が適切なように思われる。しかし「わたし」は<補完性>を持たないので、これでは「そちら」（つまり将来的な客）を欲するメッセージにならない。それが(5)"が不自然な理由である。
つまり、(5)'や(5)"における、<補完性>を持つ「こちら」の使用は、望ましいというよりも、実は必然的な要請なのだと考えられる。

5.まとめ

本発表では、一人称指示における「こちら」の特性を、対立性・間接性・補完性と捉え、それぞれの代表的な使用場面についての考察を行った。下図は、その大まかな指標である。



参考文献

- 金水 敏. 1990. 「方向と選択～コチラ類の指示詞～」『日本語学』9, 22-30. 東京:明治書院.
近藤泰弘. 2000. 『日本語記述文法の理論』東京:ひつじ書房.
鈴木孝夫. 1973. 『ことばと文化』東京:岩波書店.
瀬戸賢一. 1997. 「意味のレトリック」『文化と発想とレトリック』94-177. 東京:研究社.
田嶋行則. 1997. 「日本語の人称表現」『視点と言語行動』13-44. 東京:くろしお出版.
多門靖容. 2002. 「比喩分析の新展開～換喻・提喻を中心に～」第39回 表現学会（桜花学園大学
2002.6.1) シンポジウム資料.
廣瀬幸生. 1997. 「人を表すことばと照応」『指示と照応と否定』1-89. 東京:研究社.
三上 章. 1972. 『現代語法新説』東京:くろしお出版（復刊第一刷, 初出は1955 刀江書院）.
Levinson, S. C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge:Cambridge University Press.
金井勇人. 2003. 「二人称指示における指示詞「そちら」についての考察～二人称名詞「あなた」と
の対照を通して～」『一橋大学留学生センター紀要』6, 53-62. 一橋大学留学生センター.

引用資料

- 井上靖『あすなろ物語』新潮文庫
『毎日新聞』（1999年版 CD-ROM）

英語の it, this, that の間の相違について
—認知ステイタスに注目して—

東 裕美

英国マン彻スター大学大学院

人称代名詞 it を指示代名詞 that や this に置き換えた場合、(1) a に示すように that, this のいずれとも置き換え可能である、(1) b に示すように that のみと置き換え可能である、(1) c に示すように that, this いずれとも置き換え不可能である、の 3 タイプの結果が得られる。

(1)a "...Nurse O'Brien sent me to look for you. She wants to lift Mrs. Welman up,
and she says you usually do it/that/this with her." (SC:32)

(1)b "I put it to you that what you really said was: 'I have left the morphia at
home. I shall have to work go back for it/?that/ *this.'" (SC:196)

(1)c "Oh, of course, the money *did* matter to us. We weren't completely indifferent
to it/*that/*this. (SC:36)

(1) からわかるように、it, that, this の間の機能の違いは見えにくい。人称代名詞 it と指示代名詞 this/that の間の違いに関する先行研究は概して指示対象の認知ステイタス — 指示の時点で指示対象がどの程度聞き手の関心を集めているかの度合いについての話者の想定 — がその選択を左右しているという見解で一致している (e.g. Gundel et al. 1993)。this と that の間の違いについても、認知ステイタスにもとづけば、近接性など既存の概念では捉

えられない相違も説明可能になると指摘されている (e. g., Strauss, 1993, p. 405-6)。しかし、代名詞的に用いられる it, this, that の間の違いを認知ステータスの観点から記述・説明した研究は少ない (cf. Ariel 1990)。さらに先行研究は (1) の現象を十分に説明しないように思われる。本発表では、主に British National Corpus を用いて集めた例文を資料とし、Givon (1983) の Criteria に基づいたデータ分析を通じ、代名詞的に用いられる it, this, that が、指示対象が満たす認知ステータスにおいてどう異なるかについて示す。更にその結果にもとづき、理論的な考察を行う。

参考文献

- Ariel, M. (1988). Referring and accessibility. *Journal of Linguistics* 24, 67-87.
- . (1990). *Accessing noun phrase antecedents*. London: Routledge.
- Givon, T. (1983). Topic continuity in spoken English. In T. Givon (Ed.), *Topic continuity in discourse: A quantitative cross language study* (pp. 342-63). Amsterdam: John Benjamins.
- Gundel, J., Hedberg, K. N. & Zacharski, R. 1993. Cognitive status and the form of referring expressions in discourse. *Language* 69.2, 274-305.
- Strauss, S. (1993). Why ‘this’ and ‘that’ are not complete without ‘it’. *Papers from the 29th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 403-417.
- . (2002). *This, that, and it in spoken American English: A demonstrative system of gradient focus*. *Language Science* 24, 131-52.

例文の出典

- Christie, A. (1939, 1940). *Sad Cypress*. New York: Agatha Christie Mallowan Berkley ed. 1984. New York: Berkley.

夫婦のコミュニケーションギャップの一考察

寺田千恵

(神戸大学大学院総合人間科学研究科)

岡本真一郎

(愛知学院大学心身科学部)

1. 問題

[先行研究] 男女のコミュニケーション様式は様々な点で異なる。この点は過去の多くの研究が明らかにしてきた。社会言語学者のTannen (1986) は、男女は生れながらに異なった文化の中で育つため両者間での会話は「異文化コミュニケーション」であるという視点をとっている。日本においても井出 (1982) が、男女の言葉の使用の違いを指摘するなど多くの研究報告がある。ここでは、配偶者に対する否定的コメントについての受け取り方の、男女（夫婦）による相違について取り上げたい。

「和」を重んじる日本文化においては、他者に対して謙遜、すなわち自己卑下的呈示を行うことが多い。村本・山口 (1997) の実験的研究も個人の成功については卑下的な原因帰属をする傾向があることを明らかにしている。しかしこの研究は同時に、自分の所属集団の一員の成功については高揚した原因帰属をする傾向があるという結果も報告している。つまり、自己についての望ましい事柄については卑下的呈示を行うが、自分の所属する集団の一員の望ましい事柄については高揚的呈示を行う傾向があるのである。ただし村本・山口 (2003) は、所属する集団の一員であっても自分と心理的距離が近い人の成功については卑下的呈示を行うことを明らかにした。

[問題提起] それでは、夫婦が互いのことを第三者に話す場合はどうだろうか。内集団に対する高揚と卑下のいずれが生ずるのか。夫が妻について、または妻が夫について話す際に、卑下を動機づける要因と高揚を動機づける要因の両方が想定できる。卑下を動機づける要因の背景に、「身内は謙遜すべし」の規範がある。つまり、自己と配偶者を同一視したりまたは見下すことが、配偶者の卑下につながるというものである。一方高揚を動機づけるのは、「身内を尊重すべし」という規範に基づくものである。互いの独自性を尊重し距離を保とうとすることが、配偶者を尊重する結果につながると考えるものである。

本研究では、男性（夫）と女性（妻）ではどちらの規範に重きを置くかが異なるのではないかと仮定する。すなわち、男性は「身内謙遜」の規範を重視し、女性は「身内尊重」の規範を重視する。そしてこのような食い違いがあるため、男性は配偶者の能力を否定するよう

なコメントに不快を感じないが、女性はこれに不快を感じる、と推測する。

ただしこうした規範は話し手が必ずしも明白に意識していない可能性がある。このため、単なる質問紙調査ではなく、場面を設定した質問紙実験による検討を行った。

[本研究の目的] 本研究は、夫婦間のコミュニケーションギャップについて実証的に考察することを目的とした。具体的には夫婦の一方が第三者から誉められた際に、他方がその内容を否定するコメントをする（e.g. 「料理上手な奥さんで羨ましいですね」に対し夫が「いえいえそうでもありませんよ」と返答する）。この否定的コメントの受け取り方について、男女（夫婦）間の差を、質問紙実験によって検討した。主眼点は、否定的にコメントされた側が不快感を持つ程度の男女差を、統計的に分析することにある。また不快感の背後には、第三者にコメント内容が事実だと受け止められることへの懸念があると予想されるので、その点についても検討した。

[仮説] ①誉められた内容を配偶者に否定された場合、女性（妻）の被験者は男性（夫）よりも不快感が強い。

②男性よりも女性の被験者の方が、否定的な発話内容を第三者に事実であると認識されるという懸念を抱く度合いが高い。

③被験者の男女にかかわらず、事実事態の否定よりも、伝聞事態で否定される方が不快度は高い。

2. 方法

[実験計画と場面] 被験者の性(2)×ターゲット（否定的コメントの受け手）の性(2)×技量(3)×事態(2)の実験計画である。実験では6個の日常場面を設定した。各場面では、コメントされる側の実際の技量を得意・普通・苦手の3通りに操作した。また、対象となる事態を伝聞事態（実際の技量が確認不可能：3場面）と事実事態（確認可能：3場面）に分けた。

[被験者] 被験者は既婚男女126名であった。このうち、記入漏れのない106名（男性51名、女性55名）を分析対象とした。年齢は28歳～37歳（平均年齢男性32.29歳、女性31.98歳）であった。

[従属変数] 被験者はコメントの不快感、適切さ、事実と受け止められることへの懸念、謙遜の程度についてそれぞれ7ポイントスケールで評定した。

3. 結果

それぞれの従属変数について条件ごとに平均値を算出し、被験者の性×ターゲットの性×技量×事態の分散分析を行った。

(1) 「不快でない－不快である」の評定値。被験者性 ($F(1,102)=57.80, p<.001$)、事態 ($F(1,102)=5.84, p<.05$)、技量 ($F(2,204)=410.54, p<.001$) の主効果に加えて、被験者性×技量 ($F(2,204)=4.84, p<.01$) と、被験者性×ターゲット性 ($F(1,102)=4.39, p<.05$) の交互作用が認められた。男性被験者は否定的なコメントをそれほど不快に感じていないが、女性被験者は不快に感じていることが分かった。全体として、伝達場面での否定的コメントの方が事実場面でのものより不快に感じている。男性は夫と妻のどちらが否定的コメントされても不快に感じないが、女性は夫と妻のどちらが否定的にコメントされても不快に感じ、特に妻が否定的にコメントされている時に不快な度合が大きい。男性には技量による差は見られなかったが、女性は得意なことを否定的にコメントされた際に最も不快と感じることがわかった。

(2) 「適切でない－適切である」の評定値。技量 ($F(2,202)=5.26, p<.01$)、被験者性 ($F(1,101)=77.90, p<.001$) の主効果と、被験者性×ターゲット性 ($F(1,101)=4.05, p<.05$) の交互作用が認められた。全体としては技量の高い場合ほど否定的にコメントすることが適切ではないと感じている。また、女性の被験者の方が男性よりも否定的にコメントすることを適切だと感じていない。さらに女性は同性がコメントされる方が適切でないと感じている。

(3) 「事実と受け止められる可能性が低い－高」の評定値。事態 ($F(1,204)=12.87, p<.001$) と被験者性 ($F(1,102)=48.89, p<.001$) の主効果が認められた。全体として伝聞場面での否定的コメントの方が事実場面よりも、否定された内容について他者に事実であると受け止められると感じていることが分かった。特に、女性被験者は男性よりも否定された内容について他者にその内容が事実であると受け止められていると感じている。

(4) 「謙遜している－謙遜していない」の評定値。技量 ($F(2,204)=156.0, p<.001$) の主効果に加えて、事態×ターゲット性×被験者性 ($F(1,204)=6.33, p<.05$) の交互作用が認められた。男女被験者ともに得意条件、普通条件の場合に謙遜と受け止めた度合いが高かった。男性は夫が否定的コメントをされる場合には、伝聞場面の方が事実場面よりも謙遜していると感じているのに対し、妻が否定的コメントをされる場合には事実場面の方が伝達場面よりも謙遜していると感じている。一方女性は、夫・妻のどちらがコメントをされても伝聞場面より事実場面の方が謙遜と感じていることが分かった。

表1 各評定値の条件別平均値

被験者性	ターゲット性	技量	不快	適切	事実	謙遜
男	男 [夫]	得意	5.64	5.29	3.24	5.74
		普通	5.88	4.86	3.10	5.76
		苦手	5.79 (5.77)	5.50 (5.21)	3.38 (3.24)	2.64 (5.21)
	女 [妻]	得意	5.48	4.92	2.75	5.57
		普通	5.67	5.28	3.10	5.52
		苦手	5.75 (5.63)	5.05 (5.08)	3.25 (3.03)	2.65 (5.08)
女	男 [夫]	得意	2.40	2.19	5.08	6.22
		普通	2.53	2.53	5.28	5.93
		苦手	3.18 (2.71)	2.95 (2.56)	5.12 (5.16)	2.87 (2.56)
	女 [妻]	得意	3.20	3.02	5.10	5.82
		普通	4.02	3.52	4.74	5.30
		苦手	4.46 (3.89)	3.70 (3.41)	5.14 (4.99)	2.88 (3.41)

注) 不快(不快である1-7不快でない), 適切(適切でない1-7適切である),
 謙遜(謙遜していない1-謙遜している), 事実(事実と解釈させる可能性が低い1-7高い)
 表中()内の数字は、各評定尺度について技量に関する平均をとったものである。

4. 考察

不快感と適切さの程度に男女被験者の差がみられ、仮説①は支持された。また女性の方が男性よりも配偶者の否定的コメントを事実ととられやすいと感じていることが明らかとなり、仮説②は支持されている。男女にかかわらず事実場面での否定的コメントよりも、伝聞場面で否定される方が不快感は高いことが明らかとなり、仮説③も支持された。

男性は配偶者への誉め言葉をあたかも自己に対するもののように感ずるため、否定的コメントをしても、またはされても不快に感じない。しかし女性は、配偶者への誉め言葉を自己に対するものではないと感ずるため、不快に感じる。さらに女性は、男性が夫と妻のどちらが否定的コメントされても不快に感じないのに対し、夫と妻のどちらが否定的にコメントされても不快に感じている。男性が配偶者を自己の延長と捉えているのに対し、女性は独立した個人と捉えていることが窺える。

[引用文献]

- 井出祥子 1982 「言語と性差」『言語』Vol. 11
 村本由紀子・山口勸 1997 「もうひとつのSelf-serving bias: 日本人の帰属における自己卑下・社会奉仕傾向の共存とその意味について」『実験社会心理学研究』
 村本由紀子・山口勸 2003 「“自己卑下”が消えるとき—内集団の関係性に応じた個人と集団の成功的語り方ー」『心理学研究』,
 Tannen, D. 1986 "That's Not What I Meant!" International Creative Management

反対意見表明における日本語母語話者と非母語話者の比較 —発話データとメールデータの相違—

薄井良子
神戸大学大学院
choro@f3.dion.ne.jp

1. はじめに

本発表では、反対意見表明における日本語母語話者（NS）と「第二言語語用受容意識」が高いと認められる非母語話者（NNS）の相違について、発話データとメールデータの構造分析を試みた結果を報告する。なお、本発表でいう「第二言語語用受容意識」とは、日本語を第二言語として学習する非母語話者が、日本語の社会的・文化的ルールにしたがって適切に日本語を運用しようとする意識とする。

2. 先行研究

第二言語（L2）習得の「個人差」を考える分野で、Hinkel (1996) が、L2語用能力の発達には学習者のL2語用に対する「態度」を見る必要があることを提言し、LoCastro (2001) は、学習者の「態度・学習動機・自己アイデンティティ」の「個人差」がL2言語行動規範を受け入れる気持ちを左右すると述べている。

山下みゆき・サウクエンファン (2001) が作文データをもとに、中国人学習者の場合、対人配慮の「前置き」が少ないことを、また李善雅 (2001) がロールプレイデータをもとに、韓国入学者は、直接的な自分の意思表明に重点をおいていることを報告している。杉本・柏崎 (2002) は、大学生のメーリングリストをもとに、非母語話者も自分の意見の明確な表明や明示的な批判を回避するという日本人的な表現をするとしている。対照社会言語学的な視点から、李吉鎔 (1999・2001) が聞き手を地位の上下・親疎関係・公私の場面という属性によって、韓国入学者と日本人入学者が母語で反対意見を表明した結果を分析し、日本人は公的場面・私的場面という区別をせず、また話し手と聞き手との関係にかかわらず、84.2%～95.9%の割合で、「談話支持ストラテジー→理由節→提案節」という線状性のある構造の存在を明らかにした。

3. 研究方法

3-1 データ収集

インフォーマント：大学院生（一部研究生）

・ NS14 (女7男7) NNS14 (女10男4)

NNSの母語：中国語12（台湾5）韓国語2

日本語学習歴：3年1か月～9年（全員1級）

日本滞在歴：1年2か月～8年

・別途、アンケート・インタビューで第二言語語用受容意識が高いことを確認：母語でははつきり反対することが良いが日本語ではストレートにならないよう曖昧にすることに留意
課題：修士論文中間発表会を取りやめようと意見に対して反対のあなたはどう反対意見を述べるか。回避する場合はその理由を述べる。

発話データ：発話内容を録音

24条件 公私/上同下/親疎/性別

メールデータ：電子メールで返信 NNS12

12条件 上同下/親疎/性別

3-2 構造分析

①線状性の確認：例「先生のおっしゃることももっともだと思うのですが（談話支持ストラテジー）中間発表会は論文作成のペースメーカーとして重要ですので（理由節）中間発表会はこのまま続けていただきたいです。（提案節）」

②提案節の位置 最初：1・二番目：2・
平均値の差を比較

4. 分析の結果

4-1 線状性の割合 NS 公的場面 17.9% 私的場面 14.3% メール 20.8%
 NNS 公的場面 19.0% 私的場面 19.6% メール 6.9%

図1 線状性：公的場面（相手別）

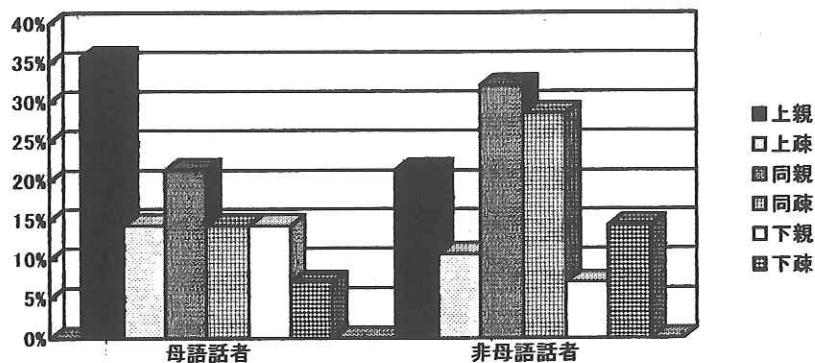


図2 線状性：私的場面（相手別）

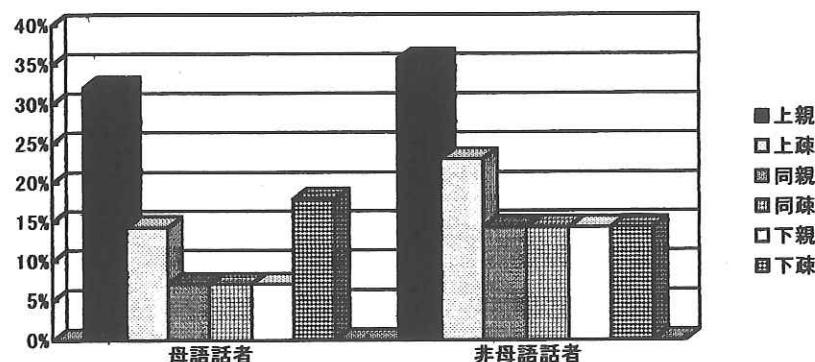
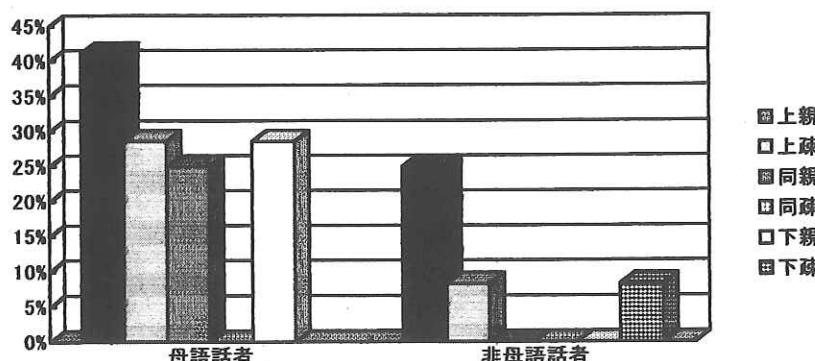


図3 線状性：メールデータ（相手別）



4-2 提案節の位置

*5%水準で有意差

**1%水準で有意差

図4

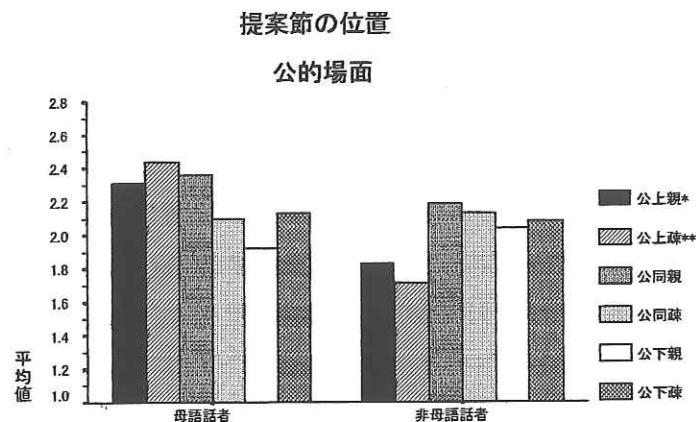


図5

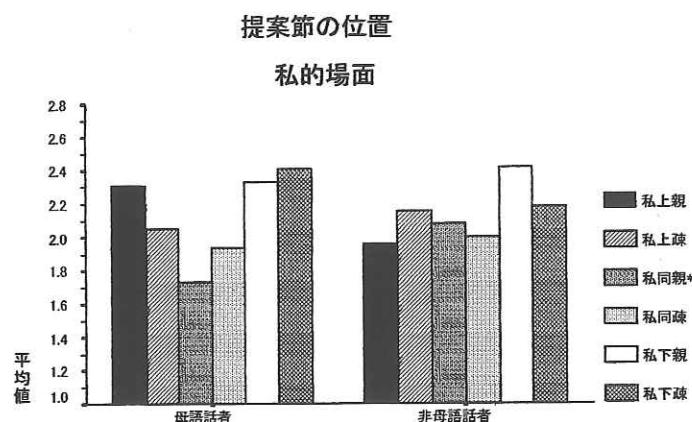
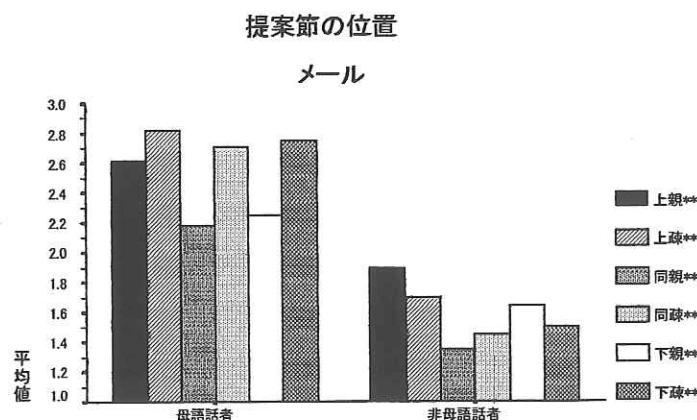


図6



5・考察

①線状性の出現率について

なぜ、母語話者において線状性の出現が先行研究と大幅に異なったのか？

- ・先行研究とは課題・インフォーマント数が違う
- ・発話：反対意見を表明することが前提、回避は例外⇨回避も可
- ・インフォーマント：大学生⇨大学院生（英語の影響）
- ・インフォーマントと調査者の既存の人間関係：無い⇨有る

そもそも、反対意見表明に構造的規範（スキーマ）はあるのか？

⇒日本語語用の受容意識が高い非母語話者にも構造的なスキーマが出現しなかったのではないか。

②非母語話者のメールにおけるふるまいについて

なぜ、非母語話者はメールになると、線状性の出現も減少し、また提案節の出現位置が前になるのか？

⇒よりストレートな表現、印象になる⇨非母語話者の意識との差

- cf. •日本人大学生の場合：携帯メール／電子メールの条件の方が対面／携帯電話条件よりも
対人緊張得点が低い。（都築・木村2000）

- ・インフォーマントのコメント：メールでの反対意見表明 →
⇒対人緊張度が緩和されることで、母語の影響が(pragmatic transfer)が出現しやすいのかもしれない。

	楽	負担	？
NS	5	4	5
NNS	7	4	1

6. おわりに

本発表では、先行研究と異なり「談話支持ストラテジ→理由節→提案節」という線状性がスキーマとしては存在しないこと、またメールデータにおいては、NNS が日本語語用受容意識に反して、ストレートな表現をしていることを示した。今後は「自然談話」における構造の分析を行ないたい。

<参考文献>

- 李吉鎔 1999 「反対意見表明に関する対照社会言語学的研究—韓・日の大学生を対象に—」 1999 年度大阪大学大学院文学研究科 未公刊修士論文
- 李吉鎔 2001 「日・韓両言語における反対意見表明行動の対照研究—談話構造とスキーマを中心として」 阪大日本語研究 13 19-32
- 李善雅 2001 「議論の場における言語行動—日本語母語話者と韓国人学習者の相違」 日本語教育 111 号 36-45
- 杉本明子・柏崎秀子 2002 「電子メールによる議論の発話構造と機能—日本語学習者のグループ・コミュニケーションの分析—」 信学技報 TL2002-3, 13-18
- 玉井健・李鍾煥 2001 「コミュニケーション能力にかかる文化的制約要因—儒教的価値観調査の意味と質問紙作成—」 英語教育研究 No. 24 119-131
- 都築誉史・木村泰之 2000 「大学生におけるメディア・コミュニケーションの心理的特性に関する分析—対面、携帯電話、携帯メール、電子メール条件の比較—」 応用社会学研究 No. 42 15-24
- 山下みゆき・サウクエンファン 2001 「意見提示の opening marker としての前置き表現」 2001 年度日本語教育学会秋季大会予稿集 157-162
- Hinkel, E. 1996. When in Rome: Evaluations of L2 pragmalinguistic behaviors. *Journal of Pragmatics* 26:51-70
- LoCastro, V. 2001. Individual differences in Second language acquisition: attitudes, learner subjectivity, and L2 pragmatic norms. *System* 29 69-89

フレームの移行と包含性：教員会議データからの一考察

内田 らら
東京工芸大学

1. はじめに

各参与者的社会的地位¹が明確な制度的場面では、社会的地位や情報量による展開に加えて、相互行為での期待の構造（フレーム）の詳細とその移行が示されている。そこでは、話題²に応じた参与形態を示す反面、多くが移行で生じる各フレームを併置して多様性を見い出したり、異レベルのフレーム同士には相互依存の関係はないと指摘したりしており、1つのフレームが他のフレームを背景知識として包み込む「包含性」には言及していない。しかし、会話展開の一貫性を念頭に置くと、多様な各フレーム間の縦の繋がりを考慮することは不可欠だと言える。

そこで本発表では、円滑な相互行為を詳らかにする立場から、制度的場面の一例として日本人教員会議をとりあげ、2種類のフレームの移行の様子を分析して、その背景要因にはフレーム間の「包含性」があると主張する。

2. 理論的枠組

「フレーム」は、出来事や相互行為に対する期待が集まり構造化したものである (cf. Tannen:1993)。Tannen and Wallat (1993) は相互行為の解釈を説明する「解釈フレーム」(59) と他の参与者、対象物、出来事などに関する会話前からの知識や期待を扱う「知識スキーマ」(60) に分類した。

一方、Goffman (1974) は解釈フレームの多層性を述べ、各々が中核と周辺という相互依存のないフレームに分けられるとしている。しかし、会議の一貫性に照らすと異レベルのフレームには上位下位の繋がりがあると考え

られる。そこで発表者は、フレームは一方が他方の上位として「包含」するものと捉える。

3. 先行研究：会話のフレーム分析

フレームの先行研究は、文化間比較を行ったものと会話展開へのフレームの関係を明らかにしたものに分かれる。前者には、Watanabe (1993) など、日米間のフレーム比較から、円滑な異文化間コミュニケーションに貢献するべく両者の相違を際立たせる研究があげられ、後者には、話題ごとのフレーム移行を扱った Tannen and Wallat (1993) や Ribeiro (1993) などがあげられる。このうち、Ribeiro (1993) は精神病患者の語りで、問診と思考障害という違うレベルのフレームも、後者が前者に埋め込まれると捉えることで一貫した談話展開が切り取れると指摘した。これは示唆に富むが、内側のフレームが外側のフレームにどう寄与しているかを説明しておらず、その点で、フレーム間で相互依存せず、既存のフレームに新たな性質が重なる「層化」を主張する Goffman (1974) を支持した研究と言わざるを得ない。

4. データ

本発表では、関東地区の某4年制大学での教員会議の録音資料（約90分間）を分析対象にする。参与者はA（教授兼学科主任）、B（助教授）、C（助教授）、D（助手）の4名で、議題は「退職教員（以下e）の記念講演と懇親会の運営法」である³。なお、話題は、議題を中心とした方向性の観点から、①「決定事項の具体化に寄与する話題」と②「決定事項の周辺にあたる話題」に分類する。そして①に

は議題の決定事項やそれに導く提案の話題を、
②には議題の一部を情報として参与者間で分け合う形の話題を含めることにする。

5. 分析と考察

5.1. 参与構造の相違とフレーム

内田(2000)は、「決定事項の具体化に寄与する話題」では、B, C, Dからの話題に対して社会的地位が最上位のAの見解が結論と扱われるが、「決定事項の周辺にあたる話題」では、当該の話題に詳しい人が中心になり、他の参与者もそれに協力する参与構造であると指摘した。そしてこれは、物事の決定では、各参与者が「A = 議事の最終決定権を持つ人、B, C, D = 直接的ないし間接的に A に意見を求める

人」という「役割」に大きく規定されるが、未知の情報を得る時は、「役割」の規定を最小限にし、情報量の少なさで円滑な会話を妨げないようにすることによると主張した。

では、上記の両フレームはどんな関係にあるのか。以下では、フレーム移行の会話例を役割意識や話題に照らして分析し、決定事項を具体化するフレームは、その周辺のフレームを下位として「包含」すると述べる。

5.2. フレームの移行と「包含性」

5.2.1. 「具体化」から「周辺」への移行

最初に、例1で「決定事項の具体化に寄与する話題」のフレームから「決定事項の周辺にあたる話題」のフレームへの移行を示す。

[例1]⁴ (懇親会の運営方法 → 過去の懇親会の慣例)

01	C : で、いすれにしろ懇親会はe先生大丈夫ってふうにおっしゃってる//わけだから	決定事項の具体化に寄与する話題
02	D :	
03	C : どういう希望でするかと言ふことですよね。	
04	D : そうですね。	
05	A : うーん。	
06	C : うんうん。	
07	(1.2)	
08	B : それ、送別会になるんですか？いや、両方は兼ねないですよね。	
09	C : でも、送る会は別にやるんでしたっけ？ =	
10	B : = あれどうでしたっけ？	
11	A : いや、それはね =	
12	C : = うん。	
13	A : あのー、我々がやりますよ？	
14	B :やりました？送別会。	
15	A : うん。小さいけどね。	
16	B : gさんとの時もやりました？	決定事項の周辺にあたる話題
17	A : え？	
18	(1.4)	
19	D : g先生の時h先生と	
20	A : 緒。=	
21	C : = ああ一緒にいた。	
22	B : 一緒にいた？	
23	D : ××会館で	
24	B : あ、そうなんですか？	

ここで、C(01)からA(15)はAが懇親会と送別会の運営に関する決定事項に導くフレームで、B(16)でgの退職当時の慣例を尋ねるフレームに移行している。これを内容面で分析すると、Bは突然的にgの話を始めたのでな

く、移行前の話題で背景知識のないBが前例を頼りに議題の情報を収集する契機と考えられる。事実、B(24)以後、暫く4人で前例の話をした後、退職教員が複数の学科から出た時は懇親会と送別会を別に行つたが、退職者

が1名の今回は懇親会のみ行うと決定した。

従って、決定事項を具体化するフレームから周辺フレームへの移行は、前者の継続に必要な情報を集める場合に見られると言える。

5.2.2. 「周辺」から「具体化」への移行

続いて、「決定事項の周辺にあたる話題」のフレームから「決定事項の具体化に寄与する話題」のフレームへの移行を例2に示す。

[例2] (e)が記念講演を辞退する理由 → 記念講演の依頼方法

01. B: おかしいですね。それ、どうしてだろう？ それ、あの、主な理由は体調？(1.0)	決定事項の周辺にあたる話題
02. D: 主な理由はそう。	
03. B: 体調のことはあんまりおっしゃんなかったんですか？汚//すって、汚すっていう。 //私は全然体調は聞いてないの。	
04. C:	
05. D: 体調の話は最初におっしゃったんですけど、でもそれよりもって、//おつ //それよりも。	
06. B:	
07. D: しゃって	
08. B: あ、じゃー、一旦は引き受けたけども、色々考えてみるってこと//でしよう //はい。	
09. D:	
10. B: カねえ。	
11. D: (0.6) でもー、心配なさって、皆さんに心配かけるからかもしれませんね。体調って 言っちゃうと (0.0)	
12. B: //あーー。	
13. C: //あーー。	
14. D: 皆さんのが心配なさるからかなーて私は聞いてたん//ですけれども。 //あーー、あ、じゃ遠慮では	
15. C:	
16. D: なくって、やっぱり体調かもしれない。	
17. C: ふーん。	
→ 18. A: その点は一応あれですね、みんな、ま、とりあえず、その主任っていう形で ね//最終的にー？もうー、近づいてるから。	
19. C: //うん、うん、 20. A: うん、うん、 21. C: //うん。	うん、うん、うん。 (2.2)
22. A: まあ、お話を聞いて	決定事項の具体化に寄与する話題
23. C: うん。(1.2)	
24. A: 納得してもらう形で決めるしかないですよね。	

この例で、B (01) から C (17) は e が記念講演を辞退する理由に関し B, C, D が情報交換するフレームだが、A (18) で「主任」という、事柄の最終決定権を持つ立場を顯示する言葉と共に記念講演の依頼方法を結論に導くフレームに移行している。具体的には、B (01) より前に記念講演の依頼方法が話し合われたが、今まで前向きだった e が突然辞退を申し出た話から B (01) 以降のフレームに入った。そして、辞退理由が体調でおおむね一致した時点で、当初の決定事項に戻り議事が進められた。

ゆえに、周辺のフレームから決定事項を具体化するフレームへの移行は、情報交換で背景知識がまとまり本来の議事決定に戻る際に

生じると考えられる。

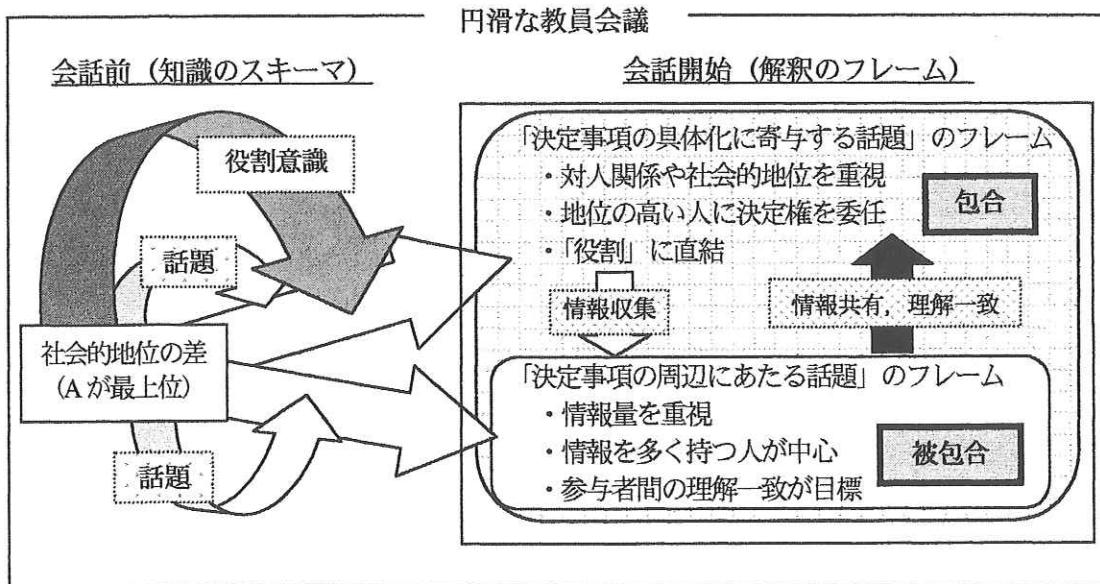
5.2.3. フレームの「包含性」

前項の論考から、2つのフレームには「包含」「被包含」の関係、即ち、「決定事項の周辺にあたる話題」のフレームは「決定事項の具体化に寄与する話題」のフレームに対し「前座」かつ「下位カテゴリー」として内包されると言える。なぜなら、会議では議事決定が中心で、各フレームは「決定事項を1つでも多くまとめる」という目的に寄与しないと円滑で有意義な結果を得る相互行為にはならないからである。この時、決定事項の周辺のフレームは、完全に別個の解釈フレームとして

層化せず、背景として議事決定の達成に貢献すると考えられる。そして、それが具体化に寄与するフレームに包まれ、全体で「決定事

項の具体化に寄与する話題」のフレームが前面に出されることで「包含性」が生まれる。

以上の議論を下の図にまとめる。



図：教員会議に現れるフレームの移行と「包含性」

6. おわりに

本発表では、社会的地位が異なる 4 名の教員会議で 2 つのフレームの相違が役割意識の有無に起因することから、両フレームの移行を分析し、決定事項を具体化するフレームは周辺のフレームを下位カテゴリーとして「包含」すると指摘した。

これはフレームの有効性を支持するもので、「制度的場面」という単一の状況で複数の話題が矛盾なく存在する理由などは、二次元的に捉えられてきたフレームの三次元性を提起することになり、これからは相互行為の会話分析に一石を投じた研究と位置付けられよう。

注

1. 「教授」「助教授」など、職業に伴う順位づけ。
 2. 参与者同士のやりとりで言及対象となるある特定の事柄 (cf. 村上・熊取谷 1995:101)。
 3. 各参与者の役職は、データ録音当時のものである。
 4. 会話例で用いた記号は、以下の通りである。
- // : 重複発話の開始箇所 = : 切れ目ない発話

(数字) : 沈黙の秒数 (0.5 秒以上)

、 : 0.5 秒未満の沈黙 ? : 上昇調 。 : 下降調
→ : 分析で注目する行 ___ : 分析で注目する表現
×× : 固有名詞の省略 @ : 笑い

参考文献

- Goffman, E. 1974. *Frame Analysis*. Mass: Northeastern University Press.
- 村上 恵・熊取谷 哲夫. 1995. 「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』62, 101-111.
- Ribeiro, B. T. 1993. "Framing in Psychotic Discourse." In D. Tannen ed. *Framing in Discourse*, 77-113. New York: Oxford University Press.
- Tannen, D. 1993. "What's in a Frame?: Surface Evidence for Underlying Expectations." In D. Tannen ed. *Framing in Discourse*, 14-56. New York: Oxford University Press.
- and C. Wallat. 1993. "Interactive Frames and Knowledge Schemas in Interaction: Examples from a Medical Examination/Interview." In D. Tannen ed. *Framing in Discourse*, 57-76.
- 内田 らら. 2000. 「話題に対する参与構造の変化：教員会議の談話から」『日本語用論学会第3回(2000年度)大会 Program & Abstracts』 38-43.
- Watanabe, S. 1993. "Cultural Differences in Framing: American and Japanese Group Discussions." In D. Tannen ed. *Framing in Discourse*, 176-209.

精神療法面接 Exchange 構造における Abortion と先行発話との連関
—Sullivan の面接記録に基づいて—

The Relationship between Abortion and Its Preceding Mood in Exchange
Structure of Psychotherapy
-Based on Psychotherapeutic Interview by Sullivan-

加藤 澄
(青森中央学院大学)

0. 序

本発表は、選択体系機能理論より、Martin と Ventola の exchange 構造モデルに従って、精神療法面接記録の exchange 構造分析表を作成し、abortion に着目、考察する。abortion は、ちょうど統合失調症者との対話において、結束性が切れる部分であり、患者によって話題が転換されてしまい、情報収集が滞ってしまう箇所である。会話が破綻する箇所に相当するという仮定のもとに、ちょうど精神療法における「抵抗」に該当するものとして捉える。

抵抗とは、「精神分析治療の期間において、無意識への到達を妨げるような、被分析者のすべての言動」と定義されている。つまり、精神分析治療面接が被分析者との合意の上でなされるにもかかわらず、患者が治療の目的に反するような言動をとることがあり、そこでは、面接によって患者自身の無意識があらわにされることへの恐怖や不快感から、治療過程において非協力的になったり、敵対的になったりするような心理機構がはたらく。

本研究では、Sullivan(1)の面接記録を基に、exchange 構造分析表を作成し、abortion 発生比率とその先行発話の形態比率について調べ、その統計結果より、先行発話の mood 形態、また疑問文の形態如何によって、abortion が引き起こされるのではないかと考えた。そこで abortion が生じる際に先行する直前の治療者の発話 move を分析し、その発話形態がどのように患者の心理機構に影響を及ぼしているかについて考察する。

1. 分析

1.1 資料

統合失調症患者の初回面接記録。患者は年齢 18 歳、男性、大学生。不安、恐怖心が著しく、幻聴と妄想症状を有する。攻撃的、かつ敵対心が強固。

1.2 方法

対話を対人的意味に関わる談話意味層の交渉と発話機能 (Speech Function)、そして語彙、文法層の叙法 (Mood) の相関関係において捉え、Sullivan の面接記録を基に、対話 exchange 構造分析表を作り、治療者の言語使用と abortion との

相関関係の諸相を観察する。

1.3. 分析

全 turn 数 379 回のうち、患者の turn 数 193 回中、83 回（患者から出された abortion 数）、割合にして 43%が abortion として流れていることがわかった。また全 clause 数に対する治療者の mood 選択数の比率、abortion に先行する直前の治療者の発話の mood 比率、wh-interrogatives と Polar-interrogatives における abortion の比率、そして wh-interrogatives 内訳比を調べ、これらの統計結果より、以下のように考察をまとめた。

2. 考察

2.1. 考察(1) ストレス・インタビューとしての loaded question

loaded questions は abortion に先行する治療者の全発話中、25 箇所あり、全 abortion 中の 30%をなしている。統合失調症という病態を考えた時⁽²⁾、質問に loaded された前提が真実である場合、（真実であることがほとんどなのであるが）、患者は先ず、質問から逃れることを考える。一方、こうした loaded question を発した時点で、治療者は患者に関する情報を要約しているのであり、患者自身の確認の労を取らずに次のステップに誘導しようとしているのである。そこで、もし答える側に多くの裁量が与えられていれば（面接における患者は、返答に関して実際的に無限の裁量を与えられている）、いかなる質問に対しても”No Commitment”で応じることが可能である。結果、対話は行き詰まり、abortion が引き起こされる。

2.2. 考察(2) loaded question による反復

Repetition が各 move において、敷衍、拡張されながら反復されている。しかも問い合わせ自体が loaded されている。同じ問い合わせごとに abortion として流されることが観察されるということは、この問い合わせが何らかの抵抗をもたらすものであること、つまりこの部分こそ患者がどうしても隠したい部分で、言うなれば病態の核心部分ともいえるものである。abortion で流されるたびに治療者は、このことを確信し、執拗に反復を続ける。一つの発話を次の発話に折込み、それをまた次の発話に敷衍、拡張しながら織り込むのだが、abortion に終わっている。

Repetition はまた echoing という精神療法面接にとって重要な局面をなす働きを誘発しやすい。反復には無意識的な反復から意識的な反復まで、いろいろな意識度の反復があるが、治療者の発話、しかも治療者自身による反復による発話に促されて、無意識的な反復を患者に誘導し、echoing を促すという意図を治療者が有していたのではないかと思われる。

2.3. 考察(3) 疑問形態において答えられない部分の観察

疑問形態において生じる abortion の数値を観察していくと、患者が何に対して、どんな尋ね方に対して答えられないのかが浮き上がってくる。本ケースでは、what、

polar-interrogatives、why、how、which の順で Abortion 発生率が高かった。これらをそれぞれの疑問詞、疑問文形態が持つ諸特徴と照合して観察することで、患者の陳述能力と表象能力に言及することも可能である。そしてそれは一つの診断上の所見として捉えられるべきである。それに基づいて、面接における質問構成が検討されるべきである。

2.4. 考察(4) Declarative Statement における 2 人称の心理文

Wh-interrogatives の次に abortion の生じる割合が高いのが、Declarative Statement の 30%である。abortion は特に、2 人称の心理文が先行発話としてなされた時に生じている。2 人称の心理文は患者に侵入感を与える。患者にとって内界を侵犯されるようなものとして受け取られた場合、抵抗を引き起こすのではないかと考えられる。というのは統合失調症という病が、容易に常人の感情移入を許さないのを特徴とする病態を有するからである。

3. まとめ

Sullivan は特に統合失調症患者を治療していく過程で、患者が言語をコミュニケーションの手段としてではなく、防衛の手段として用いることがあるのに気づく。統合失調症者にとって他者は、自分の安全保障感を脅かす存在であるので、言語を使って相手を苛々させたり、戸惑わせたり、うんざりさせて相手を自分から遠ざける。つまり、統合失調症者は言語を他人を一定の距離から自分に近づけないために使う場合があることを指摘する。そうすることで、患者はかねてより抱いている低い自己評価から自分を守るのである。そこでは言語は意志の疎通のためではなく、事態の意味をわからないままにし、相手から距離を保ち自己評価を防衛するために使われる。

Haley は、一人の人間が相手に伝えるメッセージの特徴を 1) 私が、2) 何かを言っている、3) あなたに、4) この状況下で、と 4 つの要素に分類し、他者との関係づけを否定したい場合には、①彼が何かを伝達したことを否定する、②何かが伝達されたことを否定する、③それが誰かに伝達されたことを否定する、④それが伝達された場面状況を否定する、のうちのどれか一つの方法をとれば済むとしている。1) については、自分が別の人間であると規定すればよいとし、例えば、別の名前で自己紹介をするとか、喋っているのは自分ではなく、機械であるとか神が喋らせているのだとかとする、2) は、自分の行為を、「そんなことをした覚えがない」として健忘症を装うとか、相手の解釈と自分が言ったこととが食い違っている、また自分の造語で喋って、相手とのコミュニケーションをブロックしてしまう、3) については、自分が語りかけられた時、自分自身に語りかけたり、また相手を誰か他の人とすりかえて応対すればよいとしている。例えば、友人である相手を警官とみなして話すというようなやり方である。

以上は一般的なコミュニケーション論として議論したものであるが、これらのコ

ミニケーションの形態は、そのまま統合失調症者のそれと置き換えられる。統合失調症者は相手との関係づけを避けるために、コミュニケーションを破綻させることで、他者との関わりを回避しようとするのだが、精神療法の基盤が患者に話させることにある以上、破綻を放置しておくわけにはいかない。これを打開するためには、*abortion* の質の観察とそれに基づいた戦略とが必要とされよう。

本研究では、コミュニケーションの破綻である *abortion* を精神分析治療における「抵抗」に該当するものと捉え、治療者の言語使用の観点から、*abortion* を引き起こす要因となるものについて考察した。その結果、1) ストレス・インタビューとしての *loaded question* に仕組まれた治療者の誘導意図と、それが患者の心理に及ぼす抵抗作用[考察(1)より]、2) *loaded question* による反復がもたらす *echoing*などの効能的側面と抵抗的側面 [考察(2)より]、3) 疑問文形態において、答えられない形態部分を観察することが診断上の所見につながること、そしてそれが質問が戦略的に組み立てられるための修辞基盤とならなければならないこと [考察(3)より]、4) *Declarative Statement* における 2 人称の心理文が持つ侵入感がもたらす影響と病態との関連、の 4 点を指摘した。

註

1) Sullivan, H.S. 精神科医(1892~1949) 統合失調症治療の権威。Sullivan が統合失調症にあたった当時は、まだ向精神薬が発明されていなかったが、独自の治療法で数百例が治癒したという伝説的な記録が残されてされている。特に精神療法面接における言語使用に注目し、臨床に際しての検討を説いた点で、パイオニア的存在と言える。

2) 統合失調症者は自分の内が外部に筒抜けであるという意識を持っていて、外部に探知されていると信じている。周囲がそんなことはありえないと否定すると、周囲が事実を隠蔽しようとすると疑い、益々自分のことが知られているという確信を深める。結果、患者は病的体験をもって自己の存在証明とする。例えば、何か別の人間が自分の中に入つて自分を操っているというような反応で周囲に対する。自分の体験の真実性が否定されたので、自分もその真実性をぼかすために支離滅裂な言語を使い、また荒唐無稽な妄想を抱いて煙幕を張る。

参考文献

- Chapman, A.H. 1978. *The Treatment Techniques of Harry Stack Sullivan*. New York: Brunne.
- Ferrara, K.W. 1994. *Therapeutic Ways with Words*. New York: Oxford Univ. Press.
- Haley, J. 1996. 「戦略的心理療法」訳 高石 昇. 名古屋:黎明書房.
- Halliday, M.A.K. 2001. 「機能文法概説」(訳 山口登、寛寿雄) 東京:くろしお出版
- 神尾昭雄. 1990. 「情報のなわ張り理論」 東京:大修館書店
- Martin, J. R. 1992. *English Text*. Philadelphia/ Amsterdam: John Benjamins Publishing Co.
- Ventola, Eija . 1987. *Structure of Social Interaction*. London: Frances Pinter (Publishers)
- Walton, D.N. 1988. "Questions-Asking Fallacies" In Michel Meyer ed. *Questions and Questioning*, 195-221. Berlin/ New York: Walter de Gruyter
- Weiner, I.B. 1986. 「心理療法の諸原則（下）」訳 秋谷たつ子、他 東京:星和書店.

Linguistic Marketing の研究

—ファッション販売における感性ワードの分析—

坂本和子
横浜国立大学大学院

1. はじめに

初めて訪れた美容院で髪型のオーダーに手間取ることがよくある。「短めで毛先に動きをつけて…」「無造作な感じで小顔に見えるように…」、このように人間が欲求や要求を言葉にする際、漠然と感覚的な言語を使って表現することが多い。ではどのような言葉なら、的確に伝えることができるのでしょうか。

前回のワークショップでは顧客と販売員のインタラクションについて報告したが、その中でも感性ワードや評価語の傾向をいくつか読み取ることができる（表1）。

例えば、

- ・ 販売員、顧客ともに「長い」「短い」「きつい」「派手だ」「細い」などマイナスの

顧客 特徴単語	頻度	総頻度	販売員		
			特徴単語	頻度	総頻度
よい	74	122	よい	48	122
かわいい	31	47	すごい	26	29
大きい	12	22	ありがたい	19	22
黒い	11	25	きれい	19	24
長い	10	14	大丈夫だ	16	20
短い	8	10	かわいい	16	47
かっこいい	7	19	黒い	14	25
素敵だ	6	8	かっこいい	12	19
きつい	5	8	大きい	10	22
きれい	5	24	よろしい	9	10
大丈夫だ	4	20	おしゃれだ	5	5
確かだ	3	4	賢い	5	5
厚い	3	5	長い	4	14
意外だ	3	6	結構だ	3	3
ありがたい	3	22	ウールだ	3	3
すごい	3	29	長めた	3	3
ほんとだ	2	2	大きめだ	3	4
すきだ	2	2	びったりだ	3	4
サイズ的だ	2	2	赤い	3	4
派手だ	2	2	チャコールグレーだ	3	4
ゆるい	2	3	薄い	3	5
同じだ	2	3	ありそうだ	3	5
おもしろい	2	3	意外だ	3	6
細い	2	3	きつい	3	8
OKだ	2	3	ロングだ	2	2

表 1.販売員と顧客の評価語頻度

イメージワードが比較的目立つ

- ・顧客は同じ用語を多用する
- ・全体的に高次感性ワード¹の割合が高いなどである。

トレンドとなる、あるいは売れる商品はどんな言葉を使って表現されているのか、あるいはどんな言葉を使えばトレンド化していくのか。本研究では、ファッションを感性ワードの多発市場と想定しファッション雑誌のテキストデータを分析することで、販売に役立つ感性ワードを体系化しようという試みである。

2. 分析フレームの設定

かつてロラン・バトルは雑誌の記述からモードを捉え、その意味作用を体系化した。今や日本のファッション雑誌は、バトルの時代には想像も出来なかったほど、数多く出版され、記事のはてまで有効な“潜在”広告メディアとなっている。まさにヒットするかしないかは商品紹介の言語効力によるところが大きいと思われる。そこで感性ワードを検討するにあたって、次のような仮定をおいた。すなわち雑誌に登場する

¹赤い、丸いなど、物理的特徴量との対応付けが比較的容易である低次感性ワードに対して、美しい、かわいいといった主観的要素の強いワードを高次感性ワードと定義する

感性ワードは個人に何らかの影響を与えており、その結果、流行現象が起きたり、物が売れたりする。つまり個人のスキーマを構成する感性ワードは雑誌の中から生成されると仮定する。

一方、感性は十人十色であるが、多くの人によって共有される特性が存在することも事実である。例えば、柄物の服に対する評価は「派手な」「かわいい」など相当な個人差が予想されるが、モノトーン系の服に対しては「シャープ」や「モダン」と意見の一一致が見られる。つまり個々の感性評価には独自性とともに、共通性が存在すると考えられる。

加えて、販売員と顧客の対話でも明らかのように、低次と高次の感性ワードのうち、後者が購買意思決定を誘引するものであり、両者ワードのバランスや関係はどうなっているのかも検討することとした。

3. 分析方法

まず、膨大な雑誌の中から分析対象として、部数 30 万部以上のオーソドックスな nonno (92 万部)、JJ (64 万部)、more (75 万部)、VERY (32 万部) を選定した。それでも、ファッション全般ではあまりにも膨大なテキスト量となるため、各誌 1998 年～2002 年の 10 月、11 月号に掲載の靴販売に関するテキストに絞込み、コーディング作業を行った。なお、JJ に関しては 1984 年より 20 年間のデータを収集し、時系列分析を行うこととする。

次にテキストデータを分析する方法として、テキストマイニングを導入した。テ

キストマイニングとはデータマイニング²から発展した自然言語処理の支援システムであり、具体的には文書を形態素解析し、すべての単語に対して 2 値データ処理を行って頻度や相関を分析するものである。現在多数のソフトが存在する中、ここではエンジンに確率コンプリキシティ³を取り入れた NEC の「SurveyAnalyzer」(以下 SA)を使用することとした。

分析は頻度により、各雑誌あるいは時代に共通して現れるワードを抽出するものと、対応分析により雑誌特有、時代特有のワードを抽出するという、2 つのアプローチから行った。

4. 分析結果

分析結果は以下の通りである。

どの雑誌にも共通して出てきたものは「黒だ」「シンプルだ」といった抵抗感の少ないワードである。さらにストレートな女性の願望を示す「細い」「細身だ」といったものであった。

雑誌の独自性としては、nonno と JJ は色や形態などの低次の感性ワードが中心であり、MORE は「端正だ」「優雅だ」、VERY 「繊細だ」「モダンだ」といった抽象的な高

² Rajman (1997) はテキストマイニングとの違いについて「データマイニング技術は、通常、構造化されたデータベースからの情報抽出に関するものである。一方、テキストマイニング技術は、構造化されていないテキストデータからの情報抽出に関するものである」と述べている。

³ 確率コンプリキシティとはデータ列の複雑さを表す尺度のことで、情報理論に基づいて、特定の言葉が分析対象に偏って現れているかどうかを判断するのに用いられる。

次の感性ワードが多く見受けられる。

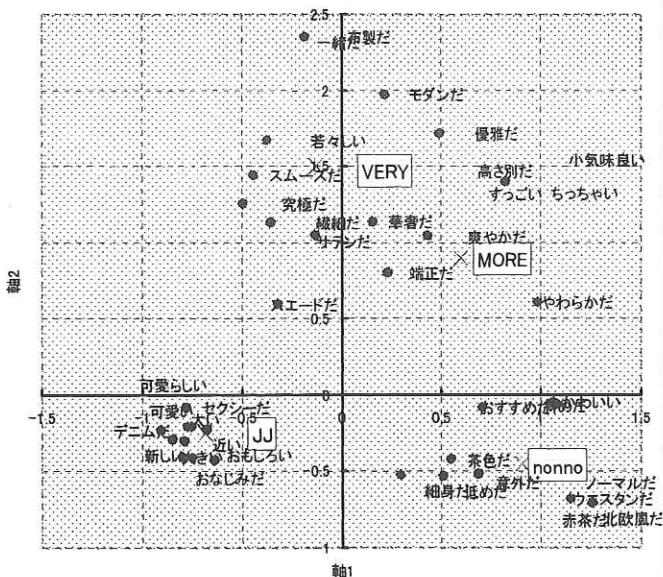
特に VERY の場合、「あえて「若々しい」「爽やか」といった若さを強調するようなワードも使われている。

また、JJ の 1984 年から 2002 年までのデータを分析した結果、時代に共通して出てくるワードは「シンプル」「シックだ」「黒だ」などで、雑誌共通のワードと類似している。時代別の独自性に関しては、素材や色といった低次の感性ワードを軸に高次の感性ワードがバランスよく使われていた。

5. まとめ

本研究はファッション雑誌のテキストに内在する感性ワードを分析することにより、時代別、雑誌（読者層）別に共通するものと独自性を有するものを抽出した。共通特性としてあがったワードは、時代、雑誌を問わず、多くの女性に指示されるものであるが、無難すぎる嫌いがありインパクトに

雑誌別対応分析マッピング



欠ける。実際の販売現場で使われているようなマイナスイメージのワードもほとんど出てこない。対話の場合は「ソリューション」として完結できるが、テキストのみではそれができないためと思われる。独自性に関しても、雑誌別、時代別に大まかな傾向はつかめるが、流行のパターンやトレンド

1984	1988	1992	1996	2000
シーン別だ	0128692877 おなじみだ	0059535704 清楚だ	018377 近い	0299869734 ベージュだ
多種多様だ	0128692877 ワイルドだ	0062779209 サテンだ	0104259 太い	0287939981 茶だ
オフィス向きだ	0129244395 人気だ	0000553605 なめらかだ	0104684 オフだ	0183495751 タークだ
パーティならではだ	0129244395 鮮やかだ	-0.008815012 おしゃめだ	0184986 上級者向けだ	0182511494 短い
正式だ	0129244395	0.09486 ヘビーダ	0184986 つや消した	0182971754 セクシーだ
				0209620921
1985	1989	1993	1997	2001
レースだ	0173522683 大きい	0139078426 新い	0.218346 低い	0598584255 可愛い
さりげない	0167270284 オーロックスだ	0108025456 スタンドードだ	0162718 快適だ	0496461801 デニムだ
シックだ	0132410508 秋ならではだ	0098815316 活用度大だ	0159799 丸い	0287600351 手馴り早い
女らしい	0143589801 バスルカラーだ	0.098815316 U字形だ	0159799 最高だ	0272453972 程よい
街着だ	013427746 スモーキーだ	0.098815316 ハードだ	0.075351 刺激的だ	0244097412 かっこいい
				0129577925
1986	1990	1994	1998	2002
さすがだ	0110318908 ラフだ	0271697066 やさしい	0.206913 グレーだ	0943350047 イエローだ
エレガントだ	0050058955 小柄だ	013859137 ソフトだ	0.135994 シルバーだ	0505620148 当たり前だ
女らしい	0.029571648 唾い	0139295857 簡単だ	0.127429 ピニールだ	0197421107 独創的だ
多い	0.020816288 気高い	0.140012362 寒い	0.106714 珍しい	0130891101 不動だ
新しい	-0.044801517 自由だ	0.140741339 大好きだ	0.107034 暖かい	0118648552 個性的でない
				0.080569199
1987	1991	1995	1999	
新しい	043101646 豊沢だ	0.19471331 エードだ	0.582527 ナイロンだ	0193371251
あとない	0365093537 狹い	0176867808 革だ	0.258402 さまざまだ	0188283587
おもしろい	0215989036 丸くない	0.17870852 すごい	0.2593 安心だ	0108994707
力ならではだ	0124026358 高い	0.142715219 楽だ	0.173424 細身だ	0104641146
新作だ	0.075798726 たまらない	0119581271 白い	0.135798 カジュアルでない	0.087987545

表 2. 時代別独自ワード

ド化を示唆する可能性を発見するには、さらに分析を進めていく必要がある。

しかしながら本研究を継続していくことで、インプリケーションとして、以下のことが考えられる。ひとつは、トレンドに結びつくような言語体系を発見することで、タイミングや表現上、有効な広告展開に結び付けられる。もうひとつは読者層の感性ワードを組み合わせたゾーンを作ることで、新しいブランディングを構築することができるということである。

今後もこうした言語分析をマーケティング分野に適用することで、機知に富んだ発見が期待できると思われる。

参考文献

- 阿部周造(1981)「消費者情報処理の経験的研究」、
マーケティングジャーナル vol.3 Barthes,R
(1972) SYSTEME DE LA MODE (『モードの
体系』佐藤信夫訳 みすず書房)
Bilmes,J(1988),"The Concept of Preference in
Conversation Analysis",*Language in Society*
17
Gentner,D(1983)Structure Mapping :A
Theoretical Framework for
Analogy.*Cognitive
Science*,7,155-170 Gruenfeld ,H and Wyer,
S. Jr (1992) , "Semantics and Pragmatics
of Social Influence : How Affirmations
and Denials Affect Beliefs in
Referent Propositions"*Journal of
Personality and Social
Psychology*,Vol.62,No. 1 Herzlich,C (1973)
Health and Illness:A Social Psychological
Analysis.London:Academic Press
- 市村ほか (2000) 「日報分析システム
井口征士ほか (1994) 『ヒューマンコミュニケーション工学シリーズ 感性情報処理』オーム社
伊東雅光 (2002) 『計量言語学入門』大修館書店
海保博之・原田悦子(1993)『プロトコル分析入門』、
新曜社 Maronick,J and Andrews ,J (1999)
"The Role of Qualifying Language on
Consumer Perception of Environmental
Claims",*The Journal of Consumer
Affairs*,Vol.33,No.2.諸橋、那須川、長野 (1998)
「膨大な文書データからの知識獲得—意図の認
識—」情報処理学会第57回
Moscovici,S (1984) The Phenomenon of Social
Representation,Social
Representation,cambridge .University Press
中島純一 (1998) 『メディアと流行の心理』金子書
房
中森義輝 (2000) 『感性データ解析・感性情報処理
のためのファジイ数量分析手法-』森北出版
長町三生 (1989) 『感性工学・感性をデザインに生
かすテクノロジー』海文堂
大西仁、鈴木宏昭(2001) 『類似から見た心』共立
出版小野原教子 (2001) 「ファッショングのなか
のジャパニーズネス・ある服飾情報誌の分析か
ら-」『人文学報』京都大学人文科学研究所
武井寿(1997) 『解釈的マーケティング研究』、白桃
書房竹内晴彦(1994)「感性表現用語の心理計測と
分析」、計量国語学第19卷第5号
辻三郎編 (1997) 『感性の科学・感性情報処理への
アプローチ-』サイエンス社
山田純(1983) 『ことばを心理する』、有斐閣選書

禁止命令の意味を持つ発話行為の日英語の諸相

有光 奈美（獨協大学非常勤講師）
naminette@msf.biglobe.ne.jp

1. はじめに

本研究は、発話行為に関する否定的概念の一領域について考察するものである。否定性研究において、否定に関するさまざまな関連概念を分析すると、発話行為に関する多様な否定的概念が存在していることに気づく（有光 2003a）。それらは、訂正（聞き手の信念を正しく変更）、拒否・拒絶（申し出を却下）、禁止（聞き手の行動を抑制）などである。本研究はこれらの発話行為に関する否定的概念のうち、禁止に焦点を当てる。明示的な禁止のマーカーである「～するな」や“Don’t”を用いないものまで含めた禁止命令の発話行為の多様性を論じる。また、これらを日英対照の視点から考察することで、禁止命令に関する新しい可能性を提示する。Austin (1962) や Saerle (1969) の研究を踏まえ、禁止命令の意味を持つ発話行為の分類を行い、禁止命令を否定的概念の一領域として分析する。

2. 理論的背景---禁止とは何か？

2.1 幼児の発達心理

論理的否定とは、文の意味に対して真理値を逆にすることである。一方、語用論的否定とは、相手の依頼の拒否、拒絶、却下、相手の行為の禁止など、より幅広いものを含みうる。幼児が発達していく段階で、笑いと泣くことは代表的な二つの感情である。笑い（肯定的）、泣くこと（否定的）と考えられる。否定的意味機能の獲得の順序には諸説あるが、拒否（排除拒否・要求実現の為の拒否）、否認、非存在、禁止などの分類が可能である。

2.2 否定と禁止の関係

非言語的に「～である」ことを伝えるよりも、非言語的に「～でない」ことを伝える方が難しい。たとえば、「これは牛だ」とか言うには、牛の物まねをするとか、牛を指さすとかすればよい。それに対して、「～でない」ことを伝えるのは容易ではない。例えば、手話などにおいてさえも、「～ない」の記号の助けを借りることになる。その上で、否定的概念のうち、禁止命令とは発話の場面に強く依存しており、必ずしも「～でない」という明示的否定辞を用いることなくとも、禁止命令を伝達することができる。以下で詳細を見る。

3. 具体的事例の検証

3.1 明示的な禁止命令の言語マーカーによる禁止

代表的な禁止命令とは、「～するな」や“Don’t”を持つ命令文であると考えられる。

(1) a. 動くな！ / b. Don’t move!

(2) a. しゃべるな。 / しゃべらないで下さい。 / b. Don’t talk. / Don’t talk, please.¹

このように、現在その場所で行われている行為をやめさせるというのが、禁止の代表的な機能である。したがって、何かの行為を表す動作動詞に「～するな」や“Don’t”を加えることで、禁止命令を構成できる。森 (2002) は、NC (Natural Course) という概念を設

¹ 命令と依頼の相違については本研究では詳細に扱わない。依頼の適切性条件が、基本的には、命令、要請、司令などの発話行為にもあてはまるることは、山梨 (1986) で指摘されている。ただし、依頼と命令との違いにおいては、準備条件として、地位関係から見て、話し手が聞き手よりも優位にあることが必要とされる点に留意しなくてはならない。

定し、NC の阻止、すなわち、変化する物象や事象を同じとする認識が阻止されることが、人間の情動に「命令」という発話行為を位置づけていると論じている。本研究において扱う禁止命令とは命令の下位カテゴリーにあり、眼前の事象（何も行為がなければ、そのまま続く、または新しく発生すると予想される事象）に対して抑制を加えることである。

3.2 行為抑制に関する動詞による禁止

同様のことを「～するな」や “Don’t” という表現なしに、伝達できる。例えば、「やめる」といった行為抑制的動詞をそのまま用いることによって、禁止を命令することができる。

- (3) a. おしゃべりはやめなさい！ / b. Stop chatting!
- (4) a. やめなさい！ / b. Stop! / Knock it off!

類似のものは「やめる」の他に、「終わりにする」、「済ます」、「停止する」、「休止する」、「中断する」、「途切れる」、「打ち切る」、「廃止する」など様々あるが、日常言語において、全てに禁止命令としての機能があるわけではないようである。

3.3 対義語の使用による禁止

- (5) a. うるさくしないで！ / b. Don’t be noisy!
- (6) a. 静かにしてください。/静かに！ / b. Be quiet, please./ Quiet!/ Silent!
- (7) a. 動くな！ = (1) / b. Don’t move! / c. Freeze!

ここでは “noisy” の反対が “quiet” や “silent” であるという対義語の概念が用いられている。形式は命令文であり、意味は発話の時点での相手の行動を禁止している。これら対義語の概念は、対比・極 (Cooper and Ross 1975)、連想的意味 associative meaning (Leech 1974) などに言及されている。対比の中には多様な否定性が存在する場合がある (有光 2003b)。上の例は、禁止命令に対義語の概念に宿る否定性が利用されている例である。

3.4 感動詞・間投詞による禁止

対義語を用いずとも、同様の禁止命令が可能である。

- (8) a. シッ！ (と怖い顔をして) /シーッ！ (場合によっては、唇に人差し指を立てて)
b. Hush! / Shush! / Sh! / Sh-sh! / Whisht! (場合によっては、唇に人差し指を立てて)

感動詞・間投詞を用いることで、禁止命令文と同じ意味を伝達することもできる。異文化間コミュニケーションであっても、これらの発話の意味を汲むのは難しくない。似たような音で、タイミングが正確で、その場に適切であれば、意図が通じる。このことは、禁止命令という現象が、様々な否定的概念の中でも特に場面に深く依存していることによる。感動詞「シッ！」が、「静かにしろ」という意味で周りの人に言いかける言葉であると同時に、寄ってくる動物を追い払うことを表す言葉でもことは偶然ではない。ともに行為の阻止を目的としている。その場で行われている行為を阻止する/ される、それが禁止であるために、その場で行われている行為を理解さえしていれば、意図を汲むのは難しくない。

Morris は肯定と否定に関して、5つの主要な頭の動作を挙げている。すなわち、首の縦振り（多くは肯定を表す）、首の横振り（スプーンを拒絶する赤ん坊の動作に由来すると考えられる否定反応の最も一般的な形。「私にはできない」、「私にはするつもりはない」、「私は不賛成だ」、「私は知らない」までの広い範囲の否定、不満や困惑を表現）、首ひねり（エチオピアの一部などで否定サイン）、首かしげ（殆どのヨーロッパ人には「そうかもしれないし、そうでないかもしれない」だが、ブルガリア、ギリシャ、ユーゴスラビア、トルコ、イラン、ベンガル地域の一部では肯定反応）、首もたげ（ギリシャ、南部イタリアなどにおいて否定サイン。あご払いとも併用。ニュージーランドのマオリ族、フィリピンのタガル族、

ボルネオのダヤク族、多くのエチオピア人には肯定サイン) である。加えて、親が子供に与える信号として、人差し指を横に振る「それをしてはいけない」の伝達を挙げ、首振りの代替信号としている。同様に、アメリカンインディアンの手話言語も、肯定信号は人差し指の上下、否定信号は手を持ち上げる、首もたげの模倣という代替信号であることが指摘されている (Morris 1991: 126-134)。このことからも、禁止命令は、文としての言語事例だけでなく、音やジェスチャーを含めた現象としてとらえなおす必要があるとわかる。

3.5 警告・威嚇による禁止

3.5.1 言語的警告・威嚇による禁止

文字表層レベルでは否定命令文ではなくとも、意味的には逆になり、禁止の意味を持つ。

(9) a. もう一度言ってみなさい！ / もう一度言ってみろ！

b. Say it again! (Do not (dare to) repeat what you said!) (Yamanashi 2001)

(10) a. これ以上騒いでみなさい！ / これ以上騒いでみろ！

b. Be noisy more! (Do not (dare to) be noisy more!)

推論による警告の発話行為で、禁止命令と類似の効果を持たせる言語現象もある。

(11) a. これ以上おしゃべりを続けるなら、このクラスの学生全員、落第にします。

b. If you continue chatting, I'll give F to all of you in this class.

(12) a. 黙らないなら教室から出て行きなさい。/ b. If you don't shut up, go out of this room.

点数をつける権利を持つ教師と点数をつけられる学生、教室運営をする教師と授業を受ける立場の学生、という具体的な力の上下関係のもとに、警告・威嚇の効力が生じている。

3.5.2 非言語的警告・威嚇による禁止

非言語的サインが禁止命令の意味を持つこともある。

(13) 一番騒いでいる学生の横で、拳を振り上げて、実際に殴る。

(14) 一番騒いでいる学生の横で、拳を振り上げる。(15) 机を拳で叩き、大きな音を立てる。

(16) 手をパンパンと大きく叩き、教室中に響き渡らせる。

(17) 無言のまま、教室全体をずっとにらみつけている。

これらの意味解釈は、場面に非常に深く依存している。意図がどれほど正確に伝達されるかは、話し手(行為者)と聞き手(被行為者)の場面理解の度合いと、お互いの協力的态度の有無による。(13)であれば身体的な危害が加わることで理解が容易であるが、(17)のように無言の中から意図を汲み取るのは難しくなってくる。

3.6 英語に見られる特徴的事例

(18) 黙れ！/ Shut up!

(19) Shut your mouth!/ Shut your face!/ Button your lip!/ Hold your tongue!

Hold your jaw!/ Hold your lip!/ Don't open your mouth! / Save your breath!/ Dry up!

言語的事例による禁止命令は、これまで見たように日英語ともかなりパラレルな現象だが(19)のような用例は英語に特徴的である。慣習的なレトリックであるが、字義通りに命令に従うことができるものから、字義通りの命令には従うことのできないものまである。

4.まとめ

本研究は、発話行為の否定的概念、すなわち、訂正、拒否・拒絶、禁止などのうち、禁止に焦点を当てた。禁止命令の意味を持つ発話行為の諸相を語用論的観点から考察し、明示的に「～するな」や“Don't”を用いるものの他、禁止命令の意味を有する多様な発話行

為の存在を指摘した。「～せよ」、「～するな」という言語現象による肯定性と否定性でまとめがちな禁止という事例を、日常生活の随所に見られる否定性の一つとしての発話行為的視点から見直した。「手を打てば魚は集まり鳥は逃げ女は茶を汲む猿沢の池」²という歌にも語用論の真髓が垣間見られるように、同じ行為が解釈者の立場次第で様々な意味を持ちうる。禁止の現象も同じことで、ある発話行為が禁止として伝達されるには、適切な場面、条件のもとに適切な形式が必要である。否定性研究の語用論的観点から、禁止命令の発話行為について、明示的な禁止命令文、行為抑制的動詞、対義語の概念、感動詞・感嘆詞、警告・威嚇、非言語的記号、慣習的なレトリック等まで含めて統合する可能性を指摘した。

References

- 赤塚紀子・坪本篤朗（共著）1998.「モダリティと発話行為」，研究社出版。
- 有光奈美 2003a.「関連概念による否定研究の再構成」，国語学会 2003 年度秋季大会予稿集, pp. 71-78.
- 有光奈美 2003b.「日常言語における価値的否定性と対象依存的否定性」，日本言語学会第 127 回大会予稿集。
- Austin, John. L. 1962. *How to Do Things with Words*. Oxford University Press. (坂本百大（訳）『言語と行為』，大修館書店, 1978.)
- Cooper, W. and J. R. Ross 1975. "World Order." *Papers from the Parasession on Functionalism*, pp.63-111, Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Grice, Paul H. 1975. "Logic and Conversation." In Peter Cole and Jerry Morgan (eds.) *Syntax and Semantics*, pp. 41-58, New York: Academic Press.
- Horn, Laurence R. 1989. *A Natural History of Negation*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Leech, Geoffrey. 1974. *Semantics: The Study of Meaning*. London: Penguin books.
- 森英樹 2002.「命令文の認知構造」，第 27 回関西言語学会，ハンドアウト。
- Morris, Desmond 1977. *Manwatching*. London:Elsevier Publishing Projects SA, Lausanne, and Jonathan Cape Ltd. (藤田統（訳）『マンウォッチング（上・下）』，小学館, 1991.)
- Searle, John R. 1969. *Speech Acts: An Essays in the Philosophy of Language*. Cambridge: Cambridge University Press. (坂本百大・土屋俊（訳）『言語行為』，劉草書房, 1986.)
- 高橋英光・葛西清蔵（編著）1999.「英語学と現代の言語理論」，北海道大学図書刊行会。
- 山梨正明 1986.「発話行為」，大修館書店。
- 山梨正明 2000a.「認知言語学原理」，くろしお出版。
- Yamanashi, Masa-aki 2001. "Speech-Act Constructions, Illocutionary Forces, and Conventionality." In D. Vanderveken *et al.* (eds.) *Essays in Speech Act Theory*. pp.225-238, Amsterdam: John Benjamins.

² この歌には他にもいくつかの類似のものが存在する。「手を打てば 魚は集まる 鳥逃げる 女は茶を汲む 猿沢池」「手を打てば 魚は集まる 鳥逃げる 下女は茶を汲む 猿沢池」「手を打てば 魚は集まる 鹿は逃ぐ 下女は茶を汲む 猿沢の池」「手を打てば 鯉は餌と聞き 鳥は逃げ 女中は茶と聞く 猿沢池」などである。奈良の猿沢池で手を打てば、池にいる魚は餌がもらえるのかと思って集まり、鳥は危険を察知して飛んで逃げ、茶店の女性はお客様が注文をするのかと思ってお茶を持ってくる、という情景である。

語用論的能力の発達に関する実証の一考察

小林 正佳

横浜国立大学

1. 研究の背景とねらい

- ・従来の言語能力(linguistic competence)の発達研究から、伝達能力(communicative competence)・社会言語能力(sociolinguistic competence)・語用論的能力(pragmatic competence)の発達研究へとシフトしている。
Eg. Hymes(1971), Ervin-Tripp(1971; 1972), Corsaro(1977), Bates(1974), Ochs & Schieffelin(1979), 小林(1987), 伊藤(1982)
- ・これらの能力の獲得には、年齢に応じた発達段階があり、成人の場合は完全に獲得されている。[上述の文献等]
- ・今後の研究では、種々の社会的・文化的コンテクストが、個々のインタラクションでの適切な発話能力の発達にどう影響するかを厳密に例証することが求められる。
Cf. Thompson(1997)
- ・語用論的能力としての間接発話行為の理解能力が、子供にはどの程度備わっているかを独自の調査方法で記述する。[本研究]
- ・語用論的能力の発達研究における分析・考察の視点を示す。[本研究]

2. 「実験観察」調査の方法

- ・実験観察者（大学生 73 人）が個々に街中で実施。
- ・被験者である成人と小学 1 年生（推定）に対し、「すいません、道に迷ってしまったんです。」及び「おねえさん／おにいさん道に迷っちゃったんだ。」と発話し、この非慣用的な間接依頼行為の遂行への反応を観察・記録。
- ・観察・記録された総件数は成人 82 件、小学 1 年生 75 件。

3. 調査結果

- (1) 「どこへ行きたいのか？」という主旨の返答

成人：54／82 (65.9%) 小 1 : 18／75 (24.0%)

- (2) 「どうして？」という主旨の返答

成人：なし 小 1 : 5／75 (6.7%)

- (3) 「・・・」沈黙

成人：5／82 (6.1%) 小1：30／75 (40.0%)

(4) その他、成人に見られた注目すべき返答

「ごめんなさい、私もこここの住人じゃないの。」

「急いでますので。」

手を振って立ち去る

「えっ?」「はっ?」

「はい。」「はあ。」「うん。」

「それで?」

(5) その他、小1に見られた注目すべき返答

「うん。(うん。)」「ふーん。」

「大変だねー。」

「あっち。」「わかんなーい。」

4. 考察

- (1) 発話者の意図、つまり＜依頼＞という間接発話行為（あるいは非字義的発話行為ないしはヒント(Ervin-Tripp(1976)) の理解とそれに対する適切な応答力には成人と小1で大差がある。
- (2) 道に迷ったという＜陳述＞に対してその原因・理由を＜質問＞してしまうのは、発話意図を理解できていないからである。
- (3) 成人の沈黙は様子を伺い更なる情報提供や説明を求める機能を有する— 実験観察者の発話が＜依頼＞と解釈されるには不透明で発話意図の推論に時間を要する。
小1の場合は、発話意図の推論能力が未だ獲得されておらず、返答に窮して黙って（走り去って）しまう（その意味では「どうして？」と同質）か、発話意図を理解していても道案内へとやり取りを発展させていく技量や勇気に欠けているのではないか。
- (4) 発話意図を理解した上で、＜依頼＞には応じられない旨を伝える能力がある。
成人でも発話意図の推論には至らず、＜陳述＞として受けとめたり、明晰化を求めることがある。
- (5) 発話意図を推論することはおろか、不承不承やり取りを交わし、適当にやり過ごす。
ただ、(3)の場合と同様、＜依頼＞を理解している可能性もある。

5. 結論と提案

- A. 発話行為の研究は理論的・内省的・思弁的なものになりやすいが、発話行為の遂行と理解のメカニズムの解明のためには、本研究のように実際の発話を分析データとした実証的アプローチも可能かつ必要である。

- B. 本研究のごく限られた範囲の調査結果では、語用論的能力の一部とみなせる間接依頼行為を理解し、それに適切に応答する能力の獲得には発達段階がある。
- C. 語用論的能力はそのまま（首尾よく）運用される(pragmatic performance)わけではない (cf. Hymes(1972))。よって、語用論的能力の獲得の解明には、コンピテンスとパフォーマンスを峻別し、インテラクションを発話行為の連鎖として捉える談話分析の観点が求められる。

参考文献

- Bates, E. 1974. "Acquisition of Pragmatic Competence." *Journal of Child Language* 1: 277-281.
- Corsaro, W. 1977. "The Clarification Request as a Feature of Adult Interactive Styles with Young Children." *Language in Society* 6: 183-207.
- Ervin-Tripp, S. 1971. "Social Dialects in Developmental Sociolinguistics." In R. Shuy ed. *Sociolinguistics: A Cross-disciplinary Perspective*, 57-86. Washington, D.C.: Center for Applied Linguistics.
- _____ 1976. "Is Sybil There?: The Structure of Some American Directives." *Language in Society* 5: 25-66.
- Hymes, D. 1972. "On Communicative Competence." In J.P. Pride and J. Holmes eds. *Sociolinguistics*, 269-293. Harmondsworth, England: Penguin Education.
- 伊藤 克敏. 1982. 「幼児言語研究の新段階」『月刊言語』(1月号)94-102. 東京:大修館。
- 小林 正佳. 1987. 「ことばの異種の判別能力獲得に関する一考察」F.C.パン他編『社会・人間とことば』145-175. 広島:文化評論出版社.
- Ochs, E. and Schieffelin, B. 1979. *Development Pragmatics*. New York: Academic Press.
- Thompson, L. 1997. "The Development of Pragmatic Competence: Past and Future Directions for Research." In L. Thompson ed. *Children Talking*, 3-21. Clevedon, UK: Multilingual Matters Ltd.

スケール推意の取り消し方について

—1次元的スケール・モデルから3次元的スケール・モデルまで—

澤田 治
早稲田大学大学院

0. はじめに

一般化された会話的推意の1つに、スケール推意(scalar implicature)と呼ばれるものがある。スケール推意とは、Griceの「量の公理」(Maxim of Quantity)の前半部(必要とされる最大限の情報を与えよ)から生み出される「それ以上ではない」という推意のことである。会話的推意の特性の1つは、「取り消し可能性」(cancellability)という特性である。これまで、スケール推意とその取消可能性に関して様々な研究がなされてきた(Grice 1989; Horn 1989; Levinson 1983, 2000; Hirschberg 1991; Rohrbaugh 1997; 田中 2001; 山本 2002, etc.)。しかし、それらの研究はすべて、1次元的スケールを前提としたものであり、多次元的なスケールの場合については考察されてこなかった。

本発表では、多次元的スケールにおけるスケール推意とその取り消し方の関係について考察し、スケールの取り消し方は次の式で表し得ることを主張する。

(1) $X = 2^n - 1$ (X =推意の取り消し方の数、 n =次元数)

1. 先行研究

これまで、スケール推意には、意味論的な知識に基づいて生み出されるスケール推意(Horn 1972, 1989)と語用論的知識に基づいて生み出されるスケール推意(Fauconnier 1975; Horn 1989; Hirschberg 1985; Levinson 2001)の2種類があることが論証されてきた。例えば、下の例で、(2a)のスケール推意である(2b)は意味論的なスケール推意であり、(3a)のスケール推意である(3b)は語用論的なスケール推意である。(3b)は、「アメリカを西から東へ移動している」という語用論的知識があつてはじめて生じる推意であることに注意されたい。また、(2c)、(3c)のin fact以下の部分はそれぞれ(2b)、(3b)を取り消している。

(2) a. John has three cows.

b. John doesn't have more than three cows.

c. John has three cows, in fact ten.

(3) a. He's got to Salt Lake City. (Levinson 2001:105)

b. He has not got to Chicago, New York etc.

c. He's got to Salt Lake City. In fact, he's even got to Chicago.

しかし、こうした分析は、すべて、「1次元的」スケールを前提にしたものである。

2. 2次元的スケール (澤田 2003)

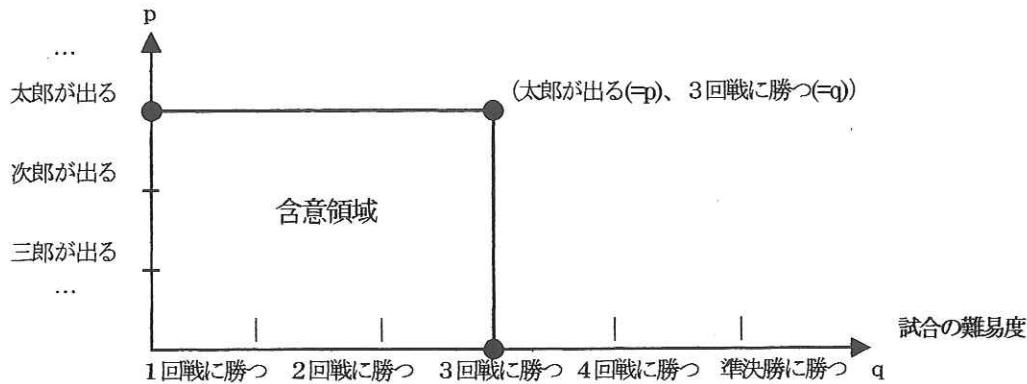
本節では、2次元的スケール文ではどのようなスケール推意が生み出されるのか、またスケール推意の取り消し方はどのように分析できるのかについて考察する。次の例を考えてみよう。

(4) (たとえ) 太郎が出ても、3回戦には勝てる。

(4)では、条件節($\Rightarrow p$)のスケールとして、帰結節($\Rightarrow q$)を導く可能性のなさ(=選手の弱さ)のスケールが想定され、かつ帰結節のスケールとして、試合の難易度のスケールが想定されている。その場合、話し手が想定したスケール上で、太郎はかなり弱いレベルに属しており、かつ、「3回戦」はそれほど難しいラウンドではない。Y軸に条件節のスケールを、X軸に帰結節のスケールを表示すれば、(4)のスケール性は以下

のようなスケールモデルで表される。四角の中は文全体から引き出される含意領域(entailment domain)である。

(5) q を導く可能性のなさ (=選手の弱さ)



(5)のスケールモデルでは2つのスケールが仮定されているので、 p からの含意と q からの含意という2つの含意があることが予測される。まず、 p からの含意は「太郎よりも強い選手（たとえば、次郎、三郎）なら当然3回戦に勝つ」ということである。すなわち、 p スケール上で太郎より下位の選手は「当然3回戦に勝つ」という含意である。一方、 q からの含意として、太郎が「3回戦よりも試合の難易度の低い試合、すなわち、1回戦にも2回戦にも当然勝つ」ということがある。すなわち、試合の難しさのスケールの中でより下位の命題が含意されるということである。

(6) p からのスケール含意：太郎よりも強い選手は3回戦に勝てる。

(7) q からのスケール含意：太郎は3回戦よりも下のラウンド（2回戦、1回戦）でも勝てる。

これら2つの含意の相互作用によって、(5)の2次元的含意領域が形成される。

それでは、スケール推意はどうなるのであろうか？讓歩条件構文に2つのスケールが存在するということは、当然2つのスケール推意が存在することを意味する。まず条件節からの推意は、「太郎よりも弱い選手は3回戦に勝てない」ということである。すなわち、 p スケール上で、「太郎が出る」という命題よりもより上位の命題は帰結節を導かないということである。一方、帰結節からの推意は「太郎は3回戦よりも上のラウンドでは勝てない」という推意である。以上の議論をまとめると次のようになる。

(8) p からのスケール推意：太郎よりも弱い選手は3回戦に勝てない。

(9) q からのスケール推意：太郎は3回戦よりも上のラウンドでは勝てない。

ここで重要なことは、スケール推意は取り消し可能であるということである (Grice 1989; Levinson 1983)。推意を取り消す機能を持つ典型的な表現として、日本語では「それどころか」がある(かつての要素は随意的な要素を表す)。

(10) p 推意の取り消し：(たとえ) 太郎が出ても、3回戦には勝てる。それどころか、(もっと弱い)
新平が出ても(3回戦には) 勝てる。

(11) q 推意の取り消し：(たとえ) 太郎が出ても、3回戦には勝てる。それどころか、(もっと難しい)
4回戦にも勝てるよ。

(12) p 推意と q 推意の両方の取り消し：(たとえ) 太郎が出ても、3回戦には勝てる。それどころか、
(もっと弱い) 新平が出ても(もっと難しい) 4回戦に勝てるよ。

以上の議論から、2次元的スケールが存在する場合、推意の取り消し方には、「 p 推意の取り消し」、「 q 推意の取り消し」、「 p 推意と q 推意の両方の取り消し」という3通りの取り消し方があることが判明する。

3. 3次元的スケール

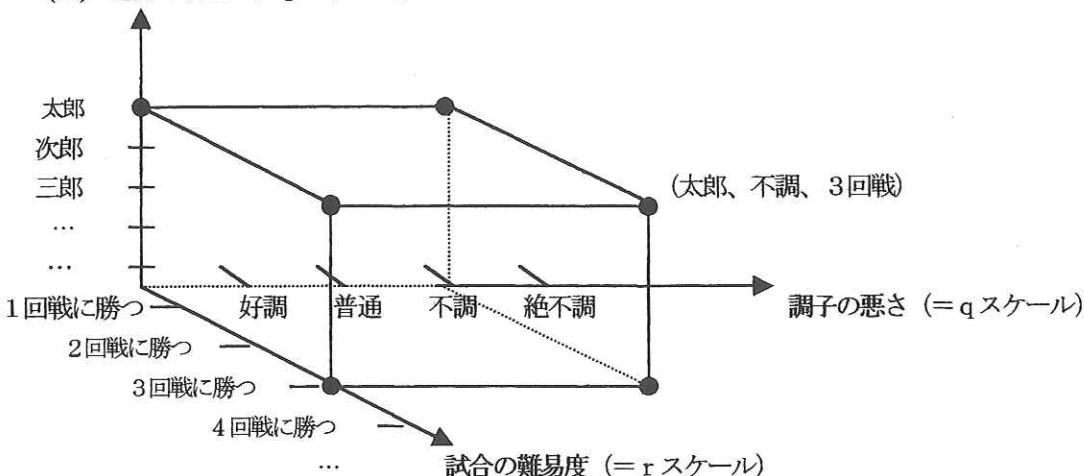
次に3次元的なスケールを考察してみよう。次の例を見られたい。

(13) たとえ太郎が不調でも、3回戦には勝てる。

p q r

この文は変項となり得る箇所を3つ含んでおり、3次元的スケール文であると考えられる。まず、pスケールは「選手の弱さ」のスケールで、「太郎」はそのスケール上でかなり高い所に位置している。次に、qスケールは「調子の悪さ」のスケールで、「不調」はそのスケールのかなり高い所に位置している。最後に、rスケールは「試合の難易度」のスケールである。pスケール、qスケールはともに、「帰結rを導く可能性のなさ」というスケールを構成しているということに注意されたい。

(14) 選手の弱さ (= pスケール)



注意すべきことは、立方体の中は文全体から引き出される含意領域であるということである。すなわち、「たとえ太郎が不調だとしても、3回戦には勝てる」が真であれば、当然スケール上でより下位の要素の組み合わせから成る文は真となる。例えば、(13)が真であれば、「(太郎より強い) 次郎が普通の調子であれば、3回戦に勝てる」も真になるのである。

(13)のスケール推意に関しては、次の3種類があると考えられる。

(15) pからのスケール推意：太郎よりも下手な選手が不調であれば3回戦に勝てない。

(16) qからのスケール推意：太郎が絶不調であれば、(彼は) 3回戦には勝てない。

(17) rからのスケール推意：太郎が不調であれば、(彼は) 4回戦には勝てない。

次にこれらのスケール推意の取り消し方であるが、3次元的スケール文におけるスケール推意の取り消し方は非常に豊かであり、以下の(18)-(24)の7通り存在する(…は例文(9)を表す)。

(18) …。それどころか、(もっと下手な) 新平が不調でも3回戦には勝てる。(p推意の取り消し)

(19) …。それどころか、(太郎が) 絶不調でも3回戦には勝てる。(q推意の取り消し)

(20) …。それどころか、(太郎が) (不調でも) 4回戦に勝てる。(r推意の取り消し)

(21) …。それどころか、(もっと下手な) 新平が絶不調でも3回戦に勝てる。(p推意とr推意の取り消し)

(22) …。それどころか、(太郎が) 絶不調でも4回戦に勝てる。(q推意とr推意の取り消し)

(23) …。それどころか、(もっと下手な) 新平が不調でも4回戦に勝てる。(p推意とr推意の取り消し)

(24) …。それどころか、(もっと下手な) 新平が絶不調でも4回戦に勝てる。(p推意とq推意とr推意の取り消し)

すなわち、(18)-(24)に表された7通りの取り消し方のパターンは以下のように図示される。

(25)	p 推意の取り消し	q 推意の取り消し	r 推意の取り消し
(18)	○		
(19)		○	
(20)			○
(21)	○	○	
(22)		○	○
(23)	○		○
(24)	○	○	○

4. 結論（背後にあるメカニズム）

本稿では、スケール推意とその取り消し可能性の関係について、1次元から3次元までのスケール文を基に考察した。そして、スケール推意の取り消し方は、1次元では1通り、2次元では3通り、3次元では7通りのスケール推意の取り消し方があることを論証した。では、こうした事実の背後にはどのようなメカニズムが存在しているのであろうか？筆者はこれらの背後には次の式が存在すると考える。

(26) $X = 2^n - 1$ ($X = \text{推意の取り消し方の数}, n = \text{次元数}$)

この式によって、各次元数での取り消し方が予測できることになる（例えば、4次元的スケール文でのスケール推意の取り消し法は15通り、5次元では31通りである）。4次元的スケールの例としては、次のような例が挙げられよう。

(27) (たとえ) 太郎でも、一日3時間、優秀な仮定教師について勉強すれば、X大学に合格できる。

しかし、(24)におけるような複数のスケール推意の同時取り消し（例えば、4次元文においては、4つのスケール推意の同時取り消し）は言語処理上相当の負荷がかかる。そのため、スケール推意が複数存在する場合、我々は複数の推意を同時に打ち消すこと避け、取り消す対象をできるだけ絞ろうとする傾向があると思われる。多次元的スケール推意の取り消しは文の情報構造や理解可能性と深く関わっているのである。

References

- Fauconnier, G. 1975. "Pragmatic scales and logical structure." *Linguistic Inquiry* 4, 353-375.
- Grice, H. P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Hirschberg, J. B. 1985. *A Theory of Scalar Implicature*. Ph. D dissertation, University of Pennsylvania.
- Horn, L. R. 1972. *On the Semantic Properties of Logical Operators in English*. Dissertation, Los Angeles: University of California
- _____. 1989. *A natural history of negation*. Chicago: University of Chicago Press.
- Kay, P. 1990. "Even." *Linguistics and philosophy* 13, 59-111.
- _____. *Words and the Grammar of Context*. Stanford: CSLI Publications.
- Levinson, S. C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- _____. 2000. *Presumptive Meanings. The Theory of Generalized Conversational Implicature*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Rohrbaugh, E. 1997. *Scalar Interpretation in Deontic Speech Acts*. New York: Garland Publishing
- 澤田治. 2003. 「譲歩条件構文における相関的スケール性について—日英対照言語学的アプローチー」『第126回日本言語学会予稿集』76-81.
- Schwenter, S. A. 1999. *Pragmatics of conditional marking: Implicature, Scalarity, and Exclusivity*. New York: Garland Publishing.
- 田中廣明. 2001. 「語法研究」(小泉保 編)『入門語用論—理論と応用—』206-217. 東京：研究社
- 山本英一. 2002. 「順序づけ」と「なぞり」の意味論・語用論』大阪：関西大学出版部.

日英語長文の再分析について

趙 順文

台湾大学日本語文学系

1. 序

外国语の習得について「聞く・話す・読む・書く」の四つの力をいかに身に付けるかが先学によっていろいろと工夫されているが、学界では日英語を問わず、「読む」力の長文分析に関する論議がほとんどなされないのが普通である。

これは單文と複文の構造が正確に把握されれば、長文分析がおのずから理解できるという短絡的な発想から抜け出せないためであろう。実際「長文分析」と銘打って、出版された膨大な参考書が市場に出回っていることは理論と実践との結合の難しさを露呈している。

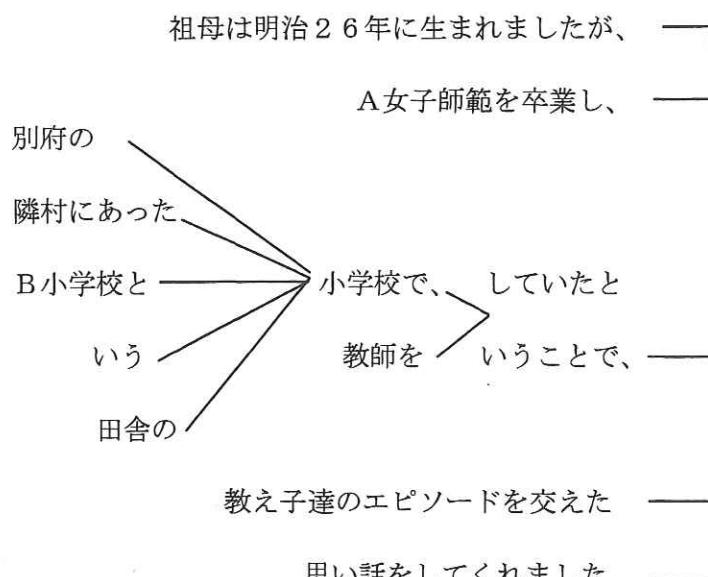
小稿は児玉徳美（1987）と結合価理論を踏まえて、言語の本質である発話連鎖の直線状の特徴を適切に反映する一述語一行の文構造を取る方法論を提案し、難関とされる長文を分析するところに目的がある。

2. 問題点

日本語の文の長さについては今までいくつかの研究報告が発表されているが、安本（1981）では現代作家百氏の文章の長さを調べた結果、文の平均の長さは50字以下であることが望ましいと言っている。小稿ではこれに則って長文は50字以上のものの複文と定義したい。長文の分析については外国语を習得しようという意識が強いあまり、台日を問わず、母国語より英語のほうが断然多いのが現状であろう。日本語に関しては次のものが取り上げられよう。

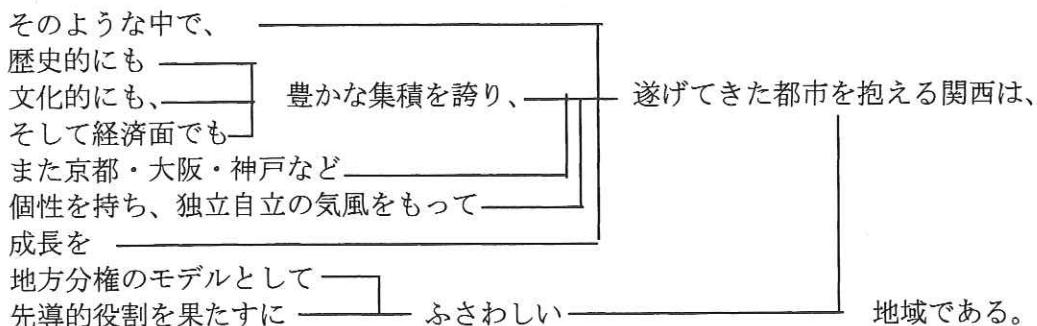
樺島（1980）は句読点を入れて92字に達する長文を次のように分析している。但し記号黒点「・」は並立している部分をつなぐことを示す。

①祖母は明治26年に生まれましたが、A女子師範を卒業し、別府の隣村にあったB小学校という田舎の小学校で、教師をしていたということで、教え子達のエピソードを交えた思い話をしてくれました。



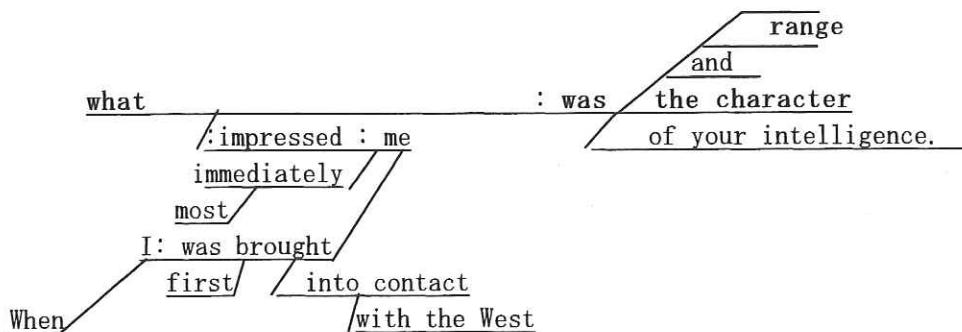
浅野（1995）は文の論理的な構造を強調して、自らあげた長文を次のように分析している。

②そのような中で、歴史的にも文化的にも、そして経済面でも豊かな集積を誇り、また京都・大阪・神戸など個性を持ち、独立自立の気風をもって成長を遂げてきた都市を抱える関西は、地方分権のモデルとして先導的役割を果たすにふさわしい



上述の分析の難点は既知のよう生成文法の樹形図を含めて、いずれも内面的な構造上の多元的な語順を立体図で示すことから、言語の本質である発話連鎖の直線状を適切に反映していないし、実践面からしても一旦長文をばらばらに分解して再構成するのでは、時々一ページ内に納めきれないところにあろう。英語も次の原（1933）から窺えるように、その例にもれずこの種の難点は避けられない。

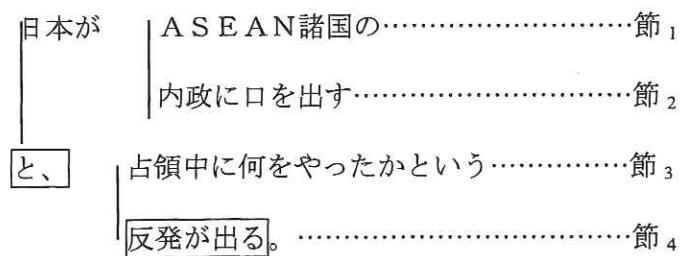
③When first I was brought into contact with the West what most immediately and impressed me was the character range of your intelligence.



3. 分析

趙（1993）は児玉徳美（1987）と結合価理論に基づき、文の直線状の特色を維持したまま、一述語一行という分析法を提唱して、文を次のように分析している。つまりこの分析法は左から右へ、一述語一行と書くように決められた日本語の横書きの様式に則りながら、順次に展開されているのが特徴である。なお「ASEAN諸国の」のような修飾語は端折った節と考えられる。

④日本が内政に口を出すと、占領中に何をやったかという反発が出る。



～₁₂ と、～₃ 反発が出る。

しかしこの分析法では 1) 接続助詞を文頭に立たせるのは不自然だ、2) 大長文はやはり一ページ内に納めきれないなどの疑問点や意見を踏まえながら、あらためて細かい修正を次のような長文分析に当てはめた。

⑤月からかかってきた呼び出し電話なのだから、こんなに何時間もただ泣いていたのでは、通話料金がかさんで、破産してしまうと、分かっているのだけれども、十数年間忘れられずいた恋人の声をいつまでも聴いていたくて、どうしても受話器を置けずにいる。(飯田茂実『一行物語』)

- i ₀₁ [Aから Bにかかる]
- ₀₂ [Aが呼び出し電話だ]
- ₀₃ [Aが泣く]
- ₀₄ [Aがかさむ]
- ₀₅ [Aが破産する]
- ₀₆ [BにSと分かる]
- ₀₇ [AがA'を忘れる]
- ₀₈ [AがA'を聴く]
- ₀₉ [AがA'を置く]

- ii ₀₁ 月から ₀₁ かかってきた ₀₁
- ₀₂ 呼び出し電話な ₀₂ のだから、₀₅
- ₀₃ こんなに ₀₃ 何時間も ₀₃ ただ ₀₃ 泣いていた ₀₃ のでは、
- ₀₄ 通話料金が ₀₄ かさん ₀₄ で、
- ₀₅ 破産してしまう ₀₅ と、₀₆
- ₀₆ 分かっている ₀₆ のだけれども、
- ₀₇ 十数年間 ₀₇ 忘れられずいた ₀₇
- ₀₈ 恋人の声を ₀₈ いつまでも ₀₈ 聽いていたく ₀₈ て、
- ₀₉ どうしても ₀₉ 受話器を ₀₉ 置けずにいる ₀₉。

- iii ₀₁ 月からかかってきた _{01/02}

- ₀₂ 呼び出し電話なのだから、₀₅
- ₀₃ こんなに何時間もただ泣いていたのでは、₀₅
- ₀₄ 通話料金がかさんで、₀₅
- ₀₅ 破産してしまうと、₀₆

06 分かっているのだけれども、09

07 十数年間忘れられずいた 07/08

08 恋人の声をいつまでも聴いていたくて、09

09 どうしても受話器を置けずにいる。

この分析法は番号つきで文の直線状を維持したまま、i) 述語の基本文型をはっきり把握しうる、ii) 述語の必須成分と状況成分との違いをはっきりさせる、iii) 節と節の関係をはっきり浮かび上がらせるなど、今までになかった利点を持っている。

英語長文を分析するには、この方法論がものをいうであろう。例えば、⑥の用例は次のようなに分析できる。

⑥What people who say such things forget is that what a man earns he usually spends, and in spending he gives employment .

i 01 What 23 people 2 who 1 say 1 such things 1
02 forget 2
03 is 3 that 3
04 what 45 a man 4 earns 4
05 he 5 usually 5 spends 5,
06 and 56 in 6 spending 6
07 he 7 gives 7 employment 7.

4. 結語

上述したように、文の直線状の特徴を最も適切に反映した一述語一行という分析法を用いれば、述語のそれぞれの成分をはっきり把握できるのみならず、節と節との連接関係を浮き彫りにすることによって、違う言語間の翻訳を容易にかつ円滑にするし、文から段落へと、テクスト分析に役立てる方法の一つをさらに発展させる可能性を秘めているのではないかと思う。

参考文献

- 浅野和彦 (1995) 『作文技術のルール・ブック』近代文芸社
樺島忠雄 (1980) 『文章構成法』講談社現代新書
児玉徳美 (1987a) 『依存文法の研究』研究社
児玉徳美 (1987b) 『語順の普遍性』山口書店
小泉保・船城道雄・本田昌治・仁田義雄・塚本秀樹編 (1987b) 『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
趙順文 (1993) 『日本語文長句分析—新聞日語語法』台湾旺文社

目的を表す so that 節に現れる can/will の意味*

明日 誠一
青山学院大学非常勤講師

1. ところ変われば、文法性も変わる

- (1) a. *You can't fail the test.*
b. **You have to work hard so that you can't fail the test.*
(2) a. *You [will pass/ *pass] the test.*
b. *You have to work hard so that you [will pass/pas] the test.*

2. can と can't の「他人の関係」

2. 1. can の反対は、can't ではなく、won't または do(es)n't である
(3) *You have to work hard so that you can pass the test.*
(4) *You have to work hard so that you [won't/ don't] fail the test.*

劇中劇 1. so that...not の 2 つの(可能な)解釈—文否定と動詞句否定

- (5)a. 基本的に not は文否定で、so that...not は「否定の目的(to prevent)」を表す
b. not を動詞句否定で解釈できる場合、so that...not は「肯定の目的(to enable)」を表す
(6) *Be sure to bring a map so that you [won't/ don't] get lost.*
(7) *Be sure to bring a map so that you can find the way.*
≒ *Be sure to bring a map in case you get lost.*
*“you get lost”に対する話者の蓋然性は、in case 節よりも、so that 節の方が高い。
cf. *Be sure to bring a map because you [will/ may] get lost.*

2. 2. can は、実は、動詞的な意味を持ち、succeed in を表す

- (8) *You have to work hard so that you [can pass/ succeed in passing] the test.*
(9) a. *Leave now so that you can catch the train.*
b. *Leave now so that you [won't/ don't/ *can't] miss the train.*
(10) a. *Install a computer so that you can save time.*
b. *Install a computer so that you [won't/ don't/ *can't] lose time.*

2. 3. では、can't の正体は何かと言えば、[won't/do(es)n't] have the chance to である

- (11) *Install filtering software so that your children can't gain access to deleterious sites.*

- (12) Install filtering software so that your children [*won't/don't*] have the chance to gain access to deleterious sites.
- (13) We have to have the dog put down so that he *can't* attack any more children.
- (14) Put the chains on the tires so that it *can't* skid on the icy road.

3. will と won't の肩身の狭い思い

3. 1. 時間的後行性を表す will の「存在の耐えられない軽さ」

(15) You have to work hard so that you [*will pass/pass*] the test. [= (2b)]

(16) You have to work hard so that you [*won't/don't*] fail the test. [= (4)]

劇中劇2. ちゃんと勉強すれば、試験は受かるもの

(17) I had to work hard before I [*passed/*failed*] the test.

*「実は、～しなかった」場合を示唆する表現は、be supposed to～である

劇中劇3. 「目的」概念は、before からの眺めがもっとも美しい

(18) Give him money before he *talks*. (=Give him money so that he [*won't/doesn't*] *talk*)

*秘密をばらされる前に(fore-)、お金を渡すという出来事を置く(-stall)と、秘密がばらされることを to forestall する。つまり、「否定の目的」の核心は、to prevent である

(19) Give him money before he *will talk*. (=Give him money so that he *will talk*)

3. 2. will に残された2つの活躍の場—「同意」と過去時制

(20) a. Give him money so that he *will talk*.

b. Give him money so that he *agrees to talk*.

(21) We had to give him money so that he [*would talk/*talked*].

4. 未来に満たされるべき意味

(22) Let's speak French so that they *can't* understand us.

(23) Put the chains on the tires so that it [*can't/won't be able to*] skid on the icy road.

*発表に際し、有益なコメントをいただいた Bertha Wise、David Brown、Edward Grossman、Eric Nicholson、Mark Odegard、Terry Byrne の各氏に感謝致します。

参考文献

Declerck, Renaat. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Kaitakusha. (安井稔(訳). (1994) 『現代英文法総論』開拓社.)

明日誠一. 2003. 「目的を表す before 節(1)・(2)」ms.

_____. 2003. 「so that...not が常に『否定の目的』を表すとは限らない」ms.

サルは鳴き声で何を伝えているのか

小田 亮 (おだ りょう)

名古屋工業大学 大学院工学研究科情報工学専攻

●比較行動学

ヒトを含めた種々の動物の行動を分析し比較することにより、行動の系統発生を明らかにしようとする科学

ローレンツ、ティンバーゲン、フォン・フリッッシュが中心となって推進。自然界における動物の行動法則を、観察や実験によって明らかにしようとする

他種の音声コミュニケーションとの比較 系統関係、淘汰圧を考慮

●ヒト以外の霊長類はどのようなコミュニケーションを行っているのか

ワオキツネザル (*Lemur catta*) の警戒音を例として

マダガスカルとは

熱帯域、南端部は亜熱帯 6500万年前にはアフリカ大陸と分離

植物のうち 80%以上、爬虫類と両生類の 90%、鳥類の約半分が固有種

霊長類は 100%が固有種である

約 5000 万年から 3000 万年前にアフリカ大陸から移住したと考えられる

約 30 種のレムールが生息 全世界の霊長類のうち約 17%

ワオキツネザル マダガスカル南西部に分布

15 頭程度の複雄複雌群 母系社会 メス優位

ワオキツネザルにとって捕食は大きな淘汰圧である

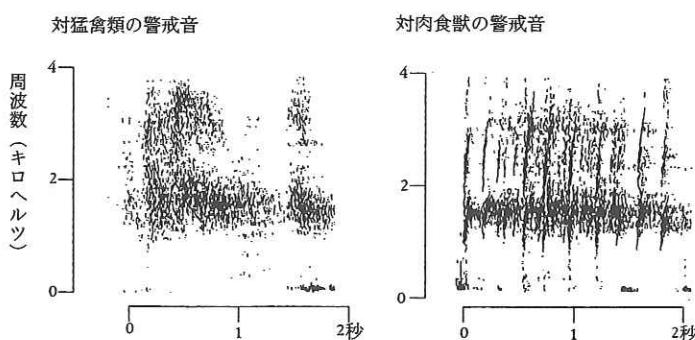
→ 対抗策として警戒音を進化させた

音声の分析 サウンドスペクトログラム

基本周波数に分解し、その時間変化をみることで構造を把握する

●ワオキツネザルはそれぞれの捕食者に対応した2種類の警戒音をもつ

図1



ワオキツネザルの二種類の警戒音のサウンドスペクトログラム。横軸が時間、縦軸が周波数

受け手の反応を再生実験（プレイバック実験）によって確かめる

図2



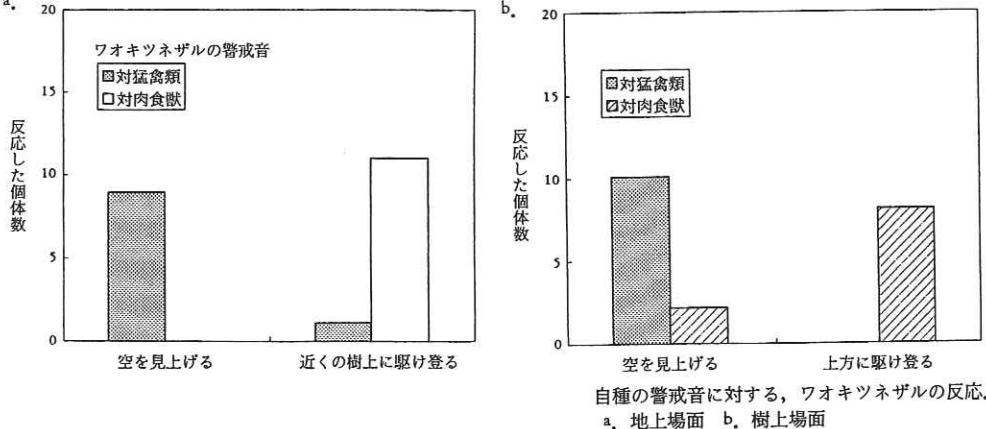
プレイバック実験の様子

26頭に1回ずつ

地上場面と樹上場面

反応の分化を確認

図3



●このような、いわば意味論的な研究は多くの霊長類を対象として行われている

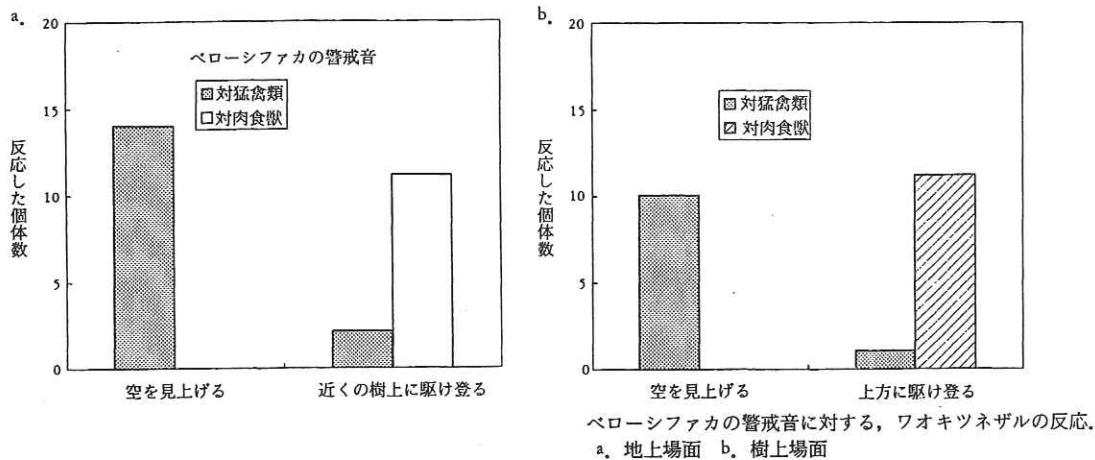
●ワオキツネザルはベローシファカと同所に共存している

ベローシファカ マダガスカル南部、西部、北部に広く分布
レムールのなかでも大きめ。5~6頭の複雄複雌群

ベローシファカも2種類の警戒音を持つ

ワオキツネザルはベローシファカの警戒音も聞き分けて反応できるのではないか？

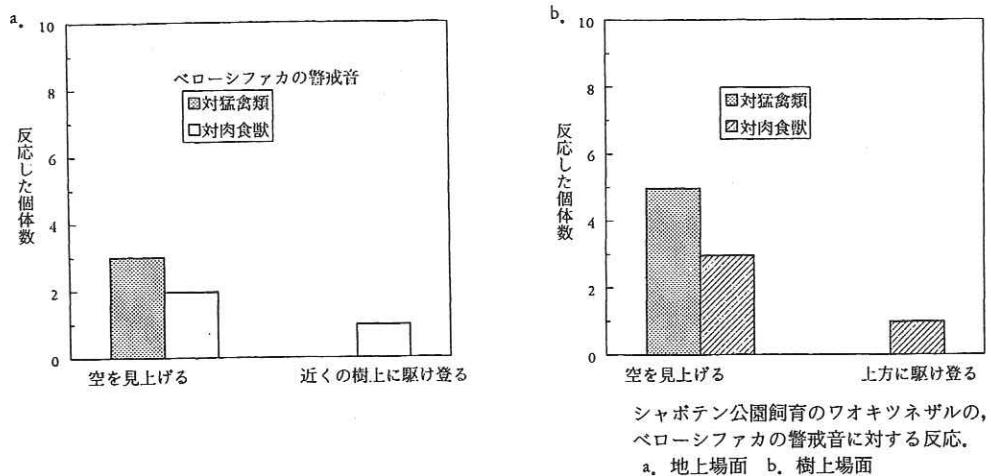
図4



自種の警戒音と混同しているのではないか？

伊豆シャボテン公園にて、日本生まれのワオキツネザルに再生実験

図5



- ワオキツネザルは、自種の警戒音とは異なることを理解したうえでベローシファカの警戒音に反応している？

- ヒト以外の靈長類における音声コミュニケーションの場合、受け手は発し手の意図を推測しているのだろうか？

モーガンの公準

「動物の行動は、それが単純に説明できるのならば、高次の心的機能によるものと解釈してはならない」

ヒト以外の霊長類における意図の理解 「心の理論」をもっているのか？

逸話は多いが、実験的に確かめるのは困難

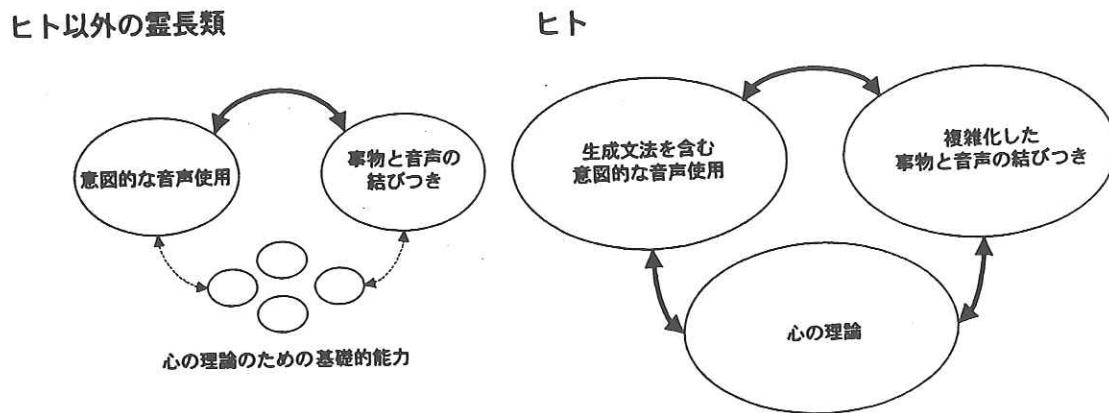
類人猿にはある程度備わっているかもしれない

● ヒト言語とヒト以外の霊長類における音声コミュニケーションの違い

意味論的には複雑化しただけ？ 語用論的には大きなギャップ

いくつかの能力が個別に進化し、それらが結びついたところにヒト言語が発生したのではないか

図6



「言語器官」ではなく「言語回路」という概念

参考文献

- 小田亮 (1999) 「サルのことば—比較行動学からみた言語の進化」 京都大学学術出版会.
- 西田利貞・上原重男 (編著) (1999) 「霊長類学を学ぶ人のために」 世界思想社
- T. Matsuzawa (eds) (2001) 「Primate Origins of Human Cognition and Behavior」 Springer-Verlag.
- 岡野恒也 (監修) (2001) 「社会性の比較発達心理学」 アートアンドブレーン.
- 小田亮 (2002) 「約束するサル—進化からみた人の心」 柏書房.

進化から見た発話行為・意味・統語

野澤元

京都大学大学院人間・環境学研究科

hajime_nozawa_jp@yahoo.co.jp

1. はじめに

有名な話であるが、パリ言語学会は1865年に、言語の起源についての研究は以後受け付けないと宣言した。確かに、その当時の科学の知見では、言語の起源についての研究は、単なる憶測の域を出ないものにならざるをえなかったのだろう。しかし、それから既に百数十年が過ぎている。人間の生物学的な知見が蓄積された現在、言語の起源とその能力の進化についての研究は花開きつつある。

しかし、残念なことがある。それは、言語能力の進化の研究に、言語をその中心的研究対象とする言語学が積極的に参加していないことである。これには、恐らく三つの理由が考えられる。

- (1) 生成文法の祖である Chomsky が、言語能力の進化について、これまで否定的な見解を示してきた。
 - (2) 言語学者の多くは、生物進化の問題を、自らの研究とは直接関係のないものだと見なしている。
 - (3) 生物学者による言語能力の進化論は、具体的な言語事例の観察に基づいていない。
- (2) と (3) については、後に詳しく論じるとして、(1) について先に述べておく。

Chomsky は、言語能力を生物進化の観点から検討することに、消極的な態度を示し続けてきた。彼は、「進化論は多くのことについて情報を与えるが、今の時点では、この種の問題については、ほとんど何も教えてくれない」と述べている (Chomsky 1988: 166)。しかし、近年、Chomsky は Hauser と Fitch との論文の中で、言語能力の進化に対する接近法について提案している (Hauser et al. 2002)。これは、彼の見解に対するこれまでの様々な批判を (例えば、Dennett 1995)、もはや無視できなくなってきたことの現れかもしれない。しかし、彼はこの論文で、中核的な言語能力は離散的な無限を生み出す計算とした上で、それが数量化等の能力として進化した可能性を示唆している。つまり、言語能力の進化をコミュニケーションへの適応とは見なさないことで、この問題を言語学から遠ざけようというのである。

本論では、言語能力の進化をコミュニケーションの問題として捉えた上で、以下の二つの目的を掲げる。

- A. 言語能力の進化の問題が、言語学の理論にとっても大きな意味を持つことを示し、進化と整合性のある言語学の手法を提案する。
- B. 言語学を生物学の一部門として位置付けることで、実際の言語使用の観察に基づいた、言語能力の進化論を促進する。

2. コミュニケーションと自然選択

一般的な見方として、言語の主な機能はコミュニケーションだと考えられている。コミュニケーションが何であるかを厳密に定義するのは難しいが、情報の輸送はその主要な側面の一つだと考えられる。事実、私達は日常的に言語を用いて、他者と様々な情報を交換している。言語の機能を情報の輸送と考えるのは、直感的に納得がゆくだろう。従って、言語能力の進化の理由を、言語が持つ情報の輸送力だと考えたとしてもおかしくはない。実際、Lieberman は、言語を支える脳の解剖学的構造や生理学的特性、また、发声器官の構造を検討し、言語能力の進化はそれらの器官が可能とする迅速な情報の輸送力によって引き起こされたと述べている (Lieberman 1991)。

しかし、言語の機能を情報の輸送として見ることは間違いではないが、進化を考える上では十分ではない。それは、生物進化がどのような過程であるかを考えればわかる。

進化： 生物進化、生物学的進化は、遺伝的に異なる性質を持つ生物個体の頻度が時間につ

れて変化することをいう。

(Futuyma 1986: 551)

自然選択： 1つ以上の遺伝する性質を持つ実在単位の間の異なる生存と繁殖によるプロセス。

自然選択を成り立たせるためには、生存と繁殖の差は偶然によるものではなく、また、その差によって同じレベルでの異なる単位の頻度を変化させるという結果をもたらさなければならない。

(Futuyma 1986: 554)

自然選択による生物進化では、ある形質が進化するのは、その形質が遺伝的基盤を持っており、かつ、個体の生存繁殖に貢献する場合のみである。言語能力が何らかの遺伝的基盤を持っていることは、既に明らかであろう。問題なのは、ある形質、この場合は言語能力が、個体の生存繁殖に貢献しなければならないという点である。

ある話手が、言語によって聞手に情報を輸送したとしても、そのこと自体は話手の生存繁殖を有利にしない。

(4) 「あそこのどら焼き、おいしいんだよね」

(4) の発話は、食料に関する情報を聞手に輸送する。もちろん、聞手はその情報によって自らの生存繁殖を高めることができるかもしれない。しかし、この情報の輸送は、それ自体としては話手の生存繁殖に貢献しない。つまり、言語の機能を情報の輸送として見るだけでは、言語能力がどのような理由で進化したのかを説明することはできない。

言語学者の多くは、言語というものの費用と利益にあまり関心がない。しかし、生物進化にとっては、形質の費用と利益こそが問題なのである。第一に、話手は発話によってエネルギーを消耗する。しかし、もっと重要なのは、言語を可能にする器官である。言語を支える脳は、人の体重の2パーセント程度の重さしかないが、それが消費するエネルギーは全体の20パーセントである (Dunbar 1996)。つまり、言語によるコミュニケーションと、他の方法でのコミュニケーションでは、その費用が格段に違うのである。もし、このように大きな費用がかかる言語能力が、それに見合う利益、正確には、生存繁殖における貢献を持たないとすれば、進化することはできなかつたはずである。では、言語能力はどのような利益を、どのようにして個体にもたらすのだろうか。

3. 行動生態学的接近法

恐らく、生物学者の多くは、生物のある形質を観察した時に、「その形質はどのように役立つか」を考えるだろう。つまり、進化の観点から言えば、「その形質はどのように個体の生存繁殖に貢献するのか」ということである。このような行動生態学的観点からは、どのような言語能力の進化のシナリオを考えることができるのだろうか。

Dunbar は、言語能力の進化は、初期の人類がその行動範囲を森林から草原へと広げたことに関係していると考えている (Dunbar 1996)。草原では森林とは異なる方法で、捕食者に対応しなければならない。なぜなら、草原では身を隠す場所が少ない上に、新しい捕食者が現れるからである。この問題に対する一つの解決策は、集団の規模を大きくすることである。集団の規模が大きいことは、共同の防衛を可能にするだけでなく、捕食者の注意を分散する効果がある。しかし、大きな集団では、個体間の対立が増加する為、その維持が難しくなる。サルはこの問題を解決する為に、互いに毛づくろいをすることで、個体間の関係を調整し、群の結束を維持しているようである。Dunbar の意見はこうである。集団の規模が一定以上になれば、肉体的な毛づくろいで個体間の関係を調整することは、もはや時間的に不可能である。言語であれば、社会的な情報を交換することで、効果的に、かつ、複数の個体と同時に関係を調整することができるというわけである。

Deacon は、Peirce の理論を応用し、かつ、人間の脳の特性を反映させた独自の記号論の観点から、單なる記号ではなく、統語を持つ記号によって初めて可能になるような、高度な情報の輸送こそが、言語の本質であると考えている (Deacon 1997)。また、彼はさらに考えを進めて、言語による高度な情報の輸送は、人類が狩猟社会へと移行した時に必要になったと主張する。男性は狩りをしている間、自らの配偶者への他の男性の接近を阻止することができない。つまり、安定した配偶関係が保証されなければ、男性による集団的な狩猟活動などできるはずがない。この問題を解決するのが、婚姻という契約的で排他的な配偶関

係である。Deacon は、主として婚姻という社会契約を明示化する必要から、統語を持つ記号能力、つまり、言語能力は進化したのだという。

Dunbar と Deacon の二人は、力点は異なるものの、言語能力の進化が社会性に関わる問題だと認識している点で共通している。確かに、人間が一人で生きてゆくのは容易なことではない。集団を形成し、社会性を持つことで、初めて手に入れることのできる利益がある。そして、その利益は最終的に、各々の個体の生存繁殖を高めるだろう。しかし、様々な理由から、しばしば規模の大きな集団の維持は困難である。その問題を解決するのが言語だというのである。

言語能力が、最終的には社会性を通して、個体の生存繁殖に貢献するという考えに異論はない。しかし、彼等の議論にはやや飛躍があるように感じられる。なぜなら、単なる音声コミュニケーションとは質的に異なる、言語によるコミュニケーションが、社会的関係の調整に役立つことが、暗黙の前提とされているからである。もちろん、この前提是直感的に正しいと思われるかもしれないが、実証はされていない。

彼等は現実の言語使用の観察に基づいて議論をしているわけではない。いや、実際には、観察をしてはいるのだ。例えば、Dunbar はイギリス全土の様々な場所で人々の会話をを集め、会話時間の約三分の二が社交的な話題に費やされていることを明らかにした。また、Deacon も、インデックスとシンボルが符号化できる意味の違いについて分析している。しかし、彼等は特定の構造を持つ言語表現が、実際にどのような社会的関係の調整に役立つかは観察していない。サルの音声コミュニケーションの研究であれば、サルがどのような音声を発し、それによってどのような効果が生じたのかの相関を観察するだろう。なぜ、人間の言語研究では、それを行わないのであろうか。問題なのは、特定の構造を持つ言語表現の使用と、それによって遂行される社会的行為の関係のはずである。

4. 発話行為と生存繁殖

人間は物理的な行為だけではなく、社会的行為を通して自らの生存繁殖を高める。そして、社会的行為を遂行する為に言語は用いられる。もちろん、言語は社会的行為の前提条件ではない。サルも音声によって社会的行為を遂行するし、人間も表情や身振によって社会的行為を遂行することができる。しかし、言語でなければ不可能な社会的行為もある。Searle が、「アメリカの大学における学部生の単核球症の診断と治療の問題についての研究プロジェクトを、誰かに引受けてくれるよう依頼することは、言語なしには行えない」と述べたのは、その意味では正しい (Searle 1969: 38)。

社会的行為と生存繁殖の関係といった問題は、正直なところ、言語学の範疇を越えている。これは、社会心理学や人類学の領域であろう。しかし、社会的行為と言語使用の関係なら、言語学、特に発話行為論の出番である。行動生態学的接近法による社会心理学や人類学は、社会的行為がどのように個体の生存繁殖に貢献するかを明らかにしてくれるだろう。だとすれば、発話行為論は言語使用がどのように社会的行為に貢献するかを示さなければならない。このように、社会心理学や人類学の知見と言語学の知見を、行動生態学的な枠組の中で統合することによって、初めて実際の言語使用の観察と分析に基づいた、言語能力の進化論が展開できるのではないだろうか。坂本が指摘するように、これまで発話行為論が言語能力の進化の問題に適用されたことはないが、これはむしろ不思議なことであろう (坂本 1991)。

言語表現には、異なる性質を持った様々な種類が存在する。そこには、サルの音声に近いものもあるだろうし、人間に特有のものもあるだろう。どのような言語能力が、どのような社会的行為への適応として進化したのかを知るために、実際に、どのような構造を持つ言語表現が、どのような社会的行為の遂行に用いられるのかを観察しなければならない。例えば、<勧める>という社会的行為について考えてみよう。

- (5) This dictionary is very good.
- (6) I recommend this dictionary.
- (7) Buy this dictionary.
- (8) I recommend you to buy this dictionary.

(5) から (8) の発話は、多かれ少なかれ、<勧める>という社会的行為を遂行すると思われる。しかし、その効果は一様ではない。(5) は、単なる評価と解釈されるかもしれない。(6) では、その辞書を買うのか、それとも借りるのかといった、聞手の最終的な行動に対する効果が弱い。確実に買わせなければ、(7) が効果的だが、これでは<命令>のようでもあり、聞手の情動面に対する効果が異なる。(8) であれば、聞

手の情動面と、最終的な行動の両面に対して、同時に意図的な効果を与えることができる。(8)は統語的な埋込みを持っており、(5)から(7)に比べて構造がより複雑である。このような観察から、統語的により複雑な構造を持つ構文は、社会的行為において、同時により多くの側面に対して効果を与えることが示唆される。

一回の発話によって、どの側面に、どの程度の効果を与えるべきかは、話手と聞手の社会的関係や状況に依存するだろう。このような言語表現と社会的行為の関係を、実際の会話データから抽出することができるなら、どのような言語能力が、どのような社会的行為への適応として進化したのかを見ることができるかもしれない。もちろん、本格的な実証の為には、状況の記述を含む会話コーパスの整備が必要であり、現時点では技術的な困難があることは事実である。しかし、どのような問題でも、予備的研究を通して少しづつ前進することによって、初めて本格的な研究への道筋が開かれるのだということは指摘しておきたい。

5. おわりに

実は、言語能力の進化については、これまで述べてきた以外の問題もある。現在の私達の言語能力は、社会的行為への適応として進化したのだろう。しかし、人類がこのような社会性を持つ以前には、その能力は異なる適応として進化し、その後に転用されたのかもしれない。いわゆる、前適応の問題である。このような意味では、Chomsky の提案も、あながち的外れとは言えない。また、岡ノ谷は、小鳥の歌の統語構造の研究に基づき、言語能力の前適応について興味深い仮説を提案している（岡ノ谷 2003）。

参考文献

- Austin, John Langshaw. 1962. *How to Do Things with Words*. 2nd ed. Oxford: Oxford University Press. (坂本百大(訳),『言語と行為』,大修館書店,1978.)
- Chomsky, Noam. 1988. *Language and Problems of Knowledge: the Managua Lectures*. Cambridge, Mass.: MIT Press. (田窪行則・郡司隆男(訳),『言語と知識:マナグア講義録(言語学編)』,産業図書,1989.)
- Dawkins, Richard. 1982. *The Extended Phenotype: the Gene as the Unit of Selection*. Oxford; San Francisco: Freeman. (日高敏隆・遠藤彰・遠藤知二(訳),『延長された表現型:自然淘汰の単位としての遺伝子』,紀伊国屋書店,1987.)
- Deacon, Terrence W. 1997. *The Symbolic Species: the Co-evolution of Language and the Brain*. New York; London: W.W. Norton. (金子隆芳(訳),『ヒトはいかにして人となったか:言語と脳の共進化』,新曜社,1999.)
- Dennett, Daniel C. 1995. *Darwin's Dangerous Idea: Evolution and the Meanings of Life*. New York: Simon & Schuster. (石川幹人・他(訳),『ダーウィンの危険な思想:生命の意味と進化』,青土社,2001.)
- Dunbar, Robin. 1996. *Grooming, Gossip and the Evolution of Language*. London: Faber and Faber. (松浦俊輔・服部清美(訳),『ことばの起源:猿の毛づくろい、人のゴシップ』,青土社,1998.)
- Futuyma, Douglas J. 1986. *Evolutionary Biology*. 2nd ed. Sunderland, Mass.: Sinauer Associates. (岸由二・他(訳),『進化生物学』,蒼樹書房,1997.)
- Hauser, Marc D., Noam Chomsky and W. Tecumseh Fitch. 2002. "The Faculty of Language: What Is It, Who Has It, and How Did It Evolve?", *Science*. 298(22), pp.1569-79.
- Lieberman, Philip. 1991. *Uniquely Human: the Evolution of Speech, Thought, and Selfless Behavior*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- 小田亮. 1999.『サルのことば:比較行動学からみた言語の進化』,京都大学学術出版会.
- 岡ノ谷一夫. 2003.『小鳥の歌からヒトの言葉へ』,岩波書店.
- 坂本百大. 1991.『言語起源論の新展開』,大修館書店.
- Searle, John R. 1969. *Speech Act: An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge: Cambridge University Press. (坂本百大・土屋俊(訳),『言語行為-言語哲学への試論』,勁草書房,1986.)
- Trivers, Robert. 1985. *Social Evolution*. Menlo Park, CA.: Benjamin/Cummings. (中嶋康裕・福井康雄・原田泰志(訳),『生物の社会進化』,産業図書,1991.)
- 山梨正明. 1986.『発話行為』,大修館書店.

「否定」再考：発話行為論の観点から

山寄章裕

京都大学大学院 人間・環境学研究科

a-key-hero@nifty.com

1. 本論の目的

自然言語の研究において、意味論ではある言語表現を構成する各要素が、命題内容全体にどのように貢献するかという観点から、語などの概念的意味のありようを記述する。しかし、この観点からでは十分に説明できない現象が存在する。

否定はその一つである。本論では、まず否定を表す語を伴う言語表現における意味論的問題を指摘する。次に、今までの説明手法に対する代案として、いわゆる行動主義の観点から、発話行為論的問題として捉え直すことを提案する。これによって、今まで十分でなかった否定の意味論および語用論における諸問題、すなわち肯定に対する否定の有標性、婉曲・ポライトネスなどの問題に対し、統合的な説明が可能であることを示す。

2. 言語現象

日本語の「ない」、英語の *not* に代表される否定を表す語の振る舞いは、意味論レベルでの貢献という点では必ずしも明確ではない。一見、否定は真理値を逆にするという明確な機能を果たしているかのようにみえるが、実際の現象はそれほど単純なものとはいえない。日本語の形容詞「ない」を含む否定文の例を挙げる。

- (1) 日本の首相は石原慎太郎ではない。
- (2) あの本の表紙は黄色くない。

(1)は名詞、(2)は形容詞にかかる例である。いずれも、「ない」は生起する文内で各々しかるべき作用域を持った否定の演算子としての機能を持つと考えられている。しかし、これは現象を統語中心にみた場合である。意味的な振る舞いはそれ以上に複雑になる。

その一つは、これら否定文が表すいわゆる意味が漠然として曖昧であるという点である。例えば(1)では、日本の首相が石原慎太郎以外の人間であることを述べているが、この文から得られる情報はそれ以上のものではありえず、依然として「誰なのか」を命題内容から抽出することはできない。Leech はこのような否定文は Grice の様態の原則（「明瞭であれ」）に反することから、語用論的に好まれない言語表現であると述べている (Leech 1983)。同様に、(2)では結局何色の表紙なのかがやはり明瞭でない。従って

語の意味というものを考えると、この種の言語表現において「ない」のような否定を表す語は、命題内容全体にどのように貢献するかという水準では、振る舞いがそれほど明確ではない。そのような水準に対する効果のために用いたとすれば、「何を言いたかったのか？」という疑問が残る。

3. アプローチ

ある言語現象に対して適切な水準でより多くのことが説明できるアプローチがより良いアプローチであるとするならば、否定を表す語の振る舞いに対し意味論の水準で説明を試みようすると上記のような疑問が生じるのは、問題だといえる。そこで、否定を表す語が実際には別の水準でより効果的に言語表現全体に貢献しているのではないかと想定することは、極めて自然であろう。

言語の意味論的側面を包含する現象として、発話行為がある。ある言語表現を発話行為として観察したとき、いわゆる意味を含む幾つかの水準で現象が捉えられる。例えば Austin は、発話行為の基本的な側面を発語行為・発語内行為・発語媒介行為のように下位区分している¹ (Austin 1962)。これは命題内容の理解に関わるより意味的な側面の水準から、それに対する聞き手の解釈・心理的変化・言語外行動に関わるより高次の水準にわたって言語現象を捉えようというアプローチとして解釈できる。

このアプローチが目指すところは、言語表現の形式と、命題内容およびそれを媒介として発話者と聞き手の思考や行動がどのような影響を受けるかの相互関係を明確にすることである。こうした観点から考えると、否定を表す語を伴う言語表現はある水準で聞き手の思考や行動に対し何らかの影響を与えていたはずであるから、否定を表す語の貢献度が最も高い側面を広い水準で検討すべきだといえる。

4. 考察

以下では、日本語の形容詞「ない」が、それを含む文による発話行為のどの水準において大きく貢献しているかを考察する。

- (3) このケーキ、おいしいよ。
- (4) このケーキ、おいしくないよ。

常識的に極めて単純に考えれば、(3)の発話の聞き手はケーキを食べたい、あるいは食べようと思うであろうし、(4)の発話の聞き手は少なくともケーキを食べようとは思わ

¹ ここではこのような分け方が適切であるか否かは問題にしない。Searle (1969)は Austin の分類が幾つかの問題を残していると述べた上で別の分類を提案しているが、その本質においては Austin のものと変わらない。

なくなるであろう。このような聞き手の態度の差の表れは、(3)と(4)の言語表現上の相違点、すなわち否定の形容詞「ない」が何らかの形で担っているはずである。前節の問題提起によるならば、(3)の表す状況=このケーキがおいしい場合に起こる思考および行動を「抑制する」という、行為とより密接に結びついた機能を担っているのではないだろうか。

このことは、「おいしい」に対する「まずい」のようないわゆる対義語を持たない形容詞や、一般的の事物を示す典型的な名詞の場合を考えてみるとより明確になる。2節の(1)は語用論的に好まれない文であると述べたが、発話行為として聞き手の思考・行動に影響を与える水準では適切な機能を果たしている。例えば「日本の首相は石原慎太郎である」と思っている人に対する発話だとしたら、そのような肯定的な命題内容に対する思い込みを訂正しているのであり、それは肯定の命題内容が真であった場合の聞き手の思考や行動を抑制する発話行為であると言うことができる。逆に言えば、抑制する必要がない状況では否定を表す語は発話行為全体に満足に貢献できないので、それを伴う表現を用いる必要がない。(1)ではそのような状況が明示されておらず意味論的な水準のみで判断しているために曖昧であるとされ、容認されなかつたのである。(2)の色彩形容詞の場合も同様に説明が可能である。

5. 婉曲・ポライトネスに対する示唆

婉曲やポライトネスなどの言語現象に対しても、同じ観点から説明が可能であると考えられる。一つの例として、(5)(6)のように対義の関係にある語と否定が関わった際(5)は必ずしも(6)と同一の意味内容とはいえないが、(6)の婉曲的な表現であるといわれる。

- (5)あのホテルのフロントは態度が良くない。
- (6)あのホテルのフロントは態度が悪い。

そのように解釈される過程は、前節で述べた「思考・行動を抑制する」という否定の機能から自然に予測される。つまり、(5)ではあくまで「このホテルのフロントは態度が良い」ということが真である場合に起こる思考・行動を抑制するという機能を持つ。一方「良い」と「悪い」という語は一般に同じ軸の対極にある語として捉えられている。そのため、一方が抑制されれば他方が相対的に顕在化される。こうして、「悪い」という語に直接アクセスしなくともその対極にある語を抑制することで、事実上同等の効果を得ることができる。ポライトネスは対人関係のような社会的な要因から語彙の選択の制限などを考慮すれば、同様の説明が可能であると考える。

6. まとめ

否定を表す言語表現は命題内容に対する貢献よりも、むしろ肯定の命題内容が真であった場合に起こる思考・行動を抑制するという、行為の水準においてより重要な機能を担っていることを示した。また、婉曲・ポライトネスなど否定が関わる問題に対しても同じ観点から説明ができる可能性を示した。

【参考文献】

- 有光奈美 1999. 「否定性を含む肯定文の諸相—認知語用論の観点から」, 京都大学人間・環境学研究科, 修士論文.
- Austin, J. L. 1962. *How to do things with words*. Oxford University Press.
(坂本百大訳 1978. 『言語と行為』, 大修館書店.)
- 小泉保 (編) 2001. 『入門 語用論研究』, 研究社.
- Leech, G. N. 1983. *Principles of Pragmatics*, Longman.
(池上嘉彦・河上誓作訳 1987. 『語用論』, 紀伊國屋書店.)
- 太田朗 1980. 『否定の意味』, 大修館書店.
- Searle, J. 1969. *Speech acts*, Cambridge University Press.
(坂本百大・土屋俊訳 1986. 『言語行為』, 効草書房.)
- 山梨正明 1986. 『発話行為』, 大修館書店.
- 吉村あき子 1999. 『否定極性現象』, 英宝社.

Webコーパスと国語辞典を用いた 書き言葉から話し言葉への言い換え

鍛治伸裕 岡本雅史 黒橋禎夫

東京大学大学院 情報理工学系研究科

{kaji,okamoto,kuro}@kc.t.u-tokyo.ac.jp

1 はじめに

音声情報は我々にとって身近な情報形態である。とくに高齢者や視覚障害者にとっては、文字情報や画像情報よりも利用しやすい情報形態といえる。しかし、現存する電子情報のほとんどはテキスト情報で、我々が簡単にアクセスできる音声情報は非常に少ない。こうした背景から、既存の電子テキストを音声合成システムで読み上げて、音声情報をユーザに提供するシステムが関心を集めている。

こうしたシステム開発には二つの問題点がある。一つは、合成された音声のアクセントやイントネーションが不自然であるという、音声合成システムの質の問題である。もう一つは、書き言葉と話し言葉ではそこで使われる表現に大きな違いがあるという問題である[3]。例えば、話し言葉では難解な語や複合名詞は使われにくいけれど、書き言葉では比較的使われやすいなどの違いがある。そのため、書き言葉テキストをそのまま音声化すると、普通は話し言葉ではあまり使わないような表現が音声化されてしまい、その結果、出力音声が不自然になってしまう可能性がある。上記の二つの問題のうち前者はよく知られた問題であるが、後者は今までほとんど指摘されなかった。後者の問題は、前処理として書き言葉テキストを話すことばとして使われても違和感のないテキストに言い換えておけば解消できる。そこで我々は言い換え技術を用いて後者の問題に取り組んでいる。

2 言い換え処理

ここで扱うべき言い換えとは、話し言葉で使うと違和感のある表現を、話すことばで使っても違和感のない表現に言い換えることであると言える。前者を仮に適切表現 (Inadequate Expression, IAE) と呼び、後者を不適切表現 (Adequate Expression, AE) と呼ぶ。IAEは話し言葉に特有の表現だけをさすのではなく、話し言葉として違和感がない表現はすべて IAE と呼ぶ。AE も同様に、書き言葉に特有の表現だけを表すものではない。IAE の書き言葉や話し言葉における使われやすさは AE のそれとは違ったものになっているので、我々は書き言葉コーパスと話すことばコーパスでの表現の出現率を使って IAE と AE を区別する方法を提案する。書き言葉コーパスと話し言葉コーパスは Web コーパスから自動収集したものを使う。さらに、その方法と用言の言い換えを学習する先行研究の手法と組み合わせて、「IAE 用言」の「AE 用言」への言い換えを学習できることを示す。学習の流れを以下に示す。

- (1) Kaji らの手法を利用して用言の言い換えを学習する [4].
- (2) 書き言葉コーパスと話し言葉コーパスを Web コーパスから自動収集する.
- (3) 書き言葉コーパスと話し言葉コーパスを用いて, (1)で学習した言い換えの中から IAE から AE への言い換えを選ぶ.

3 国語辞典を用いた用言の言い換え

用言の定義文には見出し語の同等句が含まれていて、それをうまく取り出せば「見出し語→同等句」という言い換え規則を学習することができる。我々は、Kaji らの提案した手法 [4] を利用して定義文から同等句を取り出し、言い換え規則を学習した。以下に、定義文とそこに含まれる同等句の例を示す。同等句にあたる部分には下線を引いている。

激怒する 激しく怒る こと

相乗りする 乗り物に いっしょに乗る こと

貯金する お金をためる こと

定義文の主辞となる用言（「怒る」「乗る」「ためる」）に副詞がかかっている場合、「激怒する」の定義文のように、その副詞はつねに同等句に含まれると考えてさしつかえない。しかし、体言がかかっていたとき、それが同等句に含まれるかどうかはその見出し語によるので、これを判定しなくてはならない。

Kaji らはコーパスから自動学習した格フレーム¹とシソーラスを用いて同等句を判断する方法を提案している。以下に「相乗りする」とその定義文の主辞「乗る」、「貯金する」とその定義文の主辞「ためる」の格フレームの例を示す。格フレームは、一つの用言に対して複数学習される場合もあるが、ここでは簡単のため一つしか示さない。

相乗りする { 子供, 男... } が { 自動車, 車, トラック... } に

乗る { 職員, 職員... } が { マウンテンバイク, 乗用車, タクシー... } に

貯金する { 親, 市長... } が

ためる { 私, 長官 } が { 金, 資金... } を

シソーラスを使って体言間の類似度を設定すれば次のようなことが分かる。まず、「相乗りする」格フレームのガ格とニ格は「乗る」の格フレームのガ格とニ格に対応している。一方「貯金する」と「ためる」の場合では、「貯金する」のガ格と「ためる」のガ格が対応していて、「ためる」のヲ格には対応先がないことが分かる。この結果から、「相乗りする」の定義文のニ格（乗り物）は同等句に含まれないが、「貯金する」の定義文のヲ格（お金）は含まれると判断できる。

¹用言とそれにかかる体言のペアをコーパスから収集してクラスタリングしたデータをこう呼ぶ。

4 Web コーパスからの書き言葉コーパスと話し言葉コーパスの自動収集

提案手法には、大規模な書き言葉コーパスと話し言葉コーパスが必要となる。日本語の話すことばコーパスは、「日本語話し言葉コーパス[6]」など最近少しづつ整備されてきているものの、規模が小さい、内容が講演の書き起こしに偏り過ぎているという問題点があるので使うことはできない。

Web コーパスには、新聞記事などの書き言葉テキストや個人のchatなどの話し言葉テキストが混在している。そこで、Web コーパスから書き言葉コーパスと話し言葉コーパスを自動収集するというアプローチをとる。こうしたアプローチをとれば、当然大規模な書き言葉コーパスと話し言葉コーパスを用意できる。

話し言葉は特定の聞き手を想定したことばなので「聞き手に対する尊敬・親愛・軽侮などの態度を表す言語表現(待遇表現)」が使われることが多い。これに対して、新聞記事などの書き言葉テキストは不特定の読み手を想定して書かれるのが普通なので、書き言葉では話し言葉に比べて待遇表現は使われないという傾向がある[3]。すなわち、待遇表現の使われる頻度に注目すれば、書き言葉コーパスと話し言葉コーパスを自動収集できる。

日本語は用言の活用形や機能語によって、親しみ待遇表現と丁寧待遇表現を表現できる。親しみ待遇表現とは、聞き手に対する親しみの感情を表す表現で、日本語では機能語「ね」「よ」を用言のあとにつけることによって表すことができる。[2]などでも議論されているように「ね」「よ」には「同意」や「伝達」などの役割を担っているという側面もあるが、基本的には親しい間柄の相手にしか使われない表現なので、ここでは親しみを表していると考えておく。丁寧待遇表現とは、聞き手に対する丁寧な態度を表す表現のことで、機能語「です」「ます」を用言のあとにつけたり、用言を「ですます」活用で使うことによって表すことができる。

これら二種類の待遇表現は非常に多く出現するうえ、[1]のような形態素解析と簡単なルールによって待遇表現であることが認識できる。さらに、収集されたWeb コーパスの一部を我々が人手で調査したところ、これらの待遇表現を含まないページは書き言葉で、親しみ待遇表現を多く含むページは話し言葉であると分かった。また丁寧待遇表現が多いページは、親しみ待遇表現が少なめでも話し言葉であった。そこで、Web ページに含まれる全文数に対する、親しみ待遇表現と丁寧待遇表現を含む文数の割合にもとづいて、各 Web ページを書き言葉コーパスと話し言葉コーパスとして分類、収集する。

現在までに収集された書き言葉コーパスと話し言葉コーパスの規模は、書き言葉コーパスに含まれる用言の述べ数が 2,436,189、話し言葉コーパスに含まれる用言の述べ数が 2,762,301 である。

5 言い換えの選択

書き言葉コーパスと話し言葉コーパスでの表現の出現率をもとに、それが IAE か AE かを判断する。そして、IAE から AE への言い換えを選びだす。

話し言葉でほとんど使われない表現や、話し言葉で使わないわけではないが書きことばで使れるこののほうが多い表現は、話し言葉で使われると不自然に聞こえる表現であるといえる。そのような表現の例と、我々が収集したコーパスにおける出現頻度を表1に示す。「哀悼する」は話し言葉コーパスでは全く使われていなかった。一方「急増する」は話し言葉コーパスで 26 回使われていたが、書き言葉コーパスで 475 回使われていた。そこで、(1) 話し言葉での出現率と (2) 書き言葉と話し言葉

での出現率の違い、という二つの指標を用いて IAE と AE を分ける。

手続きは以下のようになる。まず、話し言葉コーパスでの出現率が非常に低い表現は IAE で、逆に非常に高いものは AE とする。これは、出現率に対する閾値を定めて決定することができる。それ以外の表現は、書き言葉コーパスでの出現率のほうが話し言葉コーパスでの出現率よりも有意に高ければ IAE であり、それ以外(話すことばのほうが有意に高い、または有意差がない)ならば AE と考える。出現率の差が有意であるかどうかは、検定手法の一つである log-likelihood[5] を用いて求めることができる。

例えば前述の「哀悼する」には、Kaji らの手法によって「哀悼する → 死を悲しむ」という言い換えが学習されている。上記のような手続きによって「哀悼する」と「死を悲しむ」が、IAE か AE であるかを判断する。そして、前者が IAE で後者が AE と判断されれば、その言い換えは我々の目的にかなった言い換えであるといふことができる。

表 1: 出現頻度

	書き言葉コーパス	話し言葉コーパス
哀悼する	1/2,436,189	0/2,762,301
急増する	475/2,436,189	26/2,762,301

6 おわりに

本稿では言い換え処理の一つとして、書き言葉テキストを話し言葉テキストに言い換えるという処理を取り上げた。そして、国語辞典と Web コーパスを用いてその処理を行う手法の提案を行った。

参考文献

- [1] 形態素解析システム JUMAN: <http://www.kc.t.u-tokyo.ac.jp/nl-resource/juman.html>
- [2] モダリティ. 宮崎和人, 安達太郎, 野田春美, 高梨信乃. くろしお出版
- [3] 文化庁編 (1970), 「ことば」シリーズ 12 話し言葉.
- [4] Nobuhiro Kaji, Sadao Kurohashi, Daisuke Kawahara and Satoshi Sato (2002). Verb Paraphrase based on Case Frame Alignment. In Proceedings of the 40th Annual Meeting of the Association for Computational Linguistics.
- [5] Ted Dunning (1993), Accurate Methods for the Statistics of Surprise and Coincidence. Computational Linguistics, Vol.19, No.1.
- [6] Kikuo Maekawa and Hanae Koiso and Sadaoki Furui and Hitoshi Isahara (2000), Spontaneous Speech Corpus of Japanese. In Proceedings of LREC 2000.

会話の「場」を生み出す一貫性の諸相

岡本 雅史 堀 哲嚴 黒橋 祐夫

東京大学 大学院情報理工学系研究科

{okamoto, hori, kuro}@kc.t.u-tokyo.ac.jp

1 はじめに

現在、自然言語処理の分野では新聞記事や料理テキストなど、談話テキストの形態素解析・構文解析に基づく文法と意味の構造化が盛んに行われ、年を追うごとに着実に成果を上げている。しかしながら、人工知能の分野で強く求められている、自然な発話を生成するコンピュータのための発話生成技術は依然として実用に耐えうるレベルではない。

その原因としては、人とコンピュータとの対話形式で発話生成を実現することを重視し、＜質問一応答＞などの隣接ペアの実装にこだわった点、発話内容を話し手が聞き手に与える「情報」として捉え、その意味を聞き手が理解することを発話理解プロセスの中心に置いた点などが挙げられる。このような認識で発話生成を捉える限り、複雑な意味理解の迷路に入り込んで、一つの発話ごとに膨大な計算を必要とする会話モデルを仮定するか、逆にあいさつやあいづちなどの情報性の低い言語使用のみの実装にとどまるかのどちらかしかない。

本発表では、対話・独話を問わず、複数の発話連鎖からなる会話の「場」そのものを実現するために、どのような言語的・言語外的条件が必要であるのかを考察する。特に、そのような「会話の場」を支える3種類の一貫性（発話内一貫性、発話間一貫性、発話外一貫性）を先行発話のプロファイル・シフト、用言と格要素の共起関係などの様々な視点から立体的に把握し、自然な発話生成を行うためには何が必要なのかを議論する。そして、このような言語学的知見を元に現在構築中である会話生成システムの概要を紹介し、システムの主要なリソースであると同時に、常識的推論を扱う自然言語処理で今後大きな役割を果たすことが期待される「格フレーム辞書」の有用性を併せて主張する。

2 先行研究：談話における一貫性

・ Halliday & Hassan(1985)：談話を構成する一貫性を、言語使用における社会的状況としての「状況のコンテクスト(context of situation)」とテクストの意味論としての「言語の機能(functions of language)」の二つの関係から分析。

・ 状況のコンテクスト

- (1) 談話のフィールド(field of discourse)：言語活動領域（→何が生じているか）
- (2) 談話のテナー(tenor of discourse)：役割関係（→話し手、聞き手、両者の相互関係）
- (3) 談話のモード(mode of discourse)：伝達様式（→言語に与えられた役割）

・ 言語の機能

- (1) 観念構成的意味機能(ideational)：語彙－文法的な特徴によりプロセスや出来事を示す経験的機能、および複数のプロセス間の関係を示す論理的機能
- (2) 対人関係的意味機能(interpersonal)：発話行為に関わる機能
- (3) テクスト形成的意味機能(textual)：主題、情報、結束関係

→特に、テクスト内のメッセージ間を結びつける結束作用(cohesion)の分析が重要。

・ 2項間の文法的・語彙的一貫性

- (1) 同一指示(co-referentiality)：代名詞、定冠詞、指示詞などによって実現される関係
(ex. I had a little nut tree. Nothing would it bear.)
- (2) 同一分類(co-classification)：代用や省略などによって実現される関係

(ex. I play the cello. My husband does, too.)

- (3) 同一外延(co-extention)：同義性、対義性、上位下位などの関係を示す語彙項目間の関係 (ex. Flowers blossomed everywhere. And the trees were greening.)

→こうした非構造的一貫性の他に、構造的一貫性として、平行性、主題—題述展開、新—旧構成などの連続性がある。

- ・Thagard(1989)：説明的一貫性(Explanatory Coherence)

- 説明的関係：二つ以上の命題間で以下の関係のいずれかが成立している時、それらは一貫性を持つとされる：

- (1) P1 が P2 の説明の一部になっている。
- (2) P2 が P1 の説明の一部になっている。
- (3) P1 と P2 が共に別の命題の説明の一部になっている。
- (4) P1 がある仮説 H1 を説明し、P2 がある仮説 H2 を説明し、この両者の説明が類似している。

- 非一貫性：一貫性を持たないのは、二つの命題が互いに矛盾するか、両者が説明する仮説同士が相容れない場合。

→説明という観点から命題間の一貫性を分類。後に、概念的一貫性と類似的一貫性を加えて3つの一貫性に拡張した。(Thagard & Kunda 1997)

- ・高梨(1999)：相互行為的一貫性

- 説明的発話連鎖：「P. Q のだ。」における PQ 間の関係の種類

- (1) 原因や理由の説明：Q が P で表現された出来事の原因や理由である場合
- (2) 判断の根拠：Q がある判断 P の根拠となっている場合
- (3) 発話行為の正当化：Q がある発語内行為 P を行うことの理由となっている場合
- (4) 関連性の明示：Q が P を言い換えたり、別の角度から述べたり、要約したりしている場合

→先行発話の言及内容と遂行節のいずれかに対する焦点化として後続発話を捉え、発話連鎖に潜在する話し手と聞き手の相互行為が対話・独話を問わず一貫性の源泉となることを指摘。

3 発話理解としての一貫性

- ・発話内一貫性 (intra-utterance coherence)

- そもそも文形式の発話が無意味なものにならないためには、述語とそれが取るべき項の関係が適切である必要。

→世界知識として格フレーム辞書を利用

- ・河原・黒橋(2002)：格フレームの自動構築

- 大規模コーパスを構文解析してその解析結果から信頼性の高い述語—項構造のみを抽出し、各述語の各用法ごとにクラスタリングすることで自動的に格フレーム辞書を構築 (71,000 用言について 1 用言当たり平均 1.9 個の格フレームを獲得)。

表 1: 構築した格フレームの例 (* はその格が用言の直前の格であることを示す。)

用言	格	用例
買う 1	ガ格	【主体: <数量>人、乗客、幹部、筋、男性、資産家、政府、銀行、…】
	ヲ格*	株、円、土地、もの、ドル、切符、車、物、家、株式、国債、…
	デ格	【場所: 店、駅】、<数量>円、金、価格、会社、仲介、額、インターネット、…
買う 2	ガ格	対応、厚生、絵はがき、蓄財、シーン、工作、禁止、風刺画、…
	ヲ格*	怒り、ひんしゅく、失笑、反感、恨み、不興、憤慨、嘲笑、…
:	:	:

- ・発話事態の前景化としての発話理解
 - ・従来、語用論においては、ある発話の理解とはその発話を何らかの命題として把握することに他ならなかった。
 - (発話)「明日映画を見に行きましょう」
 - (表意)「話し手は聞き手に対して発話時点の翌日に何らかの映画を見に行くことを勧誘している」
 - ・しかし、そのような命題は、述語とそれ以外の項との関係の一つの事例化 instantiation)に過ぎない。
 - [発話する：話し手<が>，聞き手<に>，[勧誘する：話し手<が>，聞き手<を>，[見る：話し手<が>，聞き手<が>，明日，映画<を>]]]
 - ・それぞれの体言間の関係、用言間の関係のいずれを抜き出しても、その発話の理解たりうる。
 - (例：「話し手が勧誘する」「映画は明日である」「話し手と聞き手が見る」)
 - したがって、話し手と聞き手を含む全ての要素間のいずれかの関係が前景化されれば、完全な命題を構成せずとも理解は達成される (→解釈的随意性 (Cf.岡本 1996, 2003))
 - ・発話事態の前景化と聞き手の疑問
 - ・高梨(1999)：発話連鎖を聞き手の疑問という観点から考察
 - 独話連鎖(a)：「風邪を引いた。熱があるのだ」
 - 対話連鎖(a')：「風邪を引いたんだ」「ほんとに？」「熱があるんだよ」
 - 独話連鎖(b)：「風邪を引いた。雨に濡れたのだ」
 - 対話連鎖(b')：「風邪を引いたんだ」「どうして？」「雨に濡れたんだよ」
 - 独話連鎖(c)：「風邪を引いた。明日は学校を休む」
 - 対話連鎖(c')：「風邪を引いたんだ」「だからどうしたの？」「明日は学校を休むよ」
 - ・発話事態の前景化：[発話する：話し手<が>，聞き手<に>，[降る：雨<が>]]
 - (a/a')：[発話する：話し手<が>，聞き手<に>，[風邪を引いた]]
 - (b/b')：[発話する：話し手<が>，聞き手<に>，[風邪を引いた]]
 - (c/c')：[発話する：話し手<が>，聞き手<に>，[風邪を引いた]]
- 発話事態を構成する要素間の関係のどこが前景化されるかで、聞き手の疑問の焦点が異なっており、独話においてもそのような聞き手の疑問を先取りした形で発話連鎖が行われる。
- したがって、発話理解を一貫性の発見として、そして一貫性を発話理解の産物として相互依存的に捉えることが可能。

4 一貫性を維持する会話生成システムの構築

- ・発話間一貫性 (local inter-utterance coherence)
 - ・隣接する発話連鎖において、Halliday & Hassan(1985)の「テクスト形成的意味機能」を充たす諸条件を制約とするシステムを構築する。
- ・会話生成システム構築の手順 (現在は a のみ実装)
 - a) 一貫性を持つ発話連鎖の生成 [独話連鎖生成]
 - b) 任意の後続発話を答えとするような疑問文の生成と挿入 [対話連鎖生成]
 - c) 適切な発話交替モジュールの構築 [発話交替の実現]
- ・独話連鎖生成
 - ◆発話内一貫性の実現
 - 格フレーム辞書を用いて任意の用言（動詞、形容詞）のフレームを選び、その用言と共に起する格要素（項）を最も頻度の高い順序で配置し、最後にその用言を過去形にして文末に置いて文を生成。
 - ◆発話間一貫性の実現
 - 先行発話の任意の名詞を一つ選び、主題化するために「は」と「その」をつけて（代名詞は除く）文頭に配置し、その名詞を格要素とする格フレームを持つ用言を選択し、残った必須格を配置。

- ・現在の仕様と問題点
 - ・時制・モダリティの未実装（現在は、「た」形のみ）
 - ・コーパスに基づく名詞継承と格交替の分布の近似
 - 現在、同一の名詞を含む連続する2文の4274703ペアをWebコーパスから収集し、格交替の分布を調べた結果、後続文で主題化（「は」に交替）される先行文の格標識は、多い順に「は」、「の」、「が」、「を」、「に」、「と」、「も」、「で」、「から」であることが分かった。
 - ・前後2文間の一貫性は実現できるが、3文以上の連鎖において一貫性が保たれない。
 - S1: 私はパンを食べた。→S2: そのパンは店で売られた。→S3: そのパンは小学生がかじった。
 - 発話外一貫性 (global utterance coherence)の要請
 - ・固有名詞の取り扱い
 - ・用言の継承の未実装
 - ・接続詞の適切な挿入
- コーパスを解析することにより、実際に発話連鎖を構成する要素の分布と、一貫性を妨げる要因の分析を順次行うことで、実用的なレベルに近づける。

5 おわりに

以上、談話の一貫性の知見を踏まえて、発話理解として一貫性を捉える新しい見方を紹介し、会話の「場」を生み出す3種類の一貫性に基づいた会話生成システムの構築に向けての取り組みを示した。自然言語処理の分野においても単語レベルからの発話生成はほとんど行われておらず、自然な会話生成システムの実現は極めて困難な課題である。しかし、実際にこのようなシステムを構築する上で突き当たる様々な問題は語用論研究者にとっても非常に有意義な論点を含んでおり、自然な会話生成システムの実現に向けての議論は自然言語処理と語用論の相互交流にとって大きな役割を果たすものであると考える。

参考文献

- Carrick, C. 1996. "Explanatory coherence as a model for belief revision". *Proceedings of the Eighteenth Annual Conference of the Cognitive Science Society*, 739, California: LaJolla.
- Halliday, M. A. K. and Hassan, R. 1985. *Language, context, and text: Aspects of language in a social-semiotic perspective*. London: Deakin Univ. Press. (範壽雄(訳)『機能文法のすすめ』、東京：大修館書店)
- 河原 大輔、黒橋 穎夫. 2002. 「用言と直前の格要素の組を単位とする格フレームの自動構築」『自然言語処理』, Vol.9, No.1, 3-19.
- 岡本 雅史. 1997. 「発話行為の潜在的人称構造」, 『言語科学論集』, 第三号, 1-15. 京都大学大学院 人間・環境学研究科 言語科学講座.
- 岡本 雅史. 2003. 「アイロニー発話の認知的分析－発話理解とコミュニケーションの統合モデルに向けてー」, 京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士論文.
- 高梨 克也. 1999. 「一貫性の多様な次元－日常会話と思考の「自然な流れ」の解明に向けてー」『DYNAMISことばと文化』, Vol.3, 73-104. 京都大学大学院人間・環境学研究科 文化環境言語基礎論講座.
- Thagard, P. 1989. "Explanatory coherence". *Behavioural and Brain Sciences*, 12, 435-502.
- Thagard, P. and Kunda, Z. 1998. "Making sense of people: Coherence mechanisms". In S. J. Read & L. C. Miller (Eds.), *Connectionist models of social reasoning and social behavior*, 3-26. Hillsdale, NJ: Erlbaum.

『日本語話し言葉コーパス』の談話構造タグ付与

竹内和広 高梨克也 森本郁代 仲本康一郎 井佐原均
独立行政法人 通信総合研究所

1. はじめに

本稿では国立国語研究所、東京工業大、通信総合研究所が中心となって進めている「話し言葉の言語的・パラ言語的構造の解明に基づく『話し言葉工学』の構築」プロジェクトで作成している『日本語話し言葉コーパス』(以下、CSJ)に談話構造に関するタグを付与する活動を紹介するとともに、語用論的観点から工学的な言語処理のモジュールを再検討する意義を論ずる。

2. 日本語話し言葉コーパス

研究資料として書き言葉と話し言葉を比較すると、話し言葉のデータには何かと制約が多い。書き言葉の電子的テキストは、ほぼそのまま研究の一次資料として利用できる。一方、話し言葉では録音された音声を文字に転記する手間が問題となる。また、ただ単に転記しただけではイントネーションやポーズなどの韻律的特徴が脱落してしまう。そのような特徴情報がないと、例えば、ある発話が断定なのか質問なのかもわからなくなる可能性がある。また、言い誤りや言い淀みのような情報にも同じことが言えるであろう。これらの情報は会議録などの書き起こしでは省略されるのが普通であるが、言語心理学的な研究のためには、こうした非流暢性の要素が重要であることがわかっている。しかし、これらの転記情報は作成コストが増大するため、研究に必要な量のデータを一個人で作成することが難しくなるために、話し言葉の本格的な研究は、書き言葉に較べて立ち遅れてしまう傾向にあった。

本プロジェクトでは、時間にして約 660 時間、語数では 700 万語以上の話し言葉が格納された非常に大規模なコーパスである。収録される談話は独話が主体で、国内の「学会講演」及び、一般的の話者が簡単なメモを頼りに日常的な話題

について 15 分程度のスピーチを行う「模擬講演」から構成される。また、CSJ は日本語の音声データベースとして最大であるだけでなく、世界の主要音声データベースと比較しても遜色がない。研究用に付加された情報の多様性と精度の高さにおいては、むしろ諸外国のデータベースを凌駕している。1999 年以来継続されてきた CSJ の開発作業は本 2003 年度で終了し、2004 年春には一般公開され、広く言語研究一般に利用できるものとなる [Maekawa03]。

本プロジェクトの特徴は、「話し言葉工学」の構築を視野に入れていることである。具体的には、上に述べた CSJ の構築はプロジェクトの掲げるサブテーマの一つであり、プロジェクト全体として、コーパスの構築を通して以下の点について課題の整理・詳細化を目標としている [古井 00]。

- (1) 大規模話し言葉コーパスの構築
- (2) 話し言葉を音声認識・理解・要約するための基本技術の構築
- (3) 話し言葉の音声要約プロトタイプシステムの構築

コーパスは工学的見地からも注目されている。音声情報処理の分野では、1980 年代から音声情報処理用のデータベースは世界中で盛んに構築され始めた。これは、大量の学習データを用いて音声の自動認識や合成を試みる工学的研究に用いられたもので、その内容は、単語と文章を多数の話者が読み上げたものである。この種の音声は朗読音声(read speech)と呼ばれている。朗読音声の話者はナレーターなど職業的な朗読者であることが多く、誤りの少ない理想に近い音声になる。また、音声信号の他に提供されるのは、朗読用テキストと、その音素表記程度であり、韻律情報が提供されることはない。

自然言語処理の分野でも、コーパスからの言語情報・知識の抽出処理が非常に大きな位置を占める。そこで用いられるコーパスとして重要なものの、人間がテキストの語や文節という単位について対して品詞や、統語情報といった情

竹内和広 kazuh@crl.go.jp 独立行政法人通信総合研究所 けいはんな情報通信融合研究センター、自然言語グループ

WHY? 実験の結果の説明
で結果ですが

WHY? 4つの「あ」を混合した結果の説明
まずこれを見てこれはお手元にある図と同じでございます
これは何を表しているかと言いますとその(M ささだが)という発話に含まれる四つの(M あ)
それを十回繰り返したもの全てですね
のこっち左側がホルマント周波数の分布 右側がT3中舌面のコイルの位置であります
で軸を変換いたしましていわゆる母音四角形のように読めるように表示しております

WHY? ホルマント周波数との相関の説明
でホルマント周波数F2を見ていただきますと S
S というのはサスピションで疑いですがSはF2が高い
それからAがアドミレーションで感心なんですがその場合は低いという関係がはっきり見て取れます

WHY? 調音運動との相関の説明
そして同じように今度は調音運動の方を見ますと
SにおいてはT3Xつまり前後方向の値が小さいということは前寄り
それからAにおいてはT3Xが大きいということはより後ろ寄りという関係が見て取れます
NDに関しましては中立および落胆に関してはその中間に分布するという結果が出ております

WHY? それぞれの「あ」の個別の結果
で今のは四つのモーラの(M ささだが)の全ての(M あ)を
プールした結果でありますそれがそれぞれ個々のモーラに分離いたしますとこういう結果が出ます

図1：談話構造タグ付与作業例

報のアノテーションを行ったタグ付きコーパスの存在がある。例えば、単語に品詞情報を付与したタグ付きコーパスを大量に集め、それを統計処理することにより、品詞情報や単語区切りの付与されていないテキストに対して、単語を区切り、その単語の品詞情報を推定する形態素解析といった言語処理プログラムがある。しかし、自然言語処理でも、相対的に大量に存在した新聞記事などの既存電子化テキストを利用して研究が発展した背景から、例えば書き言葉についての形態素解析プログラムは実用の域に入っているものの、話し言葉や、くだけた書き言葉についての処理が課題となっている。

CSJでは、収録された談話全体に対して書き起こしと語のセグメンテーション、読みの付与だけでなく形態素解析を行う。うち50時間分について韻律情報 [Maekawa 02] や係り受け関係などを人手で付与する（このような詳細な言語情報まで付与したデータセットをコアと呼ぶ）。以下で述べる談話構造タグはコアのうちの4分の1に当たる約40講演に対して付与することになっている。また、タグ付与の基本単位は、文区切り [高梨 03] を採用している。談話構造の基本単位としては間休止単位を利用するのが一般的であるが [Hirschberg 96]、本プロジェクトのサブテーマ(2)の要約技術構築に向けて、第3節で触れる重要文の抽出単位との一貫性を保つため、この文区切り単位を積極的に利用している。

3. 談話構造タグ

3.1 談話構造タグ付与の目的

談話構造タグの付与は、自動要約を含む談話処理の確立 [Mani 01] と強く関連する。自動要約は、自然言語処理の一分野として研究がなされてきた。ここで、計算機による従来の自動要約は、重要文あるいは重要部分の抽出を基本とする点、すなわち、「要約」とは重要部分の抽出の集合とみなすことが多いことに注意されたい。

本プロジェクトにおいても、CSJ内の談話を「要約」した重要文抽出データを作成する。例えば50%の要約率を指定された作業者は、与えられた転記テキストの分量がちょうど半分になるように、転記テキスト中の単位を選択する。選択の単位としては前述の節を利用する。以上の方法によって抽出される重要文とは別に転記テキストを自由に要約したデータも作成する。これらのデータは、音声認識を含む計算機的処理を行って得られる自動要約結果を評価するために利用する。重要文もコアに対して提供される情報である。

現在の自動要約研究の主な対象は新聞記事である。新聞記事には定型的なフォーマットがあり、データが大量に存在するため、キーワードや重要文をテキスト内での分布情報から統計的に同定する手法が有効である。しかし、CSJの説明的独話は、話し手から聞き手に一方向的に

説明を行う点では新聞記事などの書き言葉と共にしているものの、話し言葉特有の自由度があり、上記のような手法による要約は困難な場合が多い。

談話構造は、音声・言語情報との間の相関関係を解明する観点から、既に検討が活発に行われているが、談話構造といった語用論的な視点は、自動要約だけではなく人間の知的な言語処理活動の計算機処理を考える上で必要不可欠になりつつある。我々の試みは、コーパスへの談話情報タグ付与作業における問題点の整理と分析を通して、談話構造に関する既存の理論的枠組みの問題点を整理し、談話処理のモジュール化を検討する目的をもつ。

3.2 談話構造タグの理論的背景

本プロジェクトが行う談話構造タグ付与は、Grosz & Sidner の談話構造理論（以下 GS）を背景としている [GS 86]。GS では、話し手の意図や目的が談話の表層的な言語構造に反映されると見なす。この意図構造の存在によって談話の首尾一貫性は達成されている。

- GSにおける話し手の意図ないし目的とは、
- なぜ（他の行動ではなく）談話という言語行動によって事をなそうとしているのか
 - なぜ（他の内容ではなく）この談話の内容を伝達しているのか

に関わるものであり、これを談話目的と呼ぶ。さらに、談話は複数の談話セグメントに分割され、各々のセグメントもまた談話セグメント目的（以下、談話目的）を持つ。直感的には、談話目的とは話し手が当該の談話セグメントを伝達する理由（なぜその談話セグメントを言ったのか？）であり、その談話セグメントが全体の談話目的の達成にどのように貢献するかに関わるものといえる。また、談話は意図ないしこの談話目的に基づく階層構造がある。

4. 談話構造タグ付与作業

4.1 談話構造タグ付与マニュアル

GS を背景に、実際のデータに談話構造を付与し、データ化した先行的な研究に Nakatani らのマニュアルがある（以下、IAD）[Nakatani 95]。IAD では、談話構造タグ付与のための作業手順を

- (1) 談話のセグメントの特定

(2) 談話セグメントの目的の特定と記述

(3) セグメント間の関係の特定

の 3 つに分けている。ただし、各作業をどの順番で行うかについては明示していない。

データの表記例を図 1 に示す¹。談話目的は各談話セグメントが開始する行の直前に WHY? で始まる行で示した。IAD では談話目的の表記方法には制約がなく日常言語で記述することになっている。階層構造はインデントの深さで示した。

4.2 IAD に基づく作業の問題点

予備的実験として、筆者らは IAD を簡略化したマニュアルに基づき 3 人の作業者にタグを付与してもらった。その結果、セグメント境界、セグメントの階層数または粒度、セグメント間の階層関係、談話目的の記述のそれれにおいて、作業者間に不一致が見られた²。

この不一致に対する原因の考察を以下に要約する。

先に述べたように、IAD において(1)から(3)の作業の手順が明示されていないことが考えられる。つまり、3 つの作業の順番が決まっていないため、各作業をどの時点で終了させるのかは各作業者の裁量に任されることとなり、その結果、作業者間でセグメントの粒度や階層数、セグメント間の階層関係の認定に不一致が生じたと考えられる。

その一方で、談話目的が同一もしくは類似している箇所が見られた。このようにどの作業者も見つけることができる談話目的が付与されたセグメントには、下位のセグメントとは独立に決定でき、かつ互いに支配関係を構成しないといった、他のセグメントとは異なる性質があるのでないかと考えられる。以降、こうした談話目的を持つセグメントを「セクション」と呼ぶ。さらに各作業者が認定したセクション境界を分析してみると、一致ないし近接した箇所に付与されていた。

4.3 作業方針

前節で紹介したように、GS 理論を CSJ 内の長い説明的独話に適用する対応策が必要である。

¹ 図 1 に挙げている例は、まだ文区切りがなされていない段階のデータに対してタグが付与されたものである。

² 作業者間の不一致の具体的な内容及びその原因の考察については、[高梨 02] を参照のこと。

具体的には、筆者らは、IADの作業手順を詳細化し、独自の性質を持つセクション境界の決定と談話目的付与を行う作業と、セクションよりも下位に位置するセグメント（以下、エピソード）の階層化及び談話目的付与を行う作業とに分けることにした。

セクションの認定作業では、作業者は談話分析を専門とする大学院生3名で、作業の手順は以下の通りである。

(1)セクション境界付与

音を聞きながら、中ぐらいの（5～15個）セクションに切る。階層はつけて、音は何度聞いてもよいとした。

(2)セクション目的付与

(1)の作業結果について、各セクションの談話目的を付与する。その際、音声を参照してもよく、またセグメント境界を修正してもよいとした。

作業の順序は一つの談話ごとに上の(1)(2)の順を遵守する。境界の認定は作業者間の一一致率に基づいて行う。同時に、作業者間の揺れの原因が特定できる移行的部分を合議によって認定し統合境界として扱う。

これに対し、エピソードの認定作業では内容上一貫性のある文の連鎖のパターンを、セクションとは独立に作業者に発見してもらう。このパターンとは、例えば「話題の導入→本体→話者の評価→まとめ」という構造を持ったまとまりである [Labov 72]。3名の作業者に試験的に談話内のエピソードの認定を行ってもらったところ、その多くがセクションよりも小さく、セクション境界をまたいでエピソードが認定された例は非常に少なかった。したがって、多くの場合、セクションに1つ以上のエピソードを認定する、少なくとも2階層の構造をもつ談話構造タグをコーパスに付与できる見通しである。

この2方向の作業を独立に行なながらも談話構造の階層性と矛盾せず認定できた事実は、独話の多様な一貫性のうち、音声を聞いて直感的にまとまる一貫性と言及内容に関する一貫性との間の相互関係を見る上で重要な資料になると考える。なお、エピソード認定についての理論的背景については本ワークショップの高梨の発表を参照されたい。

5. まとめ

『日本語話し言葉コーパス』の完成後の課題としては、例えば、談話構造と韻律特徴との相関を解明することが挙げられる。

従来、独話研究において手がかりとその語用論的機能との相関は限られたデータでの検討によらざるをえなかった。しかし、本コーパスの公開により、共有データのもとで、音のレベルから統語のレベルにいたる幅広い言語・音声情報と談話目的といった語用論的概念との関係を検討し、語用論の理論的枠組みを比較・評価する場がより拡大するものと確信する。

参考文献

- [Maekawa 03] Maekawa,K. Corpus of Spontaneous Japanese: Its Design and Evaluation. Proc. of Spontaneous Speech Processing and Recognition, ISCA & IEEE Workshop, 199-202.
- [古井 00] 古井貞熙, 前川喜久雄, 井佐原均. 科学技術振興調整費開放的融合研究制度一大規模コーパスに基づく『話し言葉工学』の構築—. 日本音響学会誌, 56(11):752-755.
- [Maekawa 02] Maekawa,K., Kikuchi,H., Igarashi,Y., & Venditti,J. X_JToBI: An extended J_ToBI for spontaneous speech, Proc. #ICSLP, Denver, 3: 1545-1548.
- [高梨 03] 高梨克也, 丸山岳彦, 内元清貴, 井佐原均. 話し言葉の文境界—CSJ コーパスにおける文境界の定義と半自動認定—. 言語処理学会第9回年次大会発表論文集, 521-524.
- [Hirschberg 96] Hirschberg,J. & Nakatani, C.H. A prosodic analysis of discourse segments in direction-giving monologues, Proc. of the 34th Annual Meeting of the ACL, 286-293.
- [Mani 01] Mani,I. Automatic Summarization. John Benjamins Publishing Company. 奥村学他訳 自動要約 共立出版, 2003.
- [GS 86] Grosz,B.J.& Sidner,C.L. Attention, intention, and the structure of discourse. Computational Linguistics, 12 (3):175-204.
- [Nakatani 95] Nakatani,C.H. et.al. Instructions for annotating discourse. (*Technical Report*, 21-95). Center for Research in Computing Technology, Harvard University Press.
- [高梨 02] 高梨克也, 小磯花絵, 渡邊(宇野)良子. 話し言葉コーパスへの談話構造タグ付与に基づく理論的問題の検討. 日本認知科学会第19回大会発表論文集, 114-115.
- [Labov 72] Labov,W. The transformation of experience in narrative syntax. Labov,W. *Language in the Inner City: Study in the Black English Vernacular*. University of Pennsylvania Press. 354-396.

談話を語る／聞く動機とエピソード構造

高梨 克也 竹内 和広 森本 郁代 仲本 康一郎 井佐原 均
独立行政法人 通信総合研究所

1. はじめに

本発表は『日本語話し言葉コーパス』(CSJ) (前川 2003) に見られるエピソード構造の分析を通じて、聞き手の予測・疑問や発話内容に対する評価という観点から談話構造を解明することの有効性を論ずると共に、独話に対しても談話構造を相互行為的観点から分析することが有効であることを主張する。

2. Grosz&Sidner (1986) と独話構造

CSJ に談話構造情報を付与する我々の試みは Grosz & Sidner (1986) (以下 GST) の理論をその基礎として採用している (竹内 2003). GST は表層に現われる談話の言語的構造を背景の階層的なコミュニケーション的意図に基づいて説明しようとするものであり、次のような特徴がある。

- ・コミュニケーション的意図(談話目的):
「話し手はなぜそのセグメントを言ったのか?」
- ・意図に基づく階層構造:
談話はセグメントに分割され、各セグメントの目的は上位のセグメントないし談話全体の目的を達成するための手段となっている。

GST に基づくタグ付与基準 (IAD) (Nakatani 1995) では以下の三つの作業を行なうよう教示されている。

1. 談話のセグメント化
2. セグメント間関係の特定
3. 各談話セグメント目的の記述

このマニュアルを CSJ に適用する際にはいくつかの問題点があることが既に指摘されているが (高梨 2002)¹、ここでは 3 に関する制約の欠如が作業結果に表層的に現れる 1 や 2 のゆれにつながっているという点を取り上げ、考えられる対策²を論じていく。

高梨克也 takanasi@crl.go.jp 独立行政法人 通信総合研究所 けいはんな情報通信融合研究センター 自然言語グループ。

¹ この他に、GST が対象としていた対話のデータには発話交換構造 (石崎 2001) のような構造が容易に観察できるのに対して、CSJ は独話であるため、こうした対話構造に関する情報を利用できないという点も挙げられる。

² より大きな方針として、我々は今回の作業を大きな談話セグメントを階層関係を考えずに認定するトップダウン作業とこうして認定されたセグメントの内部構造を判定するボトムアップ作

3. 談話構造についての諸理論

本節では、独話にも見られると思われる二つのレベルの談話現象について、それらが談話構造を認定する手がありとしては必ずしも有効でないことを論じる。

3.1. 談話主題

主に機能言語学の伝統の中には、文レベルで観察される情報構造に関する概念である文主題 sentence topic の類似物として、書き言葉のパラグラフに相当するレベルで観察される共通の話題を談話主題 discourse topic として認定する試みがある (Brown 1983). 確かに CSJ においても談話主題の導入だと感じられる次のような表現パターンが見られる。

例: 判断の基準としては、その病気というのは

しかし、例えば「としては」や「というのは」のような談話主題導入のための表層的マークを列挙するだけでは自発性の高い CSJ に見られる話題導入表現の多様性をカバーすることはできず、逆に同じ形式のマークが常に同様の話題導入機能を果たしていると見なすこともできない。他方、機能的側面を重視するあまり、関連する内容についての「同じ話題」の継続というような直感的な観点のみに基づく認定には、コーパス作成作業の再現性の面からは大いに問題がある。こうした話題導入表現の伝達上の機能を客観的かつ談話セグメント目的と整合的に認定する方法については、5 節で具体的な提案を行う。

3.2. 文間関係

照応や省略のような談話の結束性 cohesion (Halliday 1976) は談話のボトムアップの構成に関わる機構であるが、結束性を満たしながらも不自然な談話を構築することが可能であるため、こうしたボトムアップの機構だけでは捉えられない種類の談話内容の整合性を指すものとして、一貫性 coherence という概念が用いられてきた。ただし、一貫性の内実については様々な理論が提唱されてきているものの統合されたモデルが存在するとは言いがたいのが現状である。ここでは一貫性を捉えるた

業の二段階に分割しており、本稿で論じるのはこのうちのボトムアップ作業の理論的概要についてである。トップダウン作業の詳細については 森本 (2003) を参照のこと。

めの代表的なモデルの一つである修辞構造理論 (Mann 1988) (RST) を取り上げ、その問題点を指摘する。

RST では談話内の二文間に見られる 23 種類の関係が規定されており、各関係を認定する際の基準が明示されている点に特徴がある。また、これらの関係は文より上位の単位にも再帰的に適用できるとされている。従って、RST では、最小単位である文間関係の判定から始め、より上位の単位間関係の判定へと進むことによって、ボトムアップに談話構造を構築していくことが可能であると想定されている。また、RST の諸関係は次の二種類に大別される。まず、提示 presentational 関係は、「ある単位を伝達する〈意図〉を補強することによって、欲求や信念を持つ、許容度を上げるなどのような読者の傾性を増加させること」を目的とした関係であり、階層的なコミュニケーション的意図についての理論である GST とも整合的であると考えられる (Moser 1996)。他方、主題 subject-matter 関係は「〈記述内容〉同士の関係を読者が認識すること」を目的とする関係、言い換えれば、事象間の意味論的関係に基づいて認定される関係である。しかし、RST については、当該の二文間に提示関係と主題関係が同時に付与可能な場合があるという問題点が指摘されている (Moore 1992)。この問題は単に判定基準のあいまい性によるものではなく、提示／主題の二つのレベルの間の関係をどのように捉えるべきかという本質的な問題につながるものである。

4. 話す動機／聞く動機

Moore (1992) と同様の問題点について、高梨 (1998) は文間関係の認定を通じて談話の一貫性を説明するためには進行中の談話に対して聞き手が抱くであろう「疑問」という観点が不可欠であると主張している。つまり、談話における文間関係は、話し手が聞き手の理解状態—特に話し手自身の発話に対して聞き手が抱くかもしれない「疑問」—を見越すことによって生み出されるものであると見なされなければならない。

ところで、会話の場合には、相手の発話に対して聞き手が抱く疑問は「その場で」解決されうる。しかし、独話の場合には、聞き手がどの時点でどのような疑問を抱いたかに関する証拠をデータ内に発見することはほとんどできない。しかし、だからといって、独話の場合は聞き手の理解という観点から談話構造をすることは不適切であると考えるのは妥当ではない。独話の構造を話し手の談話目的の観点から捉えるということはこの談話目的を聞き手がどのようにして・どの程度理解できたかを解明することと同義ないし表裏でなければならない。幸いにして、聞き手からの具体的な問い合わせがない代わりに、独話にも話し手が聞き手の理解を見越すことによって生み出されたと見なしうる現象がある。前述の話題

導入表現である。

談話におけるメタ言語の分析において、西條 (1999) は「談話を話者自身の談話についての意識と共に分析する」ことの重要性を唱えている。コミュニケーションにおいて話者が自分自身の談話を意識する主たる理由は聞き手の理解を考慮することにあると考えられる³。話題導入表現は話し手が聞き手の理解を考慮することから要請される談話方略であり、聞き手がこの談話を聞き続ける動機を喚起することによって談話の構造化をもたらす。

5. エピソード構造の認定

本節では話題導入表現のもつ談話構造化の機能について、特定の表層形式のみを手がかりとするのではなく、かつ客観的な方法で、これを特定するための具体的なモデルと手順を提案する。

5.1. エピソード構造

談話内には「エピソード」と呼ばれる一貫性のある文の連鎖からなる一定のパターンが見られる。

- ・エピソードの冒頭には「話題導入表現」が生起する⁴。話題導入表現の機能は、これ以降の部分で語られる内容とこれを語る意図とを予告することによって聞き手の「予測」を促進すると同時に、それ以降の発話を通じて解決されることになる何らかの「疑問」を聞き手に対して喚起し、「聞く動機」を生み出すことである。
- ・エピソードの後続部分は話題導入表現によって喚起された疑問に対する「回答」と見なすことができ、その中心文は通常評価的な側面を持っている。
- ・従って、典型的なエピソードには話題導入表現と評価に相当する文が含まれている。

5.2. 話題導入表現

IAD において不明確であった談話目的記述を正規化するため、話題導入表現の機能は談話目的を表す次のような形式の疑問を導入することであると考える。

●疑問=談話目的の形式：

- 話し手は X の Z は W かを伝えようとしている。
X=キーワード—通常の意味での談話主題に相当する語句で、話題導入表現自体やそこからの照応関係から辿れる範囲、話題導入表現をサポートする文から選択される。
Z=X に伴うフレーム知識を総括するある種の抽象名詞で、当該のキーワード X のどのような側面に焦点が置

³ Bateson(1955)は「メタ言語」ではなく「メタコミュニケーション」という用語を用いており、メタコミュニケーションは参与者の関係性に関わるものであると定義している。

⁴ 会話分析における「物語」の分析では、「前置き」には通常の話者交替規則を一時停止させる手続きとしての側面と物語に対する適切な評価を予測させる側面があることが指摘されているが (Jefferson 1972, Polanyi 1985, Goodwin 1995), 本稿の枠組みは特にこの後者の特徴を参照したものである。

[図1] エピソード構造の認定

本文	文区切り	文タイプ	X	Z	W
			話題導入表現	クイズ	内容
でそれはどういうクイズかって言うと-	話題導入表現	①			
何か北海道のタンチョウの飛来地で有名な鶴居村とかいう場所があるんですが/並列節句/	評価背景	③	種類の対応		
そこで向羽タンチョウが飛来するかっていうのでその反人工のお父様が野鳥好きでそれで応募したら当たったっていうことで/並列節句/	文間関係	評価(説明)			
で行くことになりました[文末]	つなぎ				

② 伝達目的:
「クイズ(X)の内容(Z)はどういう(W)ものか?」

かれているかを表す。直感的には「説明」の種類だと言うことができ、候補語をリスト化できると考えられる⁵。

W=疑問詞—「XのZ」に整合する疑問詞で、話題導入表現に含まれている場合やYes/Noの場合もある。

5.3. 評価

談話における「評価」の重要性を強調した研究としてはLabov (1972) のナラティヴ分析が有名である。Labovによれば、物語は語るに値する（あるいは聞くに値する）ものでなければならず、物語において「評価」が重要なのは、「評価」こそが「語り手が語りのポイント、その存在意義—それを話す理由、語り手が言いたいこと—を示す手段」だからである。従って、「評価」には次のような性質があると考えられる。

- ・話題導入表現と対になり、話題導入表現によって喚起された疑問への「回答」を担う。より具体的には、談話目的中のZと評価文の文タイプの間には対応関係があると考えられるため、両者の間の整合性を判断することが不可欠になる。

5.4. モデルと認定手法のまとめ

これまで論じてきたモデルと手順を図示すると[図1]のようになる。

- ① 話題導入表現の候補となる文を発見する。
- ② ①の候補が談話目的の形式「話し手はXのZはWを伝えようとしている」を満たすかどうかを、この定式化中のスロットX, Z, Wを埋めることを通じて確認する。

⁵ Zのリストは「側面語」(高橋 1975) や「文末名詞」(新屋 1989), shell noun (Schmid 2000) に類似したものになると予想される。

③ 評価の候補となる文を発見し、これが当該エピソードの評価として妥当であるか否かをこの評価文の文タイプがZと整合するか否かによって確認する。

④ エピソード構造の骨格である話題導入表現と評価を認定できたら、その周辺の文がこれらの文に対してサポート関係にあるか否か（「背景文」であるか否か）を文間関係によって確認する。

⑤ 話題導入表現、評価、背景文からなる範囲をエピソードとして認定する。

6. 議論

話題導入表現や評価を特定のマーカーや品詞などの表層形式のみを基準に特定することは本質的に困難である。ここではその理由について考察してみたい。

6.1. 話題導入表現

表層形式から話題導入表現を適切に特定するのが困難なのは、談話の表層には談話目的の定式化のうちのXは現れるがZは暗黙のままに止まることが多いためであると考えられる。こうした暗黙のZが、どのようなメカニズムによって、どの程度、聞き手によって特定可能であるかについては、本稿の範囲を超えた今後の課題である。

6.2. 評価

評価は対象世界と談話行為という「二つ世界」(高梨 2001) を結びつける接点である⁶。すなわち、対象世界に関する情報にまとまりを与えるとともに、その内容が談話目的の観点からどのような価値を持つものであるかを説明する。従って、表層上評価は対象世界に関する記述

⁶ Chafe (1994) は対象世界に関わる話者の側面を represented self、言語行為に関わる側面を representing self と呼んでいる。

として生起する場合も話者の主觀を明示する表現として生起する場合もある。そのため、例えば陳述表現の形式や感情形容詞の有無のような品詞情報に基づく認定基準では、評価的発話のすべてを適切に認定することはできない⁷⁸。また、同じ二文間に複数の文間関係が同時に適用可能である場合があるという RST についての上述の問題点も、正にこうした世界の二重性の結果であると考えられる。

7. おわりに

独話に見られる談話構造を認定する際にも、談話を産物 product としてではなく、話し手が聞き手の理解を考慮しながら談話を構成していくコミュニケーション過程 process の観点から分析することが重要である。さらに、特に談話レベルに現象に対しては、どのようにして表層的形式から分かること以上のこと、しかも再現可能な方法で解明することができるかが重要になる。その一例として、本稿では、独話に見られるエピソード構造の性質とこれを明示的な手続きによって特定する方法についての試案を示した。コーパス作成作業には基準と手続きの明示性が求められるため、談話コーパス構築の試みは形式的基準のみでは捉えがたい現象を解明する客観的手法を確立する上でも有効な研究手法であると考えられる。

謝辞

初期に本作業を共に担当されていた小磯花絵さん、メタ言語に関して議論していただいた西條美紀さん、乾裕子さん、コーパス作成作業をお手伝いいただいている中尾雪絵さん、谷村縁さん、真田敬子さん、大原裕子さん、関連情報をご教示いただいた村木新次郎先生、三木麻由美さん、高千恵さん、岩男考哲さん、神崎享子さんに特に感謝いたします。

参考文献

- 新屋映子 1989 “文末名詞”について. 国語学. 159: 75-88.
- Bateson,G. 1955 A Theory of Play and Fantasy. In Bateson,G.1972 *Steps to an Ecology of Mind* The Estate of Gregory Bateson. (佐藤良明訳『精神の生態学』新思索社改訂第2版 2000)
- Brown,G.&Yule,G. 1983. *Discourse Analysis*. Cambridge University Press.
- Chafe,W. 1994. *Discourse, Consciousness, and Time: The Flow and Displacement of Conscious Experience in Speaking and Writing*. The University of Chicago Press.
- Goodwin,C. 1995 The negotiation of coherence within conversation. Gernsbacher,M.A.&Givon,T.(eds.) *Coherence in Spontaneous Text*. John Benjamins: 117-137.
- ⁷ 端的な例を一例挙げる。「温泉に浸かって」は通常肯定的な評価を伴うものだと感じられるが、表層言語形式を基準にこれを特定する方法があるとは思われない。
- ⁸ 関連研究中に見られた数少ない例外として、畠田谷(1989)ではこの問題が指摘されており、また、佐久間(1997)の「とりまとめる」の章でも本稿でいう「評価」を担う表現として様々な種類の文が用いられていることが指摘されている。
- Grosz,B.J.& Sidner,C.L. 1986. Attention, intention, and the structure of discourse. *Computational Linguistics*, 12(3): 175-204.
- Halliday,M.A.K. & Hasan,R. 1976 *Cohesion in English*. Longman Group Ltd. (安藤貞雄訳、テクストはどのように構成されるか: ひつじ書房, 1997)
- 石崎雅人・伝康晴 2001 談話と対話. 東京大学出版会.
- Jefferson,G. 1972. Sequential aspects of storytelling in conversation. Schenkein,J. (ed.) *Studies in the Organization of Conversational Interaction*. Academic Press. 219-248.
- Labov,W. 1972. The transformation of experience in narrative syntax. Labov,W. *Language in the Inner City: Study in the Black English Vernacular*. University of Pennsylvania Press. 354-396.
- 前川喜久雄 2003 『日本語話し言葉コーパス』の設計と実装. 平成15年度国立国語研究所公開研究発表会予稿集.
- Mann,W.C. & Thompson,S.A. 1988 Rhetorical structure theory: Toward a functional theory of text organization. *Text*, 8(3): 243-281.
- Moore,J.D. & Pollack,M.E. 1992 A problem for RST: The need for multi-level discourse analysis. *Computational Linguistics*, 18(4): 537-544.
- 森本郁代・竹内和広・高梨克也・井佐原均 2003 『日本語話し言葉コーパス』に対する談話構造タグ付与の問題点 SIG-SLUD-A302 49-54.
- Moser,M. & Moore,J.D. 1996 Toward a Synthesis of Two Accounts of Discourse Structure. *Computational Linguistics*, 22(3): 409-419.
- Nakatani,C.H. et al 1995 Instructions for annotating discourse. (Technical Report, 21-95). Center for Research in computing Technology, Harvard University.
- Polanyi,L. 1985. 'Conversational Storytelling' van Dijk, T. A. (ed.). *Handbook of Discourse Analysis* Vol. 3. 183-201.
- 佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一(編) 1997 文章・談話のしくみ おうふう.
- Schmid,H-J. 2000 *English Abstract Nouns as Conceptual Shells: From Corpus to Cognition*. Mouton de Gruyter.
- 高橋大郎 1975 文中にあらわれる所属関係の種々相. 国語学. 103: 1-17
- 高梨克也 1998 一貫性の多様な次元--日常会話と思考の「自然な流れ」の解明に向けて--. デュナミス--ことばと文化-. (京都大学大学院人間・環境学研究科文化環境言語基礎論講座) 3: 73-104.
- 高梨克也・井佐原均 2001. 発話理解の多重性と会話進行:「説明的発話連鎖」の分析から. 言語処理学会第7回年次大会発表論文集 417-420.
- 高梨克也・小磯花絵・渡邊(宇野)良子 2002 話し言葉コーパスへの談話構造タグ付与作業に基づく理論的問題の検討. 日本認知科学会第19回大会発表論文集 114-115.
- 竹内和広・高梨克也・森本郁代・仲本康一郎・井佐原均 2003 『日本語話し言葉コーパス』の談話構造タグ付与. *This volume*.
- 畠田谷桂子 1989 第6章 陳述の連鎖の残存傾向. 佐久間まゆみ(編) 文章構造と要約文の諸相. くろしお出版.

研究発表

卷之三

「「やっぱり」広告についての一考察」

榎原 愛
大阪大学大学院
aisakaki@hcn.zaq.ne.jp

1 広告で使われる「やっぱり」

- (1) やっぱり¹ モルツでしょ
- (2) やっぱりココアは森永

<問題>

「やっぱり」は、広告で使われると、どのような機能を持つのか？

「やっぱり」広告は、なぜ、広告として効果的なのか？

2 広告

2.1 定義

- Cook (1992: 171)

‘Ads exist to sell and every member of contemporary industrial society – other than very young children - know this. Once an ad is identified, such connotative components as “buy our product” or “we recommend that” are understood by default.’

‘An advertiser must try to have his/her ad noticed among numerous other ads and subsequently to create a maximally effective impact during the brief time span.’

- 梶山 (1995) : The battle for the mind

2.2 広告とコミュニケーション

- 広告では広告主と受け手との間でコミュニケーションが行われている。

(Cook (1992), Myers (1994), 梶山 (1995))

3 「やはり」²

- (3) 何か、ことが起きる。世間の反応が二つに分かれる。まさか、そして、やっぱり。。。素人の最初の感想としては、まさかそこまでとは思うのだが、次のような本の記述を読んでみると、やっぱりの方が頭をもたげてくる。

(朝日新聞「天声人語」2003/10/26)

- (4) 彼はやはり、試験に落ちた。

- (4)'彼は、試験に落ちた。

3.1 国語学的観点から

板坂 (1971)

- ・話題として取り上げた事柄が、すでに確立している恒常的、原理的なものに適合する。
- ・話し手の謙遜の気持ちを込める事が出来る。
- ・自己の知識や判断に関しての、話し手の心的態度を示す。

3.2 言語学的観点から

高見 (1987)

- ・表出命題に対する話し手の態度・判断・コメントを表現するモダリティー表現。

西原 (1988)

- ・語用論的的前提がある。
- ・命題や文脈を超えた次元で話し手が持つ、妥当な論理的推論体系の帰結を表わし、その帰結の確認が世間一般常識に照らし合わせても妥当な推論である事を示す。
- ・話し手の物の見方(認知体系)を前提とした推論体系が論理的である事を間接的に示し、談話全体に「結束性」を生む。

森本 (1994)

- ・「やはり」を使うのに関与する「期待」があり、それは言語的文脈自体から引き出されるものだけではなく、話題になっているものについての話し手の見解、社会的に認められた知識や慣習を含む一般的原則のようなもの。
- ・「やはり」が適切に使われるには、話し手と聞き手が共有する知識（話し手が勝手に思い込んでいるだけにせよ）が前提とされていて、そこから話し手の期待する事が引き出されなければならない。
- ・「やはり」が文脈上でうまくつかわれるかどうかは、語用論的配慮によるところが大きい。従って、聞き手が実際に前提を受け入れていないと、押し付けのような印象を与える。

4 関連性理論

4.1 関連性

関連性：効果 (effect) と労力 (effort)

認知過程への入力の特性

4.2 関連性の原理

(5) Principle of relevance

(a) Cognitive Principle of Relevance

Human cognition tends to be geared to the maximization of relevance.

(b) Communicative Principle of Relevance

Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal relevance.

(Sperber and Wilson 1995: 260)

4.3 意図明示的刺激が持つ関連性の程度に関する条件

(6) Presumption of optimal relevance

- (a) The set of assumptions I which the communicator intends to make manifest to the addressee is relevant enough to make it worth the addressee's while to process the ostensive stimulus.
- (b) The ostensive stimulus is the most relevant one the communicator could have used to communicate I.

(Sperber and Wilson 1995: 158)

4.4 解釈プロセス

(7) Relevance-theoretic comprehension procedure

- (a) Follow a path of least effort in computing cognitive effects: Test interpretive hypotheses (disambiguations, reference resolutions, implicatures, etc.) in order of accessibility.
- (b) Stop when your expectations of relevance are satisfied.

(Wilson 2002: 4)

4.5 「やっぱり」の手続き的意味

Tanaka (1998)

- ・発話が解釈されるコンテクストの選択を制限する、「手続き的」意味³を持つ。
- ・聞き手が最適の関連性を持つ解釈が可能な、正しいコンテクストを選択出来るように助ける。

(8) P: 結果はどうでしたか?

- Q: いけるかなと思ったんですが、
a. だめでした。

b. やはりだめでした。

(Tanaka 1998: 26)

- ・聞き手：「やはり」を聞いて、関連性を最適にする為の背景となる想定を探し、コンテクストに加えて解釈する。

(9) 「話し手は成功しないだろう。」と考えていた誰かがいた。

- ・発話の命題内容に貢献せず、含意に制限を与える。

(10) A: あの人、自殺したんだって。

B: やっぱり！

A: 何が やっぱりなの？

(Tanaka 1998: 42)

5 広告で使われる「やっぱり」

- ◎なぜ「やっぱり」広告は、読み手の注目を惹きつけ、広告として効果的なのか？
認知能力「関連性志向」との関わり

5.1 解釈プロセス

(11) やっぱり YAHOO BB がおトクらしい

(12) やっぱ ANA

<読み手が辿る解釈プロセス仮説>

- ①突然の語りかけ→「何がやっぱりなのか？」
→解釈を行う為のコンテクストを構築するのに必要な想定が、分からぬ。

- ② a. 商品に対する、さらなる情報集め→購買

b. 購買

⇒広告主の意図の達成：読み手の購買意欲を誘導。

- ・何故、このようなプロセスを辿るのか？

5.2 関連性の保証

<関連性の高さの保証>

- ① 広告に対する期待から：「その商品に関して肯定的な情報が述べられている。」
- ② 「やっぱり」の手続き的意味から：広告主は読み手が最適の関連性を持つ解釈を得る手助けをしている。→読み手とコミュニケーションを取る事に協力的。
- ③ Communicative Principle of Relevance から：「意図明示的な刺激は、それ自身最適の関連性の見込みを伝達する。」

(13) A:山の天気はどうでしたか？

B:天気予報では雨になると言っていました。

a. 午後から雨になりました。

b. やはり午後から雨になりました。

(Tanaka 1998: 25)

(14) 天気予報は雨になると言っていた。

(Tanaka 1998: 33)

●読み手にとって「関連性」の高い情報である事が、広告主から保証されている。

- ・充分な関連性を得る為に途中で解釈をやめるわけにはいかない。
- ・労力に見合うだけの効果の高さを充分期待できる。

5.3 読み手が取る手段

「関連性」の高さを信用

「仮設」コンテクスト形成による推論

(15) 朝はやっぱり「朝専用缶コーヒー」

・読み手にとってアクセス可能性の高い想定

- ① 商品特性に関して：自分の経験や好み、イメージなどによる百科事典的知識による。

- (16) a. 朝はマイルドなコーヒーの方がよい。
b. 一日中同じコーヒーの味だと、飽き飽きする。
c. 出勤前に喫茶店でコーヒーを飲むのは、お金がかかる。
d. 朝からコーヒーを飲むと、気分がすっきりする。

② 「やっぱり」の意味から

広告主は、常識的な前提から、妥当な推論をしている。

③ 「広告」に対する期待から

「朝専用缶コーヒー」に関して肯定的な情報が述べられている。

結論：「朝専用缶コーヒー」は、朝に飲むには最適のコーヒーならば、一度飲んでみる価値がある。

→ 仮説にすぎない。事実との照合による検証が必要。
「最適の関連性を持つ解釈ではない。」

- (17) a. (晴天の日) 「今日はピクニック日和だね。」
b. (雨天の日) 「今日はピクニック日和だね。」

⇒(A) 商品に関する、さらなる情報収集→商品購入、商品への注目

(B) 他に情報なし→商品購入

6 「やっぱり」広告の効果

○読み手にとって

広告に対する関連性が高くなる

① 「新情報」、自分に取って呼び出し可能性の高い「想定」を基に、「仮設」コンテキストを構築。

→広告主からの押し付けがましさが軽減される。

② 情報価値の高まり

→読み手自身の個々の観点から、商品を位置付け出来る。

・類似商品との差異を明確にしやすい。

・商品情報が、読み手の認知環境で強められると共に、その呼び出し可能性がより高くなる。

○広告主にとって

- ① 読み手がどのような解釈をしようとも、たとえ目を引くのが瞬時であろうとも、読み手の商品情報に関する関連性を高める事が出来る。

(18) He (=the advertiser) would be quite content if he could manage to persuade his audience to buy his product, while failing to inform them of anything at all. In contrast, he would not have succeeded in his task if he provided a great deal of information but failed to persuade anybody to buy his product.

(Tanaka 1994: 36)

- ② 読み手に心理的接近感を与える。

7 結論

(19) やっぱりこの化粧品に戻ってきました

(20) やっぱり見た目は大事です

- ① 「やっぱり」は、広告ではどのように機能するのか？

読み手にとって広告の「関連性」を高める機能を持つ。

- ② なぜ、効果的なのか？

広告主は、読み手の関連性志向を巧みに利用しているから。

関連性の高さの保証 ⇔ 関連性を持つ解釈の達成不可能

↓

広告に対する「最適の関連性」が、より高まる。

注

1 以下、例文における「やっぱり」の斜線は、すべて発表者による。

2 Tanaka (1998)と同様、本発表でも「やっぱり」「やっぱ」は「やはり」の口語体であり、「やはり」と同じ性質を持つ、と考える。

3 言語的にコード化されている情報には「概念的にコード化されている情報」と「手続き的にコード化されている情報」とがある。手続き的情報とは、概念表示の構成要素になるものではなく、概念表示の操作に関する指示であり、発話解釈過程において、聞き手が行う推論処理の仕方に制約を課す情報である。手続き的情報がコード化されている語として、例えば Blakemore (2000)では‘but’, ‘nevertheless’が分析されている。

参照文献

- Blakemore, Diane (1992) *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*, Blackwell, Oxford.
- Blakemore, Diane (2000) "Indicators and Procedures: Nevertheless and But," *Journal of Linguistics* 36:3, 363-486.
- Forceville, Charles (1996) *Pictorial Metaphor in Advertising*, Routledge, New York.
- 東森勲・吉村あき子 (2003) 『関連性理論の新展開 認知とコミュニケーション』, 研究社, 東京.
- 板坂元 (1971) 「やはり・さすが」, 『国文学 解釈と鑑賞』 第36卷, 第1号, 216-221.
- 梶山 皓 (1995) 『広告入門』, 日本経済新聞社, 東京.
- 森本順子 (1994) 『話し手の主観を表す副詞について』, くろしお出版, 東京.
- Myers, Greg (1994) *Words in Ads*, Edward Arnold, London.
- 西原鈴子 (1988) 「話者の前提：やはり（やっぱり）の場合」, 『日本語学』3月号, 89-99.
- 岡本真一郎 (2001) 「広告の説得効果と誤誘導効果」, 『日本語学』2月号, 72-81.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition*, Blackwell, Oxford.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1995) *Relevance: Communication and Cognition, Second Edition*, Blackwell, Oxford.
- 高見健一 (1987) 「日英語の文照応と副詞・副詞句」, 『言語研究』第87卷, 68-94.
- Tanaka, Keiko (1994) *Advertising Language: A Pragmatic Approach to Advertisements in Britain and Japan*, Routledge, New York.
- Tanaka, Keiko (1998) "The Japanese Adverbial Yahari or Yappari," in Robyn Carston and Seiji Uchida (eds.), *Relevance Theory: Applications and Implications*, 23-46, John Benjamins, Amsterdam.
- 辻大介 (2001) 「広告の誘惑と言語表現・非言語表現」, 『日本語学』2月号, 52-61.
- Wilson, Deirdre (2002) "Relevance Theory: From the Basis to the Cutting Edge," A Text for ICU Open Lectures on Cognitive Pragmatics.

Primary interjection と Secondary interjection

--- 解釈的使用的視点から ---

西川眞由美(akbkt909@tcn.zaq.ne.jp)

奈良女子大大学院

1. はじめに

Interjection: 統語的に独立し、発話者の心の状態、感情、態度を表す。概して、primary interjection と secondary interjection の二種類に分類される (Sweet 1891, Jespersen 1924, Pautsma 1926, Ameka 1992, Wierzbicka 1992)。¹

Primary interjection (e.g. *oh, ah, ouch, wow, hm, oops, sh*): interjection 以外の使用を持たないもので、しばしば音韻論的逸脱、言語を越えた類似性が観察される (Ameka 1992, Wilkins 1992, Wierzbicka 1992)。また、言語発話より鮮明で生き生きとした伝達を可能にする。

Secondary interjection (e.g. *bravo, good, really, indeed, what, why, cool, yes, Christ, hell*): 他の語類に由来する interjection で、1. もとの語の意味をある程度保持している、2. interjection が単なる省略発話かで degree がある、3 さまざまな語がある文脈で secondary interjection として解釈される、4. 文発話と共に起しない、などの primary interjection との違いが観察される (西川 2003b)。

- (1) Tom: I got a job at last!
Mary: *Good!*
- (2) (好きな相手を怒らせる羽目になってしまった Mary が) *Idiot!*
- (3) (オール A の成績を取った Mary が) *Yes!*
- (4) Tom: Bill and Jane decided to marry at last!
Mary: *Really!*
- (5) Tom: Bill was killed in the accident!
Mary : *What!*

Aims:

- (a) 関連性理論 (Sperber and Wilson 1995, 以下 RT と称す) の「解釈的使用(interpretive

¹ ラテン文法でも間投詞は(1) imitations of sounds (e.g. *ah!, oh!, hey!* etc. in English) と (2) abbreviated sentences (e.g. *there!* etc. in English) に二種類に分類されている (Henry John and H.J.Roby 1880: 182)。

use)」という概念を使って、primary interjection と secondary interjection がそれぞれどのようなメカニズムで話し手の心の状態を表すのかを明らかにすること。

- (b) primary interjection と secondary interjection の違いは、話し手の心の状態の表示のために、何を解釈に使用しているかの違いであることを明らかにすること
- (c) 本分析によって、primary interjection と secondary interjection について従来述べられてきたさまざまな相違点が何故起こるのかを説明すること

2. 先行研究

2. 1 Primary interjection

- (a) 自然の声の反応：

Bryant (1959: 295): The most primitive interjection is in all probability that one which is a mere emotional reaction to an external stimulus, such as laughter, the cry of pain, etc., represented verbally by *ouch*, *ha-ha-ha*, *heigh-ho* (simulating a yawn), and so forth.

Sweet (1891:152) : Primary interjections are mostly reproductions of the sounds we make involuntarily when under the influence of various emotions. It will be observed that many of written interjections --- such as *tut!* --- are imperfect attempts to express sounds which do not occur in the non-interjectional words of the language.

Jespersen (1924: 90): words which are never used otherwise (some containing sounds not found in ordering words e.g. an inhaled *f* produced by sudden pain, or the function stop inadequately written *tut* and others formed by means of ordinary sounds e.g. *hullo*, *oh*)

Problem: ある刺激を受けたときに人が発する音（の再現）が、どのようにして人の心の状態を表すようになったのかを説明していない。

- (b) 言語

Interjection は語彙発話で(lexical utterance)、意味論的構造に命題的意味をコード化し、その意味は Natural Semantic Metalanguage (以下 NSM と称す) で定義可能である。²

Ameka (1992: 105): little words or non-words which in terms of their distribution can constitute an utterance by themselves and do not normally enter into construction with other word classes

Wilkins (1992: 119): interjections have all the features attributed to utterances, including the facts that they convey complete propositions and have an illocutionary purpose.

Wierzbicka (1992: 159): interjections --- like any other linguistic elements --- have their meaning and that this meaning can be identified and captured in the natural semantic metalanguage developed by the author and her colleagues

Problem: interjection は non-truth-conditional であるという事実を説明出来ない（西川

² NSM については、Wilkins (1992: 136) 参照。

2002a, Wharton 2000 参照)。³

(c) **natural coding (Wharton 2000, 2001)**

interjection は言語と非言語の連続体のさまざまな場所に位置し、発話者の心の状態、態度、感情に関する概念を活性化する'pointer'としての procedural meaning (手続き的意味) をコード化している。

Problem: 概念的意味をコード化する言語と(概念的意味を活性化する)手続き的意味をコード化する非言語が連続体を成すという主張は、procedure と concept が連続体を成すということになり理論に矛盾する。

2. 2 Secondary interjections

(a) 形か意味における孤立

Sweet (1981: 152): ordinary words which have come to be used as interjections by various processes of isolation (e.g. *bravo*, *marry*)

Problem: どのような過程を経て、*bravo* がもとの語から意味的に、*marry* が形式的に孤立し、話し手の心の状態を表すに至ったのかを示していない。

(b) 通常の語のあるひとつの使用

Jespersen (1924: 90): words from ordinary language

Ameka (1992: 105): forms that belong to other word classes based on their semantics and are interjections only because they can occur by themselves non-elliptically as one-word utterances and in this usage refer to mental acts

Problem: 何故、ある語が一語発話として使用されると、interjection として心の状態を表すのかを説明していない。

(c) 多義性

Wierzbicka (1992: 165): secondary exclamations which are homophonous with and derived from nouns or other parts of speech

Problem: secondary interjection が他の品詞に由来しながら、その語と同音異義である(homophonous)という分析は、secondary interjection がもとの語の意味を保持しているという事実を説明出来ない。

3. Interpretive Use (解釈的使用)

関連性理論 (Sperber & Wilson: 1995) :

Principles of relevance (関連性の原則) :

1. cognitive principle of relevance (関連性の認知原則) :

Human cognition is geared towards the maximization of relevance (that is, to the achievement

³ “Ouch!”に対して、”That’s not true.”という返答は通常不自然である。

of as many contextual (cognitive) effects as possible for as little processing effort as possible).

2. communicative principle of relevance (関連性の伝達原則) :

Every act of ostensive communication (e.g. utterance) communicates a presumption of its own optimal relevance.

Presumption of optimal relevance (最適の関連性の見込み) :

- (a) The ostensive stimulus is relevant enough for it to be worth the addressee's effort to process it.
- (b) The ostensive stimulus is the most relevant one compatible with the communicator's abilities and preferences.

Relevance-theoretic comprehension procedure (RT の解釈手続き) :

- (a) Follow a path of least effort in computing cognitive effects. In particular, test interpretive hypotheses (disambiguations, reference resolutions, implicatures, etc.) in order of accessibility.
- (b) Stop when your expectations of relevance are satisfied (Sperber and Wilson 2002:18)

Descriptively used representation (記述的に使用された表示) : a representation (whether mental or public) which represents a state of affairs (that is, something on-representational). It is truth-based representation; that is, the representation describes a state of affairs that makes it true. (Sperber and Wilson 1995: 228, Carston 2002: 377 etc.)

Interpretively used representation (解釈的に使用された表示) : a representation (whether mental or public) which represents another representation (whether mental or public) and resembles it in content (logical, semantic, conceptual). (ibid.)

Sperber and Wilson (1995):

- (a) A recognizable representation can be used to draw the audience's attention to concepts and assumption schemas which are not instantiated in the immediately perceptible environment. (1995: 226)
- (b) In appropriate conditions, any natural or artificial phenomenon in the world can be used as a representation of some other phenomenon which it resembles in some respects. (1995: 227)

Illustration:

- (a) 犬の格好、犬の吠える真似といった表示が、犬という概念を表示するために解釈的に使用されている
- (b) Mary が Peter にパーティを抜け出したいということを伝えるために、車の運転の真似をする。
- (c) Peter: What language did you speak to the inn-keeper?
Mary: Bonjour, comment allez-vous, bien, merci, et vous?

(Sperber and Wilson 1995: 227)

4. 解釈的使用による考察

interpretive use: ‘X が、Y を表すために解釈的に使用されている’

4. 1 Primary interjection

(a) 自然の声の反応（非意図明示的伝達）（西川 2002a, 2003a）：

元来、primary interjection は人がある刺激を受けたときに発する自然の声の反応である。それらは、それらを耳にした者にそれぞれ(6)のような特定の想定を強く顕在化する。そして、繰り返し使用されるうちに、それぞれの interjection に関する(6)のような想定が人の記憶の中の百科辞典的知識に貯蔵され、それらを聞いた途端にアクセスできるようになっている。

(6) Tentative assumptions made strongly manifest by uttering interjections:

- a. *ouch*: The speaker is feeling sudden pain. (西川 2002a)
- b. *wow*: The speaker is impressed with something unexpected. (ibid.)
- c. *oops*: The speaker is experiencing a minor mishap. (ibid.)
- d. *oh*: Something has come into the speaker's mind. (西川 2002b)
- e. *well, uh* etc.: The speaker is considering something.⁴ (cf. Schourup 2001, etc.)
- f. *ah*: Something has just connected with or has corresponded to certain existing assumption of the speaker's.
- g. *hm*: The speaker is wondering about something. (Bolinger 1983 265)

(b) 意図明示的伝達（西川 2002a, 2003b）：

(6)のような想定を活性化することが出来るという事実を利用することにより、primary interjection は話し手の心の状態を伝える意図明示的伝達として使用することが出来る。意図明示的伝達として使用された primary interjection は、ある特定の想定を強く伝達するので、しばしば言語伝達と混同される (Wierzbicka 1992, Ameka 1992, Wilkins 1992 参照)。しかしながら、primary interjection の場合はその情報意図の証拠が直接的に与えられる（刺激に対する声）のに対し、言語伝達（発話）は情報意図の証拠が間接的に (coding) 与えられる点で両者は異なる (Wharton 2000: 29 参照)。

Claim: ‘ある特定の刺激を受けたときに人が発する特定の声が、その刺激を受けたときに起こる人の心の状態を表すために解釈的に使用されている’

Illustration: 人は痛い思いをしたとき、思わず「アウッ！」(Ow!)という音を発する。

⁴ Schourup (2001)は DM well の「意味」をさらに詳しく、'the speaker is considering what it is appropriate to consider' (cf. 2001: 1050) 、 'the speaker is saying the well-marked utterance with epistemic consideration' (2001: 1058) と定義している。

その事実は人の記憶の中の百科辞典的知識の中に入っており、その音を聞けば「その人は痛い思いをしている」という想定を活性化することが出来る。すると、自分が「痛い思いをしている」ことを相手に思い描いて欲しいときに、「アウッ！」という音を使用することによって、その目的を達成することは可能である。つまり、「アウッ！」という自然の声が「痛い！」という心の状態に関する概念表示のために解釈的に使用されているということである。

4. 2 Secondary interjection

推意（西川 2003b）：secondary interjection は、その語が一要素とする文発話が省略によって一語となったものであり、その関連性が(7)のような発話者の心の状態に関する推意の伝達にあればあるほどその一語発話は secondary interjection として認識される。したがって、secondary interjection は natural class ではなく聞き手の解釈の問題であり、その解釈には degree がある。それぞれの語が伝達する話し手の心の状態に関する推意は、元々その語にコード化されている意味をもとにして導出されたものであり、そこから微妙な意味の差が出てくる。

(7) Tentative assumptions made strongly manifest by uttering interjections:

- a. *good* --- The speaker is very pleased/happy/relieved.
- b. *idiot* --- The speaker is very unhappy/unsatisfied.
- c. *yes* --- The speaker is pleased/happy/satisfied.
- d. *really* --- The speaker is very upset/confused/surprised.
- e. *what* --- The speaker is very upset/confused/surprised.

Claim: ‘省略一語発話によって伝達される（人の心の状態に関する）推意が、話し手の心の状態を表すために解釈的に使用されている’

Illustration: (8)の *What!* は、*What do you mean?/What happened to Bill?/ What did you say?* 等の文発話から省略された一語発話と考えられる。それぞれの文発話は、ある命題内容の一部を要求する発話行為を伝達すると同時に、強い疑問の態度、不信感、驚き、動搖等、発話者の心の状態に関する想定（推意）を伝達することがあり、*What?* という一語発話になんでも両方の想定が伝達されると考えられる。しかし、ある文脈では、後者の方（話し手の心の状態に関する推意）が前者（字義通りの意味）よりずっと強く伝達されることがある。つまり、*What!* という secondary interjection は、*What?* によって（多少とも）伝達されていた(7e)のような話し手の心の状態に関する推意、つまり「なんだって！」「(疑問が多くて)信じられない！」「一体どういうことだ！」というような心の状態を表示するために、解釈的に使用されていると考えられる。

(8) Tom: Bill was killed in the accident.

Mary: *What?!*

5. 本考察の利点

- (a) primary interjection の音韻論的逸脱が説明出来る。それらはある刺激を受けたときに人が発する自然の声を再現したものだから、必ずしも特定言語の音韻論的規則に従うものではないからである。
- (b) primary interjection が何故言語を越えた類似性を示すのかを説明出来る。ある刺激を受けたときに人が発する自然の声は、その刺激によるからだの自然な反応によって作られる音なので、概ね万人に共通するものであると考えられる。よって、特定言語の音韻規則の制限を受けるものではないので言語を越えた類似性が観察される。しかしながら、それらが各言語で慣習的に使用される過程である程度当該言語の音韻論に拘束される(*ouch, wow, yuck, oops etc.*)。
- (c) secondary interjection が、何故もとの語にコード化された意味を保持しているように感じられるのかを説明出来る。secondary interjection によって伝達される特定の心の状態は、もとの語を含む文発話やその省略発話によって伝達される話し手の心の状態に関する推意であり、その推意の導出にはもとの語にコード化された意味がある程度関連しているからである。
- (d) 何故 primary interjectionの方が secondary interjection より鮮明で生き生きとした伝達が可能であるかを説明できる。それは、primary interjection は声という直接的な証拠を解釈として使用しているのに対し、secondary interjection は、文発話の推意というきわめて間接的な証拠を解釈として使用しているからであると考えられる(Wharton 2000)。
- (e) 何故、primary interjection は文発話と共に起るけれども、secondary interjection は文発話と共に起しないのかを説明することが出来る。言語伝達とは、実際は、言語を中心とする有機体で、ジェスチャー、顔の表情、抑揚、声のトーンなど、さまざまな他の感覚器官からの情報が、言語によって伝達される意味に味付けをしていると考えられる(Wharton 2001 参照)。よって、同じ言語に由来する secondary interjection よりも、もともと声のジェスチャー(vocal gesture)(Ameka 1992, Goffman 1984 参照)である primary interjection の方が中心となる文発話によって伝達される意味に味付けをする役として好まれるからである。⁵

6. おわりに

⁵ もともと言語に由来しながら vocal gesture 的に使用される interjection (e.g. *gee, well*)は文発話との共起が頻繁に見られる (Bolinger 1989, Schourup 2001 参照)。

参考文献

- Ameka, F. 1992. Interjections: The universal yet neglected part of speech. *Journal of Pragmatics* 18, 101-118.
- Bolinger, D. 1989. *Intonation and its Uses: Melody and Grammar in Discourse*. Stanford: Stanford University Press.
- Bryant, M. 1959. *A Functional English Grammar*. Boston: D. C. Heath and Company.
- Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances*. Oxford: Blackwell.
- Goffman, A. 1983. *Forms of Talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Henry, J. and Roby, H.J. 1880. *School Latin Grammar*. London: Macmillan & Co. limited.
- Jespersen, O. 1924. *The Philosophy of Grammar*. Chicago: UCP.
- 西川 真由美. 2002a. Interpretive Use of Interjections. 『人間文化研究科年報』8, 79-92.
奈良女子大大学院人間文化研究科
- 西川 真由美. 2002b. 談話標識 *Oh*. 『英語語法文法研究』9, 110-125. 東京：開拓社
- 西川 真由美. 2003a. Phatic Aspects of English Interjections. 『人間文化研究科年報』8, 79-92. 奈良女子大大学院人間文化研究科
- 西川 真由美. 2003b. Secondary interjections in English. 『英語学英米文学論集』29 (印刷中).
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., and Svartvik, J. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English language*. London: Longman.
- Schourup, L. 1985. *Common discourse particles in English conversation*. New York/London: Garland Publishing.
- Schourup, L. 2001. Rethinking well. *Journal of Pragmatics* 33, 1035-1060.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
- Sperber, D. and D. Wilson. 2002. Pragmatics, Modularity and Mind-reading. *Mind and Language* 17, 3-23. London: Blackwell.
- Sweet, H. 1891. *English Grammar*. Oxford: OUP.
- Wharton, T. 2000. Interjections, language and the 'showing'/'saying' continuum. *UCL Working Papers in Linguistics* 12, 173-213.
- Wharton, T. 2001. Natural Pragmatics and natural codes. *UCL Working Papers in Linguistics* 13, 109-158.
- Wierzbicka, A. 1992. The semantics of interjections. *Journal of Pragmatics* 18, 159-192.
- Wilkins, D. 1992. Interjections as deictics. *Journal of Pragmatics* 18, 119-158.

コンテクストへの制約—**YET** の場合

山田 大介

神奈川大学大学院 外国語学研究科

darman7@aol.com

1. イントロダクション

関連性理論の意味論は、言語表現の中には発話の真理条件、すなわち命題形成に貢献しないものがあるということを主張し、語用論へのインプットとなる言語表現の記号化された意味についてタイプの異なる二種を区別している。たいていの言語表現は概念としての意味を持ち、発話の命題形成に貢献するのであるが、一方で **so, after all, but, moreover** といった談話連結語と称されるものは、二命題間の推論関係を明示する表現であるものとして手続き的情報を記号化している。当初、Blakemore (1987) は真理条件的意味と非真理条件的意味の区別が、概念的意味と手続き的意味の区別と並行すると考えられていたが、程なく真理条件的対非真理条件的意味、概念的対手続き的意味が横断的に渡り合う方向で、手続きの記号化が広がりを見せた (Wilson & Sperber 1993)。本発表は **yet** を取りあげ、手続き的記号化が当初の考えから広げられるべきであるという Blakemore (2000, 2002) の考えをデモンストレートするものである。

次のペアを見てみる。

- (1) It was raining, yet Peter went out.
- (2) It was raining but Peter went out.

(1) と (2) は相互互換的であり、同じ真理条件を有している。しかしながら、**yet** が **but** と置き換えられるのは、比較的限られた場合においてであることも事実である。本発表では、Blakemore による **but** の分析を基にして、**yet** が、**but** と共有している意味とどのように違うのかということを議論する。両者は概念でなく手続きを記号化しているが、手続き的意味のタイプにおいて、異なることを主張したい。

2. 先行研究：**But** の手続き的意味

- (3) BUT の手続き的意味：
前節 (P) からの呼び出し可能な想定 (P') の否認 (矛盾と削除) として、**but** 節 (Q) を解釈せよ

- (4) A: John is not at office today.
B: But I've just seen him at the refectory.

- (5) [ピーターが貧血を起こしたメアリーにウイスキーを渡して] :
Mary: But I don't drink. (Blakemore 2002, 105)
- (6) John is tall but Bill is short.
- (7) She isn't my sweetheart but my sister.

3. YET : どのような手続きか

- (8) Although we may lose heart, (yet) we must persevere.
- (9) Her husband is in hospital and she is seeing other men.
- (10) Her husband is in hospital, but she is seeing other men.
(Blakemore & Carston 13)
- (11) Her husband is in hospital and yet she is seeing other men.
- (12) Her husband is in hospital. Yet she is seeing other men.
- (13) People didn't want to go out.
- (14) If P, then not Q.
- (15) If her husband is in hospital, then she won't be having any pleasure such as seeing other men.
- (16) YET の手続き的意味：
P と関係付けられる推論 (P') を保持せよ。その保持された想定はいずれ矛盾することになる

4. YET : コンテキストへの制約

- (1) It was raining, yet Peter went out.
- (17) If it is raining, then people don't want to go out.

- (18) You have a lot of things to do and it's a 13-hour flight. Yet you want to go to London.
- (19) If you have a lot of things to do and it's a 13-hour flight, then you don't want to go to London.
- (20) Is it raining? Yet I'll have to go out anyway.
- (21) If people are asking what the weather is like, then they won't go out no matter whether the weather is like.
- (22) [ピーターが貧血を起こしたメアリーにウイスキーを渡して] :
Mary: *Yet I don't drink.
- (23) A: Let's sit here. This is a good place to sit.
B: But/*Yet this is in the smoking section! (東森 348)
- (24) A: I have a lot of things to do and it's a 13 hours flight.
B: Yet you want to go to London?
- (25) If A has a lot of things to do and it's a 13 hours flight, then A doesn't want to go to London.
- (7) She isn't my sweetheart but my sister.
(26) *She is not my sweetheart, yet my sister.
- (27) It could be possible that the grandparent was caught in a "caring squeeze" — finding it a struggle to look after a very young child as well as their spouse and possibly their own elderly parents, and she said. "There may just be a lack of interest. Yet care by a relative in combination with paid childcare appears to be fine."
- 【下線は発表者による】
- (THE DAILY TELEGRAPH, August, 13, 2003. -Grandparent child care
'slows learning'—)
- (28) If there may just be a lack of interest, then care by a relative in combination with paid childcare doesn't appear to be fine.

- (29) Ardmory B&B; Fortwilliam
Modern house with spacious gardens. Panoramic view of Loch Linnhe and surrounding mountains, yet only few minutes walk to town centre and convenient for rail and buses. Join us round our real long fire, in the TV lounge. Private car parking. Secure garage parking for cycles, motorcycles, skis, boards.

【下線は発表者による】
(The Scottish Tourist Board ホームページ)

- (30) If that B&B is located in panoramic view of Loch Linnhe and surrounding mountain, then it takes much time to town centre, and it is not convenient for rail and buses.

5. 結語

談話連結語 Yet は、(16) に示したように、Q 節と結局は矛盾することになる P から呼び出し可能な想定 P' を保持し、この中で Q 節 (yet 節) を処理せよという指令を発している。Yet 節発話を処理する際に、聞き手が呼び出すこととなるコンテキストの性質とその範囲を指示することによって yet は関連性を有する。But と同様に yet は、矛盾という認知効果を導出しているが、特定のコンテキスト選択をポイントし、意図されたコンテキストへの制約を課す。

手続き的意味に二つのタイプが区別される：

- ・否認 (but) や強化 (after all) や結論 (so) といった特定の認知効果に制約を課す表現
- ・処理されるべきコンテキストの活性化に制約を課す表現
→but は前者に属し、yet は後者に属するものであると提示する

- (27)
This account of the differences between *but*, *however*, and *nevertheless* is ... that a discourse connective may have a cluster of functions some of which may be shared by other connectives. Thus while the function of contradiction and elimination is shared by all these expressions, *however* and *nevertheless* have additional functions which are not encoded by *but*. The point is that these additional functions

which must be defined in terms of restrictions on the contexts in which the cognitive effect of contradiction and elimination is achieved, and hence that the notion of a semantic constraint on relevance is more complex than the one proposed in my earlier work.

(Blakemore 2002, 128)

参照文献

- Blakemore, D. 1987. *Semantic Constraints on Relevance*. Oxford: Blackwell.
- Blakemore, D. 1988. 'So' as a constraint on relevance. *Mental Representations: The Interface between Language and Reality*. Kempson. R.M. (Ed.) Cambridge: CUP. 28-51.
- Blakemore, D. 1989. Denial and contrast: a relevance theoretic analysis of *but*. *Linguistics and Philosophy* 12. 15-37.
- Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*. Oxford: Blackwell. 武内道子, 山崎英一訳. 1994. 『ひとはどう発話を理解するか—関連性理論入門—』 東京: ひつじ書房.
- Blakemore, D. 2000. Indicators and procedures: *nevertheless* and *but*. *Journal of Linguistics* 36, 463-486.
- Blakemore, D. 2002. *Relevance and Linguistic Meaning: The Pragmatics and Semantics of Discourse Markers*. Cambridge: CUP.
- Blakemore, D. and R. Carston. 1999. The pragmatics of *and*-conjunctions: the non-narrative cases. *UCL Working Papers in Linguistics* 11, 1-20.
- Carston, R. 1998. The semantic/pragmatics distinction: a view from relevance theory. *UCL Working Papers in Linguistics* 10, 53-80.
- Carston, R. 2002. *Thought and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.
- Iten, C. 2000. *Although revisited*. *UCL Working Papers in Linguistics* 12. 65-96.
- 東森 純. 1992. BUT/YET/STILL and relevance theory. 『成田義光教授還暦祝賀論文集』 東京: 英宝社. 333-354.
- Rouchota, V. 1990. *But: contradiction and relevance*. *UCL Working Papers in Linguistics* 2. 441-475.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986/95. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell. 内田聖二, 中達俊明, 宗南先, 田中圭子訳. 『関連性理論—伝達と認知—』 1993/99. 東京: 研究社出版.

- Takeuchi, M. 1997. Conceptual and procedural encoding: cause-consequence conjunctive particles in Japanese. *UCL Working Papers in Linguistics* 9. 126-148. Reprinted in Rouchota, V. and A. Junker. (eds.) 1998. *Current Issues in Relevance Theory*. Amsterdam: John Benjamins. 81-103.
- 武内 道子. 2002. 「言語形式の明示性と表意」『英語青年』第 148 卷 第 4 号. 240-241. (2002 年 7 月号. 36-37.)
- 武内 道子. 2003a. 「関連性理論の意味論」『英語青年』第 148 卷 第 10 号. 638-639. (2003 年 1 月号. 38-39)
- 武内 道子. 2003b. 「AND と BUT : 関連性理論の意味論と語用論」『神奈川大学言語研究』第 25 号. 59-96.
- Wilson, D. and D. Sperber. 1993. Linguistic form and relevance. *Lingua* 90. 1-25.
- 山田 大介. 2002. 「関連性理論の意味論 : 二種の記号化」『神奈川大学大学院言語と文化論集』第 9 号. 131-152.
- 山田 大介. 2003. 「BUT と YET—関連性への意味論的制約」神奈川大学修士論文. 『神奈川大学大学院言語と文化論集』第 10 号に掲載予定.

否定疑問文に対する応答とその解釈

黒川 尚彦 (naokurokawa96@ybb.ne.jp)
(大阪大学大学院)

1. はじめに

- (1) (姿が見えなくなったネコを探している場面で)
- A : うちのネコ見かけませんでしたか？
B : () 見かけました。
 () 見かけませんでした。
- (2) A : Didn't you see Susan? (Wilson & Sperber 1988)
B : Yes, I did. / No, I didn't.
- (3) A : スザンに会いましたか？
B : はい、会いました。/いいえ、会いました。

目的：yes-no 疑問文に対する応答表現 yes/no とはい／いいえの選択、それらの意味、そしてそれらの解釈のメカニズムを関連性理論の立場から明らかにする。

認知語用論的課題

- ① Pope (1976)が指摘する日英それぞれの疑問応答システムは妥当であるか。
② 久野(1973)、中右(1984)の問題点を関連性理論ではどのように説明できるか。
③ yes/no、はい／いいえにエンコードされた意味は何か。

2. 先行研究

2.1 類型論的分析：Pope (1976)

English: Positivity-negativity answering system

- Yes goes with a positive answer and no goes with a negative answer.
 - But the choice is influenced by whether we wish to express agreement or disagreement with the questioner's assumption.
 - Even though negative yes-no questions usually seem to expect a positive answer, the fact that they are negative in form takes precedence in determining the form of the possible minimal answers.
- (4) A : Didn't he go?
B : No./Yes, he did.

Japanese: Agreement-disagreement answering system

Agreement, whether positive or negative, is expressed by *hai*, disagreement by *iie*.

- (5) A : Kyoo-wa atu-i des-u ne.
B : Hai (soo des-u ne)./Iie (atuku-wa arimasen)
- (6) A : Kyoo-wa atuku-na-i des-u ne.
B : Hai (soo des-u ne)./Iie kyoo-wa atu-i des-u.

(7) Pope の主張のまとめ

	Agreement	Disagreement		Agreement	Disagreement
Positive	yes	yes, tag	Positive	hai	iie
Negative	no	no	Negative	hai	iie

問題点

日本語の否定疑問文は2種類あり、それに応じた答え方がある（久野 1973, 中右 1984, 井上 1992）。

(8) 太郎から連絡はなかったか？（井上 1992）

(9) a. 太郎から（何も）連絡はなかったか？

うん、なかったよ。／いや、あったよ。

b. 太郎から（何か）連絡はなかったか？

うん、あったよ。／いや、なかったよ。

2.2 語用論的分析：久野(1973)

否定疑問文に対する答えは、質問者が肯定の答えを予測しているか、何らの予想もなく、中立的な質問を発しているかに関する被質問者の判断による。（この判断は語用論的。）

はい：あなたの予想は正しい

いいえ：あなたの予想は正しくない

(10) A：昨日、学校に行きましたか。

B：はい、行きました。

いいえ、行きました。

(11) A：昨日、学校に行ったんじやありませんか。

B：はい、行きました。

いいえ、行いませんでした。

(12)

肯定の答え 否定の答え

中立の疑問文

イイエ

ハイ

否定の答えを予期した否定疑問文

ハイ

(久野 1973: 184)

肯定の答えを予期した否定疑問文

イイエ

「はい」「いいえ」のどちらを用いるかを決めるのは聞き手が話し手の答えをどう解釈するかによる。ただしこの判断はイントネーションや非言語的コンテクストに基づくもので、構文法的に定義するのは困難。

(13) A：太郎に会いませんでした？（中立的質問イントネーション）

B：はい、会いませんでした。

*はい、会いました。

(14) A：太郎に会いませんでした？（文末の上昇イントネーションが(13)より早くスタートする）

B：はい、会いましたよ。

*いいえ、会いましたよ。

問題点¹

否定の答えを予期した疑問文であっても「いいえ」で答える場合がある。

- (15) 「もしもし。ご主人はまだお帰りになりませんか？」

「いいえ、まだです。」

(池上 1971, 松本清張『ゼロの焦点』)

2.3 意味論的分析：中右(1984)

文の意味内容：命題内容と非命題内容（モダリティ）で構成される

英語：質疑に含まれる命題内容の肯定／否定は、応答の仕方に左右しない。

左右するのは、質疑に含まれる命題内容の肯定命題（厳密には中立命題²）。

日本語：質疑に含まれる命題内容の肯定／否定は、応答の仕方に左右する。

命題内容全体（全体命題）を是認する場合「はい」系で、否認する場合「いいえ」系で応答する。

- (16) a. A : Didn't you see Susan? (=3))

B : Yes, I did. / No, I didn't.

b. You saw Susan.

- (17) A : 郵便屋さん、まだ来てませんか。

B : ええ、まだ来てませんよ。

いいえ、もう来ましたよ。

- (18) [郵便屋がまだ来ていない] か

- (19) A : 郵便屋さん、もう来たんじやありませんか。

B : ええ、もう来ましたよ。

いいえ、まだ来てませんよ。

- (20) [郵便屋がもう来た] のではないか

問題点

①どのような場合に否定疑問文の命題内容が肯定になるのか、または否定になるのか。（田野村(1988)参照。）特に極性項目が含まれない場合（例えば(21)）、命題内容が肯定か否定かをどのように決定するのか。

②池上(1971)の実験結果をどのように説明するのか。

- (21) 昨夜はおそらく起きていませんでしたか。

{はい／いいえ} 起きていました。

{23人／34人}

{はい／いいえ} 起きていませんでした。

{17人／6人}

3. 関連性理論による疑問文とその応答の分析

3.1 疑問文の意味

Wilson & Sperber (1988), Clark (1991: § 3.1)

- [I]nterrogatives are interpretively used to represent what the speaker regards as relevant answers.

¹ 田野村(1988)は、相手の考への妥当性に挑むような疑問文には久野の分析は当てはまらないと主張し、以下のような反例を挙げている。

(i) A : 「(1が素数でないと君は言うが得心できない。) 本当に1は素数じゃないか？」

B : 「はい、素数じゃありません。」（問い合わせの予期する答え：1は素数だ。）

しかしこの例はエコー疑問文と考えられ、久野に対する反例と見なすのは困難と思われる。

² 中右(1984)にあるように、中立命題は形式上肯定命題と同じである。

(Wilson & Sperber 1988)

- [I]nterrogative utterances, ..., are doubly interpretive: they interpretively represent a thought of the speaker's, which itself interpretively represents another utterance or thought. (ibid.)
- [A] thought is desirable only if it is relevant — that is, only if it is rich enough in cognitive effects (e.g. contextual implications) to be worth the individual's attention. (ibid.)

話し手が何を関連性のある答えとみなすのか、聞き手はどのようにして決めるのか？

[A] positive question such as [22] indicates that a positive answer would be, if anything, more relevant than a negative one, a negative question suggests that a negative answer would be, if anything, more relevant than a negative one³, ... (ibid.)

- (22) Did you see Susan?
(23) Didn't you see Susan?
(24) You saw Susan.
(25) You didn't see Susan.

3.2 応答の選択—Yes か No か、「はい」か「いいえ」か

英語の応答：疑問文が肯定か否定に関わらず、肯定命題を答える場合は Yes を、否定命題を答える場合は No が選択される。

- (26) A : Didn't you see Susan? (=3))
B1 : Yes, I did. (=I saw Susan.) / No, I didn't. (=I didn't see Susan.)
B2 : *Yes, I didn't. / *No, I did.
(27) A : Have you no bananas? (Pope 1976)
B : Yes. (=We have some bananas.) / No. (=We have no bananas.)

日本語の応答：疑問文から分かる話し手の思考、または疑問文の関連性のある答えに一致する場合「はい」が、一致しない場合「いいえ」が選択される。

- (28) 昨夜はおそらくまで起きていませんでしたか。 (=18))
(29) a. はい、起きていませんでした。 / いいえ、起きていました。
b. はい、起きていました。 / いいえ、起きていませんでした。

(29a)の場合、(30a)は(28)の関連性のある答え。(Pope の疑問応答システム通りの答え方。)

- (30) a. 昨夜はおそらくまで起きてていなかった。
b. (はい) 起きてていなかった。 / (いいえ) 起きていた。 (=29a))

(29b)の場合は、(28)から話し手の思考(=31a))を理解。(例：聞き手の目が赤く、夜更かししたのではないかと話し手が疑っているコンテキスト。)

- (31) a. 昨夜はおそらくまで起きていた。
b. (はい) 起きていた。 / (いいえ) 起きてていなかった。 (=29b))

³ 今井(2001: 180 注6)で、Wilson & Sperber (1988)の Yes-No 疑問文が肯定文である場合は肯定の答えが、否定文である場合は否定の答えが関連性を持つという主張は誤りであると述べている。しかしながら以下の引用から分かるように、彼らの主張は間違いとは言えない。(詳しい議論は Clark (1991: 151-2)を参照。)
this analysis should interact with consideration of relevance, and in particular with consideration of effort, ...
(Wilson and Sperber 1988) (my emphasis)

3.3 Yes と No、「はい」と「いいえ」の意味

(32) A : Didn't he go? (=4))

B : No (he didn't). / Yes, he did.

(33) A : Did John pass the exam? (adapted from Carston 2002: 163)

B1 : Yes.

B2 : He did.

B3 : Yes, he did.

(32)で、yes/no とともに応答の対象は先行発話の中立命題。no は tag が選択的だが、yes は義務的。ただし、この違いの原因は誤解を避けるために過ぎない。

(33)の B の答えはいずれも同じ真理条件的内容。しかし B3 は余剰的と感じられない (Carston 2002: 163)。よって yes は手続き的意味として先行発話の肯定命題の復元に貢献。(no も同様。)

(34) Yes の手続き的意味 : search space は関連性のある先行（中立）命題で、それを基にした肯定命題 (positive proposition) の活性化

No の手続き的意味 : search space は関連性のある先行（中立）命題で、それを基にした否定命題 (negative proposition) の活性化⁴

(35) VOICE: Come on. The question. [...] The question that is in the back of your throat, choking the blood to your brain, ringing in the ears over and over as you put it to yourself —

BILL PARRISH: The 'question' —

VOICE (urging): Yes, Bill. The question. (*Meet Joe Black*)

(36) 昨夜はおそらくまで起きていましたか。

(37) a. 昨夜はおそらくまで起きていなかった。

b. 昨夜はおそらくまで起きていた。

(38) a. はい、起きていませんでした。 / いいえ、起きていました。

b. はい、起きていました。 / いいえ、起きていませんでした。

応答が(38a)の場合：疑問文から分かる（処理労力の負担が小さいという意味で）関連性がある命題(=37a))に対する応答

応答が(38b)の場合：コンテクストから分かる（認知効果が大きいという意味で）関連性のある話し手の思考(=37b))に対する応答

(39) A : ジョンは試験に通りましたか。

B1 : はい。

B2 : 通りました。

⁴ 以下の例は先行発話が不完全文であり、応答の（イタリックの）No は語否定と考えられるかもしれない。

(i) QUINCE: [...] I want to talk to you about them next week.

PARRISH: Next week?

QUINCE: Yeah. Or the week after. [Quince sees Parrish hesitate.] No good?

PARRISH: No, anything is possible. (*Meet Joe Black*)

このような例はここでは扱わないものとし、今後の課題としたい。

B3：はい、通りました。

英語の場合と同様に、B の発話はいずれも同じ真理条件的内容だが、B3 は余剰的と感じられない。よって、「はい」は手続き的意味として命題の復元に貢献。（「いいえ」も同様。）

- (40) 「はい」の手続き的意味 : search space は関連性のある命題で、それに対する好意的態度 (favourable attitude) を活性化
「いいえ」の手続き的意味 : search space は関連性のある命題で、それに対する非好意的態度 (unfavourable attitude) を活性化

- (41) A : わりあい小さいけど中は広いんだよ。 (奥津(1989)から一部修正)
B : ええ (はい)。

- (42) A : コーヒーをもう1杯いかがですか。
B : いいえ、結構です。

(41) : 関連性のある命題「わりあい小さいが中は広い」

(42) : 関連性のある命題「B がコーヒーをもう1杯飲む」

4. 日英間の相違点

英語・日本語の理解に関する仮説

英語 : positivity-negativity sensitive (肯定命題は無標、否定命題は有標。)

聞き手は中立命題とそれに対する肯定・否定という態度を理解。

日本語 : metarepresentation⁵ sensitive (話し手自身の思考は無標、それ以外に帰する思考は有標。)

聞き手は命題とそれが誰に帰するかを（高次表意⁶として）理解。

so と「そう」：(中右 1984)

so : 肯定命題の代用 (not と対照的)

そう : 肯定命題・否定命題のいずれの代用にもなる

- (43) A : Do you think he can come tonight?

B : a. I think so.

b. I think not.

- (44) A : 今夜彼が来れると思いますか。

B : a. そう思います。 (=今夜彼が来れると思います。)

b. そう思いません。 (=今夜彼が来れると思いません。)

- (45) A : 今夜彼が来られないと思いますか。

B : a. そう思います。 (=今夜彼が来られないと思います。)

b. そうは思いません。 (=今夜彼が来られないとは思いません。)

⁵ メタ表示とは、表示の表示であり、低次表意が埋め込まれている高次表意のこと。(Wilson (2000, 2002), Sperber (2000))

⁶ 高次表意 (higher-level explicature) とは、発話の命題形式を埋め込む発話行為や命題態度を表す表意のこと。(Wilson & Sperber (1993), Blakemore (1992), Carston (2002)など)

話し手以外による発話であることを示すマーカー「って」：Itani (1998)

(46) A : What did Mary's teacher say? (Adapted from Itani (1998))

B : She is smart.

(47) Mary's teacher says that Mary is smart.

(48) A : メアリーの先生は何と言われましたか。

B : メアリーは賢いって。／メアリーは賢い。

(49) メアリーは賢いとメアリーの先生は言った。

「たい／たがる」：Uchida (2002)

(50) a. Tom: I want to marry Jill.

b. Bill: Tom wants to marry Jill.

(51) a. トム：私はジルと結婚したい／*したがっている。

b. ビル：トムはジルと結婚*したい／したがっている。

(52) a. [Tom says [Tom wants to marry Jill.]]

b. [Bill says [Tom wants to marry Jill.]]

5. 結語

① Pope (1976)が指摘する日英それぞれの疑問応答システムは妥当であるか。

英語・日本語ともに応答システムそのものは妥当。

② 久野(1973)、中右(1984)の問題点を関連性理論ではどのように説明できるか。

Yes-No 疑問文に対する応答は、先行発話（=疑問文）から分かれる（処理労力の負担が小さいという意味で）関連性がある命題、またはコンテキストから分かれる（認知効果が大きいという意味で）関連性のある話し手の思考に対する応答。

③ yes/no、はい／いいえにエンコードされた意味は何か。

yes : search space は関連性のある先行（中立）命題で、それを基にした肯定命題の活性化

no : search space は関連性のある先行（中立）命題で、それを基にした否定命題の活性化

はい : search space は関連性のある命題で、それに対する好意的態度 (favourable attitude) を活性化

いいえ : search space は関連性のある命題で、それに対する非好意的態度 (unfavourable attitude) を活性化

References

Blakemore, Diane (1992) *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*, Blackwell, Oxford.

Blakemore, Diane (2002) *Relevance and Linguistic Meaning: The Semantics and Pragmatics of Discourse Markers*, Cambridge University Press, Cambridge.

Bolinger, Dwight (1978) "Yes-No Questions Are Not Alternative Questions," in H. Hiz (ed.) *Questions*, 87-105, D. Reidel Publishing Company, Dordrecht.

Carston, Robyn (2000) "Explicature and Semantics," *UCL Working Papers in Linguistics* 12, 1-44.

Carston, Robyn (2002) *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*, Blackwell, Oxford.

Clark, William (1991) *Relevance Theory and the Semantics of Non-declaratives*, Ph.D. Thesis, University College London, London.

- Hudson, Richard, A. (1975) "The Meaning of Questions," *Language* 51, 1-31.
- 池上一彦 (1971) 「日・英語における否定疑問文とその応答」『英語教育』 Vol.20 No.9, 68-71.
- 今井邦彦 (2000) 『語用論への招待』大修館書店, 東京.
- 井上優 (1990) 「「ダロウネ」否定疑問文について」 『日本語学』 Vol.9 No.12, 28-35.
- 井上優 (1992) 「否定疑問文に対する「有標の応答」」 『日本語学』 Vol.11 No.4, 125-131.
- Itani, Reiko (1998) "A Relevance-based Analysis of Hearsay Particles: With Special Reference to Japanese Sentence-final Particle *Tte*," in R. Carston and S. Uchida (eds.) *Relevance Theory: Applications and Implications*, 47-68, John Benjamins, Amsterdam.
- Kontra, Miklós (1981) "On English Negative Interrogatives," in J. E. Copeland and P. W. Davis (eds.) *The Seventh LACUS Forum 1980*, 412-431, Hornbeam Press, Columbia.
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店, 東京.
- Ladd, D. Robert (1981) "A First Look at the Semantics and Pragmatics of Negative Questions and Tag Questions," *CLS* 17, 164-171.
- 中右実 (1984) 「質疑応答の発想と論理」 『日本語学』 Vol.3 No.4 13-20.
- 奥津敬一郎 (1989) 「応答詞「はい」と「いいえ」の機能」 『日本語学』 Vol.8 No.8, 4-14.
- Pope, Emily (1976) *Questions and Answers in English*, The Hague, Mouton.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Sperber, Dan (2000) "Metarepresentations in an Evolutionary Perspective," in D. Sperber (ed.) *Metarepresentations: A Multidisciplinary Perspective*, 117-138, Oxford University Press, New York.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1986/1995) *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell, Oxford.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1997) "The Mapping between the Mental and the Public Lexicon," *UCL Working Papers in Linguistics* 9, 107-125.
- 田野村忠温 (1988) 「否定疑問文小考」 『国語学』 152, 16-31.
- 田野村忠温 (1991) 「疑問文における肯定と否定」 『国語学』 164, 1-14.
- Uchida, Seiji (2002) "Metarepresentations in Japanese," Paper read at Gakushuin University Workshop on Cognition and Communication (14 Dec. 2002).
- Wilson, Deirdre (2000) "Metarepresentation in Linguistic Communication," in D. Sperber. (ed.) *Metarepresentations*, 411-448, Oxford University Press, Oxford.
- Wilson, Deirdre (2002) "Relevance Theory: From the Basics to the Cutting Edge," ICU Open Lectures on Cognitive Pragmatics, held at ICU (March 26 to March 29, 2002).
- Wilson, Deirdre and Dan Sperber (1988) "Mood and the Analysis of Non-declarative Sentences," in J. Dancy, J. Moravcsik and C. Taylor (eds.) (1988) *Human Agency: Language, Duty and Value*, 77-101, Stanford University Press, Stanford CA. (Available at <http://www.dan.sperber.com/mood.htm>)
- Wilson, Deirdre and Dan Sperber (1993) "Linguistic Form and Relevance," *Lingua* 90, 1-25.

語用化（pragmaticalization）とは何か。 ～接続助詞「ものの」の用法における通時的考察～

田辺和子

日本女子大学文学部

1.0 はじめに

2.0 接続助詞「ものの」の用法の変遷

2.1 11世紀 源氏物語より

2.2 18世紀 洗落本より

2.3 現代 報道文・小説より

3.0 接続助詞「ものの」の用法変化の対照比較

3.1 源氏物語原文「ものの」から見た現代語訳

3.2 現代語訳文「ものの」から見た源氏物語原文

4.0 現代語「ものの」における譲歩性の分析

4.1 「ものの」から「にもかかわらず」への置き換え

4.2 「にもかかわらず」から「ものの」への置き換え

5.0 「ものの」の用法の変遷から考える「語用化」

6.0 まとめ

1.0 はじめに

本研究の目的は、言語変化の要因である「語用化（*Pragmaticalization*）」とは何か定義することにある。「語用化」は、「文法化（*Grammaticalization*）」に比較して、どのような言語現象がそれに当たるのか、未だ十分明確に定められていない。Briton (2002)は、*grammaticalization* と並列させて、*pragmaticalization* という用語を使用しているが、その定義については、*grammaticalization* に常に伴うものという規定にとどまった。そこで、本研究では、接続助詞「ものの」に焦点をあて、その譲歩表現の創生・確立の課程を考察することによって、「語用化」を歴史的語用論（Historical Pragmatics）の立場から明らかにしたい。

接続助詞「ものの」に着目した理由は、Traugott & König (1991)が、文法化の代表例として *while* が対比の意味から譲歩的意味（concessive meaning）を獲得する過程を挙げていることを鑑み、*while* に近い意味機能を持っている語としては、日本語では接続助詞「ものの」が該当すると考えたからである。

研究の方法としては、源氏物語の原文と訳文を比較しながら、最初に原文の「ものの」が訳文に置いてどのように訳されているか調べ分類した。次に、原文では使われていない訳文の「ものの」がどのような語用論的環境において訳者によって使用されたか分析した。

さらに、現代語の「ものの」の譲歩性の特徴を「にもかかわらず」との用法と比較することによって明らかにし、「ものの」の「語用化」の過程を考察した。

2.0 接続助詞「ものの」の用法の変遷

2.1 11世紀 源氏物語より

(1) あはれとおぼしみべき人のけはひなれば、つれなくねたきものの、わすれがたきにおほす。

‘冷たくてしゃくだけれど’

(日本古典文学全集『源氏物語』1巻 夕顔: 220)

(2) けそうだつすじなく、こころやすきものの、さすがにのたまひたはぶれなどして、

‘色恋沙汰抜きで気楽だというものの’

(日本古典文学全集 1巻 末摘花: 371)

2.2 18世紀 洒落本より

(3) 一つ受けは受けたものの、是を飲んではたしかに降参せずはなるまい

(徳川文藝類聚 第六巻 歌舞伎・傾城金秤目 三: 144)

(4) 初手のうちはにぎやかでいいようなものの、いざござやもめができる

(近代日本文学大系 第22巻 滑稽本集 花暦八笑人五編下: 236)

2.3 現代 報道文より

(5) 母乳はダイオキシンがふくまれているものの、乳児は、それを飲み続ければ危険はない。

(1998.7.24 NHK ニュース)

(6) 自転車のライトの胴体部分を型抜きする職場に回されたものの、職場の活気に目を回してすぐに行

かなくなってしまった。

(2003.8.8 日本経済新聞)

3.0 接続助詞「ものの」の用法変化の対照比較

3.1 源氏物語原文「ものの」における現代語訳の用法分類

源氏物語の中の「ものの」の例文14例を、現代語訳二種（日本古典文学全集『源氏物語』1-6、小学館刊 および 濑戸内寂聴訳『源氏物語』講談社刊）において、その現代語訳について調べ、以下の3グループに分類した。

第一グループ：原文の「ものの」がいずれも他の表現に置き換えられている。

第二グループ：原文の「ものの」が、そのまま生かされている訳文と、そうでないものに分かれる。

第三グループ：原文の「ものの」が、両方の訳文に生かされている。

3.1.1 第一グループ

(7) の夜の澄める月に雪の光あひたる空こそ、あやしう色なきものの、身にしみて、
この世の外のことまで思ひ流され、おもしろさもあはれさも残らぬをりなれ。

(日本古典文学全集 2巻 朝顔 : 480)

訳文 (7) -1

冬の夜の済んだ月に雪の映えあつてゐる空が、色はないけれど不思議に身にしみて、
来世のことにもまでも思いを馳せばにはおられないというわけで、見た目の美しさもしみじみとした情
感も余すところなく感じられる折です。 (同上)

訳文 (7) -2

四季折々の季節の中でも、人が心を惹かれる花や紅葉の盛りよりも、冬の夜の澄み渡つた月の光に雪
の照り映えて見える空こそ、不思議に色のない眺めが身にしみて、あの世のことまでが思いやられ、
興趣も情緒も尽きないものです。 (瀬戸内 4巻 : 70)

第1グループの内訳 (6例)

- | | |
|------------|-------------------|
| ①色なきものの | a) 色はないけれど |
| | b) (特に逆接表現は使わない) |
| ②憎きものの | a) いまいましい気持ちではあるが |
| | b) いまいましいと思いながらも |
| ③をかしきものの | a) おかしみを感じられるが |
| | b) おかしくお思いになりながらも |
| ④おこがましきものの | a) 思いながらも |
| | b) (特に逆接表現を使わない) |
| ⑤澄みたるもの | a) 清楚ではありながら |
| | b) 感じたけれど |
| ⑥言ひつるものの | a) 言つておいた口の下から |
| | b) 話していたのに |

3.1.2 第二グループ

(8) 夜昼、あたり去らぬ耳がしがましさを、うるさきもののかくしに、尚侍の殿も思したり。

(日本古典文学全集 5巻 竹河 : 56)

訳文 (8) -1

夜も昼も、あたりを去らず何かと言い伝えてよこす騒がしさを、煩わしくはあるものの
気の毒のことと尚侍の殿も思つていらっしゃる。 (同上)

訳文 (8) -2

夜昼のけじめもなく、うるさくお耳に入れるのが、煩わしいながらも、またお氣の毒なことと、玉鬘の君
は思つていらっしゃいます。 (瀬戸内 8巻 : 9)

第2グループの内訳 (5例)

- | | |
|-------------|-----------------------------------|
| ①うるさきものの | a) わづらわしくはあるものの
b) わづらわしいながらも |
| ②心やすきものの | a) 気楽だというものの
b) それでも |
| ③つれなくねたきものの | a) 憎い女と思うものの
b) 憎らしい女だと恨む一方では |
| ④らうらうしきものの | a) かわいらしきものの
b) かわいらしきけれど |
| ⑤おほどかなるものの | a) 気高くおおらかではあるものの
b) 大様ではありながら |

3.1.3 第三グループ

(9) かの大式の北の方上りて驚き思へるさま、侍従が、うれしきものの、いましばし待ちきこえざりける心浅さをはづかしう思へるほどなどを、

(日本古典文学全集 2卷 蓬生:345)

訳文 (9) -1

あの大式の北の方が都に上って驚きあわてた話や、侍従が、うれしくあるものの、もうしばらく我慢してお待ちしなかった思慮の浅さを恥ずかしく思っている話などを、

(同上)

訳文 (9) -2

あの大式の北の方が都に上って来て驚いた話とか、侍従が、姫君のお幸せなご様子は嬉しく思うものの、あの時、もうしばらく辛抱してお待ち申し上げなかつた自分の心の浅はかさを、身にしみて悔やんだことなど、

(瀬戸内 3卷:207)

第3グループの内訳 (3例)

- | | |
|----------|-------------------------------|
| ①うれしきものの | a) うれしくはあるものの
b) うれしく思うものの |
| ②つらきものの | a) うらめしく思うものの
b) 恨めしく思うものの |
| ③憎きものの | a) 憎いとは思うものの
b) 憎らしく思うものの |

3.2 現代語訳文における「ものの」から考察する源氏物語原文

(10) いときわぎわしうものしたもうあまりに、深き心を尋ねずもて出でて、心にもかなわねば

(日本古典文学全集 14巻 篠火:247)

訳文 (10) - 1

深い事情も調べないで引き出してきて、それがとても気に入らないものとなると、 (同上)

訳文 (10) - 2 谷崎訳

深い事情も調べずに引き取ってはみたもの、気に入らないで、 (中公文庫 3巻:63)

訳文 (10) - 3 円地訳

深い事情を詮索もなさらずに今姫君を迎えてはみられたもの、それが気に入らないとなると、あんな世間体の悪いことも (新潮社 5巻:71)

(11) かのみやにも、さこそたけうのたまひしか、いみじう思しわぶれど、たえて訪れず。

(日本古典文学全集 14巻 真木柱:381)

訳文 (11) - 3

あの式部卿宮家でも、あれほど強いことをおっしゃたものの、今となってはどうしてよいか困っていらっしゃるが (同上:382)

訳文 (11) - 2 谷崎訳

あの時はみんなに強いことを仰せられましたものの、今となってはひどく困っていらっしゃいましたが、 (中公文庫 3巻:193)

訳文 (11) - 3 円地訳

式部卿の宮も、いったんはあのように強くおっしゃったもの、内心大そう思い悩んでおいでになる。 (新潮社 5巻:216)

4.0 現代語「ものの」における譲歩性の分析

4.1 「ものの」から「にもかかわらず」への置き換え

4.1.1 文学作品から

(12) 屋敷へは忍び込んだもの これから先はどうしていいかわからない

(?) 屋敷へは忍び込んだにもかかわらず 『我輩は猫である』 1993:5)

(13) 無愛想に生返事をしたもの ここではかなり拘泥した

(?) 生返事をしたにもかかわらず 『暗夜行路』 新潮文庫 2003:27)

(14) 儀礼的に一杯すすめはしたもの、すぐに一人で飲みかつ食い始めながら

(△) 一杯すすめはしたにもかかわらず

(『「雨の木」を聴く女たち』1996:34)

4.1.2 報道文から

(15) 日本航空のボーナス支給の時期に絡み労組に申し入れて、・・・

夏は支給するものの、冬は10%減とする。 (2003.6.6. NHKニュース)

(?) 支給するにもかかわらず

(16) 香港でのSARSの流行は少しおさまったものの、まだ安心とはいえません。

(△) 少しおさまったにもかかわらず

(2003.5.15 朝日子ども新聞)

(17) 「中立を国是として言うにもかかわらず、・・・」「外交文書を要求したり、手に入れたりした事実はない」と弁明したものの、ハロネン大統領の側近が「・・」と証言。

(○) と弁明したにもかかわらず

(2003.6.20 朝日新聞)

4.2 「にもかかわらず」から「ものの」への置き換え

(18) 調べでは、長崎容疑者は、1日午後7時45分ごろ、自分の軽トラックの助手席から女性が飛び降りて後頭部などを打ち、意識不明の重体となったにもかかわらず、

(?) なったものの

女性の手当でもせず置き去りにした疑い。

(<http://www.mainichi.co.jp/women/news/200309/03-03.html>, 2003/09/06)

(19) 面接官の教授が、欠席した受験生の面接点記入欄に「欠」と入れるところを、次の受験番号の受験生の点数を誤って記入。次の番号の受験生は面接を受けたにもかかわらず、「欠」が記入された。

(△) 受けたものの

(<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20030515-00000413-yom-soci>, 2003/05/16)

5.0 「ものの」の用法の変遷から考える「語用化」

1) 形態的・構文的变化

空間的対比から時間的対比を経て、従属節化を強めることで譲歩性を高めてきた。

2) 譲歩性の創生

逆接の接続助詞「にもかかわらず」と比較すると、前項節と後項節の内容における対立性は、低い。そして、前項の事項の継続性が高く、前項と後項の内容が一連の繋がりを持った出来事であるという前提がある。

3) 聞き手の推論への依存

聞き手が前項の内容から考える推意を、後項の内容で「裏切る」効果によって譲歩性が創生される。

4) 伝達機能の明確化

近代から現代語において、文学作品では、躊躇・後悔・心変わりという主観的意識を伝達するのに多く使われるようになった。一方、報道文では、物事の途中経過の報告という目的で使用されることが多い。

6.0 まとめ

「語用化」というのは、ある語における使用条件や使用環境が、明確化・特定化する過程を示す。それは、コンテキストに依存する傾向（contextualization）を強めることでもある。その結果、話し手のそれぞれの場面の理解によって、意味や機能が決定されることになる。

脚注

ⁱ Kurylowicz (1965: 52) は、“Grammaticalization consists in the increase of the range of a morpheme advancing from a lexical to a grammatical or from a less grammatical to a more grammatical status, e.g. from a derivative formant to an inflectional one.”と定義している。

資料

- 日本古典文学全集『源氏物語』 阿部秋生、秋山虔、今井源衛 訳 小学館 昭和 50 年
『源氏物語』 谷崎潤一郎訳 中央公論社 1991 年
『源氏物語』 円地文子訳 新潮社 昭和 47 年
『源氏物語』 濑戸内寂聴 講談社 1998 年
『近代日本文学大系』 国民図書 昭和 3 年
『徳川文藝類聚 6 卷』 廣谷国書刊行会 大正 14 年
「我輩は猫である」『夏目漱石全集 1 卷』岩波書店 1993 年
『暗夜行路』 志賀直哉 新潮社 2003 年
『「雨の木」を聴く女たち』大江健三郎 新潮社 1996 年

参考文献

- Brinton, Laurel J. (1996) *Pragmatic Markers in English*, New York: Mouton de Gruyter
_____(2002) The handout and lecture in *Organization in Discourse II: The Historical Perspective*, 10 August, Turk, Finland.
Bybee, Joan (1994) *The Evolution of Grammar*, The University of Chicago Press,
Chicago
Fleishman, Suzanne (1990) Philology, linguistics and the discourse of the medieval text.
Speculum 65. 19-37
Halliday, M.A.K. (1970) Language structure and language function. *New horizons in*

-
- linguistics*, John Lyons (ed), 140-65. Harmondsworth, Penguin.
- 石垣謙二 (1955) 『助詞の歴史的研究』岩波書店
- Jucker, Andreas H. (ed). (1995) *Historical Pragmatics*, , Amsterdam: John Benjamins.
- Kuryłowicz, Jerzy. 1965. "The evolution of grammatical categories." In *Esquisses Linguistiques II*. Kurylowicz(ed.) 1975:38-54. Munchen: Fink
- 小泉保 (1987) 「譲歩文について」『言語研究』91:1-14
- 此島正年 (1966) 『国語助詞の研究—助詞の素描—』桜楓社
- König, E & Auwera, J. (1988) 'Clause integration in German and Dutch conditionals, Concessive conditionals and concessives', Haiman, J. & Thompson, S. A, (eds). *Clause combining in Grammar and discourse*, John Benjamins.
- Levinson, S.C. (1979) Activity types and language. *Linguistics* 17:356-99.
- Marmaridou, S.S.A. (2000) *Pragmatic Meaning and Cognition*. Amsterdam: John Benjamins.
- 松村明 (編) (1969) 『助詞助動詞詳説』学燈社
- Okamoto, Shigeko (1996) Pragmaticization of meaning in some sentence-final particles in Japanese. In: Masayoshi Shibatani and Sandra A. Thompson (eds.). *Topics in Semantics and Pragmatics*. Philadelphia/Amesterdam: John Benjamins, 219-246.
- Sadler Misumi (2002), From a Pragmatic marker to a direct object marker, *Studies in Language* 262:2, 243-281.
- Sperber, D. & D. Wilson (1988) *Relevance:Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
- 田辺和子 (2001) 「接続助詞「ものの」の文法化に伴う譲歩的意味の創出について」日本女子大学文学部紀要 第50号
- Tanabe, K. (2003) ' Pragmaticalization of the Japanese connective particle MONONO, the handout in The XVIth International Conference on Historical Linguistics, Copenhagen.
- Torsten Leuschner (1998) "At the boundaries of grammaticalization", Ramat, A. & Hopper. P. (eds). *The Limits of Grammaticalization* John Benjamins Publishing Company, Amsterdam/Philadelphia
- Traugott, E.C. & König, E. (1991) "The semantic-pragmatic of grammaticalization revisited", *Approaches to Grammaticalization*, Traugott & Heine (eds), John Benjamins.
- 湯沢幸吉郎 (1960) 『江戸ことばの研究』明治書院

文末思考動詞「思う」の伝達機能

宇津木愛子
慶應義塾大学

一般に文末思考動詞と呼ばれる「思う」に関しては、人称やアスペクトの観点から、または同類の動詞群に属するとされる「考える」との比較によって、多くの研究がなされている。しかし、いまだ解明されていない点も多く残されているのも事実である。本稿は、動詞「思う」の包括的分析を試みるものではなく、これまでに触れられなかった点を記述することで、「思う」の考察を一步進めることを目標とする。

1. 三上章(2002)の説

まず、「思う」が伝達機能を有していないという主張を見てみたい。三上章(2002)は、「と思う」は、あくまでも思わぐの叙述であり、伝達には無関係であるという立場をとる。その根拠として以下の例を挙げている。

(1) 伝達表現である丁寧体につかぬ

*一ですと思う

(2) 伝達にかかるモーダルにつかぬ

*一らしいと思う

(3) 命令文や伝達の助動詞につかぬ

*一ねと思う

「思う」が丁寧体に後続しないことは、山岡(2000)らも指摘しているが、三上の特徴は、従って「思う」は伝達とは無関係という結論を導く点である。

また、三上の観察とは関連していないかのように見えるが、森山卓郎(1997)による「独り言」の研究が示唆する興味深い現象がある。森山が彼の文末思考動詞の研究(1992)の中でも明示していることであるが、以下の理由で文末に「思う」のつく文は独り言として成立しない：

(4) (「と思う」は) 事実を報告する情報(事実的情報)について不確実を表わすことも、主観的判断を表わす情報(意見)について、個人的意見であることを強調する場合もあるが、いずれも、発話の瞬間での話し手の思考作用そのものを取り上げることになっている。思考のモニターという性質上、後述する終助詞共起の如何に拘わらず独り言にはならない。

文末思考動詞である「思う」自体は、以上の指摘からも分かるように、独り言として発話されることは、一般には考えられない。そして更に、森山(1997)が用いている例文を観察すると、ある現象に気がつく。森山が、独り言として成立する例として挙げている文には、すべて「思う」を付与することができるが、独り言として成立しないとされる例には、例外なく、「思う」を付与することができない。一部の例を以下に示す。

- (5) 難しいなあと思う
- (6) 帰ろうと思う
- (7) * (話者が聞き手に向かって)
この御恩は必ずお返しすると思う
- (8) * 私は帰るつもりだと思う

本稿においては、上に示した共起制限を基に、以下の説明を試みたい。

(9.) 文末思考動詞「思う」は、既に伝達要素を含む文とは共起せず、伝達を目的とせぬ文(独り言など)と共に起して、その文に伝達要素を付与する。

この説明は、全く概念化されていない、つまり発話に対しての聞き手を想定していない感動詞の例などを見ると理解しやすい。

(10) あれっと思った。

「あれっ」とか「おやっ」などの感動詞は独話であり得るが、(10)のように「思う」がつくと、聞き手を想定しての、つまり伝達機能を担った発話になる。また、森山(1997)において独り言として解釈できる文末形式の例として挙げられている「なあ」に「思う」がついた発話は、普段耳にする対話の中で頻繁に用いられる。以下の発話は、あるテレビの対話番組からの例である。

- (11) 優勝してほしいなあと思います。
- (12) 早く会えるといいなあと思います。
- (13) 不思議だなあと思っています。

(11)–(13)の文末形式は、明らかに伝達表現として機能している。

森山(1992, 1997)の研究から導き出せる「思う」の共起制限の観点から三上説を考察してみると、既述の(1)–(3)は、三上が言うように、いずれも伝達を明示する要素に「思う」がついたものである。((2)の「らしい」に関しては、仁田(1992)らによって、その「伝聞の対話性」が指摘されている。)本稿においては(9)で示した立場をとり、従って、「思う」は伝達文と共起しないことから「思う」が伝達機能を持たぬという論を導く三上の立場を否定する。

2. 2層の発話主体の表出

三上(2002)が議論の対象にしなかった、独話文に「と思う」がついた文末形式が伝達機能を与えられる例をもう少し考えていくたい。既に上で例に挙げたが、本来は伝達機能を持たぬ感動詞「なあ」の場合を考えたい。例えば、

(14) すごいなあと思います

と言ったとする。話者の主観の表出は、まず「なあ」という助詞に表れ、またそれと同時に、動詞「思う」の主語としての話者の表出がある。「なあ」によっても「思う」によっても、話者の心的態度が表出されるわけである。ここで注目したい点は、前者においては、話者の存在は語の中に内在しており、話者を主語として明示して「私はすごいなあ」とすることはできない。ところが、「思う」の方には、以下で示すように、「私」という一人称主語を顕在させることが可能である：

(15) 私はすごいなあと思います。

つまり、このタイプの表現においては、顕在化させられぬ、換言すれば、概念化されぬ「私」と、それと同時に、概念化が可能な、つまり主語として明示できる「私」の両者が共存している。文法上、かつ概念上、異なる話者「私」が関わっていることが、このタイプの表現の特徴であると提言したい。

ここでは、タイポロジカルな考察にまで発展させることは避けるが、このような2層の発話主体の関わりというものが、日本語の本質的な特徴を考える上で重要なことが想定できる。

また、この特徴はモーダルに「と思う」がついた場合にも言えることであろう。「–だろうと思う」に関して、仁田(1991)は「だろう」はそれ自体が思考内容を構成するが、これに対して「と思う」は思考内容の外側にあり、それを対象化する表現であると指摘している。これは換言すれば、「だろう」の方は、話者の推量といふ思考内容を直接的に、いわば、むきだしに表示するものであり、これに対して「思う」の方は、話者の思考内容、もしくは心的内容を対象化、つまり客体化して表示するものであると言える。仁田の

指摘は、話者が発話に対して性質を異にする2種の関わりを持ち得ることを示唆するものであり、また「思う」が話者の心的内容を対象化、客体化するものであるという点で間接的ではあるが、「思う」の伝達機能に通ずるものであり興味深い。

3. 「思う」の付加による人称制限の解除：モーダル的役割？

中右(1979)においては、思考動詞「思う」は発話行為時における話者の思考活動を表現するという理由から、「思う」をモダリティー表現と認定している。一方、宮崎(2002)はモーダルの「だろう」を「と思う」に置き換えられない例を挙げ、中右の認定には無理があることを示し、また、森山、仁田、工藤(2000)においては、「思う」は一般的のモダリティとは異なり、思考行為の行為者である一人称の「私」が文中に顕在可能な点で「思う」をむしろ本動詞に近いとしている。

「思う」がどのような語、もしくは補文構造と共に起しているかを考慮せずに、モダリティー表現であるか否かを論することは意味のことないう�う。例えば、「母を思う」のように直接目的語をとる場合を考えると確かに本動詞に近い。また、過去形「思った」があることなども、一般的モダリティー表現とは異なる。「暫く考えてみる」や「考えさせて下さい」があるのに対して、「暫く思ってみる」や「思わせて下さい」が不自然な点などモーダルとは捉え難い点も多くある。

「思う」の意味要素のみを考えモダリティー表現であるとする中右(1979)の認定には無理があるが、本稿は「思う」がモーダルか否かを議論することを目的とせず、「思う」が共起する補文構造に目を向け、どのような場合にモダリティの特徴を示すのであるかを考えたい。

山岡(2000)は、「心から悲しいと思う」は、「心から悲しい」という補文だけの場合と情報量は殆ど変わらない情意表現であるとしている。この解釈は、「悲しい」と感じているのが話者であるときにのみ成立するものであると提言したい。「心から悲しい」だけの場合だと、「悲しい」という感情形容詞の特徴として、敢えて明示されない主語は話者と解釈される。ところが、「と思う」が続くと、「悲しい」の主語は話者以外でも可能になってくる。例えば、以下の通りである。

(16) 彼は悲しいと思う

「思う」の役割は、共起する要素によって異なることは、先に提言したが、(16)から見られる現象から、「思う」が感情形容詞についていた場合は、モーダル

に近い働きをするという、更なる提言をしたい。

感情形容詞「悲しい」は、言い切りで使われる場合、主語として解釈される感情主体は話者である。ところが、モーダリティ表現をつけて、

- (17) 悲しいようだ
- (18) 悲しいだろう

とすると、一転して「悲しい」の感情主体は話者以外の人になる。つまり(17)(18)のようなモーダル表現は、話者以外の感情を話者側から捉えた表現であるとされている。このようなモーダルの特徴が(16)の例にある「悲しいと思う」にも当てはまるのではないだろうか。

山岡(2000)が指摘するような、情報量は変わらないという現象は恐らく、「悲しく思う」のように、感情形容詞の連用形に「思う」がついた時に言えることであろう。「悲しいと思う」のように、終止形に「思う」がついた場合は、上で概観したように、感情主体が話者以外である解釈が可能になり、伝達意味内容に変化が生じることが考えられる。「悲しい」の感情主体と解される主語が一人称単数で表わされるという制限がなくなるという点で、モーダルの働きに類似したものがあるというのがここでの試案である。これは、「うらやましい」「くやしい」などの他の感情形容詞にも言えることである。

また、本稿のテーマである伝達機能という点も考慮し、「心から悲しく思う」は「心から悲しい」という補文に伝達機能と同時にモーダル機能が加わったものであるという説明を試みたい。

以上、一般に文末思考動詞と呼ばれる「思う」に関して、これまでに試みられなかった眺めかたをしてみた。多くのご助言をいただき、今後の研究の基盤にさせていただければと願う次第である。

参考文献

- 高橋圭介(2002)「類義語『思う』と『考える』の意味分析」
『日本語文法』pp. 190-210.くろしお出版.
- 中右実 (1979)「モダリティと命題」『英語と日本語』223-250.
くろしお出版。
- 仁田義雄 (1991)「日本語のモダリティと人称」ひつじ書房。
- 森山卓郎 (1992)「文末思考動詞「思う」をめぐってー文の意味
としての主観性・客観性」『日本語学』11-8 pp.105-116.
明治書院。
- 森山卓郎 (1997)「『独り言』をめぐってー思考の言語と伝達の
言語」『日本語文法・体系と方法』173-188.ひつじ書房.
- 三上章 (2002)「構文の研究」くろしお出版.
- 宮崎和人、安達太郎、野田春夫、高梨信乃 (2002)「モダリティ」
くろしお出版.
- 山岡政紀 (2000)「日本語の述語と文機能」くろしお出版.

義務表現に関する状況について

長友俊一郎
(関西外国語大学大学院)

0. はじめに

本発表では、*must*、*should*、*had better* をそれぞれの表現で想起される状況に着目して分析し比較する。まず、第1節では、本発表で援用する先行研究を概観する。第2節では、*must* の分析を出発点とし、上記の表現では2つの状況が想起され、それらの状況が1つに組み合わせられることを指摘する。第3節では、それぞれの表現で想起される状況の詳細を比較する。また、それぞれの表現を用いて遂行される言語行為(speech act)についても言及していく。

1. 先行研究

本節では、本発表で援用する英語法助動詞の分析の先行研究と Lakoff (1971) と Sweetser (1990) の or と and に関する先行研究を素描する。

1.1 Talmy (1988, 2000)、Sweetser (1990)、Johnson (1987)

Talmy や Sweetser は、「力のダイナミクス」(force dynamics)という認知言語学的概念を用いて英語法助動詞の分析を行う。力のダイナミクスとは、力の行使、行使された力への抵抗、力に対する障害物、障害物の除去という関係である。Johnson (1987) はこの力のダイナミクスの概念を、ヒトが経験により抽出する抽象的な理解/知識の鉄型とされる「心的図式」(image schema)を用いて提示する。(1)は、義務的 *must* に関与するとされる「強制の心的図式」(compulsion schema)である。

(1) F → □ → (Johnson 1987: 45)

F は力を行使する実体(entity)、四角はその力を受ける実体を表す。Talmy は前者の実体を「力の主体」(または、「拮抗子」)(antagonist)、後者を「力の客体」(または「主動子」)(agonist)と呼ぶ。また、ここでの実線の矢印は直接的な力のベクトルを表し、破線は力の客体がたどらざるを得ない事象の実現への潜在的な道筋を表す。たとえば、(2)の発話では、「母の権力」が F のスロットを占め、「あなた」が四角のスロットを占める。また、実線の矢印は母の権力のジョンに対する直接的な力を示し、破線の矢印は10時までに帰る方向に向かわされるジョンがたどらざるを得ない道筋を示す。これを図示すると、(3)のようになる。

(2) You *must* come home by ten. (Mom said so.) (Sweetser 1990: 61) (以下、斜字体筆者)

(3) 母の権力 → あなた → 10時までに家に帰る

1.2 Lakoff (1971)、Sweetser (1990)

Sweetser は Lakoff の分析を援用し、or/and には(4)のような特徴を有する「非対称的な内容領域²用法」があることを指摘する。

(4) 非対称的な内容領域用法の or/and で接続される 2 つの状況において、前半の状況は後半の状況に対して時間的・因果関係的に先行する。

(5) と(6)の or と and は時間の推移と因果関係の推移とにアイコン的(iconic)な非対称的な内容領域用法とされるものである。(5)のような or 接続の場合、前半部分の状況の実現しないことが後半部分の状況の原因となっており、前半の状況は後半の状況に時間的にも先行する。(6)のような and 接続の場合、前半部分の状況の実現することが後半部分の状況の原因となっており、この場合も前半の状況は後半の状況に時間的にこ

¹ cf. Haiman (1980)

² Sweetser (1990) は「現実世界領域」、「認識領域」、「言語行為領域」という 3 つ世界を設定する。現実世界領域は、概念主体を取り巻く客観的・現実的な状況の場とされる。

も先行する。

(5) Mary gets home by midnight, or her parents are furious. (Sweetser 1990: 99)

(6) The police came into the room and everyone swallowed their cigarettes. (Lakoff 1971: 127)

(5)では、Mary が夜半までに帰らないという状況の後に、後半部分の両親が怒る状況が起こる。また前半は後半の原因となっている。(6)では、警官が部屋に入った後に、全員がタバコを飲み込んだ状況が起きたことが述べられている。そして、その警官の入室が全員がタバコを飲み込んだことの原因となっている。

2. must の分析

本節では、まず、must を含む発話は力のダイナミクス的状況の想起とそれに時間的・因果関係的に後続する状況の想起があることを指摘する。次に、これらの想起された2つの状況が1つに組み合わせられる認知操作が観察されることを指摘していく。

2.1 2つの状況の想起

根源的 must はしばしば非対称的な内容領域用法の or や and と共に起する。この場合、must を含む前半部分では力のダイナミクス的状況の想起が観察される。そして後半部分では、or 接続の場合、前半の力のダイナミクス的状況が実現されない後に時間的・因果関係的に後続する状況が想起される。and 接続の場合、前半の力のダイナミクス的状況が実現された後に時間的・因果関係的に後続する状況が想起される。

(7) You *must* move your foot, or the car will clash it. (Johnson 1987: 50)

(8) Applications for the first grants *must* be in by the end of April, and then a 10-strong millennium panel will start picking winners by September. (TimesJan95)

(7)と(8)の前半では力のダイナミクス的状況の想起が見られる。前者の場合、話し手が聞き手に対して足を動かすように力を行使するものである。後者の場合、助成金の応募の規則が応募者に対して助成金の出願が8月末までになされるように力を行使するものである。また、(7)と(8)ではそれぞれ、力のダイナミクス的状況が実現しない後の状況の想起と実現した後の状況の想起が見られる。これらの状況は力のダイナミクス的状況に時間的・因果関係的に後続するものである。(7)では、車が足を轢く状況が想起され、(8)では、11人の健全な千年祭の委員団が9月までに当選者を選び始めるという状況が想起されている。

また、顕在的に or/and の接続詞が用いられない場合でも、接続詞以降の時間的・因果関係的に後続する状況の想起は観察される。

(9) "You *must* never underestimate them. They've got tremendous resilience, even when they're not playing well." (TimesJan95)

(10) "You *must* try what people do in hot countries. Drop a salt tablet into the water or lemonade and you replace both salt and water. Then you won't get cramp." (Lob)

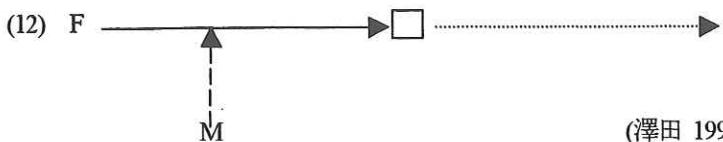
(9)では、まず、斜字体の must を含む発話で話し手が聞き手に敵のチームを過小評価しないように力を行使する力のダイナミクス的状況の想起がある。また、その状況が実現されない後に起こる「試合に負けてしまう」という時間的・因果関係的に後続する状況の想起があると考えられる。(10)では、must を含む発話で話し手が聞き手に暑い所に住む人のすることを試みることを強いるという力のダイナミクス的状況の想起が観察される。同時に、この状況が実現された後に時間的・因果関係的に後続する、「痙攣を起こさずに済む」という状況の想起が起こっていると考えることができる。

2.2 2つの状況の融合

以上、根源的 must を含む発話には、2つの状況の想起が観察されることを指摘した。ここでは、その2つの状況が1つの状況に組み合わさる認知操作(i.e. 「概念融合」 (conceptual blending)(Fauconnier and Turner 1994など))が観察されることを指摘する。

澤田(1999: 63)は義務づけを行う際には(11)の理由で動機づけが必須であることを論じ、(1)の心的図式を再考した(12)の心的図式を提示する。

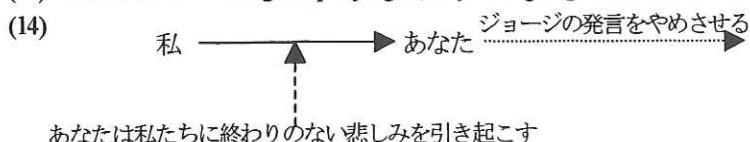
(11) 「義務づけるということは相手に力を行使することである。その力は、相手の自由意志を奪い、緊張関係を生み出しかねない。…それゆえ、義務づけには、相応の動機づけがなくてはならない。」



(澤田 1999: 61)

(1)の心的図式同様、ここでのFは力の主体、四角はFの力を受ける力の客体を表す。また、ここでの実線の矢印は直接的な力のベクトルを表し、破線はその力の客体がたどらざるを得ない事象の実現への潜在的な道筋を表す。(1)の心的図式と異なるのは、義務づけのための動機づけMの関与である。(12)の心的図式は、「ある動機づけをもとに力の主体が力の客体に力を行使しある事象の実現に向かわす」というものである。たとえば、(13)は(14)のような力の構図をもつ発話としてとらえることができる。

(13) "You *must* make George stop saying so, or you're going to cause us no end of grief ..." (*Frown*)



(14)は、「あなたは私たちに終わりのない悲しみを引き起こすので、私があなたに力を行使しななたにジョージの発言をやめさせる」というものである。ここでの動機づけは前半部分の力のダイナミクス的状況に時間的・因果関係的に後続するものである。(14)では、その状況と前半部分の *must* を含む発話の力のダイナミクス的状況がひとつに組み合わさっている。

3. must, should, had better の比較

本節では、まず *should* や *had better* にも前節と同様の認知操作は観察されることを指摘する。次に、*must*, *should*, *had better* を力の主体の特徴、力の客体の特徴、事象の特徴、動機づけの状況の特徴という観点から比較していく。また、それぞれの表現において遂行される言語行為についても言及していく。

3.1 should, had better における融合

should, *had better* のような義務表現にも力のダイナミクス的状況と、その状況に時間的・因果関係的に後続する動機づけの状況がひとつに組み合わされる認知操作が観察される。

(15) You *should* get your flu shot before winter comes. (*RHDEL*²)

(16) You'd better leave now or we'll miss the bus. (*OALD*⁶)

(15)では、道徳が聞き手に力を行使する力のダイナミクス的状況が見て取れる。その状況と、「風邪を引いてしまう」/「風邪を引かなくて済む」と言う潜在的動機づけが組み合わさり、「風邪を引いてしまうので風邪を引かなくて済むので、冬が来る前に予防接種を受けるべき」という力の構図が構築されている。(16)も同様に、接続詞 *or* 以前の話し手が聞き手へ去るよう力行使する状況と、「バスに乗り遅れてしまう」という顕在的動機づけが組み合わさる。この結果、「バスに乗り遅れてしまうといけないので帰りなさい」という力のダイナミクス的状況が成立するに到っている。

3.2 must

3.2.1 力の主体の特徴

must の場合、現実世界において恒常に力の客体に対して力を行使する「法律」、「文法」、「欲動」などの実体と発話時のみに力の客体に対して力を行使する「私」の実体の両方が力の主体になる。また、*must* に関与する力の主体は力の客体を支配するような存在であると思われる。

(17) You *must* apologize at once! (力の主体=私) (Tregidgo 1982: 79)

(18) All cars *must* have number plates. (力の主体=法律) (*ibid.*)

(19) The verb *must* agree with its subject. (力の主体=文法) (*ibid.*)

(20) If you *must* smoke, use an ash-tray. (力の主体=欲動) (Leech 1987: 78)

3.2.2 力の客体の特徴

must では、特定的な実体と不特定的な実体の両方が力の客体として機能する。(21)と(22)ではそれぞれ、「辞書を用いていない聞き手」と「人を困らせている Christy」という特定的な実体が力の客体である。一方、(23)と(24)ではそれぞれ、「すべての乗客」と「すべての入園者」という不特定的な実体が力の客体となっている。

- (21) You *must* use a dictionary. I'm tired of correcting your spelling mistakes. (Thomson and Martinet 1986⁴: 140)
- (22) She ran to them. "Do you like my beautiful sweater?" she asked ... The nanny came up. "Christy, you *mustn't* bother people." (*Frown*)
- (23) All passengers *must* wear seat belts. (*LDOCE*⁴)
- (24) ZOO NOTICE: You *must* not feed the animals. (*ibid.*)

3.2.3 事象の特徴

must の場合、事象の実現が緊急のものとして表されている場合とそうでない場合とがある。(25)と(26)の発話は、must と共に示唆されるように、それぞれ、事象の実現が緊急とされる場合と緊急とされない発話である。

- (25) "He arrives today and we *must* tell him we leave for London one day *very soon*. ..." (*Frown*)
 - (26) "... You *must* get my husband to tell you about it *sometime*." (*Flob*)
- (25)では、*very soon* で示唆されるように、「彼にいつかロンドンに発つことを言う」という事象は緊急に実現されなければならないこととされている。一方、(26)では「そのことに関して私の夫があなたに話す」ことは *sometime* で示唆されるように、緊急を要するものとしては表現されていない。

3.2.4 動機づけの状況の特徴

3.2.4.1 動機づけに対する概念主体のとらえ方

must を用いた義務表現の動機づけは、力のダイナミクス的状況に時間的・因果関係的に後続するだけではなく、概念主体にとって好ましくない状況、または好ましい状況である。顕在的潜在的 or 接続の場合、その動機づけは概念主体にとって好ましくないものである。and 接続の場合のその状況は概念主体にとって好ましい状況である。

- (27)(=13) "You *must* make George stop saying so, *or* you're going to cause us no end of grief ..." (*Frown*)
 - (28)(=8) Applications for the first grants *must* be in by the end of April, *and* then a 10-strong millennium panel will start picking winners by September. (*TimesJan95*)
- (27)の後半部分の動機づけとなる状況は「私達に終わりのない悲しみを引き起こしてしまう」という概念主体にとって好ましくないものである。(28)の場合は「9月までに10人の健全な千年祭の委員団が当選者を選び出すことができる」という概念主体にとって好ましい状況である。

3.2.4.2 動機づけの強さ

また、must の場合、動機づけは比較的強いものに限られる。

- (29) You *must* read this. It's marvelous. (Thomson and Martinet 1986⁴: 138)
- (29)の場合、あなたにとって、とてもプラスになるというような力のダイナミクス的状況に後続する、話し手にとって強く好ましいととらえられている状況が観察される。(29)では、It's good といった比較的弱い動機づけの場合は must ではなく、should が用いられる(*ibid.*)。

動機づけに対する概念主体の思い入れの強さは(30)の例からも示唆される。

- (30) "You *must* help me to go! To—to beguile a man I don't love in order to trap him." "... who knows, you may fall in love with Simon." "Never!" Andrea declared passionately. "Never! He has robbed me." (*Lob*)
- ここでの動機づけは、「Simon を騙すことができる」というものである。Andrea のこの動機づけに対する思い入れの強さは、絶対に Simon を愛することはないというここでの Andrea の気持ちから察することができる。

この動機づけの強さは、力の客体の事象の実現を前提とした must を用いた義務表現の特徴と関連してい

ると思われる。must の場合、(31)の but 以降のような事象の実現を否定するような表現は容認されない。

- (31) *He *must* come tomorrow, but he won't. (Palmer 1990²: 123)

3.2.5 must と言語行為

強い動機づけを有し、力の客体の事象の実現を前提とした must を含む発話は、強く聞き手の行動を制御する「命令」の言語行為を可能とするものと思われる。

(32) での動機づけは、「ビーチにいる人が亡くなってしまう」という強いものである。

- (32) Miami Beach firefighter Bob Sistik said ... "This whole place will be under at least 10 feet of water. Everybody on the Beach *must* go." (Frown)

また、この動機づけの強さは、「勧誘」の言語行為を丁寧に遂行する発話も可能にすると思われる。まず、根源的 must は、提案や勧誘の言語行為を行う際、「相手の負担を最小限に、利益は最大限に」という「気配りの公理」(Tact Maxim) (Leech 1983)を遵守した丁寧な発話を可能にする。

- (33) You *must* visit me. Come to dinner. (COBUILD)

- (34) You *must* come and see us some time. (Thomson and Martinet 1986⁴: 141)

- (35) "My name's Patricia Mansell and I'm writing a book about one of the SOE networks. I was given your name as somebody who could help me." "You *must* come in and have a cup of tea while we chat." ... "So what can I do to help you?" (Flob)

(35) での斜字体の must を含む発話には、前述のように 2 つの状況の想起が観察される。ひとつは、「私があなたに家にあがってお茶でも飲むことを強制する」といった力のダイナミクス的状況である。もうひとつの状況は動機づけになるものである。ここでは、「あなたの仕事のお手伝いができる」といった力のダイナミクス的状況に時間的・因果関係的に後続し、概念主体にとって好ましい状況である。この動機づけは強いものであるため、Patricia の「SOE について取材したい」という要求に最大限に応えたものであり、Patricia の利益となるものである。

3.3 should

3.3.1 力の主体の特徴

should を用いた義務表現では、現実世界において恒常に力を行使する「道徳」/「倫理」が力の主体となる。

- (36) ... he *should* morally only follow that course which causes more pleasure than it does pain. (Flob)

- (37) He *shouldn't* be so selfish. (LDOCE⁴)

3.3.2 力の客体の特徴

must の場合と同様、特定的な実体と不特定的な実体の両方が力の客体として機能する。たとえば、(38)では「母親と無礼に接する人物」という特定的な実体が力の客体であり、(39)では「イギリスを訪れるすべての人」という不特定多数の人物が力の客体である。

- (38) They *shouldn't* treat their mother in this disrespectful way. (COBUILD)

- (39) All visitors *should* register with the British Embassy ... (*ibid.*)

3.3.3 事象の特徴

事象の実現は must と同様、緊急な場合とそうではない場合の両者が観察される。

- (40) "I *should* go out as soon as possible," she replied, her brows meeting in thought. (Frown)

- (41) 'I've been to Paris.' ... 'That's a pity. You *should* go one day.' (COBUILD)

(40) の場合、as soon as possible から示唆されるように「私が外出すること」は緊急であるが、(41) の場合、one day から示唆されるように「あなたがパリに行くこと」は緊急としては表されていない。

3.3.4 動機づけの特徴

3.3.4.1 動機づけに対する概念主体のとらえ方

should の動機づけは *must* と同様、概念主体にとって好ましい状況と好ましくない状況の両者になり得る。

(42) You *should* make any request for an extension early so that if it is refused, your return may still be on time.
(*Brown*)

(43) Because of this you *should* never ignore a pounding in the heart or a throbbing of the head if you're overweight. If you do, you may be risking coronary thrombosis. (*Lob*)

(42)での動機づけは、「エクステンションのクラスが取れない場合の次の手続きができる」というものであり、話し手にとって好ましい状況である。(43)の動機づけは、「冠状動脈血栓症になってしまう」という状況であり、話し手にとって好ましくない状況である。

3.3.4.2 動機づけの弱さ

また、この動機づけの状況は *must* の動機づけより弱いものである。

(44) You *should* read this. It's good. (Thomson and Martinet 1986⁴: 138)

前述のように、ここでの *It's good* をさらに強い動機づけとなる *It's marverous* という表現で代用することはできない (*ibid.*)。

この動機づけの弱さは、力の客体の事象の実現を前提としない *should* を用いた義務表現の特徴と関連していると思われる。(45)では、事象の非実現は *but he won't* という表現で示唆されている。

(45) He *should* come tomorrow, but he *won't*. (Palmer 1990²: 123)

3.3.5 *should* と言語行為

上記の動機づけの弱さに起因すると思われる事象の非実現性は、相手に何かを「命令」するものではない「勧告」の言語行為を可能にしていると思われる。また、聞き手にある事象を押しつけないという点で丁寧な言語行為の遂行を可能とする表現を考えることができる(cf. Westney 1995)。

3.4 *had better*

3.4.1 力の主体の特徴

had better では、発話時に一時的に力を行使する「私」が常に力の主体となると思われる。このことは、(46)-(47)の括弧内のパラフレーズから示唆される。

(46) You'd better be quick (roughly= 'I urge you to be quick'). (Leech 1987: 104)

(47) He'd better not make a mistake (roughly= 'I warn him not to make a mistake'). (*ibid.*)

このことは、恒常的価値観である「道徳」/「倫理」のような実体が力を行使する(48)と(49)のような発話では *had better* は用いることができないことからも示唆されると思われる。

(48) a. *If people want to be healthy, they *had better* be more careful about what they eat.

b. If people want to be healthy, they *should* be more careful about what they eat. (LDCE³)

(49) a. *Instead of using a dictionary all time, you *had better* try to guess the meaning of the words.

b. Instead of using a dictionary all time, you *should* try to guess the meaning of the words. (*ibid.*)

3.4.2 力の客体の特徴

must や *should* とは異なり、力の客体は特定的なものに限られる。

(50) "I figure you've got little Missy Hawkins on your mind," he said. "This'll help. Right now you'd better think about stayin' alive." (*Frown*)

(51) I'd better ring him tomorrow. (Thomson and Martinet 1986⁴: 123)

(52) "you'd better not show your face back here, unless you want me to work on it with a razor." (*Lob*)

(50)では、「生き残ることを考えなければならないにもかかわらず、別のことを考えているあなた」が力の客体である。(51)では、「電話をかけなければならないにもかかわらず、そうしない可能性のある私」が力の客体である。(52)では、「話し手と顔を向き合わせるべきではないのにそうしているあなた」が力の客体である。

3.4.3 事象の特徴

had better の場合、力の客体による事象の実現は近い未来に「緊急」に実現するものとされる (cf. Swan 1995², MWCD¹)。

(53) *Mark, you'd better get cracking, the sooner the better.* (COBUILD)

(54) "I really ought to go and see Fred one of these days." "Well, you'd better do it soon—he's leaving for South Africa at the end of the month." (Swan 1995²)

(53)では、the sooner or the better という表現から、(54)では soon という表現から事象の実現が急務であることが示唆される。

3.4.4 動機づけの状況の特徴

3.4.4.1 動機づけに対する概念主体のとらえ方

had better を用いた発話で想起される動機づけの状況は、力のダイナミクス的状況が成立しない場合の概念主体にとって好ましくない結果に限られる(cf. Perkins 1983, Palmer 1990²)。このことは、顕在的な動機づけは and ではなく、or で導入されることから示唆される。

(55)(=16) *You'd better leave now or we'll miss the bus.* (OALD⁶)

(56) "... you'd better find out a nice easy way of doing it or you're liable to be up to your fat neck in trouble, Louie boy." (*Lob*)

(57) "...you'd better watch out for yourself" he warned, "or you will be starting on the same road, too." (*Lob*)

つまり、(58)のような制約が *had better* の用法には関与しているといえる。

(58) **Adversity Condition:** 義務表現で用いられる *had better* は非対称的な内容領域用法の and と共にしない。

また、この動機づけが概念主体にとって好ましくないことであるとは、(59)-(60)の *had better* と *should* との比較においても明らかになる。(59)の場合、(60)には観察されることのない、if I don't, I risk getting soaked という言外の意味が観察される(Westney 1995: 184)。

(59) *You'd better take an umbrella with you.* (*ibid.*)

(60) *You should take an umbrella with you.* (*ibid.*)

3.4.4.2 動機づけの強さと言語行為

had better に関する動機づけは強いものであり、しばしば「脅迫」の言語行為の遂行を可能にする。

(61) *He'd better pay me back that money he owes me soon, or else.* (CALD)

(62) *You'd better help me. If you don't, there'll be trouble.* (Swan 1995²: 225)

この動機づけの強さは事象の実現を前提とする *had better* を含む発話と関係しているように思われる。(63)のように、事象の実現を期待しないような *I'm sure you won't* という表現とともに *had better* は用いることができない。

(63) **You'd better take an umbrella with you, I'm sure you won't.* (Westney 1995: 182)

4. おわりに

(64) *must*、*should*、*had better* では、力のダイナミクス的状況とその状況に時間的・因果関係的に後続し、動機づけとして機能する状況の想起がある。

(65) (64)の2つの状況は融合される。

(66) *must*:

- (i) 恒常的に力を行使する実体と一時的に力を行使する実体が力の主体となる。
- (ii) 特定的な実体と不特定的な実体が力の客体となる。
- (iii) 事象の実現が緊急の場合と緊急でない場合がある。
- (iv) 動機づけの状況は概念主体にとって好ましいものと好ましくないものとなる。
- (v) 動機づけの状況は強いものである。
- (vi) 「命令」や「丁寧な勧誘」の言語行為が遂行される。

(67) *should*:

- (i) 恒常的に力を行使する「道徳」/「倫理」が力の主体となる。
- (ii) 特定的な実体と不特定的な

実体が力の客体となる。(iii) 事象の実現が緊急の場合と緊急ではない場合がある。(iv) 動機づけの状況は概念主体にとって好ましいものと好ましくないものになる。(v) 動機づけの状況は弱いものである。(vi) 「丁寧な勧告」の言語行為が遂行される。

(68) had better:

- (i) 一時的に力を行使する「私」が力の主体となる。(ii) 特定的な実体が力の客体となる。
- (iii) 事象の実現は緊急のものとなる。(iv) 動機づけの状況は概念主体にとって好ましくないものとなる。(v) 動機づけの状況は強いものである。(vi) 「脅迫」の言語行為が遂行される。

引用文献

- Fauconnier, G and M. Turner. 1994. *Conceptual Projection and Middle Spaces*. UCSD Cognitive Science Technical Report 9401.
- Haiman, J. 1980. "The Iconicity of Grammar: Isomorphism and Motivation." *Language* 56: 515-540.
- Johnson, M. 1987. *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. The Univ. of Chicago Press.
- Lakoff, R. 1971. "If's, And's, and But's about Conjunction." In Fillmore, C. J. and D. T. Langendoen. (ed.), *Studies in Linguistic Semantics*. Holt, Rinehart, and Winston. 114-149.
- Leech, G 1983. *Principles of Pragmatics*. Longman.
- Leech, G 1987². *Meaning and the English Verb*. Hituji Shobo.
- Palmer, R. F. 1990². *Modality and the English Modals*. Longman.
- Perkins, M. R. 1983. *Modal Expressions in English*. Frances Pinter.
- 澤田治美. 1999. 「語用論と心的態度の接点」『言語』 27(6): 58-63.
- Swan, M. 1995². *Practical English Usage*. Oxford Univ. Press.
- Sweetser, E. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Univ. of Cambridge Press.
- Talmy, L. 1988. "Force Dynamics in Language and Cognition." *Cognitive Science* 12 (1) : 49-100.
- Talmy, L. 2000. *Toward a Cognitive Semantics*. (Vol.I). *Concept Structuring Systems*. MIT Press.
- Thomson, A. J. & Martinet, A. V. 1986⁴. *A Practical English Grammar*. Oxford Univ. Press.
- Tregidgo, P. S. 1982. "MUST and MAY: Demand and Permission." *Lingua* 56: 75-92.
- Westney, P. 1995. *Modals and Periphrastics in English: An Investigation into the Semantic Correspondence Between Certain English Modal Verbs and Their Periphrastic Equivalents*. Niemeyer.

辞書 ([]内は使用略語)

- Cambridge Advanced Learner's Dictionary*. 2003. [CALD]
- Collins COBUILD English Dictionary for Advanced Learners*. 2001³. [COBUILD³]
- Longman Dictionary of Common Errors*. Longman. 1996². [LDCE²]
- Longman Dictionary of Contemporary English*. Longman. 2003⁴. [LDOCE⁴]
- Merriam-Webster's Collegiate Dictionary*. Merriam-Webster. 2003¹¹. [MWCD¹¹]
- Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. Oxford University Press. 2000⁶. [OALD⁶]
- The Random House Dictionary of English Language*. Random House. 1987⁷. [RHDEL⁷]

コーパス ([]内は使用略語)

- The Brown Corpus [Brown]
- Freiburg-Brown Corpus of American English [Frown]
- Freiburg-LOB Corpus of British English [Flob]
- The Lancaster-Oslo/Bergen Corpus [Lob]
- The Times for January 95 [TimesJan95] (<http://www.edict.com.hk/>)

「…ではあることは間違いない」という表現について

森 貞（福井工業高等専門学校）

mori@fukui-nct.ac.jp

1. はじめに

- (1) デアル・デナイが、「は」によって二分結合されたデハアル・デハナイが、連体修飾に用いられることは、既に指摘したように、主題提示の場合に次いで、極めて稀である。肯定形のデハアルの場合は勿論すべて意味的には対比であり、否定形のデハナイの場合も、すべて対比である。従って、主文における主語と述語の二分結合のやうに、表現構造の決定には働くかない。そのやうな構造上の重要な働きはしていないけれども、叙述文の中心的存在である述語成分において、その肯定・否定の判定を確認するといふ点において、意味的には極めて重要な働きを担っている。述語としての判定を確認した以上、述語はそこで終止するのが望ましい。これがこの用法において、連体再展叙しにくい理由であると思はれる。

（青木 1991: 4）

本発表の目的：

「ではある」「ではない」の連体修飾用法の実態を明らかにし、意味論的には出現しにくいと予測される表現であっても、語用論的には出現可能（容認可能）であることを論証する。

2. 実例

2.1 『新潮文庫の100冊』

2.1.1 「ではある+名詞」

- (2) 「乞食じゃあっても、捨吉はやっぱり人の子じゃからのう、ふびんではある話ですがの」
（水上 勉「雁の寺」）

2.1.2 「ではない+名詞」

- (3) 心臓の鼓動だけが、生存のすべてではないこともまた事実なのだ。
（安部公房「砂の女」）

- (4) 金のかかる客寄せで婚礼披露などできるものではなかったし、世の中もまたそれどころではないときであった。（有吉佐和子「華岡青洲の妻」）

- (5) 「稗史まがい」の細工の器用か不器用かは、稗官者流ではない先人の問うところではなかったのだろう。
（石川 淳「喜寿童女」）

- (6) 祖母の方はすっかり彼女の帰省を信じていたが、鮎太は、彼女の行った先が、決して彼女の母のいる港町ではないことを知っていた。
(井上 靖「あすなろ物語」)
- (7) だが、五人の男は間もなく、その丸太棒が、ただの丸太棒ではないことを知らなくてはならなかった。
(井上ひさし「ブンとフン」)
- (8) 右手の甲に煙草の火を押しつけて焼いたあとがいくつもあり、目のすわり方にただものではない雰囲気がある少女だった。
(五木寛之「風に吹かれて」)
- (9) 父・小兵衛の足音が、道場の入口にとまり、「ごめん」しわがれた低い声がきこえた。
(池波正太郎「剣客商売」)
- (10) しかも妻の心が彼女の全部ではないのも私は知っている。
(大岡昇平「野火」)
- (11) しかし通訳は笑うどころのさわぎではない真剣な表情をしていた。
(大江健三郎「不意の啞」)
- (12) こうした真相の定かではない報道を異国で読む心理はまた別物である。
(北杜夫「楡家の入びと」)
- (13) ベッドの上にはぼくではないだれかがねている。
(倉橋由美子「聖少女」)
- (14) この仮説の強さや真実を支えているものは実朝自身ではない事をはっきり知って置くのはよい事だ。
(小林秀雄「実朝」)
- (15) 金子の言葉には、お座なりではない熱っぽさがあった。
(沢木耕太郎「一瞬の夏」)
- (16) それにしても、トルコ兵をはじめて見たわけではない彼でも、敵の隊長たちの武装の貧弱さには、驚かずにはいられなかった。
(塩野七生「コンスタンティノープルの陥落」)
- (17) それは決して、つい今しがた留守になったのではない静かさがそこにあるのを、私は恋人に特有な感覚を以て感じました。
(谷崎潤一郎「痴人の愛」)
- (18) すでに子供ではない男に引取人がいるなどというのはおかしいが、これは法律です。
(立原正秋「冬の旅」)
- (19) 子どもらしく先生と書かずに、教師と書いたところに早苗のせいいっぱいさがあり、あまっちょろいあこがれなどではないものを感じさせた。
(壺井栄「二十四の瞳」)
- (20) 外山三郎や園子に対しては、本気でやっていたのではない証拠に汗を搔いていなかった。
(新田次郎「孤高の人」)

(21) しかし風が立てるのではない動きが蚊帳に伝わった。

(三島由紀夫「金閣寺」)

(22) しかし、伊木が自分の髪の形をみて狼狽したのには、そのことばかりではないもう一つの理由もあった。 (吉行淳之介「樹々は縁か」)

2. 2 インターネット検索

2. 2. 1 ニュース記事検索

(23) 「ビリ」と「変人」。相次いでノーベル賞に決まった小柴昌俊さんと田中耕一さんの話を聞くと、なんなく親しみを覚える▼もちろん立派な大学を卒業し、優秀な頭脳の持ち主ではあることは間違いないが、優等生、エリートといった雰囲気を感じさせない人柄のせいかもしれない

(茨城新聞2002年10月12日)

(24) ただ、「幅広い結集ということでは、われわれが抱いている姿と若干違う姿ではあることは否めない」とした上で、「無条件では支持できない」との考えを示した。 (佐賀新聞1996年09月03日)

(25) いびきをかく人が、すべて睡眠時無呼吸症候群ではないが、“候補者”ではあることは確かだ。 (共同通信社Medical News)

(26) 「中には指示に従わず殺された人もいるが、成功率は高いらしい。連邦司法局にかなり綿密に取材したが、命を落としている保護担当官も多く、映画のように危険な職業ではあることは確かのようだ」と話す。

(産経新聞 1996年8月14日)

(27) ただ、現在がプライバシー保護と社会の安全保障のためのバランスについて議論するいいチャンスではあることは確かでしょう。プライバシー保護強化についても、さまざまな方法があり、検討の価値があります。

(Mainichi Interactive 2002年8月23日)

2. 2. 2 大学研究室ホームページ検索

(28) ただし火星のそれは0.018立方km/年であったことが知られており、火星の1/10の体積であることを考えれば、割りに活発な方ではあることは確かなようである。

(<http://www.ipe.tsukuba.ac.jp/~s015156/SInfo/00spr/C04.html>)

(29) もちろん様々な実験条件の拘束による問題点があることは明らかで、軽々しく結論に結びつけることは危険ではあることは十分承知の上で、あえてこの結果を単純に素直に観察すれば、下記の結論が得られることも考え

られる。 (<http://mec1.idac.tohoku.ac.jp/kareiseigyo.html>)

2. 2. 3 「ではあること」に後続する述語の種類

(30) 《確認》

は確かだ	72
は間違いない	44
に（は）変わりない	22
は事実である	17
は否めない	14
に（は）違いない	13
はある	11
に（は）間違いない	10
は言うまでもない	5
に異論はない	2
その他	9
小計	219 (75%)

《承認》

はわかる	13
は認める	13
は承知している	12
は理解できる	9
がわかる	6
は知っている	3
に気付く	2
その他	6
小計	64 (22%)

《その他》

はできない	4
その他	5
小計	9 (3%)
合計	292 (100%)

3. アンケート

3.1. アンケートの概要

実施時期：2003年10月

回答者：福井高専一般科目教官 25人

判定基準：—問題なく容認できる

—変に響くが、容認できないことはない

—全く容認できない

判定対象文：以下の[1]-[5]

- [1] いびきをかく人が、すべて睡眠時無呼吸症候群ではないが、「候補者
- 」ではあることは確かだ。
- [2] 幼児期からの特別なトレーニングが欠かせないクラシック音楽のジャンルで成功するには、育ちのよさというものが、十分条件ではないに
しても必要条件ではあることは間違いない。
- [3] ここでは、時計、ハンドバック、衣類等の世界の有名ブランド品は全て揃っており、偽造品ではあることは気になるが買物を楽しむことが
出来る。
- [4] お金を出して買おうとまでは思わないが、すばらしい作品ではあるこ
とは認める。
- [5] 現代社会の苦悩を真摯に見据えようとするなら、そこには科学と不可分の領域が多数存在しているのであり、その意味で宗教は、もはや単
純に「科学嫌い」ではあることはできない。

3.2. 回答結果

(31)

○

△

×

[1]	40%(10人)	48%(12人)	12%(3人)
[2]	28%(7人)	40%(10人)	32%(8人)
[3]	12%(3人)	32%(8人)	56%(14人)
[4]	44%(11人)	36%(9人)	20%(5人)
[5]	4%(1人)	32%(8人)	64%(16人)

(32)

[1]

	○	△	×
○	3	3	1
△	7	3	0
×	0	6	2

(33)

[1]

	○	△	×
○	7	4	0
△	2	7	0
×	1	1	3

(34)

[1]

	○	△	×
○	1	2	0
△	4	4	0
×	5	6	3

(35)

[1]

	○	△	×
○	0	1	0
△	2	5	1
×	8	6	2

(36)

[4]

	○	△	×
○	3	0	0
△	3	5	0
×	5	4	5

(37)

		[4]		
		○	△	×
		○	1	0
[5]	△	5	2	1
×	5	7	4	

4. 修正案

- (38) • 「ではない」は様々な名詞を修飾するのに対して、「ではある」が修飾するのは、形式名詞の「こと」にほぼ限られる。
- 「ではある+こと」は、その使用文脈において、逆接表現が共起しているが、「ではない+名詞」の場合は、その限りではない。
 - 「ではある+こと」には「は確かだ」「は間違いない」「は否めない」「はわかる」「は認める」等のそれらがなくても文意が変わらない表現が後続する。
- (39) • 「ではない」は普通に連体修飾に用いることができる。
- 「ではある」は、以下の条件をすべて満たす場合に限り、連体修飾に用いることができる。
 - (a) 被修飾語は、形式名詞（「こと」「の」等）
 - (b) 後続する述語は、「は確かだ」「は間違いない」「は否めない」「はわかる」「は認める」等のそれらがなくても文意が変わらない表現
 - (c) 逆接表現の共起

5. 「ではある+名詞」の成立過程

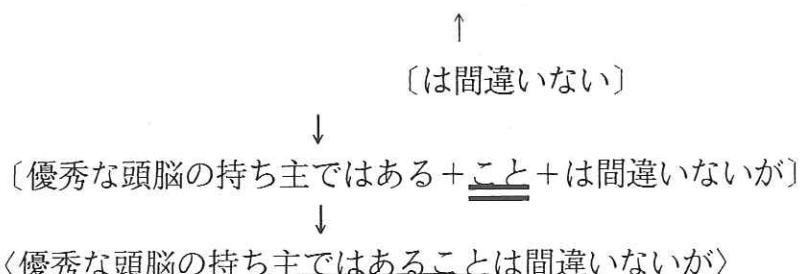
- (40) 「Aではない」の場合には、その表現が、「 $\neg A$ である」を含意し、引いては、《 $[\neg A] \rightarrow [B]$ 》の想起を可能にする。これにより、（否定表現である）「Aではない」を、（肯定表現の）「Bである」として解釈することが可能になり、その結果として、様々な名詞を修飾することが可能になるものと考えられる。他方、「Aではある」の場合は、「は」は、『肯定の判定を確認する』（青木 1991）／『肯定判断を強調する』（大野 1991）機能のみを発動しており、本来ならば、「述語としての判定を確認した以上、述語はそこで終止するのが望ましい」（青木 1991）。したがって、(31)（本発表における(23)）の例で言えば、〈優秀な頭脳の持ち主ではあることは間違いないが〉は、〈優秀な頭脳の持ち主ではあるが〉とするのがより自然な日本語と言えよう。但し、「は間違いない」を

強調の機能のみを発動するafterthought（後付け表現）として位置付ければ、前者の成立も不自然なことではない（「…であることは間違いないが」における「は間違いない」はafterthoughtではないことに注意）。

（森 2003）

- (41) 「ではある」が修飾する名詞はそれに後続する述語（強調の機能のみを発動するafterthought）を具現化するために、統語的な理由（その述語は名詞を目的語とする）により導入されたものである。したがって、被修飾語である名詞は、実質的な意味を有しない形式名詞に限られる。また、「ではある」は意味論的に対比を表わすので、逆接表現の共起が義務的である。

- (42) [優秀な頭脳の持ち主ではある ガ]



- (43) 「は」の確認／強調機能を強化しようとする意識
⇒強調の機能のみを発動するafterthoughtの顕現

6. おわりに

主要参考文献

- 青木伶子(1991)「『は』助詞と連体修飾」『成蹊大学文学部紀要』26.
大野 晋(1991)「肯定判断を強調する『……ではある』」『日本語相談4』（大野晋、丸谷才一、大岡 信、井上ひさし）、朝日新聞社.
尾上圭介(1981)「『は』の係助詞性と表現機能」『国語と国文学』58卷5号.
北原保雄(1984)『日本語文法の焦点』教育出版.
佐藤雄一(1991)「『は』の対比性について」『論文論叢』（千葉大学）19.
西垣内泰介・石居康男(2003)『英語から日本語を見る』（英語学モノグラフシリーズ13）研究社.
野田尚史(1996)『「は」と「が」』（新日本語文法選書 第1巻）くろしお出版.
堀口和吉(1995)『「～は～」のはなし』ひつじ書房.
三上 章(1972)『現代語法序説』くろしお出版.
森 貞(2003)「連体修飾節中の『ではある』『ではない』について」『福井高専研究紀要』

メタ言語否定の談話分析

山田 政通

拓殖大学外国語学部

myamada@ner.takushoku-u.ac.jp

1. 研究発表要旨

「メタ言語否定」(metalinguistic negation) の研究は、Horn(1985)を出発点として、前提との関係、多義性の問題、極性表現との生起など多方面からの研究が進み、その特徴が徐々に明らかになりつつある。しかし、どこまでをメタ言語否定の表現と見るかなど、真理条件的内容を否定する通常の「記述否定」との境界線は、今だはっきりしない部分も残っているのが現状である。

本研究発表では、従来の研究成果を踏まえた上で、新たに談話分析の視点から、英語のメタ言語否定(*not*)の特徴を明らかにすることを目標とする。特に、談話の中で実際に使用された実例を取り上げ、談話中でメタ言語否定が果す機能を検証する。

Carston (1996)は、関連性理論の枠組みに基づき、メタ言語否定の特徴として次の 5 点を挙げている：

- (1) 1 対照強勢を伴う矛盾のイントネーションを持つ。
- 2 対応する肯定発話の返答として機能する。
- 3 再解釈がされる。
- 4 文字通りの意味では論理矛盾になる。
- 5 *not* の作用域にあるものはエコー特性 (echoic) を持つ。

(吉村 2000 の要約より一部変更)

そして、5 の「エコー特性」だけがメタ言語否定の本質的な特徴であると結論付けている。もし Carston の主張が正しいとすれば、メタ言語否定を含む発話は、何らかの形で前言を踏まえた形で生じることになる。つまり、メタ言語否定の発話はそれだけ単独でなされることではなく、必ず前言との関わりの中で生まれる、ということである。そうであれば、談話分析の視点を導入することで、この「前言との関わり」をより明確にし、さらにこの前言を含む前後の文脈全体を考慮に入れることにより、修辞上の機能や対人関係上の機能な

ど、より広い観点からメタ言語否定の機能を特定することができると、著者は考える。(本稿では Carson の挙げる他の 4 つの特徴についても、実例の中でどう現れているかを適宜検証する。)

最初に述べたように、メタ言語否定表現は多岐にわたるが、本稿ではその典型例のひとつと考えられる、尺度表現を含んだ発話を取り上げる。次の対話中の B のような発話である:

(2) A : Do you like sushi?

→ B : I don't like sushi.

I love it.

この例では、Carston の主張通り、B のメタ言語否定を含む発話は、その前の A の発話をエコーの源としている。さらに B の発話の中に好みを表す尺度表現として、“like”と“love”が使用されている。加藤(1996)が述べているように、一般に「尺度表現を含む任意の立言 p, q があり、 p が q を論理的に(ないしは意味的に)含意するとき、 q は p の否定を会話的に含意する」。上の例では、“like”が用いられているので、“not love”という含意が通常生じるはずであるが、メタ言語否定はこの会話の含意を否定している、と分析される。

本稿では、談話分析の視点からメタ言語否定の機能を解明するが、その際一番大事なのがコンテキストである。どういう話し手と聞き手が関わっているのか、そしてその当事者はどういう目的を持って会話に参加しているかなど、いわゆる「発話事象」(speech event : Yule 1996) に含まれる諸要因を考慮に入れながら分析を進める。

メタ言語否定が談話中で果す機能については、まず「対比機能」(McCawley 1993) が挙げられる。Yamada(2003)は、日本語の否定発話を分析した結果、否定発話には通常何らかの対比機能が働いているが、メタ言語否定の発話ではその機能がいっそう強化されると捉えている。さらに修辞上の機能としては、メタ言語否定には「再解釈」(reinterpretation : garden path の読み) に伴う発話解釈上のどんでん返しが生じる。上記の例で考えると、B が “I love it” と発話した瞬間、聞き手 A は B の発話の前半部分までさかのぼり、“I don't like sushi” の解釈を「記述否定」の解釈から「メタ言語否定」の解釈に急遽変更しなければならない。これは聞き手に余分な負担をかけることになるが、それだけ聞き手の注目を集めることになり、驚きの要素を含んだ修辞的な効果が生じると考えられる。

また、メタ言語否定は対人関係機能として、相手を会話の中へ引き込む「参加促進」(involvement : Tannen 1989&Chafe 1994) の機能を持つ。つまり、メタ言語否定はエコー特性により相手の発話の一部を話者が繰り返しながら、相手の表現方法に抗議する “I object to U ” (U =相手の発話 : Horn 1989) という内容を持ち、このことが相手に何らかの反応を促し、会話への参加を促進する役目をすると考えられる。今回扱う例では、対立

強化に繋がる場合や、逆にユーモアが生じ親密さが強化され、積極的なポライトネスとして働く場合などが見られた。

結語として、本稿では談話の視点からの機能分析により、メタ言語否定が持つ「エコー特性」、「再解釈」の特徴が、聞き手の注目を引くという修辞的効果や、参加を促進する対人関係機能に深く関与することが分かった。今回は限られた表現しか扱えなかつたが、今後はさらにメタ言語否定のより包括的な分析を進めたい。

2. 資料

2.1 メタ言語否定 (metalinguistic negation = MN)

1. Horn (1989:363) “a device for objecting to a previous utterance on any grounds whatsoever, including the conventional or conversational implicata it potentially induces, its morphology, its style or register, or its phonetic realization.”
2. Horn (1989:377) a metalinguistic operator which can be glossed ‘I object to *U*’, where *U* is crucially a linguistic utterance or utterance type rather than an abstract proposition.”
3. Horn (1989:375) “as a way for speakers to announce their unwillingness to assert something in a given way, or to accept another’s assertion of it in that way.”
4. McCawley (1993:189): in MN, a negative sentence is interpreted “as a rejection of the way that the content of that sentence is expressed.”
5. McCawley (1993:205): “‘Metalinguistic’ is not a form of negation but a function that negative constructions may have.” (p.189: MN = more accurately “a metalinguistic use of negation”)
6. Marmoridou (2000:146) MN “has a specific communicative function, namely to bring out some kind of disagreement between interlocutors”

2.2 メタ言語否定文の特徴・機能

(1) MN の特徴

1. echoic (Carston 1996), echo negation (Ota 1980)
2. 再解釈 reinterpretation (再分析 reanalysis), garden path の読み

(2) MN の機能

1. 対比機能 McCawley (1993), Yamada (2003)
2. 修辞上の機能

再解釈 reinterpretation ⇒ forcing the listener to make extra processing efforts

dramatic effects, upsetting one's schema どんでん返し

surprise value

より強い主張

cf. Yamada (2003:402): attention-catcher, cognitive gap-creator

3. 対人関係機能 : involvement strategy (Tannen 1989)

相手を会話の中へ引き込む

本稿の目的：談話の中で MN の機能を特定する

dialogue, dyadic discourse (vs. monologue)

尺度表現 (scalar expressions) を含んだ MN

談話分析の視点からの分析

コンテクスト 話し手 聞き手

speech event (Yule 1996:57, "an activity in which participants interact via language in some conventional way to arrive at some outcome.")

例 1 日常会話 学生と教授 ユーモア

例 2 TV インタビュー インタビュアーとダイアナ妃 Q&A 明言

例 3 公開査問会議 Q&A 医師と患者 強い主張

例 4 交渉の場 館長と利用者 反駁

2.3 例文分析

例 1 学生と教授のインフォーマルな会話

- 1 Student: Do you like sushi?
- 2 Professor: I don't like sushi.
- 3 I love it.

re-interpretation / reanalysis / garden path reading

- cf. 1 Student: Do you like sushi?
- 2 Professor: I don't like sushi.

- (1') 1 Student: Do you like sushi?
 2 Professor: I love it (sushi).
 3 # I don't like it.

-好みの食べ物について話している状況

A: What is your favorite Japanese food? (or What kind of Japanese food do you like?)

B: I don't like sushi.

I love it.

-echo negation (Ota 1980:280)

-尺度表現 : like < love

-加藤(1996:37) :『スケール表現を含む任意の立言 p, q があって、p が q を論理的に(ないしは意味的に)含意するとき、q は p の否定を会話的に含意する。』

-Yule (1996:41-2): scalar implicature 尺度含意

generalized conversational implicature の一種：特別な背景知識なしで生じる

< all, most, many, some, few >

I'm studying linguistics and I've completed some of the required courses.

原則：“when any form in a scale is asserted, the negative of all forms higher on the scale is implicated.”(p.41)

-ユーモア、ジョーク

⇒ positive politeness strategy 連帯感 solidarity

例 2 故ダイアナ妃のインタビュー番組 (Panorama, BBC, November 1995)

(1 行目 that = 自分の夫が他の女性を愛していること)

- 1 Interviewer: You really thought that?
 2 Diana: Uh, uh.
 → 3 I didn't think that.
 4 I knew it.
 5 Interviewer: How did you know it?

尺度表現 : think < know

類例 太田 (1980:280)

- 1 'Do you think so?' said the girl doubtfully.
- 2 'I don't think so. I'm sure...' (A. Christie, *Patterns in Crime*. Pp.95-7)

尺度表現 : think < be sure

例 3 *Gulliver's Travels* (a TV adaptation, Channel 4, 1997)

状況 : ガリヴァーを精神病院から退院させるか否かの審理の部分

ガリヴァーが奇怪な旅行体験を語ると、医師たちの不信がつのる

馬の社会の方が人間の社会より優れている、という趣旨の発言の後

(1 行目 that = 馬の社会の方が人間の社会より優れている)

- 1 Doctor: Is that your suggestion, sir?
- ⇒ 2 Gulliver: I'm not suggesting it.
- 3 I'm insisting on it.

尺度表現 : suggest < insist

suggest: to communicate or show (an idea or feeling) without stating it directly
[Cambridge Dictionary of American English]

insist: to say firmly and repeatedly that something is true, especially when other people think it may not be true [LDOCE]

反例 : echo negation

Around here, we don't like coffee, we love it.

Horn (1989:382): (Lauren Bacall [US actress], a TV commercial)

類例 : It's not a car, it's a Volkswagen. 広告: 車の絵の存在

例 4

- 1 A: I'm partially wrong.
- ⇒ 2 B: No. You're entirely wrong.

(渡部昇一、松本道弘『英語の学び方』、1987 三笠書房、pp.212-3)

- 2 B: You're not partially wrong.

You're entirely wrong.

尺度表現 : partially < entirely

2.4 今後の課題

1. メタ言語否定の他の定番表現

“It's not A but it's B” monologue、echoic 性低下

- It's not a car, it's a Volkswagen.
- It's not TV, it's HBO.

-Horn (1989:402) “The archetypal frame for metalinguistic negation is the *not X but Y* construction, functioning as a single constituent within a sentence. This construction provides a straightforward way to reject *X* (on any grounds) and to offer *Y* as its appropriate rectification.”

-McCawley (1993:189): contrastive negation: the ‘*not X but Y*’ construction

2. メタ言語否定 **not** の起源

参考文献

- Carston, Robyn. 1996. "Metalinguistic Negation and Echoic Use." *Journal of Pragmatics* 25, 95-125.
- Chafe, Wallace L. 1994. *Discourse, Consciousness, and Time: the Flow and Displacement of Conscious Experience in Speaking and Writing*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- Horn, Laurence R. 1985. "Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity." *Language* 61:121-74.
- Horn, Laurence R. 1989. *A Natural History of Negation*. Chicago and London: University of Chicago Press. (re-issue edition, 2001, Stanford, CA: CSLI Publications)
- 加藤泰彦. 1990. 「否定の非真理関数的特性について」『言語障害教育に関する基礎的・応用的研究』上智大学国際言語研究所, 197-212.
- 加藤泰彦. 1996. 「否定とメタ言語」『日本語学』第 15 卷, 第 11 号, 35-43.
- 河西良治. 2000. 「*少ししか食べるわけではない」『言語』第 29 卷, 第 11 号, 59-64.
- Marmaridou, Sophia S.A. 2000. *Pragmatic Meaning and Cognition*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- McCawley, James D. 1993. "Contrastive Negation and Metalinguistic Negation." In *CLS 27 Part Two: the Parasession on Negation*, L. Dobrin, et al., eds., 189-206. Chicago, IL: Chicago Linguistic Society.
- 太田明. 1980. 『否定の意味：意味論序説』東京：大修館。
- Tannen, Deborah. 1989. *Talking Voices: Repetition, Dialogue, and Imagery in Conversational Discourse*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Yamada, Masamichi. 2003. *The Pragmatics of Negation: Its Functions in Narrative*. Tokyo: Hituzi Syobo Publisher.
- 吉村あき子. 1999. 「メタ言語的否定をめぐる論争」『英語青年』第 145 卷, 第 1 号, 41.
- 吉村あき子. 2000. 「メタ言語否定と関連性理論」『英語青年』第 146 卷, 第 7 号, 438-9&441.
- Yoshimura, Akiko. 2002. "A Cognitive-Pragmatic Approach to Metalinguistic Negation." *Proceedings of the Sophia Symposium on Negation*. Sophia Linguistic Institute for International Communication, 113-32.
- Yule, George. 1996. *Pragmatics*. Oxford: Oxford University Press.

存在文の文法性 —メンタル・スペース理論に基づいて—

大川 裕也
(大阪大学大学院)
essay88@let.osaka-u.ac.jp

1. はじめに

英語の存在文中で生じる名詞句は不定名詞句に限られており、定名詞句は生じない(定性制限; Milsark 1974, Belletti 1988)。

- (1) a. There is a man in the room. (Milsark 1974: 166)
b.*There is the man in the room. (ibid.: 208)

しかし、以下のように不定名詞句ではない名詞句が生じる場合もある。

- (2) a. There's the book on the table. (Abbott 1993: 44)
b. Nobody around here is worth talking to... well, there is John the salesman.
(Belletti 1988: 15)

目的：メンタル・スペース理論(Fauconnier 1994)に基づき、存在文中の定名詞句の意味解釈を明示する。

主張：存在文中の *there* と場所句がスペース導入表現となり、それにより存在文中の定名詞句に特定の解釈が与えられる。

2. 先行研究

2.1 Quirk et al.(1985), 福地(1985)

Quirk et al.(1985)や福地(1985)では、談話の情報構造から存在を表す *there* を分析している。一般的に、文は旧情報で始まり、新情報が付け加えられるという構造を持つ(3a)。福地(1985)によると、不定名詞句は新情報を受けやすいため、(3b)のような文は容認性が低く、一方、文頭に虚辞の *there* を置き、新情報を明示すると文法的に問題はない(3c)。

- (3) a. Yesterday I met Jane in a hall. The hall was decorated with many paintings.
(福地 1985: 17)
b.?A box is empty. (ibid.: 30)
c. There is a girl in the room. (ibid. 106)

△問題点：(2)のような文は、情報構造に合致していない。

2.2 Milsark(1974)

Milsark(1974)では、存在文中の名詞句は、該当するリストの中の一部を指す場合があることを示唆している。(4)では、話し相手の集合がリストであり、そのリスト内の *John the salesman* が任意に選ばれたため、定名詞句は不定である。

- (4) Nobody around here is worth talking to... well, there is John the salesman. (=2b)

△問題点：(2a)のような存在文は、前提となるべきリストが存在しなくとも、文法的である。

2.3 Lakoff(1987)

Lakoff(1987)では、存在文を直示構文と存在構文の二種類に分類している。そして、直示構文の *there* は物理的空間を表し、存在構文の *there* はより抽象的なメンタル・スペースを導入することを明らかにしている。さらに、それぞれの構文は、「存在は概念空間内の場所として理解される」というメタファーに基づいている。

△問題点：不定名詞句と定名詞句の生起に関わる制約が明確に議論されていない。

3. 理論的的前提

◆メンタル・スペース理論(Fauconnier 1994)

- ・メンタル・スペースの構築→意味構築
- ・言語表現とは別の構成物
- ・構造を持った増加可能集合体
- ・スペース導入表現：前置詞句、副詞、主語・動詞の結合、テンス、ムードなど

- (5) In Len's painting, the girl with blue eyes has green eyes. (Fauconnier 1994: 12)

スペース導入表現：In Len's painting

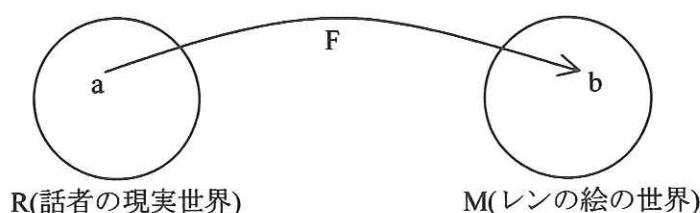


図 1

• Identification (ID) Principle

- (6) If two objects (in the most general sense), a and b , are linked by a pragmatic function F ($b = F(a)$), a description of a , da , may be used to identify its counterpart b .

(Fauconnier 1994: 3)

- ・役割：名詞句は役割 r を導入する。
スペースを項とし、その指示対象を値とする。

- (7) The president changes every seven years. (Fauconnier 1994: 39)
 →役割 r : 「大統領が 7 年ごとに変わる」
 →値 $r(M)$: 「特定の大統領(の特徴)が 7 年ごとに変わる」

4. 予測・提案

一般的に、場所句はスペース導入表現とみなされる。(8)では、補文内の *at the door* がスペース導入表現となり、*his master* は「ドアのところに存在している飼い主」と解釈される。定名詞句 *his master* が生じるのは、*a dog* からの推論により、話者・聴者が共に同定できるからとされる。

- (8) A dog may well think that his master is *at the door*: but unless a dog masters a language it is hard to see how he can think that he is thinking that his master is at the door. (BNC/下線とイタリックは発表者)

◎予測・提案：(8)では、*at the door* という場所句がスペース導入表現となり、そのスペース内で定名詞句を解釈するが、存在文中に定名詞句が生起する場合、場所句と虚辞の *there* がスペース導入表現となり、(8)とは異なる定名詞句解釈が得られるのではないか？

- (9) a. "It was only yesterday that the chance came. I may tell you that, besides Mr. Rucastle, both Toller and his wife find something to do in these deserted rooms, and I once saw him carrying a large black linen bag with him through the door. Recently he has been drinking hard, and yesterday evening he was very drunk; and when I came upstairs there was the key in the door. I have no doubt at all that he had left it there..." (HTI/下線は発表者)

- b. "We are then on an island!"
 "Ay! There are the falls on two sides of us, and the river above and below. If you had daylight, it would be worth the trouble to step up on the height of this rock, and look at the perversity of the water." (HTI/下線は発表者)

- c. ...Of course it was argued on the other side that the blood-marks on her dress might have been caused by her kneeling down by her husband when she rushed out of her room; but there was the open door below, and the fact that the fingermarks in the staircase all pointed upward. (HTI/下線は発表者)

いずれの例の名詞句も、談話内では初出であるため、スペース R で値を取ることは不可能である。さらに、(9a)から(9c)を通して、定名詞句の存在を強調する文脈であることに着目されたい。つまり、話者及び聴者が定名詞句の指示内容を同定しているか否かに関わらず、ここでの定名詞句は、その指示内容を単に強調したり、唯一性を保証するものとして機能している。

◎存在文中の *there* と場所句によって新たに導入されるスペースにより、このような解釈が得られると考えられる。

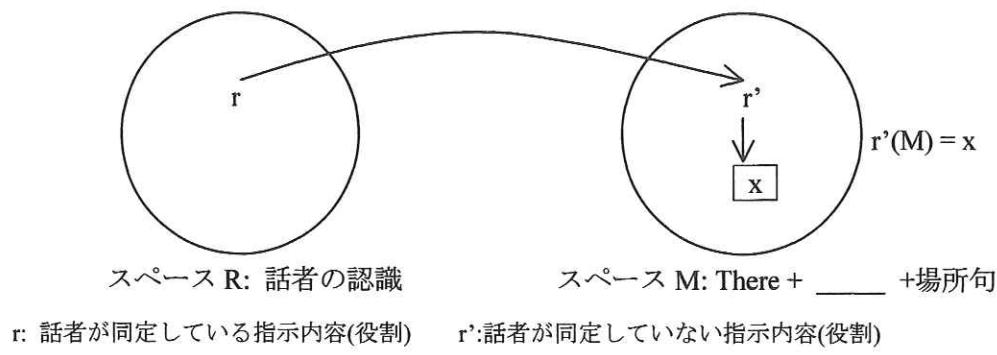


図 2 [存在文中の定名詞句解釈]

- (10)a. For, roughly, the following utterance will be true (10) There is a man on Mars just in case at the time of speaking there is a man on Mars, whereas (11) will be true just in case at some time prior to the time of speaking (10) would have been true: (11) There was a man on Mars... (BNC/下線は発表者)

- b. But the practice of taking an in-depth, thorough look at the candidates I think is a good one. There have been many references in this hearing to the fact that in years past Supreme Court nominees simply weren't subjected to this kind of treatment or this kind of examination. (HTI/下線は発表者)

一般的に、談話内で初出である指示内容は、不定名詞句で表される。よって、(9)で記されている定名詞句はすべて初出であるため、不定名詞句での記述が可能であると予測される。しかし、(10)が示すように、不定名詞句は指示内容の強調や唯一性を表すことができない。

5. 文法性の予測

存在文の場合、スペース M は定名詞句に強調または唯一性といった要素を加えるスペースである。

- (11) # In Kittredges's book, there is the claim about the interaction of syntax and pragmatics.
(Ward and Birner 1995: 736)

ここでの *the claim* は、存在文中の *there* と場所句によって新たに導入されるスペース M での解釈を許さない。「統語論と語用論との連関」という主張内容が唯一性に欠けるからである。これにより容認性の低さが説明される。しかし、(8)のように、場所句のみが導入するスペースでの解釈は可能であるため、(12)は容認可能となる。

- (12) The claim about the interaction of syntax and pragmatics is in Kittredges's book.

さらに、(2)の存在文はどのように説明されるかを再考する。

- (13)a. There's the book on the table. (=2a)
b. Nobody around here is worth talking to... well, there is John the salesman. (=2b)

Abbott(1993)によると、(13a)は *What can I use to prop open the door?* などのような文の返答としての使用であると指摘している。「相手が『ドアを支えて開けておくためのもの』を探している」という前提があるため、(13a)の話者はその前提を満たすことが求められる。名詞句が単に指示対象を表すのではなく、前提を満たさなくてはならないので、少なくとも、スペース R で値を取ることは不可能である。これが、スペース M の導入のきっかけとなり、存在文中に定名詞句が生起する。そして、(13b)では、*John* は話者が同定できる人物であるため、スペース R で値を取ることも考えられる。しかし、ここでも「話す価値のある相手」という前提がある。結果として、ここでの *John* は「話す価値のある相手」という前提を満たした人物で、この前提がスペース M の導入のきっかけとなる。よって、(13a)と同様に、存在文が問題なく容認される。

6. 場所句のない存在文

定名詞句を取る存在文では、場所句を伴わないものが見受けられる。

- (14)a. "It nearly killed him, although he had only been exposed to it in the disturbed ocean and not in the narrow calm waters of a bathing-pool. He says that he could hardly recognize himself afterwards, so white, wrinkled and shrivelled was his face. He gulped down brandy, a whole bottleful, and it seems to have saved his life. There is the book, Inspector. I leave it with you, and you cannot doubt that it contains a full explanation of the tragedy of poor McPherson." (HTI/下線は発表者)
b. First there were the stories that Kylie was in fact a complete fabrication.
(BNC/下線は発表者)

- c. There were the sale of er the shares of erm Cedar Fair, our current, which is one of our current assets and investments.
(BNC/下線は発表者)

定名詞句が表す指示内容の唯一性が解釈される限り、場所句は言語化される必要はない。しかし、存在文は名詞句が表す指示内容の存在を明らかにする機能をもつことから、場所句は存在の前提となるべきである。故に、場所句は言語的に明示されていないだけであると考えられる。

7. 結語

本発表では、Fauconnier(1994)のメンタル・スペース理論に基づいて、存在文中に定名詞句が生起する場合の定名詞句解釈、並びにその文法性について論じた。主張点は、存在文中の *there* と場所句が新たなスペースを導入することにより、場所句だけが導入したスペースでは得られない定名詞句解釈が得られるという点である。そこで得られる定名詞句解釈は、強調あるいは唯一性といったもので、不定名詞句がもち得ない機能を有する。さらに、定名詞句を伴う存在文の容認性は、*there* と場所句により導入されるスペース M での解釈の必要性により左右される。

存在文では、*be* 動詞以外の動詞(非対格動詞など)が伴う場合が少なくない。本発表は *be* 動詞を伴うものののみの分析であったが、他の動詞においても共通した点が見出せるかもしれない。加えて、とりわけ口語では、「*there*+動詞+名詞句+場所句」といった定式は遵守されていないことにも留意しなくてはならない。さまざまな形式に応用できるよう、より綿密な分析が必須とされる。

参考文献

- Abbott, B. 1993. "A Pragmatic Account of the Definiteness Effect in Existential Sentences." *Journal of Pragmatics* 19, 39-55.
- Belletti, A. 1988. "The Case of Unaccusatives." *Linguistic Inquiry* 19, 1-34.
- Epstein, R. 1996. "Viewpoint and the Definite Article." In A. E. Goldberg ed. *Conceptual Structure, Discourse, and Language*, 99-112. Stanford: CSLI.
- Fauconnier, G. 1994. *Mental Spaces: Aspects of Meaning Construction in Natural Languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fauconnier, G. 1997. *Mappings in Thought and Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 福地肇 1997. 『談話の構造』 太田朗・梶田優 編. 新英文法選書 10 東京：大修館書店.
- Halliday, M. A. K. 1994. *An Introduction to Functional Grammar*. London: Edward Arnold.
- Hornstein, N., S. T. Rosen and J. Uriagereka 1996. "Integral Predication." *WCCFL* 14, 169-183.
- 久野暉 1978. 『談話の文法』 東京：大修館書店.
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lambrecht, K. 1994. *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus, and the Mental Representations of Discourse Referents*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lumsden, M. 1988. *Existential Sentences: Their Structure and Meaning*. New York: Croom Helm.
- Milsark, G. L. 1974. *Existential Sentences in English*. Ph. D. dissertation, MIT. New York and London: Garland.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 坂原茂 2000. 「英語と日本語の名詞句限定表現の対応関係」 坂原茂 編. 『認知言語学の発展』 213-249. 東京：ひつじ書房.
- Ward, G. L. and B. Birner 1995. "Definiteness and the English Existential." *Language* 71, 722-742.

コーカス

British National Corpus (<http://thetis.bl.uk>) [BNC]

HTI Publicly Available Modern English Collection (<http://www.hti.umich.edu>) [HTI]

前提にならない until 節と因果連鎖

出水孝典

(立命館大学言語教育センター外国語嘱託講師)

0. はじめに

本発表では until 節を主節の前提になるかどうかという点から考察する。論点は以下のようなものである。

- (i) until 節には主節の前提になるものとならないものがある。
- (ii) 主節の前提になる until 節は、他の副詞節同様、現実世界を複数の事象としてとらえ、図・地の原則に従う形で主節・従属節へと振り分け言語化したものである。
- (iii) 主節の前提にならない until 節は、結果構文へと言語化するのに適切な語彙が存在しない場合の、結果構文の語用論的代用形式である。

1. until 節の語用論的特性：主節の前提となるか否か

時間を表す副詞節は主節の前提となるのが一般的である。

Keenan(1971)は論理的的前提を次のように定義している。

- (1) We now define logical presupposition as follows: A sentence S logically presupposes a sentence S' just in case S logically implies S' and the negation of S, ~S, also logically implies S'. In other words, the truth of S' is a necessary condition on the truth or falsity of S. (Keenan 1971: 45)

そしてその例として、次のように時間を表す副詞節を挙げている。

- (2) Temporal Subordinate Clauses
 - a. John left (didn't leave) when/before/after Mary called.
 - b. [Presupposition of Sentence] Mary called. (Keenan 1971: 47)

until 節の場合も一般的にはそう

- (3) John waited until Bill came. (cf. Heinämäki 1978: 85)

この場合、John didn't wait until Bill came. と言っても、「Bill が来た」ことには変わりがない。

しかし主節の前提とはならない until 節がある

- (4) a. John sang until he lost his voice.
b. Sam waxed the floor until it was shining.

- c. Bill kept kicking the door until it opened.
- (5) What is special about [(4)] is that their *until*-clauses are not presuppositions, although *until*-clauses like temporal clauses in general are presupposed to be true.

(Heinämäki 1978: 84)

Heinämäki の説明→if 節に埋め込んだ場合、(6a)の until 節は文全体の前提として残るが、(7a) の until 節は文全体の前提にはならない。

- (6) a. If John waited until Bill came, then he missed the movie.
b. Bill came.
- (7) a. If John sang until he lost his voice, he must be a silent fellow nowadays.
b. It is possible that John lost his voice.
- (8) We can conclude from [(6a)] that the *until*-clause, [(6b)] is true. But from [(7a)] we can only get that it is possible that the *until*-clause is true.

その背後にある意味の違い

- (9) In [(4)], but not in [(3)], the *until*-clause expresses a result of the activity described in the main clause. Whether the result is obtained usually depends on whether the activity goes on long enough. It is this “result-*until*” that fails to be a presupposition.

(Heinämäki 1978: 85)

この節のまとめ

主節の結果を表さない until 節: 普通の時間を表す副詞節同様に、主節の前提となる
主節の結果を表す until 節: 普通の時間を表す副詞節とは異なり、主節の前提ではない
→Heinämäki は主節の結果を表す until 節が主節の前提とならないという事実を指摘しているだけで、なぜそういった場合主節の前提になれないのかを説明していない。本発表の目的は、それを説明することである。

2. until 節の特殊性と認知原則

副詞節は Talmy(1978)が述べているように、図・地の区分を反映している。現実世界が副詞節を含む複文へと言語化される場合、現実世界の複数の事象が認知上の図・地へと振り分けられ、地とみなされた事象が副詞節、図とみなされた事象が主節へと言語化される。

こうした振り分けはわれわれの認知傾向を反映している。

時間的に先行する事象=地→副詞節、時間的に後続する事象=図→主節

- (10) The unmarked (or only possible) linguistic expression for any particular relation between two events that are in temporal sequence treats the earlier event as a reference-point, or

Ground, and the later event as requiring referencing, i.e. as the Figure. Where the complete surface form is that of a whole complex sentence, the two events are accordingly expressed in the subordinate clause and in the main clause, respectively.

(Talmy 1978: 638)

- (11) She departed after his arrival/after he arrived.

(Talmy 1978: 637)

原因となる事象=地→副詞節、結果として生じる事象=図→主節

- (12) The unmarked (or only possible) linguistic expression for a causal relation between two events treats the causing event as Ground and the resulting event as Figure. Where the complete surface form is a full complex sentence, the two events are in the subordinate and the main clause, respectively. (Talmy 1978: 639)

- (13) We stayed home because of his arrival/because he had arrived.

(Talmy 1978: 637)

前提と図・地の認知傾向の間にはどのような関係があるのか。

Talmy の存在論的先行性に関する傾向

存在論的に先行する必然的事象=地→副詞節、それに付随する偶発的事象=図→主節

- (14) A necessary (i.e. ontologically prior) event acts as Ground (in the subordinate clause) with respect to a contingent event as Figure (in the main clause). (Talmy 1978: 640)

- (15) contingent = able to happen only in a particular situation or if something else happens first: CONDITIONAL (Macmillan English Dictionary)

→主節の事象が生起しうるのは副詞節の事象が生起した場合のみである、つまり、副詞節の事象が、主節の事象が生起する前提となっているということである。

これは結局次のように言い換えられる。

- (16) 断定されている部分は図、前提とされている部分は地

(山梨 1995: 14)

until の特殊性→認知原則にあてはまらない

時間関係に関する認知原則(時間的に先行する事象=地、時間的に後続する事象=図)にあてはまらない。

- (17) She slept until his arrival/until he arrived.

(Talmy 1978: 637)

sleep は arrive に対して時間的に先行するのになぜ主節で表されているのか

Talmy(1978)はこれを因果関係に関する認知原則(原因=地、結果=図)によって説明している。

→until 節の事象が、主節の事象の終結を引き起こしている。

- (18) The problem of *until*'s apparently exceptional sequential properties may find resolution by

observation of its causal properties. For when the relation has a causal implication---as it can in [(17)]---this follows the general pattern at least to this extent: the causing event---'his arrival' in [(17)]---is expressed in the subordinate clause. Now, semantically, what this event causes is *not* the event expressed in the surface main clause---'her sleeping' in [(17)]---but rather the *end* of that event. And temporally, that end is indeed after the causing event. (Talmy 1978: 639)

Talmy は until が認知原則に従っていると説明するため、次のような意味的派生の結果、until 節が生成されるとしている。

- (19) [THE END OF [she slept]] BE AT [he arrived].

→[she slept] HAVE-ITS-END AT/EXTEND UNTIL [he arrived]. (Talmy 1978: 639)

→こうすることで、「彼の到着」は「彼女の睡眠の終結」に時間的に先行し、前者が後者を引き起こしたという関係が成り立つ。すると、時間関係・因果関係に関する両認知原則に従っていることになる。

(19)は矢印によって表される派生の前後で、それぞれ次の a, b のような表層の文になるという。

- (20) a. She stopped sleeping when he arrived.

b. She slept until he arrived. (Talmy 1978: 640)

確かにこのように見れば、例外的に見える until 節も認知原則と一致するが、常にこのような見方ができるのだろうか。

- (21) 言語現象の理解に関わるこの種の区分は、絶対的なものではない。与えられた言語表現のどの部分が図でどの部分が地として認識されるかは、その言語表現の使用される文脈や状況との関連で相対的に決められる。 (山梨 1995: 14)

→認識の仕方を決める文脈とは何か？

3. 因果連鎖とその言語化

そもそもどうしてある事象が副詞節へと言語化されるのか。

Croft(1991)が挙げている言語化に対する制約

单一の語彙へと言語化できるのは、单一の因果連鎖でつながった事象、すなわち一つの事象のみ

- (22) Individual lexical items appear to denote only causally linked events. (Croft 1991: 160)

次の例における容認度の差はこれによるもの。つまり、因果連鎖でつながっていなければ、一つの動詞・一つの節へと言語化することはできない。

- (23) a. The boat sailed into the cave.
 b. *The boat burned into the cave.
- (24) The activity of sailing and the motion into the cave can be combined only because the activity of sailing *causes* the motion to come about. If the activity does not cause the motion to come about, the sentence is unacceptable [as in (23b)]. (Croft 1991: 160)

(23b)のような意味を表したければ、(26)のように従属節を用いて言語化するしかない。

- (25) If one does want to describe two causally unrelated events that are simultaneous and possibly also spatially co-occurring, then one must use two separate verbs in separate clauses, linked coordinately or subordinately.
- (26) The boat was burning as it entered the cave. (Croft 1991: 160)

実際、上で見た前提となっている従属節は、そのようになっている。

- (27) a. John left (didn't leave) when/before/after Mary called. [= (2a)]
 b. John waited until Bill came. [= (3)]

(27a)の「ジョンの出発」「メアリーの電話」、(27b)の「ジョンが待つこと」「メアリーの到着」は別の因果連鎖に属する事象である。因果関係でつながっていない2つの事象であるからこそ、主節・副詞節という形で言語化された。

主節の前提とならない until 節は上記の副詞節とは異なる。

主節の前提とならない until 節の場合、主節の事象が until 節の事象を引き起こしたという因果連鎖が存在するので、「因果関係でつながっていない2つの事象であるから主節・副詞節という形で言語化された」のではない。

- (28) a. John sang until he lost his voice.
 b. Sam waxed the floor until it was shining.
 c. Bill kept kicking the door until it opened. [= (4)]

類似の状況が従属節を用いず結果構文で表されることもある。これは単一の因果連鎖でつながっているからである。

- (29) a. John sang himself hoarse.
 b. Sam wiped the floor clean.
 c. Bill kicked the door open(ed).

したがって、(28)が until 節を用いて言語化されているのは、因果連鎖が存在しないからではない。結果構文などの一つの動詞・一つの節へと言語化しようとしても、それを表す語彙がなかったためである。

結果構文の語彙的制約

結果構文は、因果連鎖、時間関係といった意味的な側面以外に、語彙的な制約が強く、因果連鎖や時間関係が適切であっても、言語化に用いることのできる語彙が限られている。

- (30) a. John laughed himself to sleep.

- b. John laughed himself silly.

- (31) a. *John laughed himself sleepy/asleep.

- b. ??John laughed himself tired.

- (32) 特定の構文においては用法や意味が限定され生産性に乏しく、容認度に不安定なものもある。 [...] [(30)] の結果構文は適格であるが、意味・形式上それと類似の [(31)] は一般に不適格である。 [...] [(30)][(31)] のような結果構文は不安定な構文である。このような構文に対する分析が詳細になればなるほど、意味と形式の関係は複雑になる。

(児玉 2002: 77-79)

(28) の until 節を含む文が表しているのは、語彙的な制約さえクリアできていれば一つの動詞・一つの節によって言語化できたはず一つの事象である。適切な語彙がなかったために、仕方なく一つの事象を二つの動詞・二つの節へと言語化したものだと考えられる。

主節の前提とならない until 節

→結果構文へと言語化するのに適切な語彙が存在しない場合に、結果構文の代わりに用いられる。

結果構文と until 節の違いについて、Horrocks and Stavrou は次のように述べている。

- (33) a. beat the metal flat (Horrocks and Stavrou 2003: 303)

- b. s/he beat the metal until it was flat (Horrocks and Stavrou 2003: 305)

- (34) Note here the contrast between [(33a)], where ‘becoming (fully) flat’ is explicitly encoded as the culmination of the semantically composite incremental process of ‘beating-flat (the metal)’, and [(33b)], where the temporal clause simply measures the ‘extent’ of the atelic activity of ‘metal-beating’ by assigning an arbitrary limit: i.e. the agent stopped when the metal became flat (as opposed to some other time when s/he might have stopped). The flatness of the metal at the moment of cessation is understood pragmatically as a consequence of beating it, but flatness is not encoded as a state attained by the metal as a result of beating it.

(Horrocks and Stavrou 2003: 305-306)

結果構文が主節とその結果を(意味論レベルで)コード化しているのに対して、until 節は主節の事象が止められたことを言っているだけであり、until 節の事象が主節の事象の結果であることは語用論的に理解されているだけである。

→until 節は結果構文の語用論的代用形式で、因果関係が結果構文によって直接表せない場合に、それを聞き手の語用論的推論に委ねるものである。

なぜこうした until 節は主節の前提とならないのか。

until 節が主節の前提となるためには、二つの因果連鎖・二つの事象が必要である。事象が二つ存在してはじめて、一方が他方の生起に必要である、つまりその前提である、という関係が生じるからである。

二つの節からなる文へと言語化されてはいても因果連鎖でつながった事象の場合、因果連鎖でつながっていない別個の二つの事象が存在する場合よりも、図・地の認知が明確に機能せず、一方を地・背景である前提とみなす認知プロセスがはたらかないと考えられる。むしろこの場合、事象の認知順序がそのまま語順に反映され、一方が他方の前提であるとみなすのではなく、等位接続に近い認識で言語化が行われていると考えれば、なぜ主節の事象の結果を表す until 節が前提にならないのかが説明できる。

4. おわりに

本発表では、主節の事象の結果を表す until 節がなぜ主節の前提にならないのかを、図・地の認知原則、および因果連鎖に課される言語化の制約の点から説明した。具体的には、通常の until 節が因果連鎖でつながっていない別個の事象を図・地に区分けして認知することで作られるのに対して、主節の事象の結果を表す until 節は、因果連鎖でつながった事象が、単文への言語化に必要な語彙の欠如から、やむをえずこのような形で言語化されたものであり、図・地の区分けがはたらかず、そのために地となる前提が認識されないものであることを示した。

参考文献

- Croft, William (1991) *Syntactic Categories and Grammatical Relations: The Cognitive Organization of Information*. University of Chicago Press, Chicago.
- Heinämäki, Orvokki (1978) *Semantics of English Temporal Connectives*, Indiana University Linguistics Club, Bloomington.
- Horrocks, Geoffrey and Melita Stavrou (2003) "Actions and their Results in Greek and English: The Complementarity of Morphologically Encoded (Viewpoint) Aspect and Syntactic Resultative Predication," *Journal of Semantics* 20, 297-327.
- Keenan, Edward L. (1971) "Two Kinds of Presupposition in Natural Language," *Studies in Linguistic Semantics*, ed. by Charles J. Fillmore and D. Terence Langendoen, 45-52, Holt, Rinehart and Winston, New York.
- 児玉徳美. (2002) 『意味論の対象と方法』 くろしお出版, 東京
- Talmy, Leonard (1978) "Figure and Ground in Complex Sentences," *Universal of Human Language Volume 4*, ed. by Joseph H. Greenberg, 625-649, Stanford University Press, Stanford, California.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press, Ithaca.
- 山梨正明. (1995) 『認知文法論』 ひつじ書房, 東京

対人関係に配慮した「申し出」表現についての一考察

吉成 祐子
神戸大学文化学研究科博士課程

1. はじめに

- (1) (たくさん荷物を抱えている人を見て) お荷物、お持ちしましょうか。
- (2) (棚の上の荷物をとろうとしている人を見て) お取りしましょうか。

【本研究では】

- 1) 「申し出」表現が、「相手の願望をたずねる」(Asking Desire)という発話意図を実現するために使用されることを指摘・分析
- 2) その「申し出」表現が使用される理由として、①相手に対する話し手の心的態度の表明、
②相手の意向を察して行う配慮、であることを主張

2. 先行研究

2-1. 「相手の願望をたずねる」ための表現

- (3) a. Would you like to see my photos?
- b. 写真を見たいですか。

英語 : "Do you want to~ ?" "Would you like to~?"

日本語 : 「～したい（です）（か）？」 ⇒ 丁寧さの点で不適切・使用制約あり

<熊井(1989); 鈴木(1989); 大石(1996)など>

【典型的な日本語の表現①】

- (4) (先生に対して) コーヒー、飲みたいですか。
→ a. コーヒー、飲みますか。 《相手の行動をたずねる表現》
→ b. コーヒー、飲みませんか。 《相手に行動を勧める表現》
<鈴木(1997)> 「聞き手の領域」 × 聞き手の欲求 → ○聞き手の行動

→ c. コーヒー、いれましょうか。 《話し手の行為を申し出る表現》
<鈴木(1997)> 「聞き手の領域」 → 「話し手の領域」

⇒典型的な日本語の表現に言い換えられる際、「聞き手の領域」に言及するのか、「話し手の領域」に言及するのか、その基準が定められていない

【英語における指摘】

<鶴田他(1998)>

「相手の行為」と「話し手自身の行為」のペアを作る動詞の場合、二つの表現が可能

- (5) a. Would you like (to have) another cup of tea?
b. Shall I get/bring/make you another cup of tea?

⇒日本語に関して、ペア動詞による使い分けを指摘しているものはない

2-2. これまでの「申し出」表現の研究

『日本語表現・文型事典』 2002:375

申し出表現 実現すれば相手に利益があることを、自分が実行する用意があることを
相手に伝えようとする表現

【「申し出る」という発話行為をめぐる、表現形式の検討】

<仁田(1991); 坂本・蒲谷(1995)など>

- (6) お荷物、お持ちしましょうか。
(7) お荷物、お持ちしましょう。
(8) お荷物、お持ちします。

【「申し出」表現を使用する場面の検討】

<鶴田他(1988)>

相手が困っているのを助けようとする場合

相手に楽しみになるようなことをしようとする場合

<坂本・蒲谷(1995)>

申し出をすべき必然性・社会的役割に基づいた「当然性」

⇒相手の願望をたずねるために「申し出」表現が使用されていることの考察はない

3. 「申し出」表現の特性

表1 「相手の願望をたずねる」典型的表現

	コーヒー、	決定権	利益・恩恵	行動の主体
(a)	飲みますか	聞き手	聞き手	聞き手
(b)	飲みませんか	聞き手	聞き手	聞き手
(c)	いれましょうか	聞き手	聞き手	話し手

【表現要素】

- 《共通点》 すべて聞き手が決定権を持ち、聞き手のみ利益・恩恵を受ける
- 《相違点》 「飲みますか」「飲みませんか」 一聞き手が〔飲む〕 という行動
「いれましょうか」 一話し手が〔いれる〕 という行動
- 鈴木(1997)によれば、「話し手の領域」「聞き手の領域」を区別する場合、対人関係に関わる、丁寧さの配慮がなされている
- ⇒「申し出」表現は、丁寧さのような対人関係に関わる表現

【表現形式】

- 《共通点》 相手に問いかける疑問文
- 《相違点》 「ショウ」形：話し手の意志を表す表現形式が含まれている
仁田(1991)で指摘されるように、「いれましょう」は、〔自分がコーヒーをいれる意志を持っている〕コトを明確にあらわしている
- ⇒「申し出」表現は、話し手の意志（積極的態度）を含む有標的な表現

【「申し出」表現】

話し手が提供しようとする行為を、相手が受け入れるかどうかを問いかける表現

【仮説 1】

「相手の願望をたずねる」という発話意図を実現するために、話し手は「申し出」表現を用いる

【仮説 2】

「相手の願望をたずねる」ために用いられる「申し出」表現には、対人関係配慮にもとづく、積極的な理由がある

上記の仮説を検証するため、相手の願望をたずねるために使用される、典型的な表現の実態調査を用いて分析を行う

4. 「申し出」表現の使用実態

4-1. 吉成(2003)における調査

【調査内容】

対象：日本語母語話者である大学生 66 名

方法：質問紙による調査

内容：相手の願望をたずねるために話しかける場面で、最も使いそうな表現を選択肢の中

から選ぶ

場面：話し手が持っている本を、相手が読みたいかどうかをたずねる

相手：大学内の人間関係を想定 《親》 カテゴリー…先生、後輩、友達

《疎》 カテゴリー…先生、後輩

【選択肢】

「相手の願望をたずねる」典型的な表現3つ ×

話体（普通体・丁寧体）の使い分け3段階 ⇒ 9つの表現

	普通体	丁寧体1	丁寧体2
行動質問	読む？	読みますか	お読みになりますか
勧め	読まない？	読みませんか	お読みになりませんか
申し出	貸そうか	貸しましょうか	お貸ししましょうか

4-2. 比較基準

話体の使い分けによる丁寧さ¹の実態

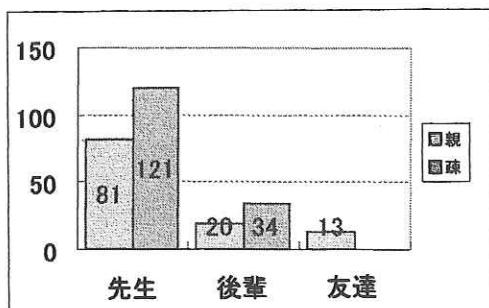


図1 丁寧度得点

《特徴》 上下・親疎関係による、丁寧さのあらわれに固定的な差あり

- ① 親疎に関わらず、目上に対して丁寧度が高くなっている
- ② 親よりも疎の関係にある相手に丁寧度が高くなっている

以上の結果は、杉戸(1979)や荻野(1983)などの先行研究と同傾向を示す

¹ 独自の手法である、丁寧度得点を用いて比較を行う。丁寧度0（普通体）0点、丁寧度1（デス・マス体）1点、丁寧度2（デス・マス体+尊敬語・謙譲語）2点と重み付けをし、相手別の回答の合計点数を丁寧度得点とした。

4-3. 結果

【「相手の願望をたずねる」典型的表現の使用比率】

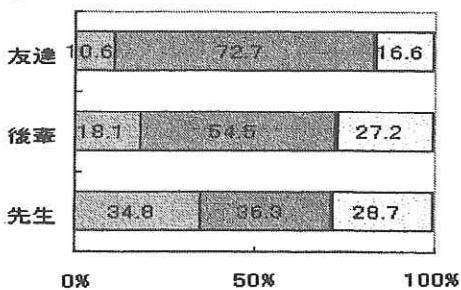


図2 《親》カテゴリー

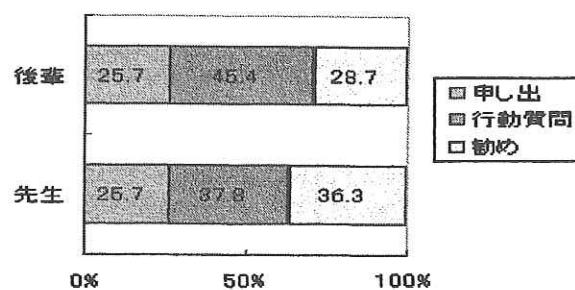


図3 《疎》カテゴリー

5. 考察

5-1. 話体による丁寧さとの比較

【上下関係による使用比率の比較】

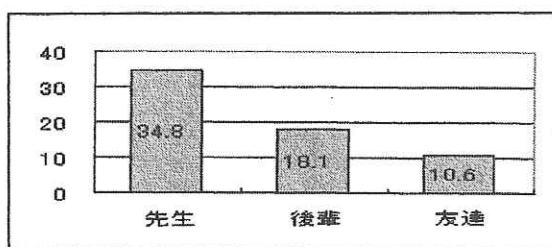


図4 《親》カテゴリーでの使用比率

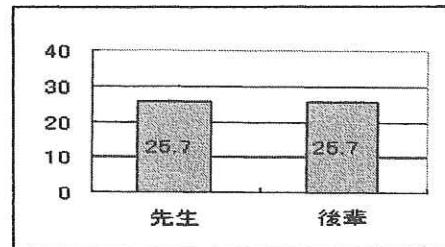


図5 《疎》カテゴリーでの使用比率

有意差あり

有意差なし

⇒話体による丁寧さの特徴①（親疎に関わらず、目上に対して丁寧度が高くなっている）

との違いあり = 「申し出」表現は、親しい相手の上下関係によってのみ使い分けられる

【親疎関係による使用】

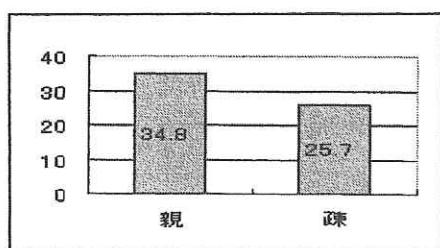


図6 先生に対する使用比率

親 > 疎

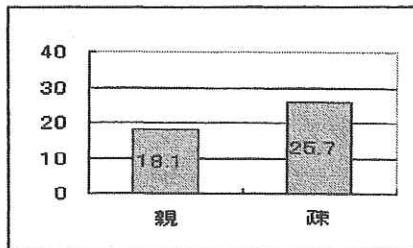


図7 後輩に対する使用比率

親 < 疎

⇒話体による丁寧さの特徴②（親よりも疎の関係にある相手に丁寧度が高くなっている）

との違いあり = 親しい先生に対して「申し出」表現の使用が高い

【考察①】

?なぜ、話体による丁寧さとの違いがあるのか
(疎の相手に対しては上下関係なし、友達と後輩に差あり)
⇒「話し手の領域」に言及するのは、聞き手との距離をとるため
「申し出」表現は、自己と相手との距離をとるためのストラテジー

【考察②】

?なぜ、《疎》の先生よりも《親》の先生に対する「申し出」表現の使用比率が高いのか
⇒親しき仲にも上下関係あり（目下である自分の立場をアピール）
「申し出」表現は、力関係による互いの位置を示すためのストラテジー

⇒「申し出」表現は、話し手の意志（積極的態度）を含む有標的な表現
相手に対する話し手の心的態度のあらわれ（行為を提供する意志をアピール）
「申し出」表現は、相手に対する積極的態度を示すためのストラテジー

5-2. 相手の意向情報の有無による比較

?なぜ、「申し出」表現は、どの相手に対しても使用されているのか
なぜ、話体による丁寧度のような、二極に分布した傾向ではないのか

【仮説 3】

相手が自分の行動を必要としていることを、話し手が認識している場合、「申し出」表現を使用する

<坂本・蒲谷(1995)>

「申し出をするためには申し出の主体が『相手は自分の行動を必要としているが、相手はそのことを自分に明言できないでいる』と認識している必要がある」
⇒話し手が、聞き手の願望を知っている場合、「申し出」表現の使用は妥当である

【比較する場面】

場面1：相手が読みたがっているかどうか知らない場合
場面2：相手が読みたがっていることを知っている場合

【相手の意向情報の有無による比較結果】

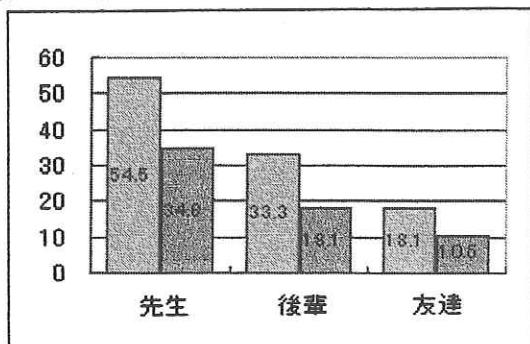


図8 《親》 カテゴリー

情報有 > 情報無

(%)

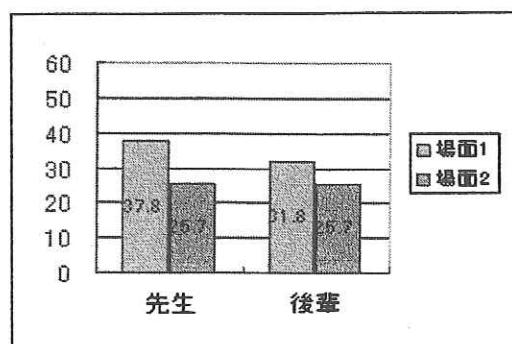


図9 《疎》 カテゴリー

情報有 > 情報無

【考察③】

「相手の願望をたずねる」時でも、特に、相手の願望を認識している場合には「申し出」表現を使用すべき必然性（坂本・蒲谷 1995）が適用される

⇒相手の意向がわからない場合でも、それを察しようとするほど「申し出」表現を用いるのではないかと推察される

↓

- ・ 親しくても目上には、相手の意向を察しようとする態度が必要であると考えて、「申し出」表現の使用が多いのではないか
 - ・ 友達や親しい後輩に対しては、相手の気持ちを察する必要はないものの、相手の気持ちを察しようという態度は力関係に関わりなく、文化的側面として行われているのではないか（日本のコミュニケーションの「察し」）
- ⇒「申し出」表現は、相手の意向にも配慮する対人関係ストラテジー

6. おわりに

【まとめ】

本研究では、「申し出」表現が「相手の願望をたずねる」ために使用される一面をもつていることを指摘し、調査結果より、使用される理由や要因についての分析を行った。「申し出」表現の使用には、相手との客観的な関係だけが要因となるのではなく、相手に対する話し手の心的態度の表明や、相手の意向を察するという、対人関係配慮が関わっていることを考察した。

【今後の課題】

- ・「申し出」表現使用の文化的差異の可能性
- ・隣接応答ペアにもとづく談話分析の必要性

<参考文献>

- Brown, P & Levinson, S. (1987) *Politeness: Some universals in language usage.* Cambridge University Press.
- 古田暁 (1996) 『異文化コミュニケーション (改訂版)』有斐閣
- 小池清治・細川英雄・小林賢次・山口佳也編 (2000) 『日本語表現・文型事典』朝倉書店
- 熊井浩子 (1989) 「待遇表現の一視点—「ほしい・たい」を中心にしてー」『日本語学校論集』16:1-13、東京外国语大学外国语学部附属日本語学校
- 森田良行 (1995) 『日本語の視点』創拓社
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 荻野綱男 (1983) 「待遇表現の数量化」水谷静夫編『朝倉日本語新講座 5 運用 I』朝倉書店
- 大石久実子 (1996) 「~(し)たいですか?」に代表される願望伺いについて—オーストラリア英語母語話者と日本語母語話者の接触場面での問題ー」『日本語教育』91:13-24、日本語教育学会
- 坂本恵・蒲谷宏 (1995) 「「申し出」表現について」『国語学研究と資料』19:左 25-35、早稲田大学
- 杉戸清樹 (1979) 「職場敬語の一実態一日立製作所での調査から」『言語生活』328:30-44、筑摩書房
- 鈴木睦 (1989) 「聞き手の私的領域と丁寧表現—日本語の丁寧さは如何にして成り立つかー」『日本語学』8(2):58-67、明治書院
- (1997) 「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」田窪行則編『視点と言語行動』45-76 くろしお出版
- 鶴田庸子/ポール・ロシター/ティム・クルトン (1988) 『英語のソーシャルスキル』大修館書店
- 吉成祐子 (2003) 「願望疑問文をめぐる言語表現の使い分け」『日本語教育論集』12:122-129、姫路獨協大学

会話における認識的権威の交渉：終助詞「よ」「ね」の分布と機能について

金井 薫

日本女子大学大学院 (kaoruk@mint.ocn.ne.jp)

0. はじめに

本研究は、会話分析的な見地から自然会話の発話連鎖において終助詞「よ」と「ね」がどのように使用されているのかに注目し、会話参加者が「よ」、「ね」を用いる事によって何をしているのかを分析、考察する。「よ」、「ね」の使用は当該の情報の性質により自動的に決められるのではなく、「よ」、「ね」の使用を通して「認識的権威」の所在が交渉されている事を示す。

1. 問題提起

1. 1 終助詞「よ」、「ね」

- ・神尾(1990)：情報の所有権について論じた「情報のなわ張り理論」の枠組において、終助詞「ね」を話し手、聞き手と情報との「心的距離」という観点から捉えている。終助詞「ね」はそこで述べられる情報が聞き手のなわ張りに属する事を示す標識であるとしている。
- ・金水(1991)：終助詞「よ」は話し手が完全な仮説を持つ時に使われやすい標識、「ね」は話し手の持つ仮説が聞き手の持つ仮説よりも強くない事を示す標識であるとした。
- ・片桐(1995)：「よ」、「ね」を話し手が当該の情報をどれだけ受け入れているのかを表す標識として捉えている。
- ・Morita (2002) : Goffman (1981)の“production format”という概念を用い、「よ」は相手と交渉の余地のない権威を持つという立場を示し、「ね」は相手との相対で弱い権威を示し、相手からの了解を求める標識であるとした。

これらの先行研究において、「よ」、「ね」の使用には、誰が情報に対しより「近い」のか、「強い仮説を持つ」のか、といった事が問題になると考えられている。しかし、二人以上の人間が実際に会話をすると、この問題について会話参加者の間で了解が得られていない場合があるのではないだろうか。発話連鎖の中で「よ」、「ね」がどのように使用されているのか、自然会話をデータとして分析する必要があると考えられる。

1. 2 「認識的権威」の交渉

Heritage (2002)は、会話において「認識的権威(epistemic authority)」を誰が持つか、という事が発話の形に影響を与えると考えている。認識的権威とは、ある事柄に関し相手

よりも知識があり、その事柄を評価する権利を持つ立場の事を指す。注目したいのは、「認識的権威」を誰が持つかということが、当該の情報の性質により予め会話参加者達が了解している事ではなく、やりとりの中で交渉されるものとして捉えられているという点である。

(1) Heritage (2002:200)より。表記上の修整を加えた。

- 1 Emm: The=y gosh uh this is really been a wee=k ha=sn'it?
2 Nan: → Oh== it rilly ha=s.
3 Emm I[t's rih]
4 Nan: [Gee it ri]=lly, it rilly ha=[s.
5 Emm: [Ah won't ev'n turn the tee vee o:n,h

- 1 第一評価 → 最初に発話されるため、第二評価よりも認識的権威を得やすい。
2 第二評価 → 同意/反対として位置づけられ (Pomerantz 1984)、第一ペアに依存した評価として受け止められやすい。“oh”を冒頭に置くことにより、発話者は自分が「認識的独立性」を有する事を示し、認識的権威が自分にある事を主張する事が出来る。

1. 3 目的

本研究では、Heritage (2002)に基づき、ある事柄について誰が「認識的権威」であるか、という問題は、予め会話参加者達の間で決定している事ではなく、やりとりの中で交渉される事であると考える。そして、会話参加者達は終助詞「よ」、「ね」を用いる事で当該の事柄に対する自分の態度を示しあう事により、「認識的権威」の所在を交渉しているという事を示し、実際の交渉の様子を記述する事を目的とする。

2. 方法

2. 1 分析の枠組

一つの事柄に言及している発話連鎖における終助詞「よ」、「ね」の分布に注目する。先行研究に基づき、認識的権威という観点から発話を次のように分類する。

- 完全な認識的独立性を持ち、認識的権威を持つ事を示す発話：「～よ」
- 不完全な認識的独立性を持ち、相手に依存している事を示す発話：「～ね」
- 全く認識的独立性を持たず、完全に相手に依存している事を示す発話：驚き表示¹（「あ、

¹ 森山(1989)の用語。森山は応答の形式は当該の情報に対する応答者と先行する発話の話者との相対的な接近度を表す事を指摘しており、「～ね」という形は先行文の発話者の方が接近度が高い事を示すと考えている。

「うなんだ」、「へえ」など

2. 2 データ

日本人母語話者同士による友人、家族、姉妹などによる会話を約3時間分収集し、文字化したものをデータとした。

3. 分析

3. 1 認識的権威の所在がはじめから了解されている場合

(2) まきこ：義姉、ひかる：義妹、

(まきこがひかるからもらった梅酒について)

- 1 まきこ： あんだけあったのにきれ=いに飲んじゃったの.
- 2 すっからかんだもん.
- 3 ひかる：→ おいしいもんね.
- 4 まきこ：→ おいしいもんね=.
- 5 ひかる： いや・ふ・な夏だったら冷やしてさ,
- 6 氷いれてね=,
- 7 まきこ： うん.

(3) まりこ：妹、みどり：姉

- 1 まりこ： → ...なんかもう埼玉に住んでるみたいだよ,
- 2 益田さん.
- 3 越谷に.
- 4 みどり： → !あそなんだ.
- 5 え 一緒 [もう]住んでんの?
- 6 まりこ： [うん]
- 7 多分.
- 8 みどり： あそなんだ.

(4) さき：姉、かよ：妹 ドライブ中の会話

- 1 さき： 次が相模湖な [んだっけ] ?
- 2 かよ： [そうそう].
- 3 それで八王子相模湖間でさ=,
- 4 さき： うん.
- 5 八百円 [違うの] ?
- 6 かよ：→ [八百円ぐらい] 違うのよ.

- 7 さき : → すっごい違うねえ.
 8 かよ : うん.
 9 さき : → 大した距離じゃないのにねえ.
 10 かよ : うん.
 11 確かろっぴやー,
 12 六百円かな.
 13 さき : うん.
 14 かよ : なんかねえ,
 15 ちょっと,
 16 変な,
 17 ちょうど=間なのかななんかよく分かんないけど.
 18 さき : → でも意外とあるんだよね [相模湖]
 19 かよ : → [距離] あるよ.

3. 2 認識的権威をめぐって交渉が起きる場合

(5) 幼なじみ同士の会話

- 1 けんた : 覚えてないじゃん,
 2 [2 そんなの,2]
 3 ひとし : [2 え? 2]
 4 けんた : 昔のことなんて.
 5 ひとし : → 覚えてるよ.
 6 けんた : → 僕ぜんぜん覚えないよ,
 7 [1 小学校のことなんか,1]
 8 ひとし : → [1 覚えてるよ,1]
 9 : 小学校はなーから中[2 学とかさー,2]
 10 けんた : → [2 中学とか覚え 2]てないよ.

(6) 新しく同じ会社でアルバイトをする事になったバイト仲間同士の会話

- 1 みき : → 寒いねこの頃.
 2 さち : @
 3 みき : えつ.
 4 寒くない?
 5 さち : → 寒くないですよ.
 6 みき : → 寒いよ外.
 7 さち : ..ちょうどいいぐらい、

(7) さき：姉、かよ：妹 ドライブ中の会話

(高スピードで抜かして行った車に対して)

1 かよ：→ すごいね。

2 さき：→ すごいよ。

3 やっぱりあの馬力にはいくらなんでも勝てない。

(8) さき：姉、かよ：妹 ドライブ中の会話

(子供達に車を借りられる事に関して)

1 かよ： それはいいんだけど=、

2 さき： うん。

3 かよ： なんか、

4 ないと困るのよね。

5 さき：→ いやだからそうなのよ。

6 もうなんか車の生活しちゃってる [じゃない]。

7 かよ：→ [ね！]

8 → そうなのよ。

(9) 新しく同じ会社でアルバイトをする事になったバイト仲間同士の会話

(アルバイト先の社員について)

1 えいじ： 神城、神城さんポイントは=、

2 もう、

3 さち： @

4 えいじ： やるしかないからやるみたいな感じで。

5 さち： そうですよね=。

6 えいじ： たまあに東さんが @

7 さち： そうですよね。

8 すごいいつもあそこ[xxxx]

9 えいじ： まあ、

10 み、みんな自分勝手ですよね、

11 他人のことどうでもいいみたいな、

12 なんていうんですか。

13 さち： 入り込んでて。

14 えいじ： 入り込んでて。

- 15 → かー、佐藤さんが入ってから少し変ったんですよねそれでも.
16 さち： → そうなんですか。
17 えいじ： → 佐藤さん変えるんですよ.
18 さち： @[@@]
19 えいじ： [一人一人].

(10) 新しく同じ会社でアルバイトをする事になったバイト仲間同士の会話
(アルバイト先の社員について)

- 1 さち： 神城さんて=,
2 まさおさんがいる時ってすごいしゃべってて=.
3 せいじ： あ,
4 しゃべってたね.
5 まさおさんは.
6 しゃべる人なんですよ彼. @
7 さち： なんかこないだ,
8 → まさおさん来てましたよね,
9 昨日か一昨日くらい.
10 せいじ： → 来てたんですか.
11 さち： → 来てたんですよ=.
12 神城さんすごい楽しそうで=@
13 せいじ： @
14 さち： 嬉しそうになんかすんごい二人でずっとしゃべってましたよ.
15 せいじ： 二人はなんかずっと馬鹿話してたんですよね,
16 基本的に.

(11) さき：姉、かよ：妹 ドライブ中の会話

(かよの息子が新しいガールフレンドを家に連れて来た事について)

- 1 かよ： 十一時か十二時までは帰って来てって言ってたら
2 つ、一緒に来ちやったのよ.
3 さき： あああ.
4 それが手だったのよ.
5 かよ： かもしれないね.
6 さき： そこまであれしたのよ,
7 テクニック使ったのよ.
8 かよ： @@@

- (12) まきこ：義姉、ひかる：義妹、
 (ひかるがまきこにある料理の作り方を紹介している)
- 1 まきこ： ..じゃ分量だけ.
 2 分量だけ書いてけばいいんだわね?
 3 ひかる： あそう [そう] .
 4 みどり： [う=ん] .
 5 まきこ： ..じゃまたひとつ..
 6 みどり： これ [もおいしそう] じゃない?
 7 ひかる： [それだから=]
 8 → ..だからこれほんとにヘルシー [よ] .
 9 まきこ： [ヘルシー] .
 10 → ヘルシーね.
 11 ひかる： すっごいヘルシー.
 12 ヘルシーよりも易しいからいいわね.
 13 みどり： @@ [@]
 14 ひかる： [@@] @@@
 15 ひかる： いや,
 16 ヘルシーでおいしい.
 17 まきこ： あそう.
 18 ひかる： 私こんなに野菜だけがおいしいって初めてだったもん.
 19 まきこ： ほんと=?
 20 ひかる： うん.

4. 考察

従来：情報に対する話し手の主観的態度を表す標識としての終助詞「よ」、「ね」

↓

本研究：情報に対する認識的権威を交渉するための言語材料としての終助詞「よ」、「ね」

Hayashi & Mori (1998)による発話の相互構築の分析：「私的領域」という概念の再考

5. まとめ

終助詞「よ」、「ね」を分析する際にこれまで用いられて来た話し手、聞き手の「情報のなわ張り」、「仮説の強弱」などの概念を「認識的権威」という概念を用いて捉え直し、分析を試みた。そうする事により、ある事柄に関して誰が認識的権威を持つのか、誰が「ね」を用いるべきで誰が「よ」を用いるべきなのか、という問題は、情報の内在的性質により予め一人一人の頭の中で決められるものではなく、やりとりの中で動的に交渉されるものである事を示した。

文字化表記法

[]	重複	=	延び
[xxx]	聞き取れない音節	...	ミディアムポーズ
-	切断された単語	..	ショートポーズ
--	切断されたイントネーション単位	@	笑い
!	高ピッチの単語		

参考文献

- Goffman, Erving (1981) *Forms of talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Hayashi, Makoto and Junko Mori (1998) "Co-construction in Japanese Revisited: We do "finish each other's sentences,"" in N. Akatsuka, H. Hoji, S. Iwasaki, S. Sohn, and S. Strauss (eds.) *Japanese/Korean linguistics*, vol. 7, 77-93. Stanford: CSLI.
- Heritage, John (2002) "Oh-Prefaced responses to assessments: A method of modifying agreement/disagreement," in C. E. Ford, B. A. Fox, and S. A. Thompson (eds.) *The language of turn and sequence*, 196-224. Oxford: Oxford University Press.
- 神尾昭雄(1990)『情報のなわ張り理論－言語の機能的分析』大修館。
- 神尾昭雄(2002)『続・情報のなわ張り理論』大修館。
- 片桐泰弘(1995)「終助詞による対話調整」『言語』24号, 38-45.
- 金水敏(1991)「伝達の発話行為と日本語の文末形式」『神戸大学文学部紀要』18号, 23-41.
- Morita, Emi (2002) "Stance marking in the collaborative completion of sentences: Final particles as epistemic markers in Japanese," in N. M. Akatsuka and S. Strauss (eds.) *Japanese/Korean Linguistics*, vol. 10, 220-223. Stanford: CSLI.
- 森山卓郎(1989)「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1号, 63-88. 大阪大学文学部日本学科。
- Pomerantz, Anita (1984) "Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shapes," in J. M. Atkinson and J. Heritage (eds.) *Structures of social action: Studies in conversation analysis*, 57-101. Cambridge: Cambridge University Press.

直接引用とパワー：女性雑誌の批判的談話分析

真田敬子
(神戸大学大学院)

1. はじめに

日本の若者向けファッション雑誌やタウン情報誌では、一般の若者が掲載される際、写真のそばに発話の引用のようなものがつけられることが多い。しかしよく観察すると引用の形式は様々であり、引用符の使われたものから、若者の発話と解釈するのが難しいものまで、幅広く存在する。本発表では、若い女性向けのファッション雑誌の中で、大学生やOLなど一般の女性を読者モデルとして掲載する記事を分析し、まず、読者モデルの写真に添えられたテキスト（キャプション）が読者モデルによる発話として解釈されるメカニズムを示す。また、その発話の内容は引用のメカニズムと結びつくことによって、読者モデルと読み手の地位を構築するディスコースのパワー行使することを論じる。

2. 研究の背景：批判的談話分析（Critical Discourse Analysis）

批判的談話分析では、ディスコースは社会に流れるイデオロギーを反映するとともに、イデオロギーを構築するものもあると考える。この分野では、政治や人種差別、ジェンダー等の問題に関わるテキストや会話の分析を通して、言語使用がイデオロギーを構築する際にどのような形でパワー（支配しようとする力）が行使されるか、そのメカニズムを明らかにすることを目指している。

3. データと方法

3. 1 データ

雑誌「JJ」(2003年12月号)のうち、読者モデルとプロのモデルが一つの記事に登場しているものを分析した。「JJ」は読者モデルを採用する雑誌の草分け的存在である。想定される対象読者は女子大学生およびOL(18歳～20代半ば)である。

分析の主な対象は読者モデル登場記事の写真に添えられたキャプションである。キャプションは1ページまたは2ページを全体とするテキストのうちの部分テキストであるが、ここに読者モデルの発話として読める文が置かれる。

3. 2 分析

3. 2. 1 視覚的手がかり

雑誌記事は視覚的に写真、タイトル、リード、キャプションといった部分に分けられる。またキャプションの中では、空所や引用符やかっこが使用されている。このような視覚的手がかりは、記事の一部分を一つの小さなテキストとしてまとめる機能を持つと考えられるので、分析の観点に採用する。

3. 2. 2 インターテキスト

Hanks(2000)は、テキストの意味は他のテキストとの関係において決まるというintertextという概念を提唱している。視覚的手がかりによってまとめられる小さなテキストは、意味付けの際に、他の小さなテキストから影響を受けたり、逆に影響を与えたりするということになる。

3. 3. 3 「わがこと」性の語

渡辺(1991)は、話し手のことを述べることはできても、他人のことを述べることができない語を「わがこと」性の語と呼んでいる。本研究では中でも通常一人称の主語をとる感情表現（嬉しい、悲しい、好きだ、など）、願望の助動詞「たい」、一人称代名詞（私）の使用に注目する。

3. 3. 4 主体位置

Talbot(1992)はテキストの中の様々な「声」を分析するために、行為者(interactants)、登場人物(characters)、主体位置(subject positions)という概念をたてている。

行為者=テキストの書き手、読み手をはじめとする、テキストを介して会話する人物。

登場人物=行為者の会話の中で「声」が引用されたり、存在が前提とされている人物。

主体位置=テキストの人物と読み手がとる立場、役割。

本研究ではテキストの語り手と主体位置に注目する。

4. 雑誌記事の語り手とキャプションの語り手

4. 1 雑誌記事の語り手

雑誌記事は、テキストの書き手が設定した架空の語り手によって語られる。

(1)全国400万人の限定アイテムファンのみなさん、ごきげんよう。JJ6月号で発表したJJ限定のページの大反響に応えて、秋冬コレクションの発表です。今回も力作揃いで、自信を持って紹介します。

4. 2 キャプションの構造

読者モデルの写真のキャプションは、氏名と年齢・職業（または大学名・学年）を表すテキストと、ファッショントを説明するテキストから成る。一方、（プロの）モデルの写真についたキャプションでは、氏名等を表すテキストではなく、ファッショントを説明するテキストに加え、商品の値段とブランドを表示するテキストが存在する。

・読者モデルのキャプション

(2)垣上友香さん（25歳・保育士）

「白石美帆さんのような、ナチュラルで可愛い感じが好き。濃くなりすぎると野暮ったいので、全体的に明るい色で仕上げています」

引用符の存在は、このテキストが、このテキストを含む雑誌記事の書き手とは別の語り手によって語られたものであることを示す。氏名等を表すテキストは引用節の代用とみなすことができ、さらに話者「わがこと」性の語である「好き」が存在することから、このテキストは語り手として垣上友香さんを指し示す。

(3)水上悠子さん 早稲田大学3年生

どんな服もすっきりタイトに着るのがSサイズの私にとって一番のエレガント。デニムをはく日が多いので、一歩先行くリッチでおしゃれなデニムスタイルこそ私のお姉エレガント。

「私」は語り手を指す。語り手はすぐ前に存在するテキストで提示された人物、すなわち水上悠子さんが指定される。

- ・モデルのキャプション

(4)ミニスカートでもモノトーンでおかつニーハーブーツなら子供っぽく見えません。オフショルダーならさらにエレガント。ニット¥12,800 (BLACK by mousey/ジャックポットプロダクション) スカート¥7,300 (Last Scene girl/メッセージ) ブーツ¥35,800 (vivier/サン・トロペ・コーペレーション) ネックレス¥12,000 (FREE'S SHOP)

このテキストには、このテキストを含む雑誌記事と異なる語り手によって語られていることを示す標識が存在しない。よってこのテキストは、語り手として記事の書き手を指し示す。

5. 記事の中のテキスト間関係

ここでは記事のタイトル、リード、キャプションのテキスト間関係が、キャプションの語り手を判断する上で影響を与えることを示す。

5. 1 記事のタイトル

(5)今年のコート[主演女優賞]

5. 2 モデルテキストでのリードとキャプション

- ・リード

(6)下半身のすっきり効果を狙ってミニ丈ギリギリがベスト
(7)半端なはみ出しあはNG ひざ丈スカートは20cm出るくらい

- ・キャプション

(8)コート¥39,800<84cm丈> (FREE'S SHOP) 首の詰まったボトルネックのコートはひざ上丈だからすっきり見えます。ニット¥13,000(INDIVI) スカート¥13,000 (プライベート レーベル) バッグ¥8,900 (リフレクト) ブーツ¥35,000 (銀座ワシントン)

語り手：記事の書き手。

5. 3 読者モデルテキストでのリードとキャプション

・見出し

(9)この冬みんなの心配事は「スカートとコートのバランスは？」

語り手：記事の書き手。もしくは書き手と読者モデル。

・リード

(10)今年はミニスカートをいっぱいはきたい！と思っている読者のコがセレクト

語り手：記事の書き手。

(11)プリーツスカートには短め A ラインコートでキュートに

語り手：記事の書き手

・キャプション

(12)稻井志保美さん 青山短期大学2年生 選んだコート¥46,000 (INED) ブーツとスカート丈の間から脚がすっきり覗いて見えるコートがいいので、私が選んだのはひざ頭ギリギリ丈の85cm丈をチョイスしました。

語り手：読者モデル

(13)村中麻美さん 東洋英和女学院大学2年生 選んだコート¥49,000 (INDIVI) 身長 165cm の私が選んだコートは、脚がスラリと見えるスカート丈ギリギリの 80cm 丈。A ラインのフンワリシルエットでもすっきりです。

語り手：読者モデル

(14)土屋輪さん 東京女子医科大学4年生 選んだコート¥42,000 (MATERIA) スリットが深いスカートだからコート丈も短めな 65cm 丈をセレクト。コート丈はスリットとかぶらないほうがすっきり見えます。

語り手：読者モデル。「セレクト」の主語はリード(10)に関連付けられることから、読者モデル、すなわち土屋輪さんを指すようになる。

(15)原 真紀子さん フェリス女学院大学3年生 選んだコート¥55,000 (ピンキー &ダイアン) テロテロ A ラインスカートはシルエットを崩したくないから、65cm 丈のショートタイプで。歩いてもスカートの揺れ感は保てて◎です。

語り手：読者モデル。リード(10)(16)に関連づけられることから、65cm丈ショートタイプのコートを選んだ読者モデル、すなわち原真紀子さんを語り手として指すようになる。

・リード

(16)バランスがとりにくいフレアーはどのコートがピッタリか読者のコがチェック

6. 読者モデルと想定される読者の間に構築される関係

(12)稻井志保美さん 青山短期大学2年生 選んだコート¥46,000 (INED) ズーツとスカート丈の間から脚がすっきり覗いて見えるコートがいいので、私が選んだのはひざ頭ギリギリ丈の85cm丈をチョイスしました。

(13)村中麻美さん 東洋英和女学院大学2年生 選んだコート¥49,000 (INDIVI) 身長 165cm の私が選んだコートは、脚がスラリと見えるスカート丈ギリギリの 80cm 丈。Aラインのフンワリシルエットでもすっきりです。

(14)土屋輪さん 東京女子医科大学4年生 選んだコート¥42,000 (MATERIA) スリットが深いスカートだからコート丈も短めな 65cm 丈をセレクト。コート丈はスリットとかぶらないほうがすっきり見えます。

(15)原 真紀子さん フェリス女学院大学3年生 選んだコート¥55,000 (ピンキー&ダイアン) テロテロ A ラインスカートはシルエットを崩したくないから、65cm丈のショートタイプで。歩いてもスカートの揺れ感は保てて◎です。

(17)歩いたときスカートとコートの丈が一緒だとチラチラ見て気になるから 3cm ぐらい長めのコートがベスト。

(18)コート裾から 10cm くらい覗いたテロテロスカートの裾がバランス悪く見えるからダメ。

(19) 読者モデルの主体位置

読者・消費者として…想定される読者と同列

モデル・ファッション知識豊富な人物として…読者と同列または上位

ファッションのルールを唱えたり命令を下す人物として…読者より上位

7. まとめと今後の課題

85 頁

この冬みんなの心配記事はスカートとコートのバランスは?

85 頁

82 頁

トキのあいだを楽しく過ごすかぐく

85 頁

83 頁

バームウッドでスカートを楽しむ

85 頁

参考文献

- Fairclough, N.(1992) Critical Language Awareness. London:Longman.
- Fairclough, N.(2001) Language and Power. Second Edition. London: Longman.
- Hanks,W.F.(2000) Intertext. Rowman & Littlefield publishers, Inc.
- Hayashi,R.(1997) 'Hierarchical interdependence expressed through conversational styles in Japanese women's magazines', Discourse &Society. 8(3):359-389.
- 林礼子 (2002) 「雑誌との対話 女性雑誌の中で構築する「私」のアイデンティティ」『月刊言語』vol.31.no.2.大修館書店.
- Johnstone, B. (2001) Discourse Analysis. Oxford:Blackwell.
- 中村桃子(2001)「ことばとジェンダー」勁草書房.
- 野村眞樹夫 (2000) 日本語のテクスト—関係・効果・様相一」ひつじ書房.
- 真田敬子 (2003)「女性雑誌におけるアイデンティティの構築—読者紹介記事の偽の発話を分析する」『KLS23』関西言語学会.
- Talbot,M.(1992) The construction of gender in a teenage magazine. In Fairclough(ed.) Critical Language Awareness.
- 渡辺実(1991)「「わがこと・ひとごと」の観点と文法論」『国語学』165.1-14.

データ

「J J」2003年12月号.

パラグラフの一貫性

海寶康臣
龍谷大学非常勤講師

1. はじめに

Mann & Thompson (1986, 1988)等による一貫性に基づく従来の研究では、文と文の意味的な関係が考察の中心であった。しかしながら、文間のみを考察対象にしたのでは、一連の文の容認度を十分に説明することはできない。例えば、隣り合う文間に一貫性が成立している(1)(2)の容認度が低い理由を説明することはできない。

- (1) This morning I had a toothache. I went to the dentist. The dentist has a big car. The car was bought in New York. New York has had serious financial troubles. (van Dijk 1995: 116)
- (2) Roint is never home nowadays because she lives near school. School, you know, is the center of kids social life. Uri has missed school a lot this year. He never showed up at tennis either. (Giora 1997)

佐久間 (1994) は、文章の全体の構造を説明するには、文より大きく文章より小さい言語単位が必要であると考えている。

- (3) 最大の言語単位である「文章」の全体構造を記述するには、その主要な構成要素である「文章の成分」の設定のしかたが問題になる。従来、複数の文の連続からなる「完結統一体」として規定されてきた文章の全体的な構造を端的に説明するのに有効な言語単位としては、文よりも規模の大きい、高次元の意味のまとめを表す「文を越える単位」を考える必要があるといえよう。
(佐久間 1994)

本発表では、そのような言語単位の性質に基づいて、例えば(1)(2)がなぜ不自然なのかを説明したい。また、そのような言語単位を「パラグラフ」と呼び、(4) のように規定する。

- (4) パラグラフ：書き手（話し手）が読み手（聞き手）に何を伝えようとしているのかが明らかな2文以上の文のあつまり。

例えば、(5) は「現在のアメリカでは、原発の必要性がますます高まりつつある」ということを伝達しようとしていることが明らかなのでパラグラフである。一方(1)(2)(6)は何を伝達しようとしているのかがはっきりしておらず、パラグラフではない。

- (5) ①アメリカは、世界で最も多く原子力発電所をもつ国です。②現在103基が運転され、国内の電気の約20%をまかっています。③原子力発電所の新規計画は、1974年以降ありませんでしたが、2000年にカリフォルニア州で電力危機が起こったことなどから、電気の安定供給などに重要と位置づけ、今後は利用を拡大していく方針となっています。④これに基づき、2010年までに新しい原子力発電所を建設する計画が検討されています。
(2003年9月28日の朝日新聞に掲載されていた日本原子力文化振興財団の広報)
- (6) ①アメリカは、世界で最も多く原子力発電所をもつ国です。②現在103基が運転され、国内の電気の約20%をまかっています。③原子力発電所の新規計画は、1974年以降ありません。

以下では、例えば(5) から得られる「現在のアメリカでは、原発の必要性がますます高まりつつある」のような主張を paragraph topic と呼ぶ。paragraph topic の規定は(7) の通りである。

- (7) paragraph topic : 書き手（話し手）がパラグラフ内で最も伝達したいと考えていると想定される主張。

本発表では、paragraph topic とパラグラフを構成する各文の関係、複数のパラグラフから構成される談話におけるparagraph topic 間の関係、main idea とparagraph topic の関係について考察する。なおmain idea とは、談話全体の中で書き手（話し手）が最も伝達したいと考えていると想定される主張のことを意味する。

2. パラグラフの性質

2. 1. sentence topicの結束性

談話にまとまりをもたせるための道具には、指示・代用・省略・語彙等に基づく結束性（cohesion）と意味的なつながりである一貫性（coherence）の二種類があるが、以下では、sentence topicの結束性は一連の文に意味的になまとまりをもたせる上で、決定的な役割は果たさないことを示す。sentence topicの定義は(8) の通りである。¹

- (8) sentence topic : The expression whose referent the sentence is about.

野村（1986）は、「パラグラフは、テキストにおける任意の話題にかかわる、任意の規模のまとまりである」と規定した上で、「そのようなパラグラフの話題の一貫性は、パラグラフを構成する文の主題にかかわる結束性によって、構造的に保証される」としている。また、佐久間（1987）は「文と文章、および文段の主題を一応区別する立場をとる」としながらも、「提題表現の統括機能の及ぶ勢力範囲を、文の主題の表現の反復と省略から把握する方向で、文段の区分をより客観的に認定しようというのが[同論文]の意図である」と述べており、同論文中で引用している以下の(9) の北原（1984: 101）の主張に対して肯定的である。

- (9) 文章は、いくつかの段落から構成され、その一つ一つの段落は、また、いくつかの文によって構成されている。そこで、一つ一つの文の主題を総合すると段落の主題がとらえられ、そうして得られた段落の主題を総合すると、その文章全体の主題がとらえられるのではないかということが考えられてくる。

野村、佐久間、北原はいずれも文の主題をsentence topicの意味で用いている。野村（1986）はsentence topicの結束性に基づいて一連の文は意味的にまとまり、パラグラフという言語単位を形成すると捉え、北原（1984）や佐久間（1987）はsentence topicと段落や文段の主題との相關関係を重視している。しかしながら、一連の文の間にsentence topicの結束性が保持されていても、必ずしもそれが意味的にまとまっているとは限らない。

- (10) ①John likes modern jazz very much. ②Nearly every week he goes to a jazz club downtown to listen to a different jazz group.
③He spends a lot of his pocket money on buying records which he likes to play for his friend. (Williams 1969: 33)
- (11) ①ジョンはモダンジャズが大好きだ。②ほぼ毎週繁華街にあるジャズクラブに、いろいろなジャズグループの曲を聞きに行く。③ジョンは小遣いの多くを友だちに聞かせたいレコードを買うのに使う。
- (12) Nearly every week he goes to a park near his house to play tennis.
(13) ほぼ毎週家の近くの公園にテニスをしに行く。
(14) He spends a lot of his pocket money on buying hamburgers.
(15) ジョンは小遣いの多くをハンバーガーを買うのに使う。

(10)(11)の第2文をそれぞれ(12)(13)と交換してもsentence topicの結束性は損なわれないが、容認不可能になる。(10)(11)の第3文をそれぞれ(14)(15)と交換した場合も同様の結果になる。この事実は、一連の文に意味的になまとまりをもたせる上で、sentence topicの結束性は決定的な役割は果たさないことを示している。

2. 2. paragraph topic とパラグラフを構成する文との一貫性

一連の文を意味的に自然なまとまりにする決定的な要因はsentence topicの結束性ではなかった。その要因はparagraph topic とパラグラフを構成する文との関係にあると主張したい。本発表では、paragraph topic とパラグラフを構成する文に関して、以下の(16)の原則を提案する。

- (16) paragraph topic とパラグラフを構成する文との間には、一貫性が成立しないければならず、パラグラフ内には、paragraph topic との一貫性の形成に関与しない文が存在してはならない。

ここでいう一貫性は、以下の(17)に示すMann & Thompson (1986)で提案されている15種類の意味的な関係に相当する。²

- (17) a. solutionhood b. evidence c. justification d. motivation
e. reason f. sequence g. enablement h. elaboration
i. restatement j. condition k. circumstance l. cause
m. background n. concession o. thesis-antithesis

(16)の原則は、換言すれば、一貫性の観点から、一連の文すべてと関係する主張の抽出が不可能な場合は、一連の文はパラグラフとしての適格性に欠けるというものである。一貫性の観点から一連の文すべてと関係する主張とはparagraph topic のことを意味する。(1)(2)(6) が不自然なのは、paragraph topic の抽出が不可能なためである。また、(10)(11)の第2文をそれぞれ(12)(13)と交換したり、第3文をそれぞれ(14)(15)と交換すると容認不可能になるのもparagraph topic の抽出が不可能になるためと考えられる。これにたいして、(5) や(10)が容認可能なのはparagraph topic の抽出が可能なためである。(5) のparagraph topic は「現在のアメリカでは、原発の必要性がますます高まりつつある」という主張である。このparagraph topic と第1文および第2文の間にはcircumstance relation が成立しており、第3文との間にはrestatement relationが成立している。また、第4文との間にはreason relation が成立している。一方(10)のparagraph topic は第1文であり、第2文、第3文との間にはreason relation が成立している。なお、circumstance、restatement、reason各関係の定義は以下の通りである。

- (18) circumstance : テクストのある箇所が状況を確立し、かつ同じテクストの別の箇所がその状況内、あるいはその状況との関係で解釈される場合に成立する関係。
- (19) restatement : テクストのある箇所が同じテクストの別の箇所を言い換えている場合に成立する関係。
- (20) reason : テクストのある箇所が同じテクストの別の箇所で表現されている意志的な行為を行う論理的根拠を提供する場合に成立する関係。

ところで、(5) の第4文に(21)を後続させると容認不可能になるが、それは、やはりparagraph topic の抽出が不可能になるためである。

- (21) しかしながら、原子力発電の推進に対する米国民の不安は解消されていません。

つまり、すべての文と一貫性を成立させるような文の抽出が不可能になるためである。しかしながら、「現在のアメリカでは、原発の必要性がますます高まりつつある」という主張と(21)の間には、concession relation が成立しているように思われるかもしれない。

- (22) concession : テクストのある箇所が、同じテクストの別の箇所でなされている主張を弱めてしまう可能性がある事柄が真実であることを、話し手が認めてい

る場合に成立する関係。

たしかに、この主張と(21)が隣接する2つの文としてテキスト内に生起しているならば、両文の間にはこの関係が成立しているといえる。この場合、両文からは論理的な矛盾は感じられない。しかしながら、(21)を(5)の第4文に後続させた場合、(21)とこの主張の間には、論理的な矛盾が感じられる。それは、(21)から得られる「原発の推進はすべきではない」という推意(implicature)と、この主張から得られる「原発を推進すべきである」という推意とが衝突するためである。このように、2つの命題から得られる推意が論理的に矛盾する場合には一貫性は成立しない。また、このような推意の衝突が起ると、読者はparagraph topicの抽出が不可能になる。

(21)に(23)を後続させると、(21)から「原発の推進はすべきではない」という推意はうまれなくなり、容認不可能になることも回避される。

- (23) ①米国民の不安を解消するために、原子力業界は、原発などのシステムを動かす際に人間が犯す可能性のあるミスを防ぎ、大事故につながらないよう安全の確保を目指すヒューマン・ファクターという研究分野の研究を大きく進展させてきました。②この分野の研究の進展により、原子力発電所の安全性は格段に高まりました。

(5) に(21)を、(21)に(23)を後続させると、(21)と(23)とでひとつのパラグラフを形成することになる。その場合、「原子力業界は原子力発電所の安全性を高め、米国民の不安を解消するための研究を大きく進展させた」という主張がparagraph topicになり、(22)との間にはreason relationを、(23)の第2文との間にはcause relationが成立する。

- (24) cause: テキストのある箇所が、同じテキストの別の箇所で伝えられている状態の原因を示す場合に成立する関係。

3. パラグラフ間の関係

(21)に(25)を後続させると、ひとつのパラグラフを形成する。その場合、(21)の「原発推進に対する米国民の不安は解消されていません」という主張がparagraph topicになり、この主張と(25)の第1文、第2文との間には、「テキストのある部分でなされた主張に対する証拠が、同じテキストの別の部分で提供される場合に成立する関係」であるevidence relationが成立することになる。しかしながら、このパラグラフが(5)に後続すると、文章全体としては容認不可能になる。

- (25) ①世論調査では、過半数以上の人々が自分の家の近くに原子力発電所が建設されることに反対しています。②また、原子力施設で働く労働者の発癌率が異常に高いという報道がされて以来、全米各地で原子力発電所の建設に対する反対運動がおきています。

これは、(5)のparagraph topicから得られる推意と(21)+(25)のparagraph topicから得られる推意が衝突するためである。換言すれば、(5)と(21)+(25)のparagraph topicの間には一貫性が成立しなくなるためである。このように、隣接するパラグラフのparagraph topicの間に一貫性が成立しなくなると容認不可能になる。

- (26) I ①小泉首相の実績は安保政策ばかりが目立っている。②日米関係を優先するあまり、テロ対策特別措置法を成立させ、海外への自衛隊の派遣を可能にさせ米英などの艦艇への給油活動を実施してきた。③また、長年懸案になっていた有事関連法を成立させたと思ったら、イラク復興支援特別措置法も成立させた。

④首相はブッシュ大統領の来日に備えて、年内にも陸上自衛隊部隊や輸送機をイラクに送ろうとしているし、財政支援の検討も進めているようだ。⑤イラ

クへの自衛隊派遣について、首相は「殺されるかもしれないし、殺すかもしれない」と述べているように、米兵やイラク人の殺害が連日のように報じられている治安の悪いイラクに派遣される自衛隊員には、大きな危険が伴うように思える。

II ①戦争に関するある本によると、戦闘の最中や戦闘後に、15~30%の兵士が戦闘ストレス反応にかかり、嘔吐、下痢、被害妄想、震え、一時的な失明、難聴などの症状を示すようだ。②戦闘経験のない自衛隊員への影響は計り知れない。③民主党が主張するように、主権がイラクに戻り、国連安保理が平和維持活動を決議した時に自衛隊を派遣するようにしてもらいたい。

(2003年10月5日 朝日新聞読者投稿欄「声」)

容認可能な文章である(26)の第1パラグラフのparagraph topicは、「小泉首相の実績は安保政策ばかりが目立っている」であり、第2パラグラフのparagraph topicは「自衛隊をイラクに派遣するのは、主権がイラクに戻り、国連安保理が平和維持活動を決議した時にして欲しい」である。両paragraph topic間に「2つの考えが対比されていて、話し手が一方の考えを支持し、もう一方の考えを支持しない場合に成立する関係」であるthesis-antithesis relationが成立している。しかしながら、第2パラグラフを以下の(27)にかえると両パラグラフのparagraph topicの間の一貫性が損なわれ容認不可能になる。(27)のparagraph topicは「自衛隊のイラク派遣と復興資金の提供は日本にとって不可欠である」という主張であり、この主張と第2文、第3文の間にはreason relationが成立している。

(27) 自衛隊のイラク派遣と復興資金の提供は、日本の繁栄と安全を守るという視点に立てば、速やかな実行から逃れることはできない。それは、米国がイラク復興で成功した場合と、失敗した場合とでは、どちらが日本の国益に合致するかの判断をすれば自明のことだ。イラクに赴く自衛隊員にとりそれは重く厳しい任務であり、彼らに重要な使命を託す国民一人ひとりが背後でしっかりと支える必要がある。

(2003年10月16日 産経新聞社説より)

以下の(28)も隣接するパラグラフのparagraph topicの間に一貫性が成立することを示している。

(28) I ①食べ物の安全など、人の生命や健康に関わる問題を積極的に報じていくのは新聞や放送の使命の一つである。

②過去の薬害や公害の例をあげるまでもなく、行政や業界団体は大切な情報を隠しがちだ。③そんな時、独自に調査し、新たな事実を発掘する報道は市民にとって重要で、知る権利にこたえるものだ。

II ①だが、問題点をえぐり、現状を批判する以上、データの確認や裏付け取材がいつもまして求められる。②それを怠れば、厳しく批判されるのは当然だ

③ダイオキシン汚染をめぐるテレビ朝日の報道は、こうした問題を改めて示した。

III ①看板番組「ニュースステーション」が99年2月、民間研究所の調査結果を取り上げて、埼玉県所沢市の野菜はダイオキシン濃度が高いと報道した。②これを機に野菜価格が急落する。③ところが、この調査で最も汚染濃度が高いとされたのは、野菜ではなく煎茶だったことが後でわかった。

④地元農家が「野菜の安全性への信頼が傷つけられた」とテレビ朝日を相手に損害賠償などを求める裁判を起こし、最高裁は事実上報道の非を認める判決を下した。

⑤一、二審とも、「所沢の野菜から高濃度のダイオキシンが検出されたという報道内容は主要な部分で真実だ」として農家の請求を退けたが、最高裁は「真実との証明がない」として判断を覆したのだ。

⑥汚染データの示し方には欠陥があったといわざるをえない。

⑦放送を見れば、ホウレンソウを中心とした野菜が汚染されていると思うだろう。⑧スタッフが研究所にきちんと確認さえすれば、測定値が最も高いのは

煎茶だったと簡単にわかったはずだ。
IV①取材の基本をおさえ、正確にデータを伝える努力が軽んじられていたのだ
②テレビ朝日には厳しく反省を求めたい。
V①とはいって、この点に目を奪われるあまり、ダイオキシン汚染に警鐘を鳴らした報道の意義を否定することはできない。
②当時、地元住民の間では、産業廃棄物の焼却場のそばにある農地で育った農作物について、ダイオキシン汚染の不安が高まっていた。③地元農協は汚染の調査結果の公開を拒み、行政の対応は遅れていた。
④この報道をきっかけに、ダイオキシン対策法ができ、大気中に排出されるダイオキシンの総量規制が導入されるなど対策が進んだ。⑤所沢のダイオキシン濃度も大幅に下がった。
⑥今回の最高裁判決でも、泉徳治裁判官が補足意見として「長期的には農家の人々の利益擁護に貢献した」と述べた。
VI①だが、こうした報道の意義を評価する見方は、今回の最高裁判決では全般的に乏しいのではないか。②最高裁の判断が、一、二審と全く異なったのは、報道の社会的な役割をどこまで重視するかの違いもあったんだろう。③それが気がかりだ。

(2003年10月17日 朝日新聞社説)

この文章の各パラグラフのparagraph topic および後続のパラグラフのparagraph topic との間に成立している一貫性は以下の(29)の通りである。

- (29) I : 人の生命や健康にかかる問題を積極的に報じていくのは新聞や放送の使命の一つである。(concession)
II : 新聞や放送が現状を批判する際には、データの確認や裏付け取材が厳しく求められる。(thesis-antithesis)
III : ニュースステーションは現状を批判する際に、データの確認と裏付け取材を十分に行わなかった。(motivation)
IV : テレビ朝日には厳しく反省を求めたい。(concession)
V : ダイオキシン汚染に警鐘を鳴らした報道の意義は否定できない。
(thesis-antithesis)
VI : 最高裁において、報道の社会的役割があまり評価されなかつたことが気がかりだ。

(28)のmain idea、すなはち(28)の文章全体の中で書き手が最も伝達したいと考えていると想定される主張は、「報道に際してデータの確認と裏付けを行わなかつたテレビ朝日は深く反省すべきであるが、ダイオキシン汚染に警鐘を鳴らした報道の意義は正当に評価されるべきである」である。このmain idea と各パラグラフのparagraph topic との間には、以下の(30)に示す一貫性が成立している。

- (30) I. circumstance II. concession III. main idea の構成要素
IV. main idea の構成要素 V. main idea の構成要素 VI. concession

4. 話し言葉とパラグラフ

Brown & Yule (1983: 100-106) やザトラウスキー (1991) は話し言葉にもパラグラフに相当する言語単位があるとし、その単位のことをBrown & Yuleはparatoneと、ザトラウスキーは話段と呼んでいる。本発表においても、話し言葉にパラグラフに相当する言語単位があると考える。

- (31) ——Bの新居の近くで。
A: 新居の住み心地はどう?
B: ①この辺り空気悪いでしょ。②国道が近いし。③それになんか泥棒も多いらしいのよ。

(31)の対話は一つのパラグラフといえる。(31)のparagraph topic は「B の新居の住み

心地はよくない」であり、この主張は、A の質問との間には「テクスト内のある箇所で提示された問題の解決案が、同じテクスト内の別の箇所で提供される場合に成立する関係」であるsolutionhood relation を、B の①、B の③との間にはcause relationを、B の②との間には circumstance relationを成立させており、(16)の原則を遵守している。しかしながら、B の③を例えば(32)に変えると容認不可能になる。これは、一貫性の観点から一連のすべての文と関係する主張を抽出することが不可能になるためである。

(32) 大型のスーパー や飲食店が沢山あって便利でしょ。

ところで、B の②までをひとつのパラグラフとみなすことも可能であるが、そのように考えた場合、このパラグラフのparagraph topic と(32)から得られる推意とか論理的に矛盾することになる。このように、すでに確立されたparagraph topic と論理的に矛盾する場合には一連の文は容認不可能になるが、同様に、すでに確立されたparagraph topic の意図・目的と合致しない場合にも一連の文は容認不可能になる。

(33) まもなく電車が到着します。黄色い線の内側までさがってお待ちください。

- (34)
- a. この電車は6両編成です。
 - b. この電車の最高時速は100キロです。
 - c. この電車はエクアドルで製造されました。
 - d. この電車は全長約100メートルです。

(33)が駅のホームでのアナウンスだとすると、paragraph topic は「まもなく到着する電車に安全に乗れるように準備してください」である。(33)に(34a)が後続する場合、このparagraph topic の意図・目的の達成が助けられるが、(34b-c)が後続するとこのparagraph topic の意図・目的とは合致しなくなる。

5. おわりに

本発表では、paragraph topic とパラグラフを構成する文との間には、一貫性が成立していかなければならず、パラグラフ内にはparagraph topic との一貫性の形成に関与しない文が存在してはならないことをみた。また、隣接するパラグラフの paragraph topic間にも一貫性が成立していかなければならぬならないことを示すとともに、main idea とparagraph topic の関係についても考察した。さらに、すでに確立されたparagraph topic と論理的に矛盾する場合や意図・目的が合致しない場合には、一連の文は容認不可能になることをみた。

注

1. (8) のsentence topicの定義は Reinhart (1982: 5)によるものである。
2. 本文中で提示していない一貫性の定義を以下に示す。
 - justification : テクストのある箇所で遂行される発話行為の適切性や容認可能性を、同じテクストの別の箇所で明示的に確立することを試みる場合に成立する関係
 - motivation : テクストのある箇所で聞き手に対して何らかの指示が提示され、同じテクストの別の箇所でその指示に従う動機づけがなされている場合に成立する関係
 - sequence : テクストを構成する2つの箇所が出来事であり、2番目に提示される出来事が最初に提示される出来事に続く場合に成立する関係。
 - enablement : テクストのある箇所が、同じテクストの別の箇所でだされている指示に聞き手が従うことの可能にするような情報を提供する場合に成立する関係。
 - elaboration : テクストのある箇所が、同じテクストの別の箇所で伝達される概念を明細に述べる場合に成立する関係。
 - condition : ある命題が別の命題が成り立つ条件提供する場合に成立する関係。
 - background : テクストのある箇所なしには、同じテクストの別の箇所を適切に理解することができない場合に成立する関係。

参考文献

- Brown, G. and Yule, G. 1983. *Discourse Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Giora, R. 1985. "Notes Towards a Theory of Text Coherence." *Poetics Today* 6-4: 699-715.
- Giora, R. 1997. "Discourse Coherence and Theory of Relevance: Stumbling Blocks in Search of a Unified Theory." *Journal of Pragmatics* 27: 17-34.
- Halliday, M. A. K. and R. Hasan. 1976. *Cohesion in English*. London: Longman.
- Hinds, J. 1977. "Paragraph Structure and Pronominalization." *Papers in Linguistics* 10: 77-99.
- Hinds, J. 1978. "Levels of Structure Within the Paragraph." *Berkeley Linguistics Society* 4: 598-609.
- Hobbs, J. R. 1990. *Literature and Cognition*. CSLI Lecture Notes no. 21.
- Hovy, E. and Maier, E. 1993. "Parsimonious or Profligate: How Many and Which Discourse Structure Relations?" Unpublished.
- 北原保雄. 1984. 『文法的に考える』 東京: 大修館書店。
- 児玉徳美. 2002. 『意味論の対象と方法』 東京: くろしお出版。
- Mann, W. C. 1999. "An Introduction to Rhetorical Structure Theory (RST)." Unpublished.
- Mann, W. C. and Thompson, S. 1986. "Relational Propositions in Discourse." *Discourse Processes* 9: 57-90.
- Mann, W. C. and Thompson, S. 1988. "Rhetorical Structure Theory: Towards a Functional Theory of Text Organization." *Text* 8: 243-81.
- Mikulecky, B. S. and Jeffries, L. 1998. *Reading Power* (2nd edition). New York: Addison Wesley Longman.
- 野村眞木夫. 1986. 「パラグラフにおける文の展開をめぐって」 『表現研究』 44: 11-18.
- 野村眞木夫. 2000. 『日本語のテクスト—関係・効果・様相—』 東京: ひつじ書房。
- Reinhart, T. 1982. *Pragmatics and Linguistics: an Analysis of Sentence Topics*. Indiana: Indiana University Linguistics Club.
- 佐久間まゆみ. 1987. 「『文段』の認定基準（I）——提題表現の統括——」 『文藝言語研究・言語篇』 11: 89-135.
- 佐久間まゆみ. 1994. 「中心文の『段』の統括機能」 『日本女子大学紀要』 44: 93-109.
- 佐久間まゆみ他編. 1997. 『文章・談話のしくみ』 東京: おうふう。
- Sanders, T. J. M., Spooren, W. P. M. and Noordman, L. G. M. 1992. "Toward a Taxonomy of Coherence Relations." *Discourse Processes* 15-1: 1-35.
- ポリー・ザトラウスキー. 1991. 「会話分析における『単位』について—『話段』の提案」 『日本語学』 10-10: 79-96.
- 白井英俊. 1980. 「文章理解と意味結合関係」 『計量国語学』 12.7: 308-20.
- 内田安伊子. 1999. 「テキスト構造と一貫性に関する一考察」 『お茶の水女子大学人文科学紀要』 52: 281-299.
- van Dijk, T. A. 1977. *Text and Context: Explorations in the Semantics and Pragmatics of Discourse*. New York: Longman.
- van Dijk, T. A. 1985. "Semantic Discourse Analysis." In van Dijk ed. *Handbook of Discourse Analysis* vol. 2. 103-136. Academic Press.
- Williams, S. N. 1969. *The Logic of the English Paragraph*. (『英文パラグラフの論理』) 東京: 研究社

シンポジウム

シンポジウム「第2言語語用論——異文化間語用論の視点から」

伊藤克敏

神奈川大学

従来の語用論研究は Grice や Austin などによる言語行為論は言語共通の「普遍的語用論」(universal or general pragmatics) が主体であったが、Levinson(1983)の最終章で丁寧表現 (polite expressions) には普遍的な面はあるが、言語による相違もあり、それが、異文化間の誤解 (cross-cultural misunderstanding) が生じる可能性があり、言語間の「対照語用論」(contrastive pragmatics) の研究が必要であるとし、ドイツ語と英語の丁寧表現の相違についての研究 (House&Kasper,1981) に言及している。そして、その対照語用論研究の成果を第2言語習得の研究に応用すべきであるとし、「応用語用論」(Applied pragmatics) という分野の1部門として位置づけることを提案している (376)。

1980年代初期に定型表現 (formulaic expressions) の対照語用論的研究がなされている (Coulmas, 1981)。そして、Argentinian Spanish, Australian English, Canadian French, German, Israel Hebrew 間の complaint, apology, offer, suggest 等に関する言語行為 (speech acts) の対照語用論研究 (Cross-Cultural Speech Act Realization Project—CCSARP) が Kasper, Blum-Kulka, House 等が中心になって行っている。1980年代の中頃から第2言語習得における語用論的誤り (pragmatic error or failure) についての研究が盛んになった (Thomas, 1983; Eisenstein & Bodman, 1986)。そして、第2言語習得の誤答分析研究で用いられていた中間言語 (interlanguage) の用語を転用して作成された中間語用論 (interlanguage pragmatics) に関する研究が注目されるようになった (House & Kasper, 1987)。その研究の一つの集大成が Kasper & Blum-Kulka, eds. (1993) の論文集といえよう。語用論的誤用に関する記述的研究と同時に、語用能力 (pragmatic competence) をどうして学習者に効果的に身につけさせ、そして、それがどのように発達していくのかについての研究が盛んになっている (Rose & Kasper, 2001; Kasper 2002)。

本シンポジウムでは、学会で初めて第2言語語用論を取り上げるので、先ず、関山講師から第2言語語用論の史的展開と最近の研究動向、更に研究方法について具体的な例を挙げながら述べていただく。次に、特定のトピックスに関する研究成果を発表していただく。先ず、高橋講師に英語の依頼表現の語用能力指導において演繹的/明示的指導と帰納的学习のどちらが効果的かに関する調査研究結果を発表していただく。次いで、村田講師には英語の丁寧表現とりわけポジティブポライトネスストラテジーの日本人学習者による習得状況と指導方法について発表していただく。最後に、西光コメンテーターに発表についての講評をお願いし、次いで、参加者全体によるディスカッションを行う。

参考文献

- Coulmas, F. (ed.). *Conversational Routines: Exploration in Standardized Communication Situation and Prepatterned Speech*. The Hague: Mouton
- Eisentein, M. and J. Bodman. 1986. "I very appreciate": expressions of gratitude by native and non-native speakers of American English" *Applied Linguistics* 7:167-85.
- House, J & G. Kasper, . 1981. "Politeness markers in English and German" In Coulmas(1981:157-85).
- Kasper, G. 2002. *Pragmatic Development in a Second Language*. Malden, MA: Blackwell.
- Kasper, G. & Blum-Kulk eds. 1993. *Interlanguage Pragmatics*. Oxford: Oxford University Press.
- Rose, K.R. & G. Kasper. 2001. *Pragmatics in Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Thomas, J. 1983. "Cross-cultural pragmatic failure" *Applied Linguistics* 4:91-112.

第二言語習得語用論の潮流とこれからの英語教育

関山 健治(沖縄大学)

sekiyama.kenji@nifty.ne.jp

O. はじめに

文法、発音といった、表面的な英語力にはほとんど問題がなく、英語を聞き、話すことにも習熟している日本人でも、時として英語母語話者との間に誤解をひきおこすことがある。たとえば、奨学金に応募しようとしている学生が、ある外国人教員に次のように言ったとする。

Mr. Smith, I want you to write a recommendation for me.

本人は「推薦状を書いていただきたいのですが」と言ったつもりであろうが、英語母語話者の中には、命令されたような気持ちになり、不快に感じる者も多いであろう。この種の誤用は、とくに上級レベルの学習者が引き起こした場合、「この学生は無礼である」、「ものの言い方を知らない」などと、単なる英語運用力の欠如では済まされず、人格的にマイナスのイメージを与えかねない。

今回のシンポジウムで取り上げる第二言語習得語用論は、語用論、社会言語学、応用言語学の3分野にまたがった学際的な研究領域として、1980年代以降、語用論の研究者や現場の外国语教師から注目を集めている分野である。しかし、その研究の多くは、応用言語学の一分野である第二言語習得研究の方法論を援用して行われているため、理論言語学寄りの立場から語用論に携わっている研究者にはとらえどころがないように映るかもしれない。本稿では、シンポジウムのテーマである第二言語習得語用論に関して、他のパネリストの先生方の論点も踏まえつつ、その歴史と英語教育への応用に関して概説する。

◎ コミュニケーションをする際に要求される能力

✧ 言語知識(linguistic knowledge)

正しい文法、発音で表現するための知識：*Mr. Smith, I want you to write a recommendation for me.* → 統語的には正しい文章。

✧ 語用言語的知識(pragmalinguistic knowledge)

自分の伝えたい内容を適切に述べるために必要な知識。発話行為の適切な選択などを含む：*I want you to...* は依頼というよりは命令の意味合いがあり、上記の場面では不適切。

✧ 社会語用的知識(sociopragmatic knowledge)

自分と相手との関係などに応じて適切な言語形式を選択するための知識。同じ発話行為でも、様々な表現形式があり、適切なものを選択する必要がある：
Please write a recommendation for me. / Will you write a recommendation for me? / I wonder if you could write a recommendation for me. / Would you be kind enough to write a recommendation for me?

★従来の英語教育→言語知識に重点

1. 第二言語習得語用論が生まれた背景

✧ 日本人の英語力の向上

単に必要な情報を伝達するだけでなく、話者的心情や態度も含めた高度なコミュニケーション能力が要求されるようになった。

✧ 語用的能力の欠如が及ぼす影響の重大さへの認識

とくに、文法や発音に問題の少ないレベルの学習者の場合、語用レベルの誤りは、「ことばの問題」としてではなく、人間性や性格に問題があると解釈されかねない。上級学習者が潜在的に持つ問題点に关心が向けられるようになった。

✧ 英語学習をとりまく環境の変化

高校における「オーラルコミュニケーション」の新設や ALTとの接触機会の増加。大学における、コミュニケーション能力育成型のカリキュラムに基づいた共通英語教育の改革など。

(参考) 中学校の新学習指導要領(外国語科・抜粋)

(2) 言語活動の取扱い

ア 3学年間を通した全体的な配慮事項

3学年間を通じ指導に当たっては、次のような点に配慮するものとする。

(ア) 実際に言語を使用して互いの気持ちや考えを伝え合うなどのコミュニケーションを図る活動を行うとともに、(3)に示す言語材料について理解したり練習したりする活動を行うようすること。

(イ) コミュニケーションを図る活動においては、具体的な場面や状況に合った適切な表現を自ら

考へて言語活動ができるようにすること。

(ウ) 言語活動を行うに当たり、主として次に示すような言語の使用場面や言語の働きを取り上げるようにすること。

〔言語の使用場面の例〕

a 特有の表現がよく使われる場面

- ・あいさつ・自己紹介・電話での応答・買い物・道案内・旅行・食事など

b 生徒の身近な暮らしにかかわる場面

- ・家庭での生活・学校での学習や活動・地域の行事など

〔言語の働きの例〕

a 考えを深めたり情報を伝えたりするもの

- ・意見を言う・説明する・報告する・発表する・描写するなど

b 相手の行動を促したり自分の意志を示したりするもの

- ・質問する・依頼する・招待する・申し出る・確認する・約束する・賛成する/反対する・承諾する/断るなど

c 気持ちを伝えるもの

- ・礼を言う・苦情を言う・ほめる・謝るなど

2. 第二言語習得語用論の歴史

◆ 1960 年代

学習者の言語能力（音韻、形態、統語に関する能力）に関する比較研究が主流：対照分析(contrastive analysis)の知見に基づき、学習者の母語と目標言語を対照し、相違点を明らかにすることにより誤用を少なくすることが目標。構造主義言語学の影響を受け、意味論、語用論的なレベルでの研究は少ない。

◆ 1970 年代～1980 年代

Hymes の提唱した communicative competence の影響。特定の発話行為における、母語話者と外国人学習者の言語使用の比較研究に関心（比較文化語用論：cross-cultural pragmatics）。Blum-Kulka et al. (1989) の CCSARP (Cross-Cultural Speech Act Realization Project) など。

✧ 1990年代～

教育現場における、語用的能力の習得過程への関心（第二言語習得語用論：L2 pragmatics）。語用的能力を育成するための教授法、アクションリサーチなど、応用言語学的な視点からの研究が増加：言語使用に関する研究から言語習得に関する研究へ。

◎ 研究がなされている発話行為とテーマの例

- ✧ 依頼(request)：ポライトネス(politeness)の観点から、表現の間接性に関する比較など。
- ✧ 謝罪(apology)：意味公式(semantic features)の順序や内容など。
- ✧ 断り(refusal)：緩和表現の内容や発話の長さなど。
- ✧ 褒め(compliment)：褒める内容が表現に及ぼす影響など。

3. データ収集の方法

✧ 談話完成テスト (Discourse Completion Test: DCT)

場面を提示し、それぞれの場面でどう表現するかを書き込ませる形式。初期の第二言語習得語用論の研究で多く用いられた。大量のデータを迅速に収集できるメリットはあるが、実際の言語使用が正確に反映されないことなど、難点も多い。発話を記入するのではなく、選択肢を与えて選ばせる形式もある。

✧ ロールプレイ(Role-play)

近年の研究で主流となっている方法であり、調査対象者に場面を提示し、実際に目の前で発話させ、それをテープ等に収録する形式。変数のコントロールがしやすく、実際の会話の場面に近いデータが得られやすい。

✧ 学習者コーパス(learner's corpus)

学習者の発話を文字化したコーパスを用いる。今後、学習者コーパスの整備が進むことで一般化？

ポジティブポライトネスと英語教育

龍谷大学 村田 和代 murata@law.ryukoku.ac.jp

1. はじめに

Pragmatics のとらえかた

The perspective on pragmatics we adopt is an action-theoretical one, viewing pragmatics as the study of people's comprehension and production of linguistic action in context.

(Kasper and Blum-Kulka, 1993: 3)

Pragmatics is defined as the study of communicative action in its sociocultural context.

(Rose and Kasper, 2001: 2)

Interlanguage pragmatics 第二言語学習者がどのように語用論的能力を発達させていくか
Interlanguage pragmatics has consequently been defined as the study of nonnative speakers' use and acquisition of linguistic action patterns in a second language (L2)

(Kasper and Blum-Kulka, 1993: 3)

2. 先行研究

As has been much emphasized in the interlanguage pragmatics literature, learners' communicative success hinges to a large extent on their ability to express interpersonal meanings with target-language resources. (Rose and Kasper, 2001: 62)

request (Blum-Kulka *et al.*, 1989)

disagreement (Beebe & Takahashi, 1989)

apology (Blum-Kulka *et al.*, 1989)

3. 実験授業の妥当性

先行研究より

- ・ 発話行為レベルにとどまっていた。
- ・ 言語の対人関係に関わる側面を扱ってはいるものの、焦点は情報伝達にあった。
- ・ 対人関係を構築する積極的ストラテジーというより、conflict を避けるための対人関係ストラテジーを扱っていた。

JACET 待遇表現研究会のこれまでの研究成果より

- ・ ポライトネスストラテジーの英語教育への導入の必要性



Discourse level, Interpersonal, Positive politeness strategies

4. ポライトネストについての再確認

ポライトネス 「円滑な人間関係の確立・維持のための言語行動」

Negative face: the want of every "competent adult member" that his actions be unimpeded by others.

Positive face: the want of every member that his wants be desirable to at least some others.

(Brown and Levinson, 1987: 62)

普遍性（言語行動の背後にある動機）と 多様性（ストラテジー）

5. 2002年度の実験授業 村田・大谷(2002・2003a) Murata and Otani (2003b)

5.1. 実験の目的と内容

目的：日本の大学の初・中級学習者向け授業において、対人関係の確立・維持のストラテジーであるポライトネストラテジー(とりわけ英語で多用され、かつ日本語ではありません意識されないポジティブポライトネストラテジー)を意識的に提示することで、語用論的能力の発達に有効か否かを検証する。

期間：2002年4月～7月の前期授業

対象：経営学部、生活環境学部1年 32ペア 64名

実験授業：Brown & Levinson(1987)のポライトネストラテジーを参考に、ポジティブポライトネスを中心に、初・中級学習者に習得可能と考えられる6つのストラテジーを選び、各ストラテジーについてA4一枚程度の簡単な解説、例文のプリントを作成。前期12回あるリスニング授業の中でそのプリントを使用し、各ストラテジーについて短時間(約20分)の提示・解説・会話練習を行った。

分析方法：実験授業前(4月)と実験授業後(7月)に学習者の会話をテープ録音し会話の質・量の違いを分析した。(4月は自己紹介の会話を、7月は夏休みの予定についての会話を録音した。)また、同時期に本授業以前の学習者の英語学習実態、授業前後での学習者の意識の変化を見る為のアンケート調査を実施した。

5.2. ストラテジーの解説

① address term の使用

呼称を使用することで、相手との心的距離を縮める。例：first name, nicknameなどの使用。

② back channeling • emphatic response

相手の話を黙って聞くだけでなく、あいづち、応答を入れることで相手の話題に関心を示していることを伝える。例：Oh. Yeah, Really?, That's greatなど。

③ answer with additional information

相手からの質問に対し、Yes, Noなどで答えっぱなしにせず、もう一言コメントを入れるこ

とで、相手の質問により積極的に答える。例：“Do you like sports?” “Yes. To tell the truth, I am a member of a soccer club.”

④ compliment

相手の身なり、持ち物、考え方、行動、人柄などをほめる事により、相手への関心を示す。

例： Oh, that's a lovely T-shirt. I like it.

⑤ showing interest

相手の話に更なる情報提供を求めたり、相手に問い合わせることで、相手の話題や相手そのものに関心を持っていることを伝える。

例：“Do you like sports?” “Yes, I like to play tennis. How about you?”

“I'm from China.” “Oh, really? Which city of China?”

⑥ hedge・softener の使用

相手の意見に不同意の場合や、相手の誘いを断る場合は表現を和らげる。

例： That's a good idea, but . . .

5.3. 分析結果

5.3.1. 会話の量的変化

① 4月と比較し7月には各ストラテジーの使用回数に増加が見られた。

表1 ストラテジーの出現数 (1ペアあたりの平均)

	address term	emphatic response	additional information	compliment	showing interest	hedge	計
4月	0	5.25	0.66	0.06	5.06	0	11.03
7月	5.22	10.38	4.34	0.47	6.78	0.06	27.25

② 4月と比較し7月にはターン交代の数が増加した。

表2 ターン交代の数 (1ペアあたりの平均)

4月	7月
36.28	46.78

5.3.2. 会話の質的変化

① 4月と比較し7月には、back channeling・emphatic response の使用回数のみならず使用表現の種類も多様になった。

表3 back channeling・emphatic response の使用数とそこに占める“Oh”と“OK”的割合

	4月	7月
back channeling・emphatic response 全体数	168 (100.0%)	332 (100.0%)
“Oh”	88 (52.4%)	75 (22.6%)
“OK”	34 (20.2%)	7 (2.1%)
“Oh”, “OK”以外の response	46 (27.4%)	250 (75.3%)

② 4月と比較して7月は一つの話題に関して会話にふくらみが見られるようになった。

(1) F1-1. What's your name?

F2-1. My name is XXXXX.

F1-2. When is your birthday?

F2-2. My birthday is July 16th.

F1-3. Where is your hometown?

F2-3. My hometown is Nara.

What's your name?

F1-4. My name is XXXXX.

F2-4. When is your birthday?

F1-5. My birthday is August 2.

F2-5. Where is your hometown?

F1-6. My hometown is Osaka. (N-21)

(2) F1-1. ... What are you going to do

this summer, XXX.

F2-1. I'm going to go to Universal
Studio Japan.

F1-2. Wow, really? It's sound
interesting.

F2-2. Have you ever been there?

F1-3. I went there last year. It was
very fun.

F2-3. Oh, which attraction do you
like?

F1-4. I like Jaws. It was very
exciting.

F2-4. Really? I'm going to go ride on
it. How about you, XXX?

F1-5. I'm going to go to Philippine
this summer.

F2-5. Wow, really? What are you
going to do in Philippine?

(N)

③ 4月には全く見られなかった hedge, softener が7月には効果的に使用された。

(3) F1-2. I'll go there. I'm going there with my friends in my high school.

→F2-3. Oh, that sounds very nice.

→F1-3. Would you like come with us, XXX?

→F2-4. Oh, thank you for asking, but I'm going to see my grand mother in Nagasaki.

(N-6)

④ 7月には、会話の開始部、終結部において、相手への気遣いや配慮を見せる発話が見られた。例：small talk, compliment の使用。終結部での “Have a nice vacation.”

- (4) F1-1. Good morning, XXX. How are you?
 F2-1. I'm fine. How are you?
 F1-2. I'm fine, thank you.
 →F2-2. Your shirt is very good color.
 →F1-3. Thank you. I bought it last year in Kyoto Isetan.
 F2-3. Great.
 →F1-4. I like your shirt, too.
 →F2-4. Thank you.
 F1-5. It's cute.
 →F1-5. Thank you, XXX. Eh, soon we are going to have summer vacation. What are you going to do this summer? (N-17)
- (5) F2-1. By the way, I'm going to go to spa.
 F1-1. Oh, where is the spa?
 F2-2. That is in Tokushima.
 F1-2. Oh, it's your hometown.
 F2-3. Yes. Do you like spa?
 →F1-3. Yes. I like, but I seldom go there.
 →F2-4. Oh, really? Let's go spa another opportunity.
 →F1-4. Oh, I want to go. Thank you.
 F2-5. Good bye.
 F1-5. Good bye.
 →F2-6. Have a nice vacation.
 F1-6. Thank you. (N-13)

5. 3. 3. アンケート結果

実験授業以前に 6 割以上の学生が英会話を勉強した経験を持ち、その学習経験者のうち 8 割以上が native speaker から英会話を学んだ経験がある。しかしそれにも関わらず、今回取り上げた対人関係ストラテジーを大学入学まで一度も学んだことのない学習者が 7 割もいることが明らかになった。実験授業後のアンケートでは、授業内で提示したストラテジーに関する知識の重要性を認識した学習が 8 割を超え、また実際に会話の上達を自覚し、英語を話すことに興味を持ち積極的な学習を希望する回答が 15 名より得られた。

5. 4. 考察

- 英語会話に興味を持ち、実際に英語母語話者の授業を受けた学習者でも、中学、高校までの学習の中では対人関係を構築するためのポライトネスストラテジーについてほとんど学んでいない。また、その重要性も認識してはいない。
- やさしいポライトネスストラテジーを意識的に提示することで、その重要性を認識させることが可能である。
- 語彙・文法知識が十分ではない初・中級の学習者でも、ポライトネスストラテジーを理解することが、会話をう上での自信につながり、さらなる英語会話学習の動機付けに結びつく。
- ポジティブポライトネスストラテジーの意識的な提示により、会話をう際、対人関

係に配慮するようになり、ストラテジーの応用も見られた。結果、会話のスムーズな展開につながった。

- 日本人英語学習者にポジティブポライトネスストラテジーを指導する事で、対人関係に配慮した会話を行えるようになり、結果、会話の質量とも向上が見られる。このことより、対人関係確立・維持に関わるポライトネスストラテジーは語用論的能力の発達に貢献したと言える。

6. 2003 年度録音・分析結果 村田 (2003)

6.1. 録音状況

対象学生：生活環境学部 2 年 48 名

分析方法：5 月に学習者の会話をテープ録音し会話の質・量の違いを分析した。(free time activity についての会話を録音した。)また、各学生には英語会話を習ったことがあるかについて（いつ、どれくらいの期間等）記入してもらった。

6.2. 分析結果

6.2.1. 会話の量的変化

各ストラテジーの出現数、及びターン数とも、旧ペアが圧倒的に多い。

表 4 ストラテジー数 (1 ペアあたりの平均)

	address term	emphatic response	additional information	compliment	showing interest	hedge	計
旧ペア	3.00	4.88	2.63	0.63	5.88	0	17.02
新ペア	0	0.47	0.53	0.07	2.00	0	3.07

表 5 ターン交代の数 (1 ペアあたりの平均)

旧ペア	新ペア
29.13	6.07

6.2.2. 会話の質的変化

① 旧ペアの会話は、ストラテジーの多用(□は address term, ER= emphatic response, AD= additional information, SI= showing interest), および、会話の展開が見られた。

(6) F1-1. What would you like to do in your free time?

F2-1. I would like to do the shopping. What would you like to do in your free time?

F1-2. I would like to work part time. (N-8)

(7) F1-1. Good morning, XXX.

F2-1. Good morning, XXX.

F1-2. What do you like to do in your free time?

F2-2. Oh, I watch movie.
F1-3. Oh, movie? (ER)
F2-3. Yeah.
F1-4. Recently what did you watch? (SI)
F2-4. I watch "Purobansu Monogatari".
F1-5. Purobansu Monogatari? Was it interesting? (SI)
F2-5. Yes, very interesting. This movie's hero is very handsome. (AD)
F1-6. Oh, it's great! (ER)
F2-6. Oh. (laughing) What do you do in your free time, XXX? (N-7)

- ② 会話の開始部、終結部において、相手への気遣いや配慮を見せる発話が見られた。
③ 未指導の positive politeness strategy の効果的な使用が見られた。
 聞き手に配慮した話題展開、Joke の使用等。

6. 3. 考察

- 新・旧ペアとともに友人同士であることや、大学入学後同時間(同科目)英語を学習したことを見ると、全ペアが同じような英語会話になるという予測をたてる事ができる。しかしながら、新ペアと旧ペアの会話は明らかに異なっており、旧ペアの方が、会話の量・質ともに自然な会話に近い。この違いは、友人同士で英語を話すことが恥ずかしくないから、あるいは英語に慣れたからというよりも、ポライトネスストラテジーの指導の有無にあると言える。
- 実験授業から約 10 ヶ月経過後の会話から、学習者がポジティブポライトネスストラテジーを習得したことは明らかである。聞き手に配慮しながらどのように会話を積極的に進めてゆけばよいかという点を教授するには、ポライトネスストラテジーの導入は非常に有効であり、対人関係確立・維持に関わるポライトネスストラテジーは語用論的能力の発達に貢献したと言える。
- 新ペア 15 ペアのうち 10 ペアの会話が、2002 年度実験授業導入前にみられた典型的な会話例と同じように Q-A の繰り返しの会話であったが、このうち 6 名が、これまでに英語会話学習の経験がある学生であった。村田(2002)他待遇表現研究会の研究の中で NS の teacher talk にはポジティブポライトネスストラテジーの多用が共通した特徴であることを述べたが、ポライトネスストラテジーが多用される状況下でこういったストラテジーを習得しているとは言いがたい。旧ペアの会話の分析結果からも明らかであるが、ポライトネスストラテジーの意識的な提示(explicit instruction)の方が効果的である。

7. まとめ

1. 語用論的知識(positive politeness strategy)の意識的提示の有用性
2. 発話行為をこえてディスコースへ
3. 言語の対人関係の確立・維持にかかわる側面が語用論的能力の発達にとって重要

※ 本研究は、平成15年—16年度科学研究費補助金研究 基盤研究(C)(1)課題番号15520379「日本人が話す英語に見られる対人関係構築・維持上の問題点の解明」(研究代表者 関西外国語大学 堀 素子教授)の研究成果の一部である。したがって他研究分担者に負う部分があるが、文責はすべて筆者にある。

参考文献

- Beebe, L., and Takahashi, T. 1989. "Do you have a bag? Social Status and Patterned Variation in Second Language Acquisition." In S. Gass, C. Madden, D. Preston, & L. Selinker (Eds.), *Variation in Second Language Acquisition: Discourse and pragmatics* (103-25). Clevedon and Philadelphia: Multilingual Matters.
- Blum-Kulka, S., House, J., and Kasper, G. (Eds.). 1989. *Cross-cultural pragmatics: Requests and Apologies*. Norwood, NJ: Ablex.
- Brown, P., and Levinson, S. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kasper, G., and Blum-Kulka, S. (Eds.). 1993. *Interlanguage Pragmatics*. Oxford: Oxford University Press.
- 村田和代. 2002. 「Native English Teachers の Teacher Talk からの示唆: 事例研究D」JACET 中部支部大会ワークショップ (金城学院大学) 口頭発表.
- 村田和代. 2003. 「ポライトネスマストラテジーを意識的に提示した実験授業について」第42回 JACET 全国大会シンポジウム (東北学院大学) 口頭発表.
- 村田和代・大谷麻美. 2003a. 「ポライトネスマストラテジーが日本人英語学習者に与える影響と効果について」第11回社会言語科学会研究大会 (立教大学) 口頭発表.
- Murata, K., and Otani, M. 2003b. "Politeness and Communicative Competence: The Effect of Teaching Positive Politeness Strategies to Japanese Students." Paper presented at the 1st Asia TEFL, Busan.
- Rose, R. K., and Kasper, G. (Eds.). 2001. *Pragmatics in Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.

英語学習者の個人差と第2言語語用論

高橋 里美

立教大学

1. 研究の背景と目的

第2言語語用論の研究分野では、90年代後半以降、教室内でどの程度第2言語語用能力の習得が可能であるかが主要研究課題のひとつとなっている(e.g., House, 1996; Tateyama, Kasper, Mui, Tay, & Thananart, 1997; Rose & Kasper, 2001)。これまでの研究では、対象語用ストラテジーを演繹的／明示的(explicit)に説明した場合に最も効率のよい習得が可能であることが判明している。これらの結果を受けて、Takahashi (2001)では、4つのインプット(授業)形態を提示し、どの形態が英語の複雑な依頼表現形式(bi-clausal forms: e.g., "I was wondering if you could VP.")を習得する際に最も貢献するかが調査された。この4つのインプット形態とは、1) Explicit-Teaching Condition、2) Form-Comparison Condition、3) Form-Search Condition、4) Meaning-Focused Conditionで、2)から4)までは帰納的(implicit)にインプットを与え、学習者自らが対象依頼表現の言語形式特徴を見出し、学習していくという授業形態である。結果としては、1)のExplicit-Teaching Conditionが最も対象依頼表現の習得に寄与することが判明し、先行研究の結果を追証する形となった。しかし、帰納的インプット状況においても、学習者の中には対象となっている英語依頼表現の言語形式特徴を見出せる者がおり、学習者の言語適正・動機・学習方略・対象言語習熟度などの個人差要因が関係していることが示唆された。つまり、演繹的／明示的な説明が一切なくても、何らかの個人差特徴を備えている学習者はインプット中の対象語用ストラテジーに気づき、その重要性を認識できるということである。また、同研究では、帰納的インプット状況においては、学習者は対象英語依頼表現以外の言語形式・ディスコース特徴にもかなりの意識を向けていることも判明した。

本研究では、帰納的学習効果の検証の前段階として、Takahashi (2001)で検証の対象となった英語依頼表現を含むインプットを帰納的に学習者に与えた場合、その対象依頼表現形式およびそれ以外の言語形式・ディスコース特徴のどれにもっとも意識が向けられているのか、そして、その認知プロセスに学習者の個人差要因(動機・英語習熟度)がどの程度影響を及ぼしているのかを明らかにすることを目的とする。

なお、本研究では、Takahashi (2001)で扱った3つの帰納的インプット形態のうち、Form-Search Conditionのみに焦点を当てる。このインプット形態では、学習者はネイティブ・スピーカー特有の言語形式・ディスコース特徴を探していくというタスクに従事す

る。以下、「帰納的インプット」とは、このForm·Search Conditionにおけるインプット形態を指す。

2. 研究課題

①日本人英語学習者に帰納的インプットを与えた場合、複雑な言語形式をもつ英語依頼表現(bi-clausal forms)の方がそれ以外の言語形式・ディスコース特徴よりも気づきやすいであろうか。(以下、これらの言語特徴を「ストラテジー」とも言う。)

②日本人英語学習者に帰納的インプットを与えた場合、上記①での対象ストラテジーの「気づき」の認知プロセスにおいて、学習者の動機・英語習熟度の両方、あるいはどちらか一方が影響を及ぼしているのであろうか、それともどちらも影響を及ぼしていないのであろうか。

③もし、学習者の動機や英語習熟度が「気づき」の認知プロセスに影響を及ぼしている場合、さらにそれぞれのどの下位要素が関連しているのか。

3. 研究の対象とする言語形式・ディスコース特徴(ストラテジー): Takahashi (2001)を基に決定

①Request form 1 (REQ-1): e.g., "I was wondering if you could VP."

②Request form 2 (REQ-2): e.g., "Is it possible to VP?" / "Do you think you could VP?"

③Request form 3 (REQ-3): e.g., "If you could VP."

④Discourse lubricant (LUB): e.g., "well," "you know," "maybe"

⑤Idiomatic expression (IDE): e.g., "This has to do with," "How ya doin?"

⑥Other (NS-distinctive) linguistic form: e.g., "I live next door," "It's hard for us to get sleep."

4. 「気づき」の定義と数量化

本研究では、Schmidt (1990, 1993, 1994, 1995, 2001)に基づき、「気づき」という認知概念を「対象項目に意識を向けることであり、対象項目への関心度によってその度合いは異なる」と定義する。この定義に基づき、「気づき」の概念を以下のように数量化する。

- 3 = 全く気がつかなかった (全く関心がなかった)
- 2 = 気がついたが、ほとんど関心がなかった
- 1 = 気がついたが、あまり関心がなかった
- 0 = 気がついたが、関心の有無についてははつきり言えない
- 1 = 気がついて、やや関心があった
- 2 = 気がついて、関心があった
- 3 = 気がついて、非常に関心があった

5. 実験方法

5. 1 被験者

日本人大学生 80 名 (大学 1・2 年次生／平均年齢：19.4 才)

5. 2 実験材料

- 英語学習の動機に関するアンケート (Schmidt et al. (1996) のアンケートをもとに作成)
- G-TELP (英語習熟度テスト：リスニングおよびリーディング)
- Form·Search Condition 用 (トリートメント) タスクパケット：
 - ① ロールプレイ・トランск립ト (Takahashi (1987) および Takahashi & DuFon (1989) で使用したもの) : NS-NS ロールプレイ、 NS-NNS ロールプレイ (いずれも 2 つの依頼場面におけるロールプレイ)
 - ② インストラクション・シート
- 「気づき」に関する内省用タスクパケット：
 - ① 内省用アンケート (上記 4 における数量化をもとに、対象ストラテジーの「気づき」の度合いを 7 段階で判定) (Appendix を参照)
 - ② 上記のロールプレイ・トランスク립トで対象ストラテジーに下線が引かれてあるもの

5. 3 実験手順

- ① 学期の初めに英語学習の動機に関するアンケートおよび G-TELP を実施。
- ② トリートメント／内省セッションの実施 (1 回 90 分を、3 回に渡って実施)。
 - トリートメント・セッション : NS-NS および NS-NNS ロールプレイ・トランスク립トを読みながら、ネイティブ・スピーカーに特有の英語表現を書き出させる (noticing-the-gap activity)。
 - 内省セッション : ロールプレイ・トランスク립トで対象ストラテジーに下線が引かれてあるものを読みながら、「気づき」に関する内省用アンケートを記入。

5. 4 データ分析

— 被験者のグループ分け：

High Motivation / High EFL = 23 人
High Motivation / Low EFL = 18 人
Low Motivation / High EFL = 19 人
Low Motivation / Low EFL = 20 人

— 研究課題 1 および 2 について： 3 要因分散分析 (繰り返し測定) ($\alpha = .05$)

一研究課題3について：ピアソンの相関、ステップワイズ回帰分析

6. 結果と考察

●研究課題1

帰納的インプットを与えられた場合、学習者は6つの対象ストラテジーに対して同じレベルの意識を向けているのではなく、その気づきの度合いは様々である。(表1と2を参照) 6つのストラテジーを気づきの度合いの順(高→低)に並べると以下のようになる。

LUB > IDE > REQ-1 > REQ-2 > OLF > REQ-3

上記に示すように、学習者は複雑な依頼表現形式(bi-clausal forms)よりもディスコース・レベルの特徴および慣用的な表現に興味をもっている。これは、單一句から成る依頼表現形式(mono-clausal forms)(e.g., Could you please VP?)を既にマスターし、且つそれを使用することが(実際には不適切であるにもかかわらず)適切であると思い込んでいるために、そもそも「依頼の表現形式」には関心が向かないということに起因するのではないか。同時に、中学・高校レベルの英語授業で、ディスコース・レベルの口語的表現を使った言語活動が行われず、その特徴についても教えられてこなかったことによると考えられる。

REQ-3(if you could VP)については、この言語形式に依頼の機能を見出せず、あくまでも(習得済みの)条件節という認識があるために、このストラテジーには意識が向かなかつたと考えられる。

●研究課題2

帰納的インプットを与えられた場合、学習者の「動機」が複雑な英語依頼表現形式やそれ以外の言語形式・ディスコース特徴の気づきに影響を及ぼすが、学習者の「英語習熟度」は関係ない。(表1と3を参照)

特に、英語学習に対する動機が高い学習者の方が、ディスコース・レベルの特徴(LUB)や慣用的な表現(IDE)に気づく傾向にある。動機の高い学習者の方がコミュニケーション能力の向上に積極的で、インター・アクション・ポライトネスにも関心が高く、このために上記のストラテジーにより意識を向けるのではないか。

●研究課題3(動機のみを対象に分析)

動機の下位要素の中では、本質的動機(intrinsic motivation)・外因的動機(extrinsic motivation)・動機づけの強さ(motivational strength)が、対象ストラテジーの気づきの認

知プロセスにもっとも影響を及ぼしている。(表4を参照)

特に、本質的動機（英語学習そのものに興味がある等）の影響が強いが、本研究の「気づき」の数量化（「関心の有無」）の方法に起因している可能性もある。

参考文献

- House, J. 1996. "Developing Pragmatic Fluency in English as a Foreign Language: Routines and Metapragmatic Awareness." *Studies in Second Language Acquisition*, 18, 225-252.
- Rose, K. & Kasper, G. eds. 2001. *Pragmatics in Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schmidt, R. 1990. "The Role of Consciousness in Second Language Learning." *Applied Linguistics*, 11, 129-158.
- Schmidt, R. 1993. "Consciousness, Learning and Interlanguage Pragmatics." In G. Kasper & S. Blum-Kulka eds. *Interlanguage Pragmatics*, 21-42. New York: Oxford University Press.
- Schmidt, R. 1994. "Deconstructing Consciousness in Search of Useful Definitions for Applied Linguistics." *AILA Review*, 11, 11-26.
- Schmidt, R. 1995. "Consciousness and Foreign Language Learning: A Tutorial on the Role of Attention and Awareness in Learning." In R. Schmidt ed. *Attention and Awareness in Foreign Language Learning* (Technical Report #9), 1-63. Honolulu, HI: University of Hawaii, Second Language Teaching & Curriculum Center.
- Schmidt, R. 2001. "Attention." In P. Robinson ed. *Cognition and Second Language Instruction*, 3-32. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schmidt, R., Boraie, D., & Kassabgy, O. 1996. "Foreign Language Motivation: Internal Structure and External Connections." In R. Oxford ed. *Language Learning Motivation: Pathways to the New Century* (Technical Report #11), 9-70. Honolulu HI: University of Hawaii, Second Language Teaching & Curriculum Center.
- Takahashi, S. 1987. *A Contrastive Study of Indirectness Exemplified in L1 Directive Speech Acts Performed by Americans and Japanese*. Unpublished master's thesis. University of Illinois at Urbana-Champaign, Urbana.
- Takahashi, S. 2001. "The Role of Input Enhancement in Developing Pragmatic Competence." In K. Rose & G. Kasper eds. *Pragmatics in Language Teaching*, 171-199. Cambridge: Cambridge University Press.
- Takahashi, S., & DuFon, M. 1989. *Cross-linguistic Influence in Indirectness: The Case of English Directives Performed by Native Japanese Speakers*. Unpublished manuscript. Department of English as a Second Language,

University of Hawaii at Manoa. (ERIC Document Reproduction Service No. ED 370 439)

Tateyama, Y., Kasper, G., Mui, L., Tay, H., & Thananart, O. 1997. "Explicit and Implicit Teaching of Pragmatics Routines." In L. Bouton ed. *Pragmatics and Language Learning 8*, 163-178. Urbana, IL: University of Illinois at Urbana-Champaign.

表1：3要因分散分析（繰り返し測定）結果

Source	SS	df	MS	F
Motivation	13.520	1	13.520	4.548*
Proficiency	3.720	1	3.720	1.252
Motivation x Proficiency	11.894	1	11.894	4.002*
Subject (Group)	225.904	76	2.972	
Strategy	167.848	5	33.470	23.354**
Strategy x Motivation	20.148	5	4.030	2.812*
Strategy x Proficiency	3.782	5	.756	.528
Strategy x Motivation x Proficiency	10.973	5	2.195	1.531
Strategy x Subject (Group)	544.584	380	1.433	

Notes: * p < .05 ** p < .0001

表2：「ストラテジー」の平均および標準偏差

Strategy	Mean	S.D.
REQ-1	.594	1.816
REQ-2	.294	1.314
REQ-3	.492	1.249
LUB	1.408	1.144
IDE	.972	1.193
OLF	.248	1.113

Notes: REQ-1 = 'I wonder if you could VP', REQ-2 = 'Is it possible to VP?',
 REQ-3 = 'If you could VP', LUB = discourse lubricant, IDE = idiomatic expression,
 OLF = other (NS-distinctive) linguistic form

表3：「ストラテジー x 動機」の平均および標準偏差

Strategy	High-Motivation (S.D.)	Low-Motivation (S.D.)
REQ-1	.561 (1.966)	.628 (1.669)
REQ-2	.439 (1.333)	.141 (1.292)
REQ-3	.569 (1.399)	.410 (1.083)
LUB	1.675 (1.007)	1.128 (1.223)
IDE	1.494 (.983)	.423 (1.156)
OLF	.404 (.992)	.084 (1.219)

Notes: REQ-1 = 'I wonder if you could VP', REQ-2 = 'Is it possible to VP?',
 REQ-3 = 'If you could VP', LUB = discourse lubricant, IDE = idiomatic expression,
 OLF = other (NS-distinctive) linguistic form

表4：ストラテジーの気づきと動機下位要素の相関および回帰分析結果

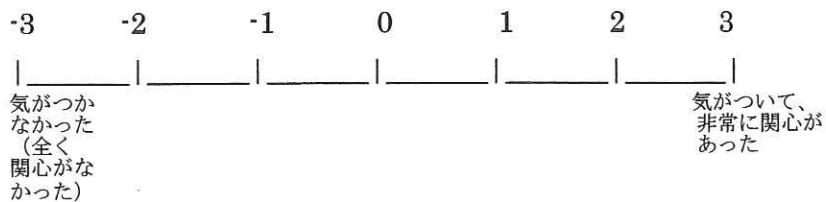
Strategy	Motivation	Correlation	Step/R-squared
REQ-1: (wonder)	none		
REQ-2: (possible)	intrinsic motiv. strength	r = .317 (p < .01) r = .278 (p < .05)	Step 1/ R ² = .101 Step 2/ R ² = .149
REQ-3: (if)	intrinsic	r = .275 (p < .05)	Step 1/ R ² = .076
LUB: (lubricant)	motiv. strength	r = .254 (p < .05)	Step 1/ R ² = .064
IDE: (idiomatic)	intrinsic extrinsic personal goals	r = .369 (p < .001) r = .302 (p < .01) r = .222 (p < .05)	Step 1/ R ² = .136 Step 2/ R ² = .208 -- --
OLF: (other ling. forms)	None		

Notes: Intrinsic: (e.g. 'I enjoy learning English very much') / Extrinsic: (e.g. 'Being able to speak English will add to my social status') / Personal goals: (e.g. 'I really want to learn more English in this class than I have done in the past') / Motivational strength: (e.g. 'I plan to continue studying English for as long as possible')
 [Example sentences are taken from Schmidt *et al.* (1996: 65-67)]

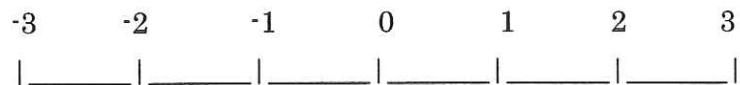
Appendix

「気づき」についての内省用アンケート (Form 1 からの抜粋)

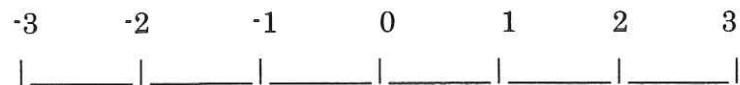
(3) It's really hard for me and my sister to study.



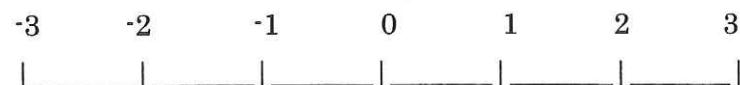
(5) We were just wondering if she could practice at a different time.



(9) That sounds good.



(29) If she could practice earlier in the day.



研究発表・ワークショップ発表ハンドアウト(Program & Abstracts)執筆要項

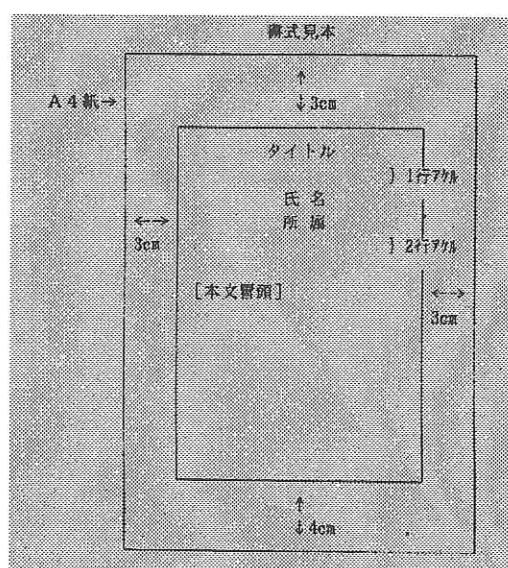
1. 原稿枚数：A4 横書き、研究発表の場合 8 枚以内（参考文献を含む）、ワークショップ発表の場合 4 枚以内（参考文献を含む）。
2. 書式：余白は上 30mm、下 40mm、左・右 30mm とする。原稿の 1 ページ目は、タイトル、氏名、所属を記し、それに本文を続ける。1 行字数、行数、段組などは自由。
3. 締め切り：毎年 10 月 31 日（水）必着。遅れますと掲載されないこともありますので、締め切り日を厳守して下さるようお願いいたします。
4. 送付先：〒573-1001 大阪府枚方市北片鉢町 16-1 関西外国語大学 澤田治美研究室「日本語用論学会事務局」宛（封筒の表に「研究発表（あるいはワークショップ発表）ハンドアウト在中」と朱書きのこと）TEL 072-856-1721（代表）
5. その他：原稿はそのまま写真印刷するので、鮮明に仕上がるよう文字の大きさ、濃さには注意する。ページ番号は裏面に鉛筆で記す。ヘッダー、フッダーはつけない。
6. 参考文献は以下の様式に従うこと。

Grice, H.P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Hopper, P.J. 1979. "Aspect and Foregrounding in Discourse." In T. Givón ed. *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, 213-241. New York: Academic Press.

小泉 保. 1990. 『言外の言語学—日本語語用論—』東京：三省堂。

野崎 昭弘. 1995. 「言葉と言葉の間」『月刊言語』(2 月号) 62-69. 東京：大修館。



日本語用論学会規約

第1章 総則

第1条 本会は「日本語用論学会」(The Pragmatics Society of Japan)と称する。

第2条 本会は語用論ならびに関連分野の研究に寄与することを目的とする。

第3条 本会は次の事業を行う。

1. 大会その他の研究集会の開催
2. 機関誌の発行
3. その他必要な事業

第4条 本会は諸事業を推進するため運営委員会および事務局を置く。

第5条 運営委員会の承認を経て、支部を各地区に置くことができる。

第2章 会員

第6条 本会の会員は通常会員の1種類とする。

第7条 通常会員は、本会の趣旨に賛同し所定の手続きを経て本会に登録された個人および団体とする。

第8条 会員は諸種の会合および事業の通知を受け、事業に参加することができる。
また、所定の手続きを経て、研究集会で研究発表し、機関誌に投稿することができる。

第3章 役員

第9条 本会に次の役員を置く。

会長	1名
事務局長	1名
運営委員	若干名
会計監査委員	1名

また、顧問を置くことがある。

第10条 会長および事務局長は、運営委員の推薦によるものとする。

第11条 運営委員は会員より選出するものとする。任期は2年とし、再選を妨げない。

第12条 運営委員は会長、事務局長を加えて運営委員会を構成する。その任務・権限等は次の通りとする。

1. 研究集会にかかる事項の決定
2. 予算および収支決算の承認
3. 機関誌の編集・発行にかかる事項の決定
4. 会計、庶務、涉外の事務
5. その他運営委員が必要と認めたもの。

第13条 本会の規約の変更は、運営委員会の発議により、会員総会で承認を得る。

第14条 会計監査委員は会員の中から選出する。任期は2年とし、1期に限る。

第4章 会議

第15条 定例会員総会は、年に1回会長がこれを招集する。また、必要な場合、臨時会員総会を招集することができる。

第16条 定例運営委員会は、必要に応じて、年に1回以上招集される。

第5章 会計

第17条 本会の運営経費は会費、寄付金等を以てこれに当てる。

第18条 運営委員会は、予算案および収支決算書を作成する。予算案および収支決算書は会計監査委員の監査を経て、会員総会で承認を得る。

第19条 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第6章 事務局

第20条 事務局を事務局長もしくは運営委員の所属する大学に置く。

第21条 事務局は会費の徴収、会場の手配、会員に対しての連絡などをとり行う。

**日本語用論学会第6回(2003年度)大会
PROGRAM & ABSTRACTS**

2003年12月6日発行
編集発行 日本語用論学会
代表者 小泉保

発行者 日本語用論学会

〒573-1001

大阪府枚方市中宮東之町16番1号

関西外国語大学外国語学部 澤田治美 研究室内

Tel: 072-805-2801

Fax: 072-805-2890

印刷 (株) 河北印刷 (075-691-5121)
